財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書　第14集

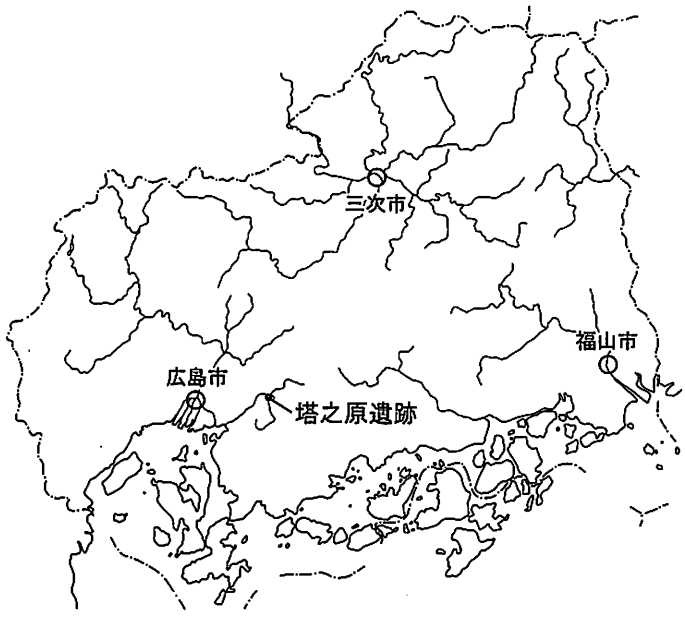
塔之原遺跡

一般国道２号改築事業（安芸バイパス）に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

２００６

財団法人　広島県教育事業団

塔之原遺跡

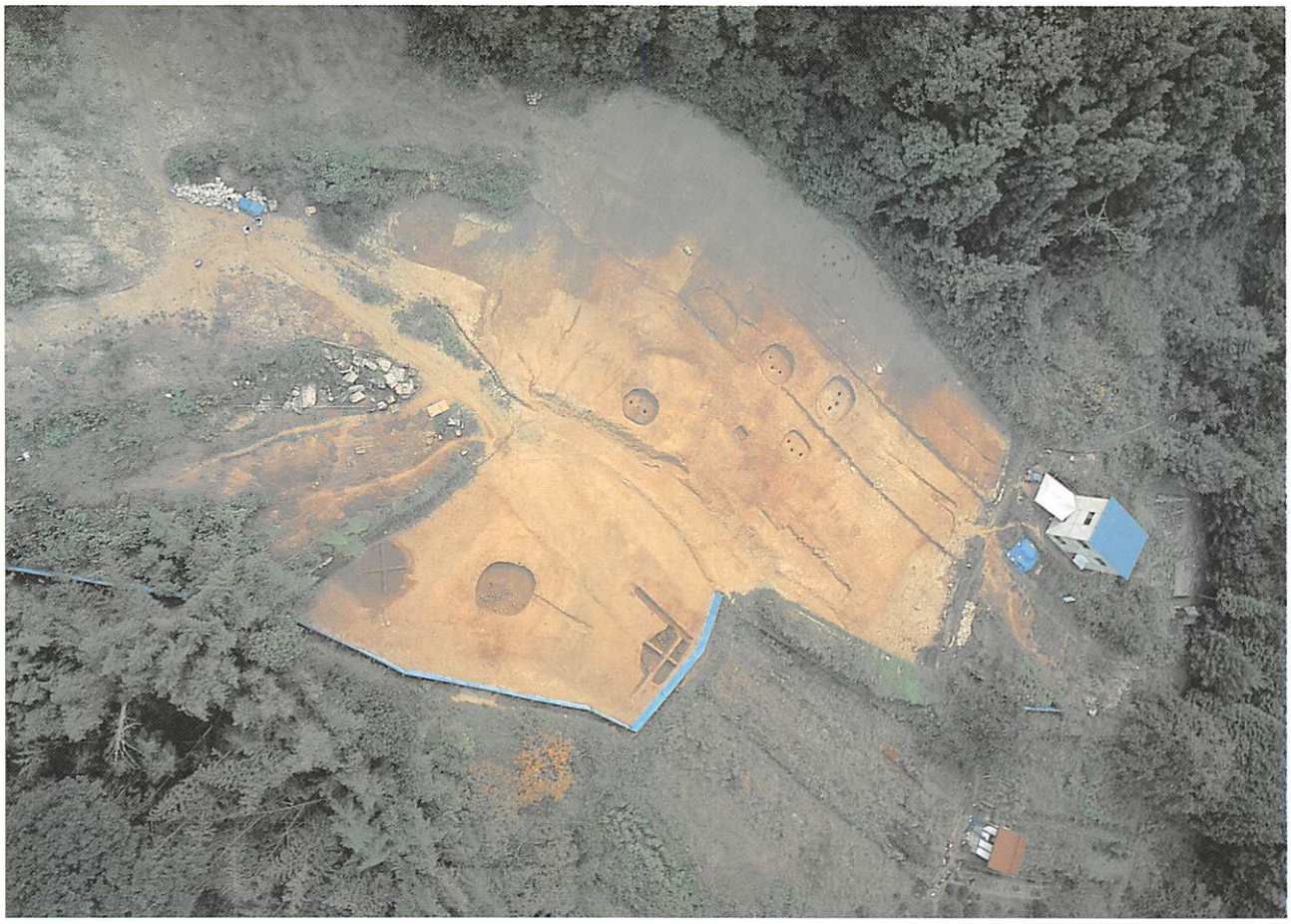


2006

財団法人　広島県教育事業団

遺跡遠景（西から）

巻頭図版２



a　遺跡西半部

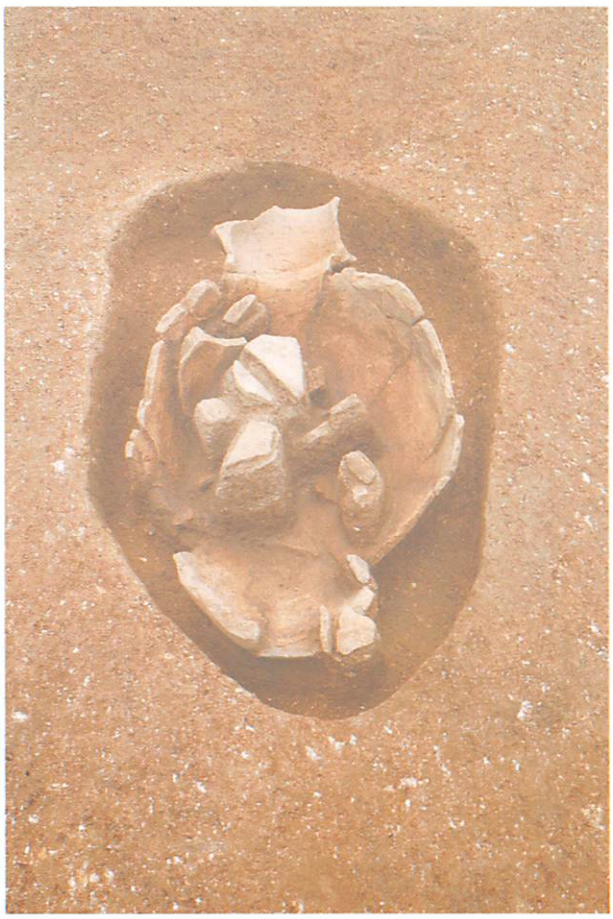
b　遺跡東半部

a　ＳＢ９下面検出状況（北から）

b　ＳＢ９床面（北から）

巻頭図版４

a　墳墓群全景（西から）



b　土器棺墓・ＳＫ22（西から）

c　陥穴・ＳＫ５（北から）

例　　言

1　本書は一般国道２号改築事業（安芸バイパス）に伴って平成15（2003）年度に発掘調査を実施した広島市安芸区上瀬野町塔之原甲1874番地他５筆に所在する塔之原遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は国土交通省中国地方整備局広島国道事務所から委託を受けて，財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室が実施した。

3　発掘調査は辻　満久，葉杖哲也（現：広島県教育委員会文化課），沢元保夫（現：財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター），梅本健治が担当した。

4　出土遺物の整理・実測及び写真撮影等は担当者が行った。

5　本書は２，４－３を梅本が，５－２，５－３を伊藤　実が，それ以外を辻が分担して執筆し，編集は辻が行った。

6　本書に使用した遺構略号は以下の通りである。
ＳＢ：建物跡（竪穴住居跡，掘立柱建物跡）
ＳＫ：土坑，陥穴，墓坑
ＳＤ：溝状遺構
ＳＸ：性格不明遺構

7　出土遺物は土器，石器，鉄器の順に掲載し，遺物番号は連番としている。縮率は原則として土器は１／３，石器は２／３または１／２・１／４，鉄器は１／２である。須恵器は断面を黒塗りとし，石器の使用範囲は矢印で示した。

8　本書に使用した方位は世界測地系平面直角座標系第Ⅲ系による。

9　本書に使用した第１図は国土地理院発行の５万分の１地形図「海田市」を使用した。

10　出土した石製品の石材は考古地質学研究所柴田喜太郎氏の肉眼鑑定による。

目　次

本文目次

1　はじめに …… 1
2　位置と環境 …… 2
3　調査の概要 …… 7
4　遺構 …… 15
　1建物跡 …… 15
　2土坑 …… 37
　3墓坑 …… 45
　4その他の遺構 …… 53
5　遺物 …… 59
　1土器類 …… 59
　2石器 …… 112
　3鉄器 …… 116
6　まとめ …… 129

巻頭図版

巻頭図版1　遺跡遠景（西から）
巻頭図版2　a　遺跡西半部
　b　遺跡東半部
巻頭図版3　a　ＳＢ９下面検出状況（北から）
　b　ＳＢ９床面（北から）
巻頭図版4　a　墳墓群全景（西から）
　b　土器棺墓・ＳＫ22（西から）
　c　陥穴・ＳＫ５（北から）

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図（1：50,000） …… 3
第2図　遺跡周辺地形図（1：2000） …… 8
第3図　遺構配置図（1：600） …… 9
第4図　遺構配置図1（1：200） …… 10

第５図　遺構配置図２（１：200）…… 11
第６図　遺構配置図３（１：200）…… 12
第７図　ＳＢ１実測図（１：60）…… 16
第８図　ＳＢ２実測図（１：60）…… 18
第９図　ＳＢ３実測図（１：60）…… 19
第10図　ＳＢ４実測図（１：60）…… 20
第11図　ＳＢ５実測図（１：60）…… 21
第12図　ＳＢ６・７実測図（１：60）…… 23
第13図　ＳＢ８実測図（１：60）…… 24
第14図　ＳＢ９実測図（１：60）…… 25
第15図　ＳＢ10実測図（１：60）…… 26
第16図　ＳＢ11実測図（１：60）…… 27
第17図　ＳＢ12実測図（１：60）…… 28
第18図　ＳＢ13実測図（１：60）…… 30
第19図　ＳＢ14実測図（１：60）…… 31
第20図　ＳＢ15実測図（１：60）…… 32
第21図　ＳＢ16実測図（１：60）…… 33
第22図　ＳＢ17実測図（１：60）…… 34
第23図　ＳＢ18実測図（１：60）…… 35
第24図　ＳＢ19・ＳＸ５実測図（１：80）…… 36
第25図　ＳＫ１～３・６・７実測図（１：40，１：80）…… 39
第26図　ＳＫ４実測図（１：40）…… 40
第27図　ＳＫ５・８・９実測図（１：40）…… 41
第28図　ＳＫ10～12実測図（１：40）…… 42
第29図　ＳＫ13実測図（１：40）…… 44
第30図　ＳＫ14～17・26実測図（１：40）…… 46
第31図　ＳＫ18～23実測図（１：20，１：40）…… 48
第32図　ＳＫ24・25・27実測図（１：40）…… 50
第33図　ＳＫ28・29実測図（１：40）…… 51
第34図　ＳＸ１・３実測図（１：60）…… 53
第35図　ＳＸ２実測図（１：30）…… 54
第36図　ＳＸ４実測図（１：60）…… 55
第37図　ＳＸ６実測図（１：60）…… 56
第38図　ＳＸ７・ＳＤ２実測図（１：60）…… 57
第39図　ＳＤ１・３実測図（１：60）…… 58

第40図　出土遺物実測図（1）（1：3）…… 61
第41図　出土遺物実測図（2）（1：3）…… 63
第42図　出土遺物実測図（3）（1：3）…… 64
第43図　出土遺物実測図（4）（1：3）…… 66
第44図　出土遺物実測図（5）（1：3）…… 70
第45図　出土遺物実測図（6）（1：3）…… 72
第46図　出土遺物実測図（7）（1：3）…… 75
第47図　出土遺物実測図（8）（1：3）…… 77
第48図　出土遺物実測図（9）（1：3）…… 79
第49図　出土遺物実測図（10）（1：3）…… 81
第50図　出土遺物実測図（11）（1：3）…… 84
第51図　出土遺物実測図（12）（1：3）…… 86
第52図　出土遺物実測図（13）（1：3）…… 87
第53図　出土遺物実測図（14）（1：3）…… 89
第54図　出土遺物実測図（15）（1：3）…… 91
第55図　出土遺物実測図（16）（1：3）…… 92
第56図　出土遺物実測図（17）（1：3）…… 95
第57図　出土遺物実測図（18）（1：3）…… 96
第58図　出土遺物実測図（19）（1：3）…… 98
第59図　出土遺物実測図（20）（1：3）…… 101
第60図　出土遺物実測図（21）（1：3）…… 103
第61図　出土遺物実測図（22）（1：3）…… 105
第62図　出土遺物実測図（23）（1：3，1：6）…… 107
第63図　出土遺物実測図（24）（1：3）…… 110
第64図　出土遺物実測図（25）（2：3）…… 112
第65図　出土遺物実測図（26）（1：2，1：4）…… 113
第66図　出土遺物実測図（27）（1：4）…… 114
第67図　出土遺物実測図（28）（1：4）…… 115
第68図　出土遺物実測図（29）（1：2）…… 116

表目次

遺構一覧表……13～14
出土遺物（土器）観察表……118～127
遺物（石器・鉄器）計測表 …… 128

図版目次

図版１　a　遺跡遠景（北東から）
　　b　遺跡全景（北東から）
　　c　遺跡西半部（北から）
図版２　a　遺跡東半部（北から）
　　b　ＳＢ２・３・５（北から）
　　c　ＳＢ２～５・９（北から）
図版３　a　ＳＢ１遺物出土状況（北から）
　　b　ＳＢ１断面（北から）
　　c　ＳＢ１完掘（北から）
図版４　a　ＳＢ２断面（南東から）
　　b　ＳＢ２遺物出土状況（北東から）
　　c　ＳＢ２完掘（北東から）
図版５　a　ＳＢ３遺物出土状況（北から）
　　b　ＳＢ３断面（北から）
　　c　ＳＢ３完掘（北から）
図版６　a　ＳＢ４遺物出土状況（北から）
　　b　ＳＢ５遺物出土状況（北から）
　　c　ＳＢ６～８完掘（東から）
図版７　a　ＳＢ４完掘（北から）
　　b　ＳＢ５完掘（北から）
　　c　ＳＢ６～８断面（南から）
図版８　a　ＳＢ６遺物出土状況（北から）
　　b　ＳＢ７遺物出土状況（北から）
　　c　ＳＢ８遺物出土状況（北から）
図版９　a　ＳＢ６完掘（北から）
　　b　ＳＢ７完掘（北から）
　　c　ＳＢ８完掘（北から）
図版10　a　ＳＢ９上層遺物出土状況（北から）
　　b　ＳＢ９断面（北から）
　　c　ＳＢ９下層遺物出土状況（北から）
図版11　a　ＳＢ９床面（北から）
　　b　ＳＢ９柱根（左：Ｐ２，右：Ｐ１）
　　c　ＳＢ９完掘（北から）
図版12　a　ＳＢ10断面（東から）
　　b　ＳＢ10遺物出土状況（北から）
　　c　ＳＢ10完掘（東から）
図版13　a　ＳＢ11断面（東から）
　　b　ＳＢ11遺物出土状況（北から）
　　c　ＳＢ11完掘（北から）
図版14　a　ＳＢ12断面（南東から）
　　b　ＳＢ12遺物出土状況（西から）
　　c　ＳＢ12完掘（西から）
図版15　a　ＳＢ13上面遺物出土状況（北から）
　　b　同上・部分（西から）
　　c　同　　上（北から）
　　d　同　　上（西から）
図版16　a　ＳＢ13断面（東から）
　　b　ＳＢ13遺物出土状況（北から）
　　c　ＳＢ13完掘（北から）
図版17　a　ＳＢ14断面（東から）
　　b　ＳＢ14遺物出土状況（北から）
　　c　ＳＢ14完掘（北から）
図版18　a　ＳＢ15断面（北から）
　　b　ＳＢ15遺物出土状況（北から）
　　c　ＳＢ15完掘（北から）
図版19　a　ＳＢ16断面（東から）
　　b　ＳＢ16遺物出土状況（北から）
　　c　ＳＢ16完掘（北から）
図版20　a　ＳＢ17断面（北から）
　　b　ＳＢ17遺物出土状況（東から）
　　c　ＳＢ17完掘（東から）
図版21　a　ＳＢ18完掘（北から）
　　b　ＳＢ19・ＳＸ５完掘（北から）
　　c　調査風景
図版22　a　ＳＫ１完掘（北から）
　　b　ＳＫ２完掘（西から）
　　c　ＳＫ３遺物出土状況（北から）

図版23　a　ＳＫ３完掘（北西から）
b　ＳＫ４断面（西から）
c　ＳＫ４検出状況（北から）
図版24　a　ＳＫ４完掘（北から）
b　ＳＫ６完掘（南から）
c　ＳＫ７完掘（北から）
図版25　a　ＳＫ10検出状況（東から）
b　ＳＫ10完掘（東から）
c　ＳＫ11完掘（北から）
図版26　a　ＳＫ12検出状況（西から）
b　ＳＫ12完掘（西から）
c　ＳＫ13検出状況（北東から）
図版27　a　ＳＫ５完掘（北から）
b　ＳＫ８完掘（北から）
c　ＳＫ９完掘（北から）
図版28　a　墳墓群全景（西から）
b　ＳＫ14完掘（北から）
c　ＳＫ15・16断面（北から）
図版29　a　ＳＫ15・16完掘（北から）
b　ＳＫ17完掘（北から）
c　ＳＫ17完掘（西から）
図版30　a　ＳＫ18～21断面（東から）
b　ＳＫ18～21完掘（西から）
c　ＳＫ18～21完掘（北から）
図版31　a　ＳＫ18完掘（北から）
b　ＳＫ19完掘（北から）
c　ＳＫ20完掘（北から）
図版32　a　ＳＫ20・21断面（東から）
b　ＳＫ21完掘（東から）
c　ＳＫ22検出状況（西から）
図版33　a　ＳＫ22検出状況（南から）
b　ＳＫ22検出状況（南から）
c　ＳＫ22完掘（南から）
図版34　a　ＳＫ23断面（北から）
b　ＳＫ23完掘（南から）
c　ＳＫ24完掘（南から）
図版35　a　ＳＫ25完掘（南から）
b　ＳＫ26検出状況（北から）
c　ＳＫ26完掘（北から）
図版36　a　ＳＫ27完掘（南から）
b　ＳＫ28完掘（南から）
c　ＳＫ29完掘（南から）
図版37　a　ＳＸ１完掘（北から）
b　ＳＸ２検出状況（西から）
c　ＳＸ４断面（北から）
図版38　a　ＳＸ４検出状況（北から）
b　ＳＸ４完掘（北から）
c　ＳＸ６完掘（北から）
図版39　a　ＳＸ７・ＳＤ２検出状況（北から）
b　ＳＸ７・ＳＤ２完掘（北から）
c　ＳＤ１完掘（北東から）
図版40　出土遺物１
図版41　出土遺物２
図版42　出土遺物３
図版43　出土遺物４
図版44　出土遺物５
図版45　出土遺物６
図版46　出土遺物７
図版47　出土遺物８
図版48　出土遺物９
図版49　出土遺物10
図版50　出土遺物11
図版51　出土遺物12
図版52　出土遺物13
図版53　出土遺物14
図版54　出土遺物15
図版55　出土遺物16
図版56　出土遺物17
図版57　出土遺物18
図版58　出土遺物19
図版59　出土遺物20

1　はじめに

塔之原遺跡の発掘調査は一般国道２号（安芸バイパス）改築工事に係わるものである。安芸バイパスは現在事業が進んでいる東広島バイパス（安芸区上瀬野町～安芸郡海田町）とすでに暫定供用がされている西条バイパスを連結するもので，これらのバイパスとともに広島市，海田町等から広島空港へのアクセス強化，広島市と東広島市の連携強化等を目的とする。

建設省中国地方建設局広島国道工事事務所（現，国土交通省中国地方整備局広島国道事務所，以下「国交省」という。）は，平成９（1997）年３月31日，当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて，広島市教育委員会（以下，「市教委」という。）・広島県教育委員会（以下，「県教委」という。）と協議した。市教委と県教委はこれを受けて順次現地踏査及び試掘調査を実施しており，塔之原遺跡については平成14（2002）年11月25日及び平成15（2003）年１月17日付けで，試掘調査により確認した旨を国交省に回答した。本遺跡の取扱いについて県教委・市教委と国交省は協議を重ねたが，路線変更等による現状保存は困難との結論に達した。

発掘調査を実施することとなった塔之原遺跡について，国交省は平成15（2003）年３月13日付けで財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（現，財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室），以下「事業団」という。）あて調査依頼を行った。国交省と事業団は平成15（2003）年４月１日付けで委託契約を結び，平成15（2003）年4月16日～平成16（2004）年３月10日までの約10か月間発掘調査を実施した。また，整理作業・報告書作成は，平成16（2004）・17（2005）年度に実施した。

本報告書は以上の経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり，今後の埋蔵文化財の資料として，またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして，少しでも寄与できれば幸いである。

なお，発掘調査にあたっては国土交通省中国地方整備局広島国道事務所，広島市教育委員会および地元住民の方々から多大なるご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

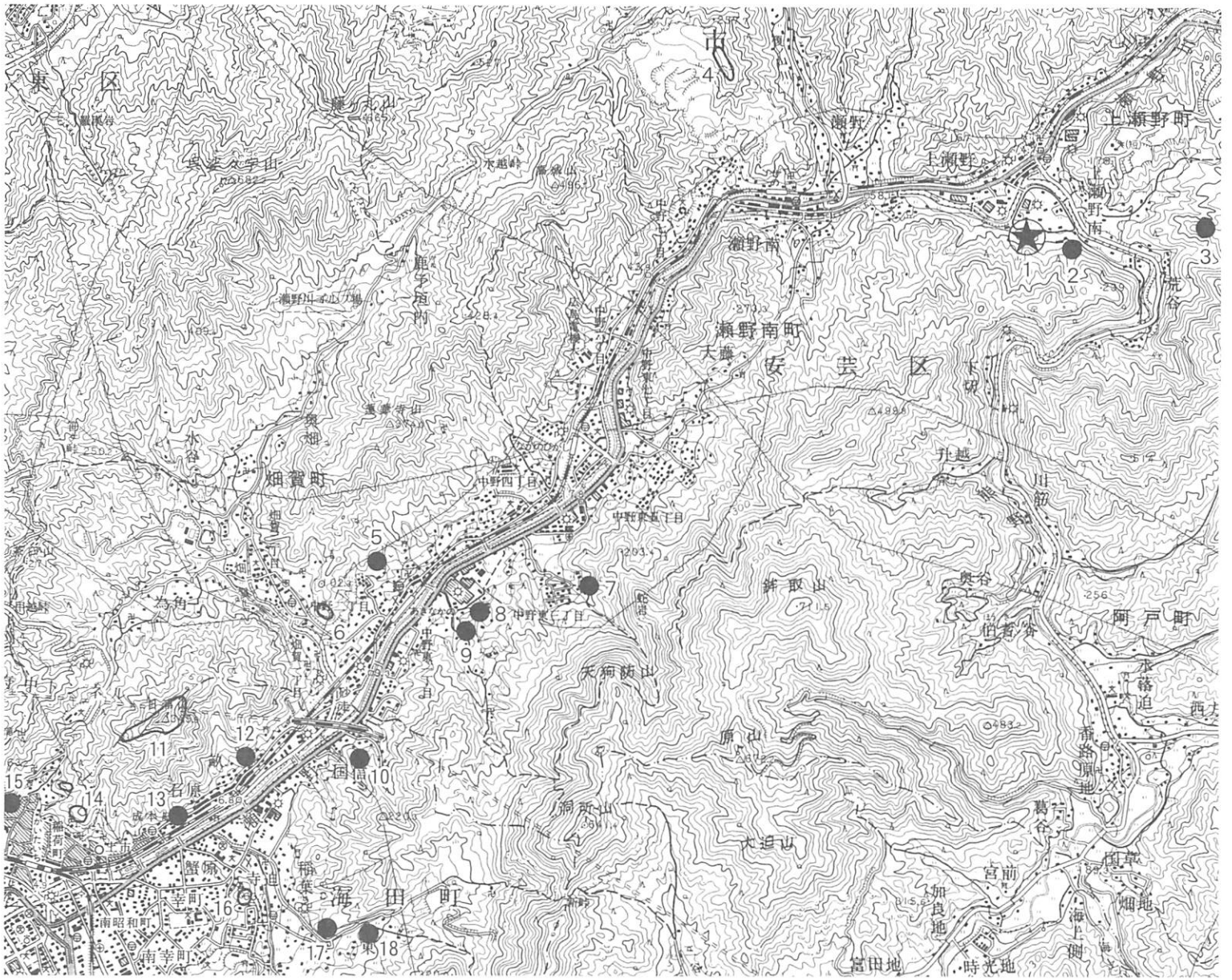
2　位置と環境

塔之原遺跡が所在する広島市安芸区は旧安芸郡瀬野川町・熊野跡村・船越町・矢野町から成り，広島湾に臨む旧船越町と矢野町の間に安芸郡海田町，船越町と広島市東区の間には安芸郡府中町が存在する。つまり，広島湾東岸の旧安芸郡域を主体とする。当地域は東は東広島市・賀茂郡，南は呉市及び安芸郡・佐伯郡の島嶼部に接する。地形的には，賀茂台地に水源を持ち，北東-南西方向に直線的に流れて広島湾に注ぐ瀬野川と，これに平行して走る南北に３列の山地と２列の狭小な平野部からなる。瀬野川右岸には外側に北東から長者山（標高555m），藤ヶ丸山（標高665m），呉娑々宇山（標高682.2m）と標高500～600m級の山々が連なり，内側には北東から八世以山（標高495.2m），高城山（標高496.1m），蓮花寺山（標高374.0m），日浦山（標高345.9m）と標高300～400m級の一段低い山並みがみられる。両山列の間には幅100～200mとごく狭い谷が延び，北の榎ノ山川，南の畑賀川といった小河川が内側の山列を２か所で断ち切って瀬野川に注いでいる。一方，瀬野川の左岸には熊野町境を北東から曾場々城山（標高607.2m），水ヶ丸山（標高660.2m），鉾取山（標高711.5m），天狗防山（標高591m），原山（標高672.2m），洞所山（標高641.4m），城山（標高592.8m），金ヶ燈篭山（標高531.9m），絵下山（標高568.1m）といった標高500～700m級のより高い山塊が延びる。瀬野川沿いには幅200～300m程度の比較的広い谷底平野がみられる。塔之原遺跡は瀬野川に蛇行しながら北流してきた熊野川が合流する地点の南側に位置する山塊の北側山麓に存在する。

広島湾東岸域に位置する当地域は中央を流れる瀬野川沿いに古代山陽道が通り，西行すれば安芸国府に，東行すれば「西の箱根」とたとえられる難所を経て安芸西条に至る。古来政治的，交通の面でも要衝の地として，中世を中心に諸勢力による抗争の舞台となった。しかし，遺跡の調査は殆ど行われておらず，古代以前の状況はあまり明確ではないが，近年瀬野川左岸の開発の進捗に伴って遺跡の調査が行われ，前期古墳や弥生時代から古墳時代にかけての集落跡などの調査に成果がみられる。ここでは，これら最近の調査成果を反映させながら，瀬野川流域を中心とした地域の歴史的環境について見ることにする。

旧石器時代・縄文時代　これらの時代の遺跡は調査が行われたものはなく，いずれも遺物の表面採集例である。旧石器は，熊野町・東深原遺跡で流紋岩製の局部磨製石斧２点がみつかっている。

縄文時代の遺跡では，矢野町・矢野小学校校庭遺跡，熊野町・道上遺跡，同・東深原遺跡，同・畦地遺跡などがある。矢野小学校校庭遺跡では早期の楕円押型文土器や後期の磨消縄文土器・沈線文土器が出土している。熊野町の縄文時代の遺跡は盆地の縁辺部や入り口，瀬野川に注ぐ熊野川や二河川などが形成した沖積低地を望む小高い場所などに立地している。道上遺跡では前期前半の外面ミミズバレ状の隆帯，内面貝殻条痕の轟式系統の土器や石鏃・石匙・スクレイパー・楔形石器などが，東深原遺跡では流紋岩製の磨製石斧や石皿・磨石が出土している。畦地遺跡は低丘陵の先端に立地し，早期頃の有茎尖頭器や安山岩製の石鏃が出土した。



1　**塔之原遺跡**
2　段之原山遺跡
3　坊山古墳群
4　三ツ城跡
5　大師堂裏山第１号古墳
6　鳥籠山城跡
7　三谷遺跡
8　成岡Ａ地点遺跡
9　成岡Ｂ地点遺跡
10　上安井古墳
11　日浦山城跡
12　畝観音免古墳群
13　石原常本貝塚
14　飯山城跡
15　新宮古墳
16　串山城跡
17　東の谷２号遺跡
18　東谷１号遺跡

第１図　周辺遺跡分布図（1:50,000）

弥生時代　前期の様子はよく分からないが，中期の遺跡としては丘陵西緩斜面で中期後半の壺・高杯・蓋が出土した海田町・東谷１号遺跡がある。また，同・東の谷２号遺跡で工事中にみつかった弥生時代中頃の脚付無頸壺は胴部に穿孔がみられ，祭祀との関わりが指摘されている。

後期の遺跡では，発掘調査が行われた集落跡の安芸区中野東町・三谷遺跡[1]，同区中野東二丁目・成岡Ａ地点遺跡[2]，塔之原遺跡の東側に近接する安芸区上瀬野町・段之原山遺跡[3]，墳墓群の安芸区中野東二丁目・成岡Ｂ地点遺跡[4]がある。いずれも瀬野川左岸に位置する。

三谷遺跡は標高90～100ｍの尾根筋中腹に立地し，中期末～後期の竪穴住居跡24軒，掘立柱建物跡１棟などを検出した。第６号住居跡は径10.5ｍと広島湾岸最大級の平面多角形の住居跡で，第７号住居跡からは鉄器片・鉄片58点が出土している。成岡Ａ地点遺跡は，古墳時代初頭の古墳３基が検出された丘陵尾根斜面で弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居跡や掘立柱建物跡・土坑などがみつかっている。段之原山遺跡は丘陵尾根線上で弥生時代終末の竪穴住居跡５軒，貯蔵穴２基などを検出した。

成岡Ｂ地点遺跡は，Ａ地点遺跡の南200ｍの同じ丘陵尾根の基部側に立地する。標高74～80ｍの丘陵尾根斜面に木棺墓６基を含む土坑墓13基，土器棺墓３基，土器蓋土坑墓１基や板石２枚を床に埋め込み葬送儀礼が行われた可能性のあるテラス状遺構１が見つかっている。片刃鉄斧２点などが出土しており，弥生時代中期後半～終末ないし古墳時代初頭頃のものと考えられている。

古墳時代　この時代の遺跡は大半が古墳で，集落跡・生産遺跡などの様相は明らかでない。

前期古墳は，成岡Ａ地点遺跡の第１～３号古墳[5]，海田町・上安井古墳[6]，同・小請山古墳群（３基），安芸区矢野町・西崎古墳，同区上瀬野町・坊山古墳群（２基），同区中野町・大師堂裏山第１号古墳などがある。

成岡第１～３号古墳は，標高52～64ｍの丘陵尾根線上に築かれており，市道の建設に伴って発掘調査が行われた。いずれも尾根を直線的な溝で区画した一辺・径7.5～13.5ｍの墳形が方・円形の古墳である。最も低所にある第１号古墳は組合式木棺墓，第２号古墳は箱式石棺墓を埋葬施設としている。最高所の第３号古墳が最も墳丘規模が大きく，墳丘中央に中心主体である木槨の可能性のある木棺墓が築かれており，墓坑内から鉄剣１・鉇１・鉄鏃21が出土した。また，北東から南東側にかけての墳丘裾などに木棺墓・箱式石棺墓など計９基の埋葬施設が築かれていた。これら３基の古墳の築造時期は第１・２号古墳が布留０式期，第３号古墳はこれらに先行すると考えられている。上安井古墳は国道２号の改築工事に伴って発掘調査が行われた。瀬野川左岸の標高80ｍの丘陵上に築かれた径13.5ｍ×15ｍの円墳で，背後に直線的な溝を設けている。計４基の埋葬施設があり，墳頂部に中心主体の竪穴式石室とこれに沿うように築かれた木棺墓が，墳丘北斜面に木棺墓，北側墳裾に土坑墓が築かれている。竪穴式石室には推定長2.35ｍの断面Ｕ字形の木棺が納められていたと考えられている。棺内から鉄剣・鉇・管玉・ガラス小玉が，棺外からは北側頭位に並べて置かれていた完形の土師器２個体（壺・甕）のほかに，鉄鏃・袋状鉄斧・鋤先・直刃鎌など豊富な鉄器類がみつかっている。この上安井古墳の築造年代については，布留１式期を中心とした古墳時代前期と考えられている。

小請山古墳群は，瀬野川左岸の標高100～125mの丘陵尾根上に立地し，箱式石棺を埋葬施設とする第１号古墳，簡略化した竪穴式石室を埋葬施設とする第２号古墳など３基の古墳で構成され，第２号古墳は６世紀前半頃に比定されている。西崎古墳は箱式石棺を埋葬施設とし，５世紀代のものとされている。坊山古墳群は瀬野川に合流する付近の熊野川北岸の丘陵頂部に立地する古墳２基から成り，いずれも箱式石棺を埋葬施設とする。大師堂裏山第１号古墳は瀬野川右岸の蓮華寺山から東に延びる丘陵尾根上に立地し，箱式石棺から人骨が出土している。

後期の６世紀後半以降多くみられる横穴式石室をもつ古墳としては，海田町・畝観音免古墳群[7]（２基），安芸区船越四丁目・新宮古墳[8]などがある。畝観音免古墳群は，瀬野川右岸の日浦山から南に延びる丘陵端部の緩斜面に立地し，いずれも南に開口する横穴式石室を埋葬施設としている。第１号古墳は両袖式の石室で，鉄刀・鉄槍・鉄鏃・鉄釘などが出土し，７世紀前半に築造されたと考えられている。第２号古墳は奥壁部分を残して大半を失っているが，敷石・排水溝がみられた。新宮古墳は，岩滝山山麓の丘陵南斜面に立地する径10mの円墳で，両袖式の横穴式石室を埋葬施設としている。

古代　律令制下では当地域は安芸郡宇山（あるいは宗山）郷に該当し，古代山陽道の荒山駅が現・安芸区中野字出口と字荒野付近に比定されている。この荒山駅から甲越峠を越えて安芸国府に到る。古代の遺跡としては，明確なものはない。

中世　現・安芸郡府中町に比定される安芸国府に隣接する当地域には，平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて相次いで荘園が立荘される。瀬野川上・中流域の太政官厨家領世能荒山荘，同下流域の八条院領開田荘，熊野川上・中流域の太政官御祈願所領阿土熊野保，広島湾東部沿岸島嶼部域の八条院領安摩荘などである。鎌倉時代初期に安芸国守護で世能荒山荘地頭などを兼ねた宗孝親が1221（承久３）年の承久の変で滅亡したあと，世能荒山荘の地頭に任命された下野国の阿曽沼氏は，早速現地に地頭代を派遣して荘園の経営に乗り出した。鎌倉時代末期から南北朝時代初期頃に世能荒山荘に下向した阿曽沼氏は，安芸国府や大覚寺統の資金源である八条院領の開田荘や安摩荘の矢野浦など南朝方勢力の拠点にあって，一貫して幕府方に立ってこれら南朝方勢力の駆逐に奔走している。鳥籠山城を拠点とする阿曽沼氏は，15世紀中ごろから矢野浦周辺を治める矢野城主野間氏などとともに周防大内氏の配下となり，その安芸攻略の尖兵として，安芸武田氏をはじめとする幕府方勢力などと海田湾頭を舞台に抗争を繰り返した。15世紀後半には開田荘の一部の年貢の代官請を行うなど勢力を南下させ阿曽沼氏は，日浦山城をはじめ，現・海田町や船越町域に新たな拠点を設ける。しかし，16世紀初頭に尼子氏が南下して大内氏の安芸攻略の拠点である鏡山城を陥落させると，阿曽沼氏もほかの芸備諸勢力とともに一時尼子氏に属して，大内氏と敵対した。その後，一旦大内氏に帰属するものの，大内義隆が重臣の陶晴賢に討たれると毛利氏に服属した。以後，阿曽沼氏は毛利氏の配下として当地域を治め，やがて毛利氏の転封に伴って萩に移る。一方，最後まで大内・陶氏に属した矢野城主野間氏は，1555（弘治元）年毛利氏に滅ぼされる。

中世の遺跡は山城跡が主で，阿曽沼氏に関連すると伝えられる鳥籠山城跡・日浦山城跡・飯山

城跡・木舟山城跡・三ツ城跡[9]や野間氏の矢野城跡などがある。鳥籠山城跡は瀬野川右岸の比高64mの丘陵端部にある。阿曽沼氏の拠城で，最高所の主郭から南東方向に大小13の郭を階段式に配している。三ツ城跡は区画整理に伴って発掘調査が行われ，南北に延びる尾根の２か所に２本を１単位とする堀切を設けて３つの主郭を造成し，各郭上には建物跡・土坑・柱穴列が存在する。最北端の第１郭の北から西側にかけて竪堀９本が，最南端の第５郭の南側にも竪堀10本が設けられ，北と南の防御を特に厚くしている。この城跡は世能荒山荘から瀬野川支流榎ノ山川沿いに北に延びる狭小な谷を東に望む比高190mの丘陵上に立地する。この谷筋は北東に延びて榎ノ山峠を抜け，奥屋を通って天野氏が治める志和荘に至る要路である。阿曽沼氏は奥屋地域をめぐって天野氏や毛利氏などと抗争を繰り返しており，三ツ城跡は阿曽沼氏の拠点のひとつとして機能したと思われる。矢野城跡は矢野浦を支配した野間氏の居城で，広島湾を西に望む標高568mの絵下山山頂から北側尾根上にかけて３つの郭群が配されている。最も低い尾根上にあるＣ郭群は県史跡に指定されている。この矢野城は南北朝期に南朝方の熊谷蓮覚らが立てこもり，北朝方の武田氏らの攻撃を受けている。このほか，海田町・石原常本貝塚は室町時代前期の貝塚で，発掘調査によって土師質土器や五輪塔の破片が出土している。また，海田町・畝観音免第１号古墳の横穴式石室流入土からは土師質土器（杯・吉備系椀），瓦器（和泉型椀・皿），東播系須恵器（鉢）などが出土している[10]。

註

（１）田村規充「広島市安芸区・三谷遺跡の発掘調査」2004年度広島史学研究会大会考古部会発表要旨　2004年
（２）財団法人広島市文化財団『成岡Ａ地点遺跡』 2001年
（３）財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課『第24回青空ミュージアムｉｎ段之原山遺跡』 2004年
（４）財団法人広島市文化財団『成岡Ｂ地点遺跡』 2001年
（５）註（２）に同じ。
（６）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上安井古墳発掘調査報告書』 2001年
（７）広島県安芸郡海田町教育委員会『畝観音免古墳群』 1979年
（８）広島県安芸郡船越町教育委員会・広島県安芸郡船越町文化財保護委員会「新宮古墳の調査」『広島県安芸郡船越町埋蔵文化財基礎調査概報』 1970年
（９）広島市教育委員会『三ッ城跡発掘調査報告』 1987年
（10）註（７）に同じ。橋本久和「瓦器椀の分布」『中世土器研究序説』 真陽社　1992年。橋本久和「瓦器椀研究と流通拠点- 中世前期の広島湾を中心にして-」日本中世土器研究会編『中世土器研究論集』 2001年

参考文献

・広島市役所編『瀬野川町史』 1980年
・広島県安芸郡海田町編『海田町史』資料編　1981年
・広島県安芸郡海田町編『海田町史』通史編　1986年
・広島県安芸郡熊野町編『熊野町史』通史編　1987年
・後藤陽一監修『広島県の地名』 平凡社　1982年
・広島県『広島県史』中世　通史Ⅱ　1984年

3　調査の概要

立地

塔之原遺跡は広島市安芸区上瀬野町に所在する。

遺跡は西流して広島湾に注ぐ瀬野川と熊野町から北流して瀬野川に合流する熊野川に囲まれた沖積地の南西部に立地する。遺跡の背後＝南側には標高300m程の山塊が迫っており，遺跡はこの山塊が南に伸びて傾斜をゆるめる山裾付近の台地上に広がる。遺跡と周辺の可耕地及び民家との比高差は約20mである。

河川の合流地点付近で，その河川により形成された沖積地から一段高い場所に位置し，さらに傾斜も緩やかでほぼ平坦でまとまった面積を持つなど遺跡の立地としては絶好の場所といえよう。

調査概要

遺跡の現状は一部畑地化しているがほとんどが水田であった。遺跡の南側は山林で，北側は急傾斜して宅地や農用地に続く。西側は小さな谷が南北に台地を縦断するように入っており，東側は台地状の地形が少し続いて南北方向に縦断するような小さな谷が入る。遺跡は全体的に南から北に傾斜しており，遺跡中央部北側は小さな谷状の地形となっている。

諸般の事情で排土場の確保が出来なかったことや器材を搬出入する道路が狭かったことなどから調査区を半分に分け，調査部分の排土を未調査区側に持っていき，調査が完了すると今度は未調査区へ持っていった調査完了部分の排土を調査完了部分へ搬入し，一旦ここで排土等が流出しないように整地した後，未調査区の排土をするという方法をとった。具体的には，前半は調査区の西半部を，そして後半は東半部を調査した。

また水田及び畑地の耕作土は重機等の機械で除去し，不整地運搬車で各々運搬排土し，その後の遺構検出面＝黄褐色粘質土の精査，遺構検出，遺構の掘り下げ等は人力により実施した。

南側部分の遺構は上面の削平が著しく深さの浅いものや北側部分が不明のものが多い。北側に移るにしたがって遺構の状況は良くなりかつ深いものが多くなった。また，遺構の一部については調査区外に伸びるものも見つかった。

遺構

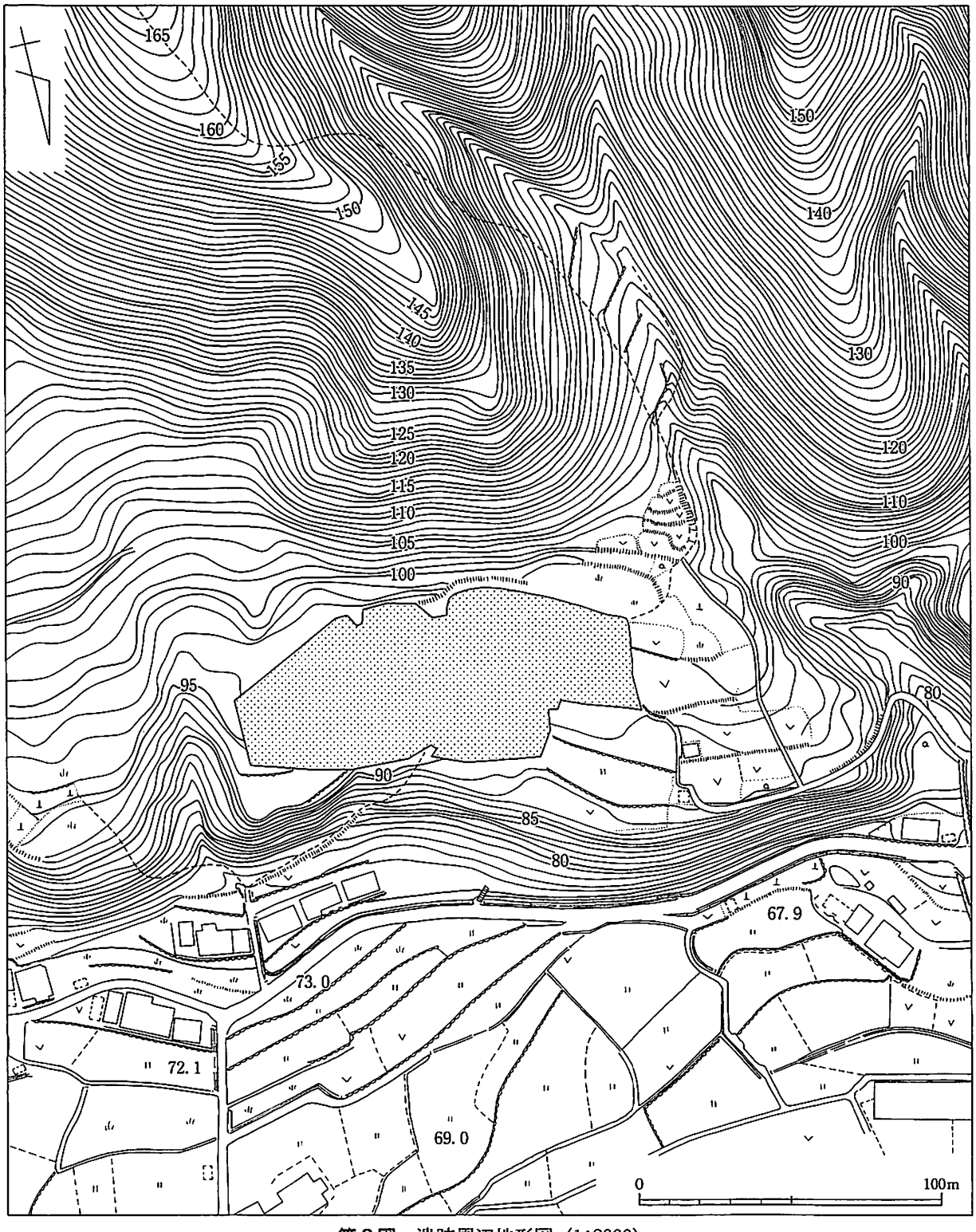
調査の結果，竪穴住居跡17軒，掘立柱建物跡２棟，土坑11基，陥穴３基，土坑墓14基，土器棺墓１基，溝状遺構３条，性格不明遺構７を検出した。

竪穴住居跡は調査区の西から東まで切り合い関係をほどんど持たずに散在する。数的には中央より西側の方が多い。平面形は円形・楕円形・隅丸方形（長方形）と多様であるが，主柱穴の構造を見ると２本柱と４本柱に分かれ，２本柱のものが４本柱のものを倍するほど見つかっている。

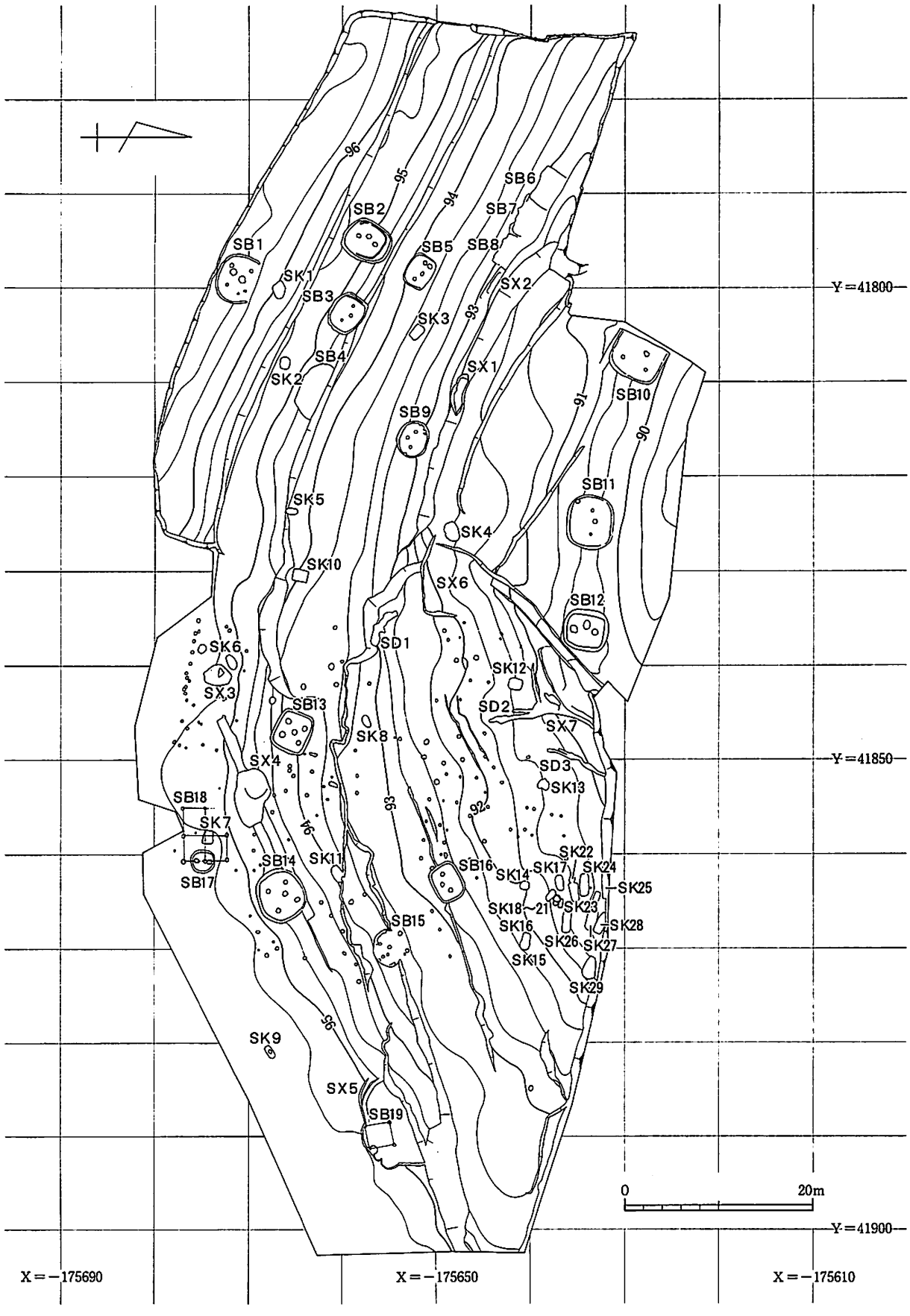
２本柱の構造のものは主柱穴を結ぶ線上の中央部から少しずれて小穴がある。規模は様々であるが，小型のものが多い。時期的には弥生時代末から古墳時代初頭におさまると思われる。

４本柱の構造のものは概して中型以上の規模のもので，中央部に炉穴と思われる小穴があり，周りに焼土を伴うものが多い。時期的には古墳時代初頭から前半頃と思われる。

掘立柱建物跡は調査区の東南及び東端で検出した。東南のものは２間×２間の総柱の建物跡に



第２図　遺跡周辺地形図（1:2000）

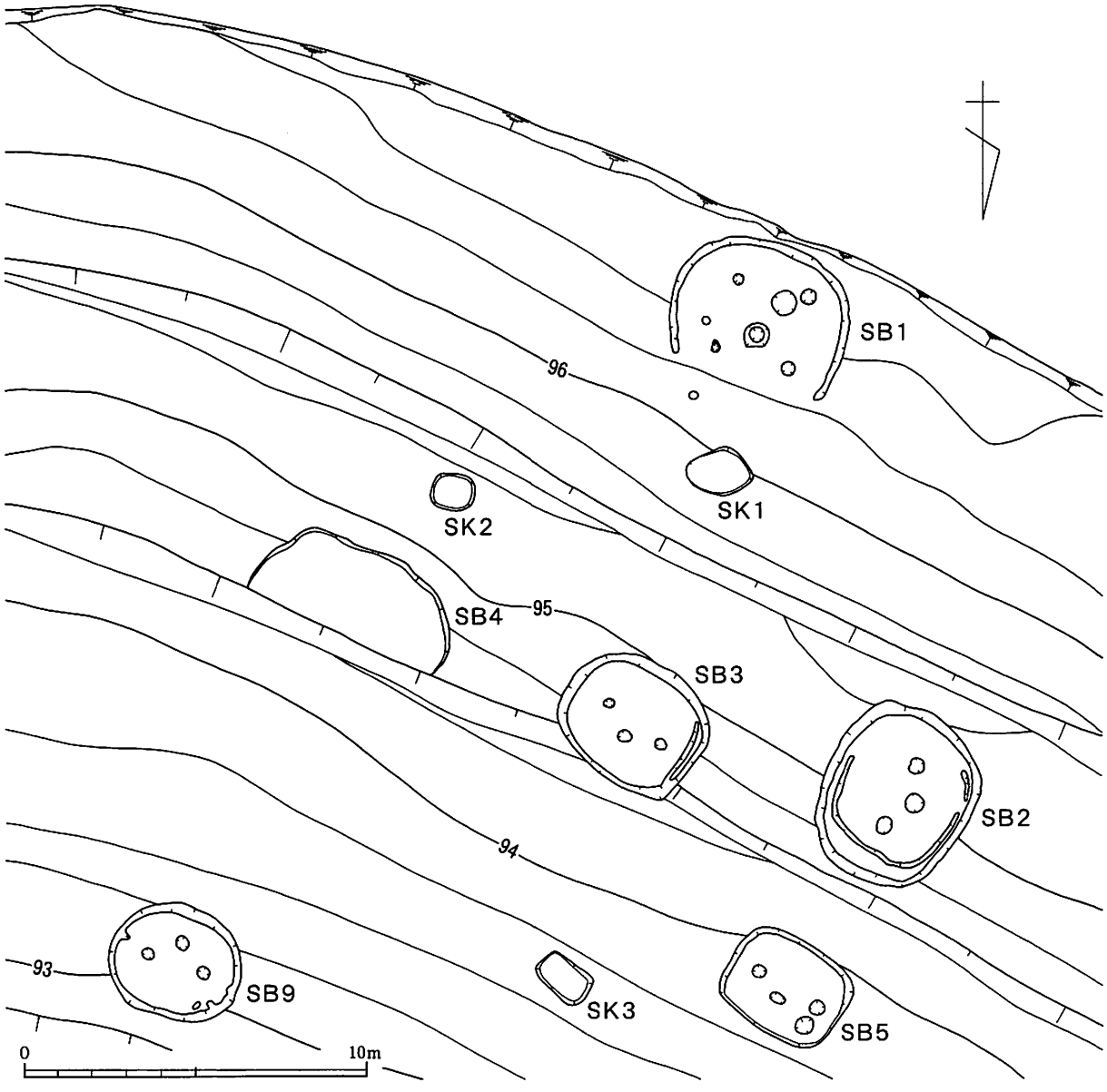


第３図　遺構配置図（1:600）

なると思われるが，上面の削平が激しく詳細は不明である。時期についても不明である。また，東端のものは１間×１間でその性格や時期も不明である。

陥穴は調査区の西・中央付近・東南端付近の三カ所で確認できた。周辺に類似した構造を持つ土坑はなく単独に近い状態である。土坑自体が深く中央部に逆杭を設置するための深めの小穴がある。類似構造のものは縄文時代には存在するので，少なくとも縄文時代以降の産物であろう。

土坑墓及び土器棺墓は調査区の中央部から北西よりの調査区境にかけて密集して配されている。溝や土盛りなどの明瞭な区画施設は確認できなかったが，住居跡のある場所とは明らかに画されていることから当初から墓所として認識されていたと思われる。土坑墓の形態的な特徴や供伴する遺物などから弥生時代後半から古墳時代初頭頃と思われ，この時期はほぼ住居跡の時期と一致することから，この集落で暮らしていた人々の共同墓地であろうと思われる。



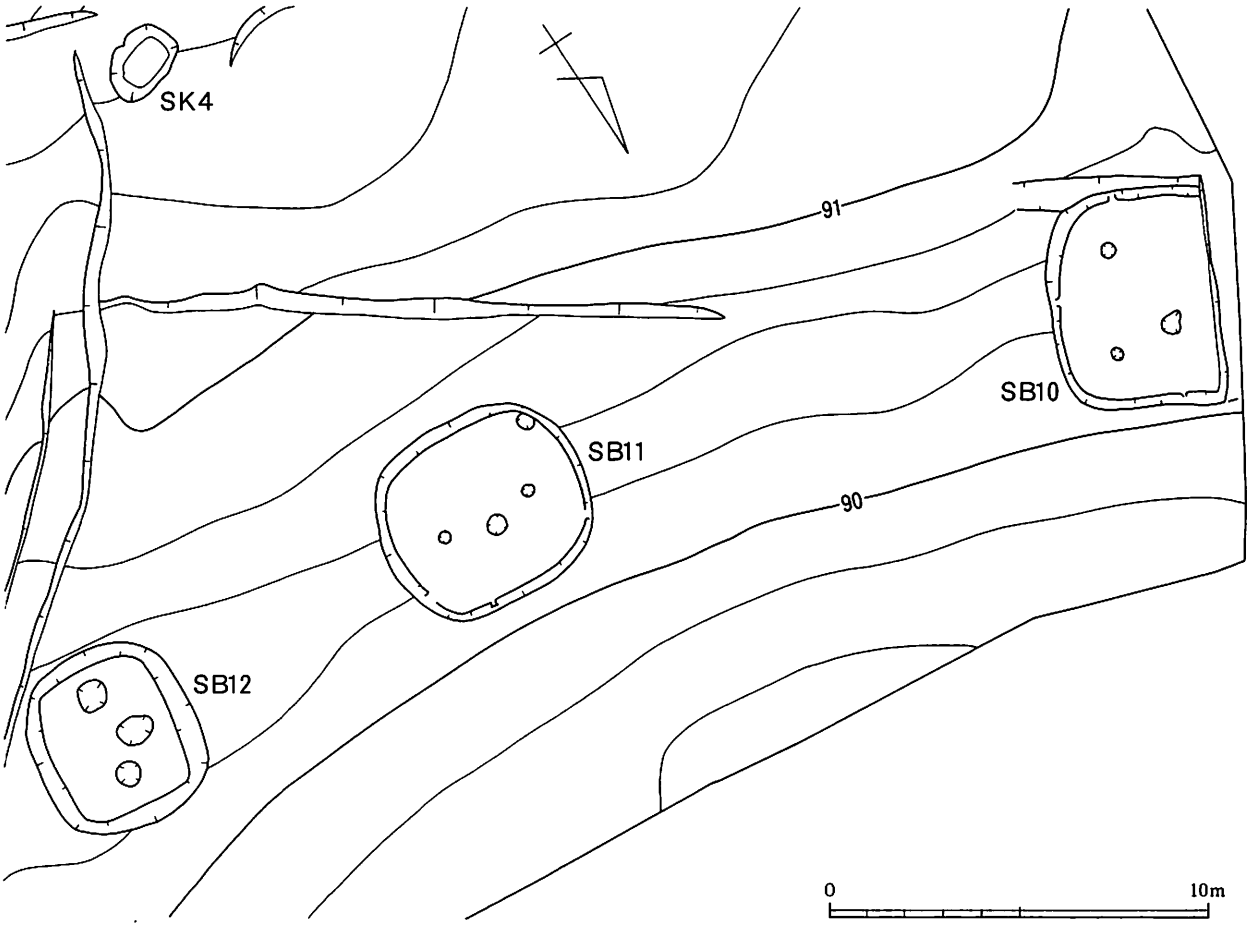
第４図　遺構配置図１（1:200）

遺物

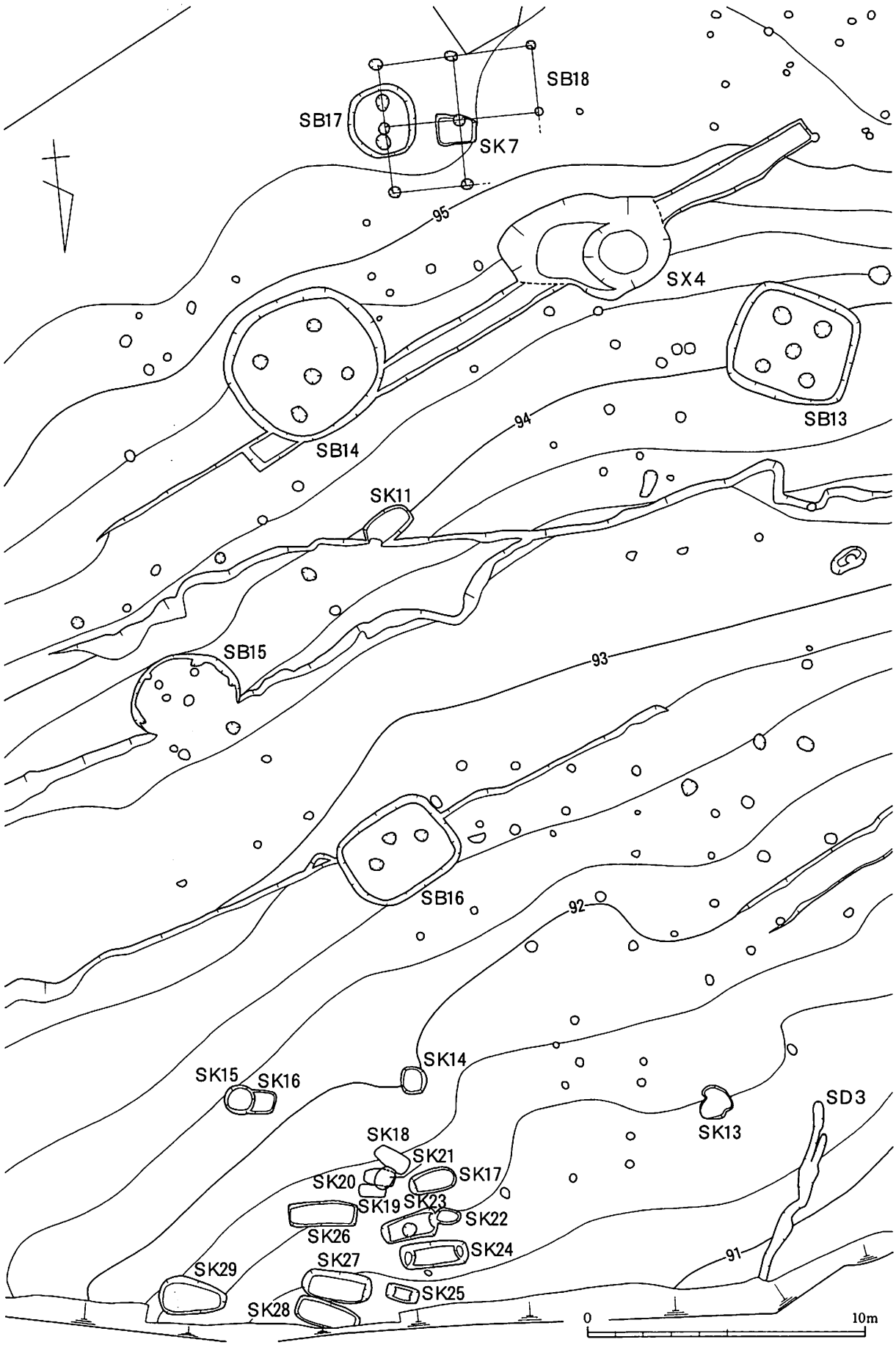
これらの遺構からは弥生土器（壺・甕・高杯・鉢・椀），土師器（壺・甕・高杯・椀・土鍋），須恵器（杯蓋・杯身・壺・甕）などの土器類や石器（石鏃・石匙・刃器・砥石・台石）や鉄器（鉄鎌・やりがんな・鉄鏃・鉄板・不明鉄器）などの多様な遺物が出土している。

弥生土器はＳＢ１～15，ＳＫ１・３・11・22・26から，土師器はＳＢ１～３・５～14・16・17，ＳＫ３・10・12・13，ＳＸ２・４・７から，須恵器はＳＢ１・ＳＢ13・ＳＫ12から，石器はＳＢ２～４・８～14・16，ＳＸ２・７から，鉄器はＳＢ１・３・５・６・９・10・14，ＳＫ26から各々出土している。

この他に調査区内から弥生土器・土師器・須恵器・石器（石鏃）など遺構から遊離して出土している。



第５図　遺構配置図２（1:200）



第６図　遺構配置図３（1:200）

遺構一覧表　　（　　）は現存値

名称	種　別	平面形	規　模	床面積	柱構造	中央ピット	備　考
ＳＢ１	竪穴住居跡	楕円形	5.2×(4.1)	(15.6)	４本柱	○	
ＳＢ２	竪穴住居跡	隅丸長方形	5.2×4.3	15.1	２本柱	○	２回拡張
ＳＢ３	竪穴住居跡	隅丸長方形	4.2×3.6	9.9	２本柱	○	１回拡張
ＳＢ４	竪穴住居跡	隅丸方形？	6.1×(3.1)	(14.6)	？		北半分消滅
ＳＢ５	竪穴住居跡	隅丸長方形	3.5×2.9	7.8	２本柱	○	
ＳＢ６	竪穴住居跡	長方形？	3.9×(2.7)	(9.5)	？		北半分消滅
ＳＢ７	竪穴住居跡	長方形？	4.0×(3.1)	(8.7)	？		北半分消滅
ＳＢ８	竪穴住居跡	長方形？	3.5×(1.3)	(3.7)	？		北半分消滅
ＳＢ９	竪穴住居跡	楕円形	3.9×3.2	7.7	２本柱	○	柱材炭化痕跡あり
ＳＢ10	竪穴住居跡	隅丸方形	5.6×(4.7)	19.5	４本柱？	○	西側1/3未掘
ＳＢ11	竪穴住居跡	楕円形	5.7×5.0	19.3	２本柱	○	
ＳＢ12	竪穴住居跡	楕円形	4.5×4.0	12.9	２本柱	○	一回拡張
ＳＢ13	竪穴住居跡	隅丸方形	4.4×4.0	12.5	４本柱	○	
ＳＢ14	竪穴住居跡	隅丸方形	5.5×5.2	19.0	４本柱	○	
ＳＢ15	竪穴住居跡	楕円形？	3.8×(2.9)	(7.4)	不明		
ＳＢ16	竪穴住居跡	長方形	4.1×3.2	9.1	２本柱	○	
ＳＢ17	竪穴住居跡	楕円形	2.8×2.3	3.7	２本柱		
ＳＢ18	掘立柱建物跡	２間×２間	5.8×4.6	25.7	総柱？		北西の柱穴不明
ＳＢ19	掘立柱建物跡	１間×１間	2.7×2.5	6.7			

名称	種　別	平面形	規　模	深さ	備　考
ＳＫ１	土坑	不整楕円形	160×130	21	小ピットあり
ＳＫ２	土坑	楕円形	128×106	20	土器小片
ＳＫ３	土坑	長方形	157×105	43	上面から弥生土器
ＳＫ４	土坑	長方形	160×106	66	角礫多数内包
ＳＫ５	陥穴	楕円形	138×69	149	中央部やや南よりに直径20cm深さ47cmのピットがある
ＳＫ６	土坑	長方形	160×80	32	
ＳＫ７	土坑	長方形	137×97	13	ＳＢ18に切られる
ＳＫ８	陥穴	長方形	134×75	144	中央部に34×24cm・深さ52cmのピット
ＳＫ９	陥穴	楕円形	137×67	85	中央部に37×30cm・深さ55cmのピット
ＳＫ10	土坑	長方形	159×118	17	角礫を敷く？
ＳＫ11	土坑	長方形	172×103	21	底面が西から東に傾斜。土坑墓の可能性もある。
ＳＫ12	土坑	方形	145×120	29	土器，底面に炭化物
ＳＫ13	土坑	不整形	118×95	10	小型丸底壺，礫
ＳＫ14	土坑墓	楕円形	95×77	13	
ＳＫ15	土坑	円形	86×86	41	礫

名称	種　　別	平面形	規　模	深さ	備　　考
ＳＫ16	土坑墓	長方形	177×80	15	ＳＫ15を切る
ＳＫ17	木棺墓	長方形	162×71	25	墓坑底面小口片側に木棺痕跡
ＳＫ18	土坑墓	長方形	117×60	30	ＳＫ21を切る
ＳＫ19	土坑墓	長方形	95×44	15	ＳＫ20・21を切る
ＳＫ20	土坑墓	長方形	110×57	13	ＳＫ19に切られ，ＳＫ21を切る
ＳＫ21	土坑墓	長方形	86×59	32	ＳＫ18・19・20に切られる
ＳＫ22	土器棺墓	楕円形	91×54	12	壺形土器半分残存
ＳＫ23	木棺墓	長方形	201×100	30	墓坑底面小口両側に木棺痕跡，中央部のピットは後世のもの
ＳＫ24	木棺墓	長方形	236×94	52	墓坑底面小口両側に木棺痕跡
ＳＫ25	木棺墓	長方形	113×59	22	墓坑底面小口両側に木棺痕跡
ＳＫ26	土坑墓	長方形	240×84	26	土器小片
ＳＫ27	木棺墓	長方形	244×107	35	墓坑底面小口両側に木棺痕跡，中央部やや西側から鉄鏃
ＳＫ28	木棺墓	長方形	(227)×119	70	墓坑底面小口両側に木棺痕跡
ＳＫ29	土坑墓	洋梨形	217×135	50	底面が西から東に傾斜

名称	種　　別	平面形	規　　模	深さ	備　　考
ＳＸ１	不明遺構	円形？	(456)×(117)	48	南側部分のみ
ＳＸ２	不明遺構	方形？	406×(85)	12	土器がまとまって出土
ＳＸ３	不明遺構	不整形	286×217	25	
ＳＸ４	不明遺構	不整形	630×337	79	礫が集積，中央部に暗渠のあと
ＳＸ５	不明遺構	楕円形？	(861)×(343)	25	
ＳＸ６	不明遺構	方形？	(536)×(958)	20	段状遺構？
ＳＸ７	不明遺構	長方形？	1088×542	28	ＳＤ２を切る

名称	種　　別	長　さ	幅	深さ	備　　考
ＳＤ１	溝状遺構	427	83～52	30	
ＳＤ２	溝状遺構	(460)	63～33	10	ＳＸ７に切られる
ＳＤ３	溝状遺構	(693)	42～30	13	

4　遺　　構

1　建物跡

弥生時代末から古墳時代にかけての竪穴住居跡（ＳＢ１～ＳＢ17）17軒，時代不明の掘立柱建物跡（ＳＢ18・ＳＢ19）２棟を検出した。竪穴住居跡は調査区の西側から東側中央にかけて重なり合うことなく数～10数ｍの距離を置いて存在する。また，掘立柱建物跡は調査区の東南側にあり，一棟（ＳＢ18）は住居跡を壊して，もう一棟（ＳＢ19）は性格不明遺構（ＳＸ５）の上に存在する。

Ａ　竪穴住居跡

ＳＢ１（第７図，図版３）

位置　本住居跡は調査区境の南西側にあり，調査区の最も高所に位置している。遺構検出時に既に北側部分が水田造成時に削平されており，さらに平滑化に伴い遺構の中から上部は失われていた。ＳＢ３から南に8.9m離れた位置にある。

規模　平面形は5.2×4.1mの楕円形と推定できるが，前述したように北側部分は消滅しているので詳細については不明といわざるを得ない。検出面から住居跡底面までの深さは最も深いところで24cmである。壁の内側には平面形に沿って幅16cm・深さ10cmの壁溝が巡っている。

床面・柱穴　床面で検出したピットは７基で，この内大きさや配置から主柱穴は４基で，規模に関してはＰ１が径43×26cm深さ45cm，Ｐ２が径43cm深さ43cm，Ｐ３が径38×27cm深さ38cm，Ｐ４が径37cm深さ49cmであった。この他に南西と南東の柱穴の間に比較的大きな土坑Ｐ６（径68cm深さ30cm）がある。このＰ６はピット内から住居跡の時期よりは新しい時期の土器が出土しているので，本住居跡と直接関連のある遺構ではないと思われる。

なお各柱間距離はＰ１－Ｐ２及び対辺のＰ３－Ｐ４が2.2m，Ｐ１－Ｐ３及び対辺のＰ２－Ｐ４が2.1mである。

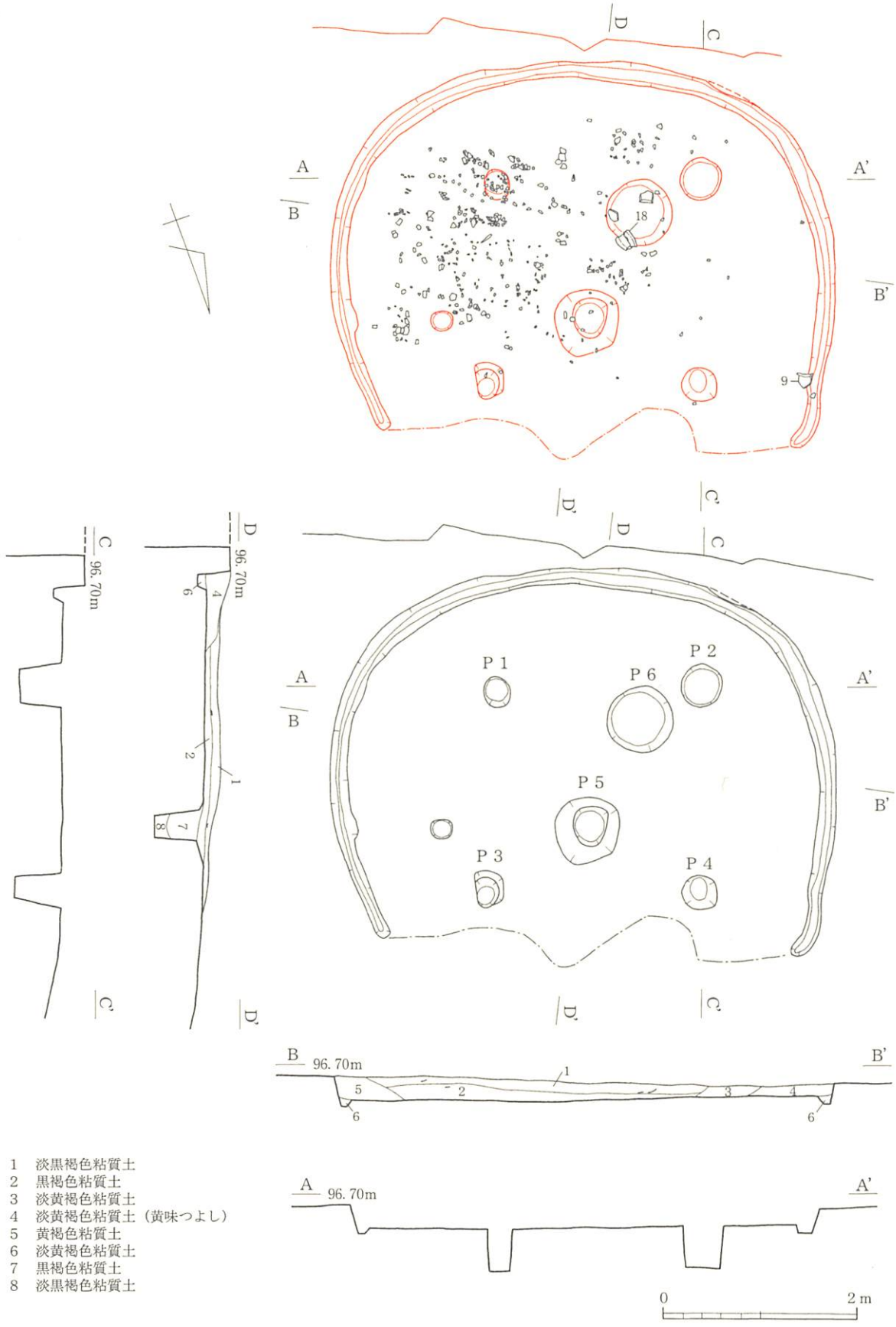
炉跡　また中央部にやや北よりに炉跡と思われる径74×68cm深さ50cmのピット（Ｐ５）を検出した。上面から若干ではあるが炭化物が出土している。

遺物出土状況　床面までの深さがほとんどなかったが遺物は床面より若干上から出土しており，そのほとんどが小片で摩滅を受けている。床面からは甕（９）が，Ｐ６内から甕（18）が出土している。

ＳＢ２（第８図，図版４）

位置　本住居跡は調査区の西側中央部から若干南側にあり，ＳＢ１からは北に8.8m，ＳＢ３から西に3.8mの場所に存在する。検出面は南から北側にかけて緩い斜面となっており，北側部分については壁の内側に沿って巡る壁溝がわずかに残存するのみであった。

規模・平面形　平面形は5.2×4.3mの隅丸方形である。ただし北側部分については住居跡の壁が



1　淡黒褐色粘質土
2　黒褐色粘質土
3　淡黄褐色粘質土
4　淡黄褐色粘質土（黄味つよし）
5　黄褐色粘質土
6　淡黄褐色粘質土
7　黒褐色粘質土
8　淡黒褐色粘質土

第７図　ＳＢ１実測図（1:60）

消滅しているため壁溝から推定した。遺存状況の良いところで検出面から床面までの深さは64cmである。床面には壁の内側に沿って壁溝が巡っているが，断面観察の結果では内側の溝から外側の溝へと拡張した跡が見受けられ，初期では3.3×4.1m，その次が5.0×4.3mで現在の大きさに近くなり，これを僅かに北側に拡張して現在の大きさになったと思われる。

しかしこの間，柱穴は同じ場所にあったことから，これらの拡張はさほど時間を経過せずに行われた可能性が高い。また，一回目は南北方向にかなりの規模で拡張され，内部の機能的な変化を窺わせる。しかし，２回目や最後の拡張は規模も小さく，空間を新たに確保するというよりは補強・補修的な意味合いが強いものと推測できる。

床面・柱穴　床面はほぼ平坦である。北西隅に69×57cmの範囲で炭の広がりが確認できた。主柱穴は２本柱である。この内南側のＰ１は径46×40cm・深さ52cm，北側のＰ２は径52×43cm・深さ55cmである。そしてこのＰ１－Ｐ２を結ぶ線上から若干西側に径50cm・深さ32cmのＰ３がある。Ｐ１－Ｐ２の間に91×57cmの範囲で焼土が存在する。ただしこの焼土はＰ３には見当たらずピット検出面でも確認できなかった。Ｐ１－Ｐ２の距離は2.0mである。

遺物出土状況　遺物は上面から床面まで出土している。大半は小片で散発的な出土であり，北半部に供半する遺物が若干出土している。床面に伴うものには甕（31），鉢（32），椀（38）がある。この他に床面近くで石鏃（416），砥石（431）が出土している。

ＳＢ３（第９図，図版５）

位置　本住居跡は調査区の西側中央部から若干南側にあり，ＳＢ２からは東に3.8m，ＳＢ４からは西に3.6mの場所に，すなわちＳＢ２とＳＢ４のほぼ中間に位置している。検出面は南から北側にかけて緩く傾斜しており，さらに元の水田の段を越えて北側に続くが，この部分は段の落差による削平を受けており，僅かに壁溝だけが残っていた。

規模・平面形　平面形は4.2×3.6mの隅丸長方形である。ただし，北半側については削平を受けているので，全形はつまびらかにできない。遺存状況の良いところで検出面から床面までの深さは0.8mである。床面には壁の内側に沿って幅18cm・深さ５cmの壁溝が巡っているが，ここでもＳＢ２同様，北西側で住居跡の拡張が確認でき，最初は4.0×3.6mであったと想定できる。ただし，この拡幅は西側に僅かに広げた程度となっており，あるいはここでも前述したＳＢ３と同様に補強程度の規模であり，住居跡の構造を大きく変更するようなものではなかったと思われる。

床面・柱穴　床面はほぼ平坦である。主柱穴は２本構造となっており，東側のＰ１は径27cm・深さ55cm，西側のＰ２は径35×30cm・深さ54cmである。Ｐ１とＰ２を結ぶ線上中央から若干北側に40×32cmの長方形をした深さ26cmのＰ３が存在する。また，このＰ１とＰ２の間には74×52cmの範囲で焼土が存在する。ただしこの焼土はＰ３の堀方までしか及んでいない。Ｐ１－Ｐ２の距離は1.9mである。

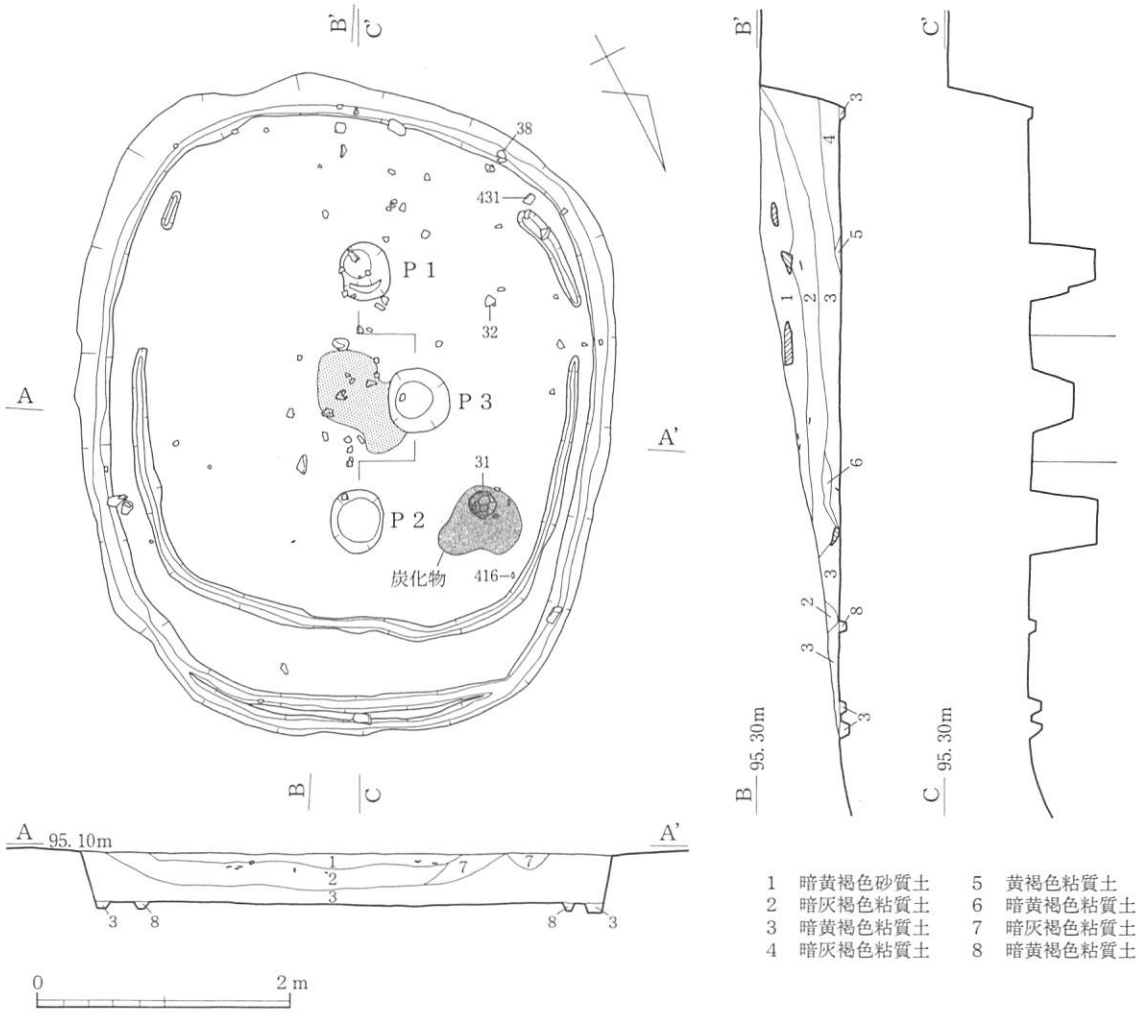
炉跡　Ｐ１－Ｐ２間で焼土が存在するのでそのあたりに炉跡があったとの仮定は可能であるが，明確には存在しない。

遺物出土状況　遺物は遺構の埋土中位ぐらいの所からまとまって出土している。床面に伴うものには壺（53），台石（442），鉄鎌（444）がある。この他に流れ込みと思われる石匙（425）が出土している。

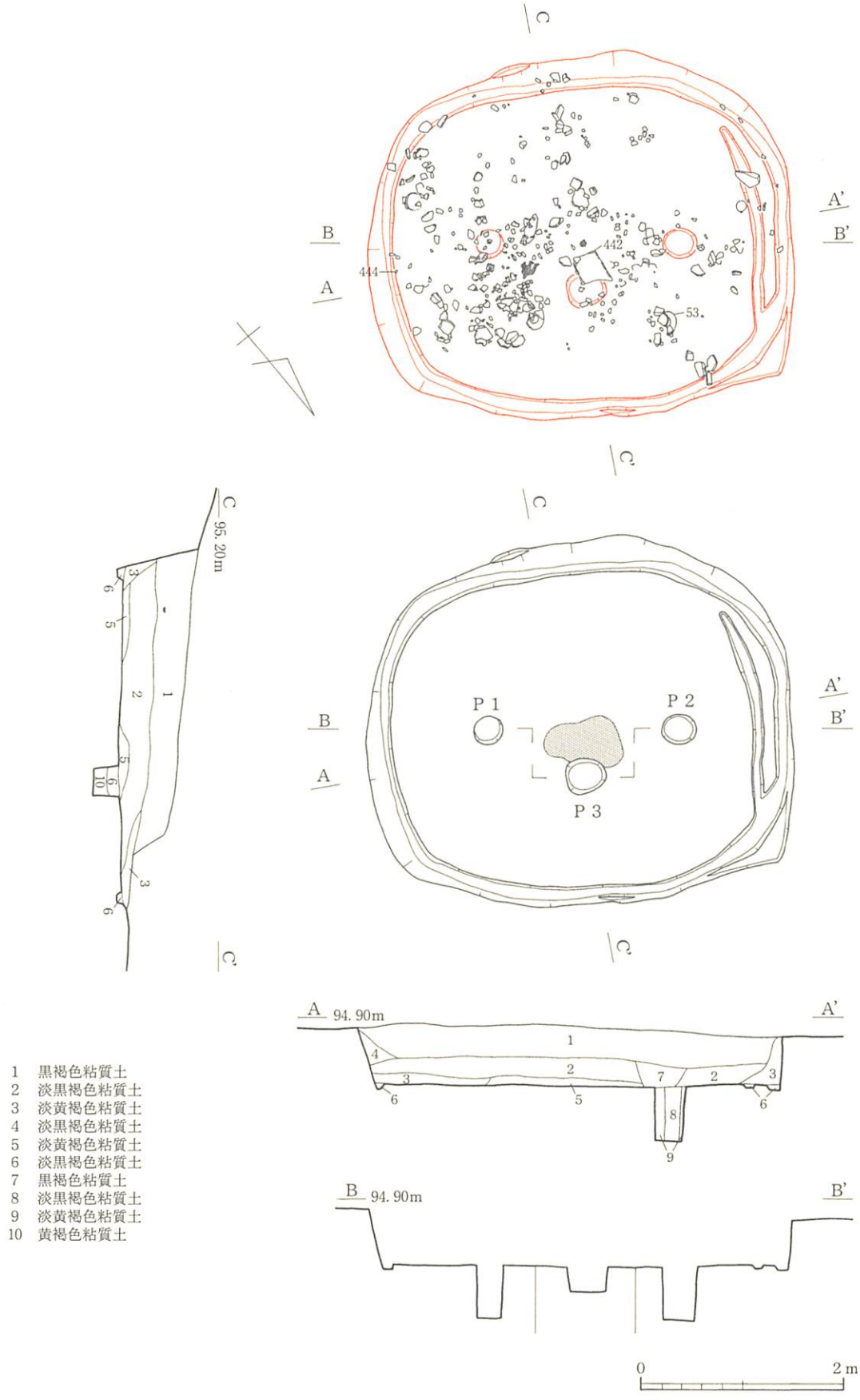
ＳＢ４（第10図，図版６ａ，７ａ）

位置　本住居跡は調査区のやや中央より若干南側にあり，ＳＢ３から東に3.6m，ＳＢ９から南に9.2mの所にある。検出面は南から北側にかけて緩く傾斜しており，北側が水田の段であったので急に切れている。

規模・平面形　北側は削平されており詳細は不明であるが，遺存している南半部の状況から推測すると，平面形は6.1×3.1mの楕円形であろうと思われる。遺存状況の良いところで検出面から床面までの深さは26cmであった。



第８図　ＳＢ２実測図（1:60）（アミ目は焼土）



1　黒褐色粘質土
2　淡黒褐色粘質土
3　淡黄褐色粘質土
4　淡黒褐色粘質土
5　淡黄褐色粘質土
6　淡黒褐色粘質土
7　黒褐色粘質土
8　淡黒褐色粘質土
9　淡黄褐色粘質土
10　黄褐色粘質土

第９図　ＳＢ３実測図（1:60）（アミ目は焼土）

床面・柱穴　床面は平坦であるが，南から北にほんの少し傾斜する。壁溝や柱穴等は見あたらない。

炉跡　確認できず。

遺物出土状況　床面上から石器制作時に産出されるチップや細片が比較的まとまって出土した。台石やハンマーストーン，石核等は未確認である。供伴すると思われる遺物には高杯（87）がある。この他は床面から少し浮いた状態で出土しているのがほとんどである。

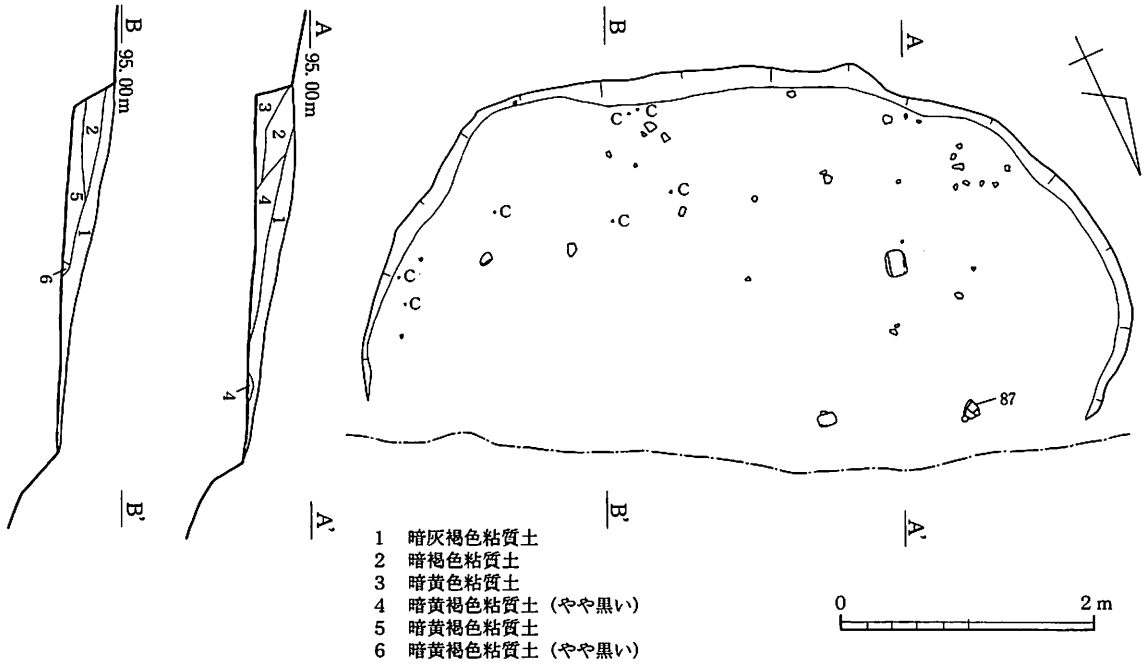
ＳＢ５（第11図，図版６ｂ～７ｂ）

位置　調査区の西側の中央部付近にあり，ＳＢ２から北に2.8m，ＳＢ９から西に13.9mのところに存在する。検出面は南から北側にかけて僅かに傾斜する。上面がかなり削平されており遺存状況は必ずしも良好ではない。

規模・平面形　平面形は3.5×2.9mの隅丸長方形である。北側の遺存状況は不良で，僅かに住居跡の壁の立ち上がりを把握したに過ぎない。遺存状況の良いところで床面までの深さは27cmであった。

床面・柱穴　床面はほぼ平坦である。壁の内側に沿って幅16cm・深さ４cmの壁溝が巡っているが，全周はせず西側隅付近から南隅をとおり東隅で終わりほぼ半周する。柱穴は２本柱の構造で東側のＰ１は径38cm・深さ61cm，西側のＰ２は径42cm・深さ64cmで，Ｐ１とＰ２を結ぶ線上の中央若干北側に径44×32cm・深さ42cmの楕円形の土坑Ｐ３が存在する。この他に北側隅に51×47cm・深さ５cmの極浅い落ち込みＰ４がある。Ｐ１－Ｐ２の距離は2.0mであった。

炉跡　Ｐ１とＰ２の間に42×22cmの範囲で焼土面が存在するので，このあたりに火を受けた痕跡は認めうるが，炉跡であるとは断定できない。

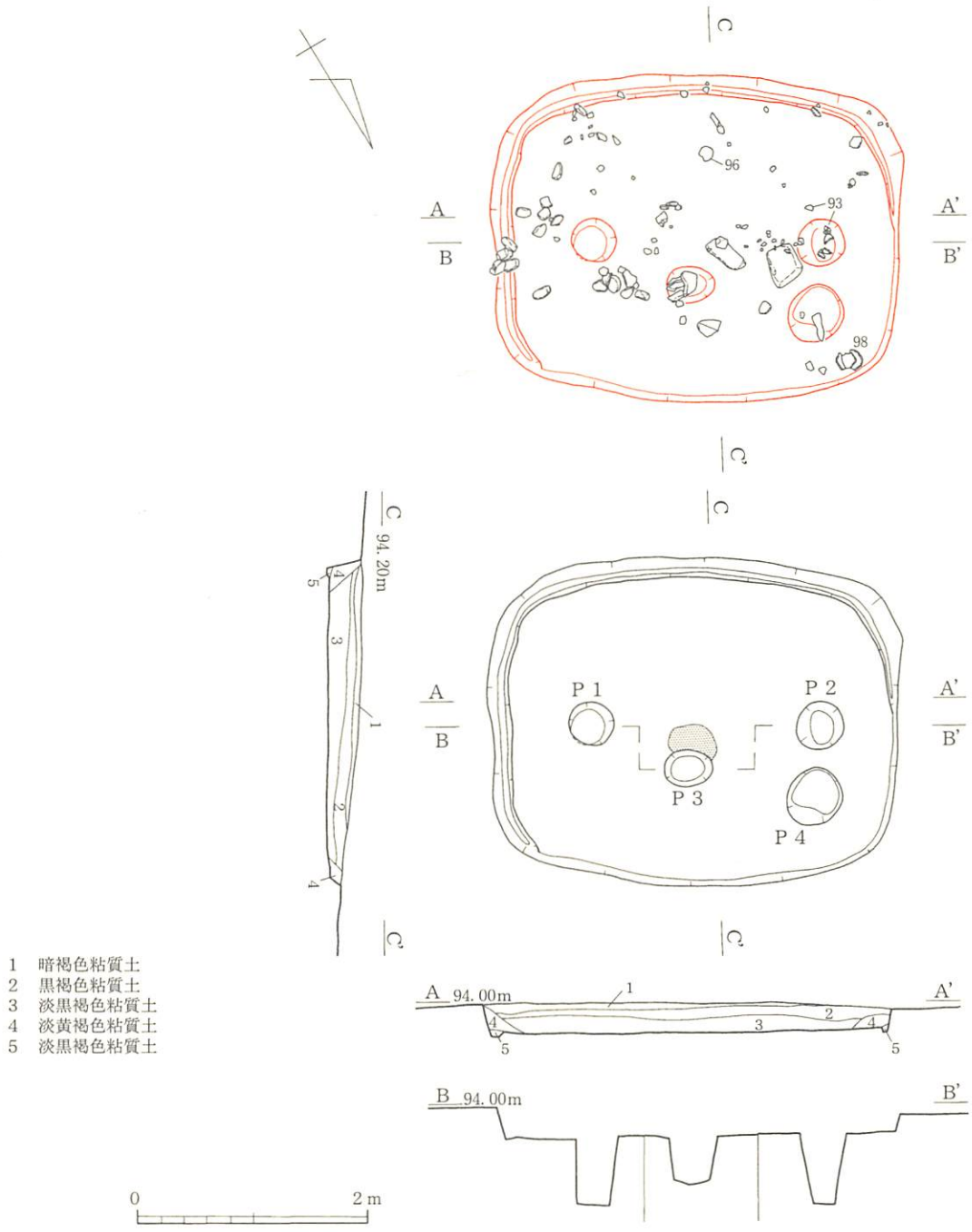


第10図　ＳＢ４実測図（1:60）（Ｃはチップ・細片）

遺物出土状況　ほぼ床に近いところからの出土である。甕（93），椀（96，98）が床面直上から出土している。また，中央部付近では台石等が出土している。

ＳＢ６（第12図，図版６ｃ，７ｃ，８ａ，９ａ）

位置　調査区の西端部に位置する。ＳＢ５から西に14.2mのところにあり，ＳＢ７と隣接する。断面観察によりＳＢ６がＳＢ７を切っていることから，ＳＢ７→ＳＢ６の前後関係が確認できる。



第11図　ＳＢ５実測図（1:60）（アミ目は焼土）

南から北側にかけて緩く傾斜し，後世にかなりの削平を受けている模様で，特に北側の遺存状況は良くない。

規模・平面形　平面形は3.9×2.7mの方形ないしは長方形である。北側部分の削平が著しいのとＳＢ７の床面を僅かに破壊しているだけなので東側の状況についても不明な部分が多い。最も遺存状況の良いところで床面までの深さは30cmであった。

床面・柱穴　柱穴や壁溝は未確認である。床面は僅かに南から北側にかけて傾斜する。

炉跡　確認できず。

遺物出土状況　小片が出土している。全て床面より少し上位から出土している。

ＳＢ７（第12図，図版６ｃ，７ｃ，８ｂ，９ｂ）

位置　調査区の西端部に位置する。ＳＢ５から西に10.1mのところにあり，ＳＢ６及びＳＢ８と隣接する。断面観察によりＳＢ７がＳＢ６及びＳＢ８によって切られていることから，ＳＢ７→ＳＢ６・ＳＢ８の前後関係が確認できる。南から北側にかけて緩く傾斜し，後世にかなりの削平を受けている模様で，特に北側の遺存状況は良くない。

規模・平面形　平面形は4.0×3.1mの方形ないしは長方形である。北側部分の削平が著しいのとＳＢ６及びＳＢ８により破壊されているので東西の状況についても不明な部分が多い。最も遺存状況の良いところで床面までの深さは31cmであった。

床面・柱穴　柱穴や壁溝は未確認である。床面は僅かに南から北側にかけて傾斜する。

炉跡　確認できず。

遺物出土状況　小片が出土している。床面に伴うものには高杯（120）がある。

ＳＢ８（第13図，図版６ｃ，７ｃ，８ｃ，９ｃ）

位置　調査区の西端部に位置する。ＳＢ５から北西に5.8mのところにあり，ＳＢ７と隣接する。断面観察によりＳＢ８がＳＢ７を切っていることから，ＳＢ７→ＳＢ８の前後関係が確認できる。南から北側にかけて緩く傾斜し，後世にかなりの削平を受けている模様で，特に北側の遺存状況は良くない。

規模・平面形　平面形は3.5×1.3mの方形ないしは長方形である。北側部分の削平が著しいのとＳＢ７の床面を僅かに破壊しているだけなので西側の状況についても不明な部分が多い。最も遺存状況の良いところで床面までの深さは23cmであった。

床面・柱穴　柱穴や壁溝は未確認である。床面は僅かに南から北側にかけて傾斜する。

炉跡　確認できず。

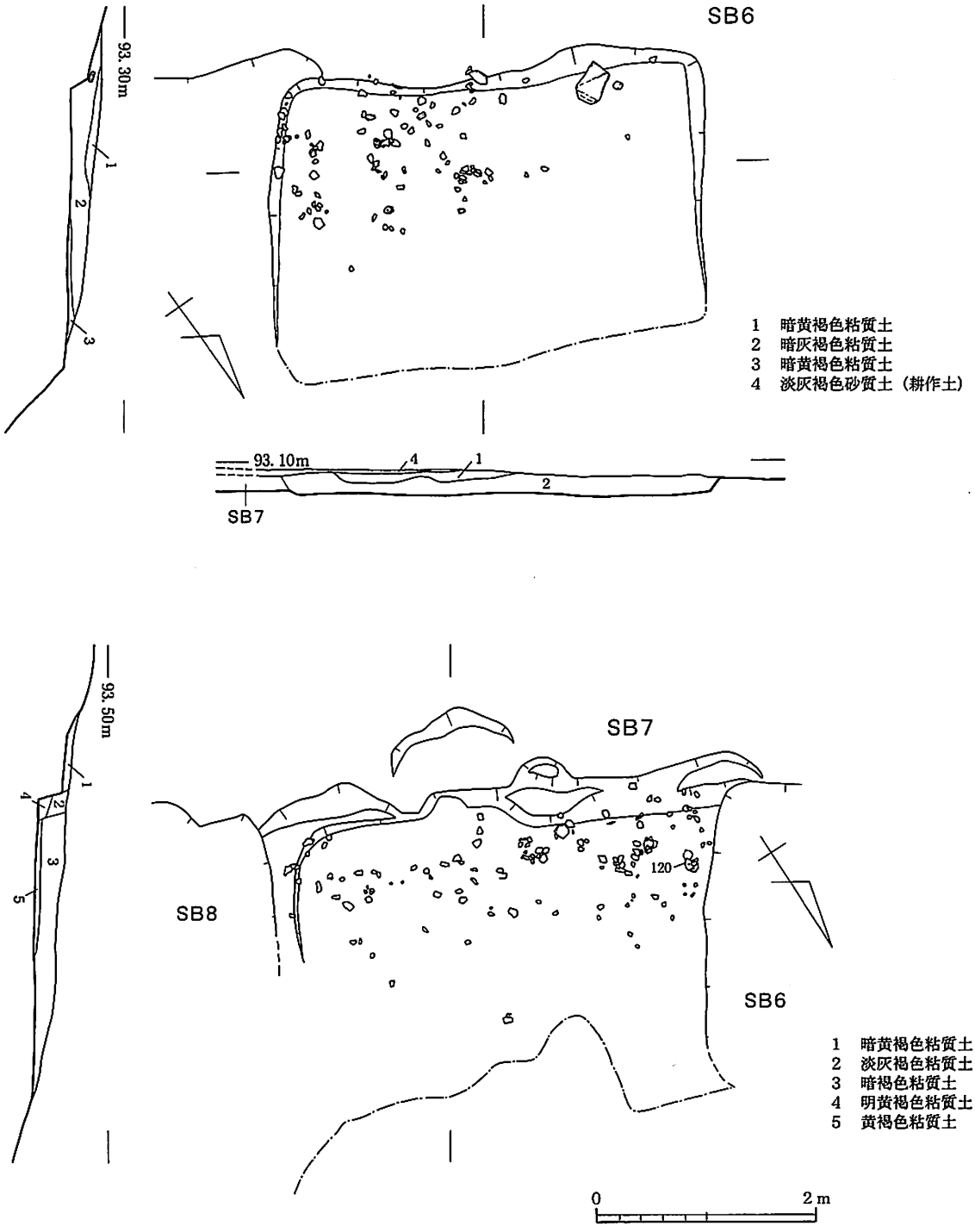
遺物出土状況　小片が出土している。床面に伴うものには甕（125），壺（128）がある。

ＳＢ９（第14図，図版10，11）

位置　調査区の中央部やや西側にあり，ＳＢ４から北に9.2m，ＳＢ５から東に13.8mの位置にあ

る。南から北側にかけて緩やかに傾斜するが，上面の掘削は意外と少なく遺存状況は良好である。

規模・平面形　平面形は3.9×3.2mの楕円形である。壁はしっかり残っており，検出面から床面までの深さは深いところで80cm浅いところでも47cmとなっており，前述した住居跡に較べると残り具合は格段に良い。

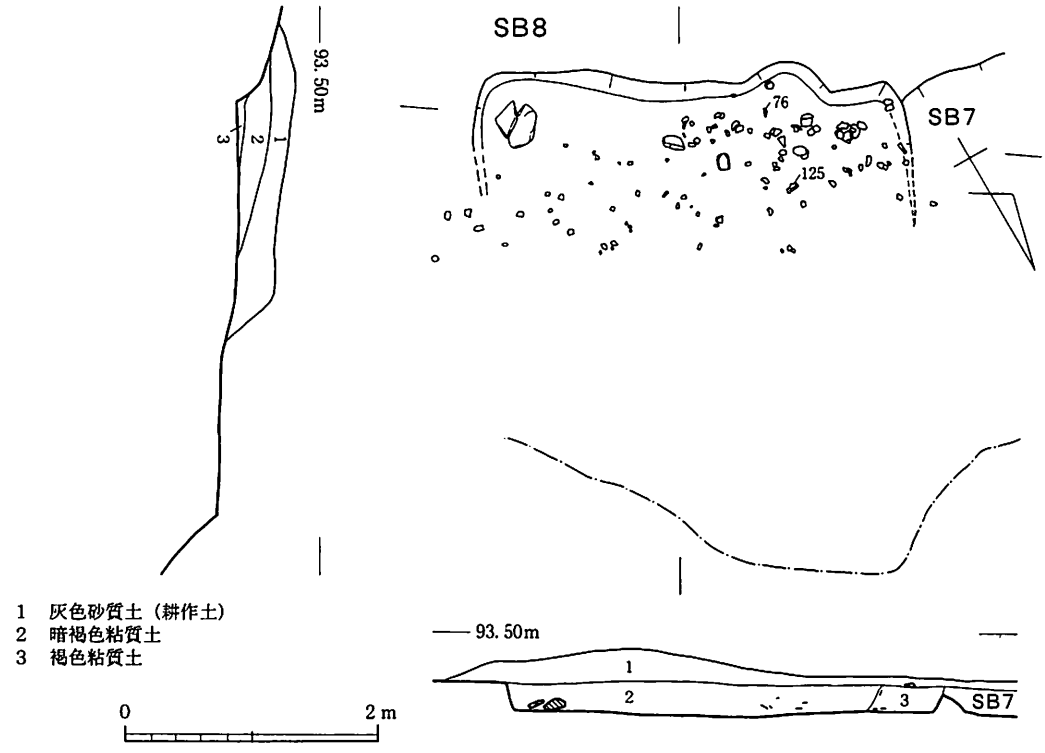


第12図　ＳＢ６・７実測図（1:60）

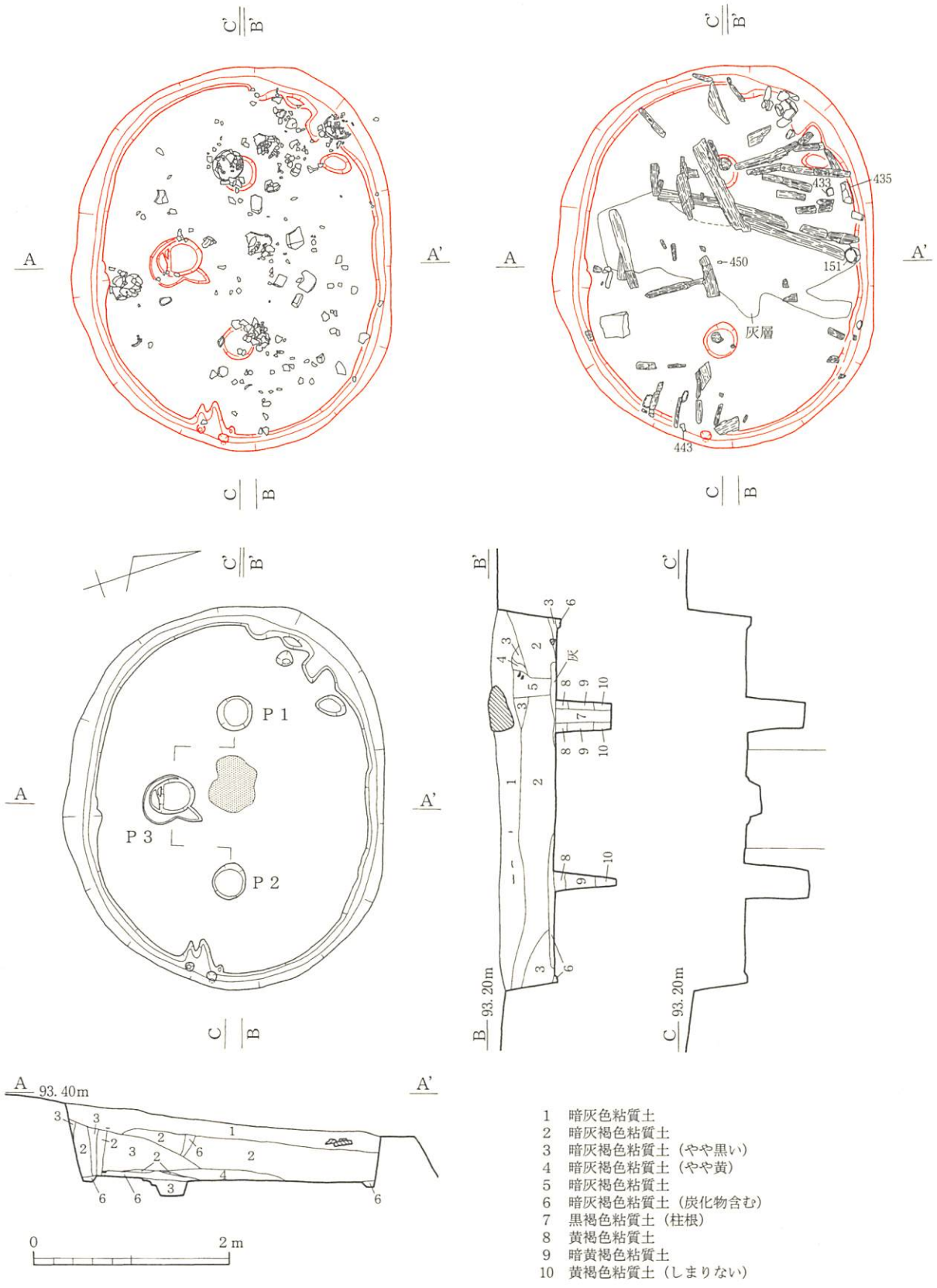
床面・柱穴　床面はほぼ平らである。壁の内側に沿って幅28～15cm・深さ５cmの壁溝が巡っている。西側と東側が若干広くなっており，小さなピットが付随する。性格については不明だが，出入り口であったのかも知れない。柱穴は２本あり，西側のＰ１は径35cm・深さ59cm，東側のＰ２は径37×32cm・深さ56cmである。両者ともに断面から柱根が確認できる。さらにＰ１とＰ２を結ぶ線上の中心から若干南側に52×42cm・深さ25cmのＰ３がある。Ｐ１－Ｐ２の距離は1.7mである。

炉跡　Ｐ１とＰ２の中間に56×37cmの範囲で焼土が存在するが，炉跡であるとは断定できない。床面の直近で炭化物と灰層が確認できた。そしてＰ１およびＰ２上には柱材と思われる炭化物が立った状態で検出できた。しかし床面上では火を受けた痕跡は前述した中央部以外では確認できなかったので，ある程度住居跡が使われなくなってから意図的あるいは不可抗力的に火を受けた可能性が高い。炭化物の残り具合からすれば東側半分が良く燃えており，とりわけ北東部が盛んに燃えていたようである。

遺物出土状況　上面から比較的まとまって出土している。床面上では椀（151），砥石（433，435），鉄鎌（443），鉄器（450）が出土している。



第13図　ＳＢ８実測図（1:60）



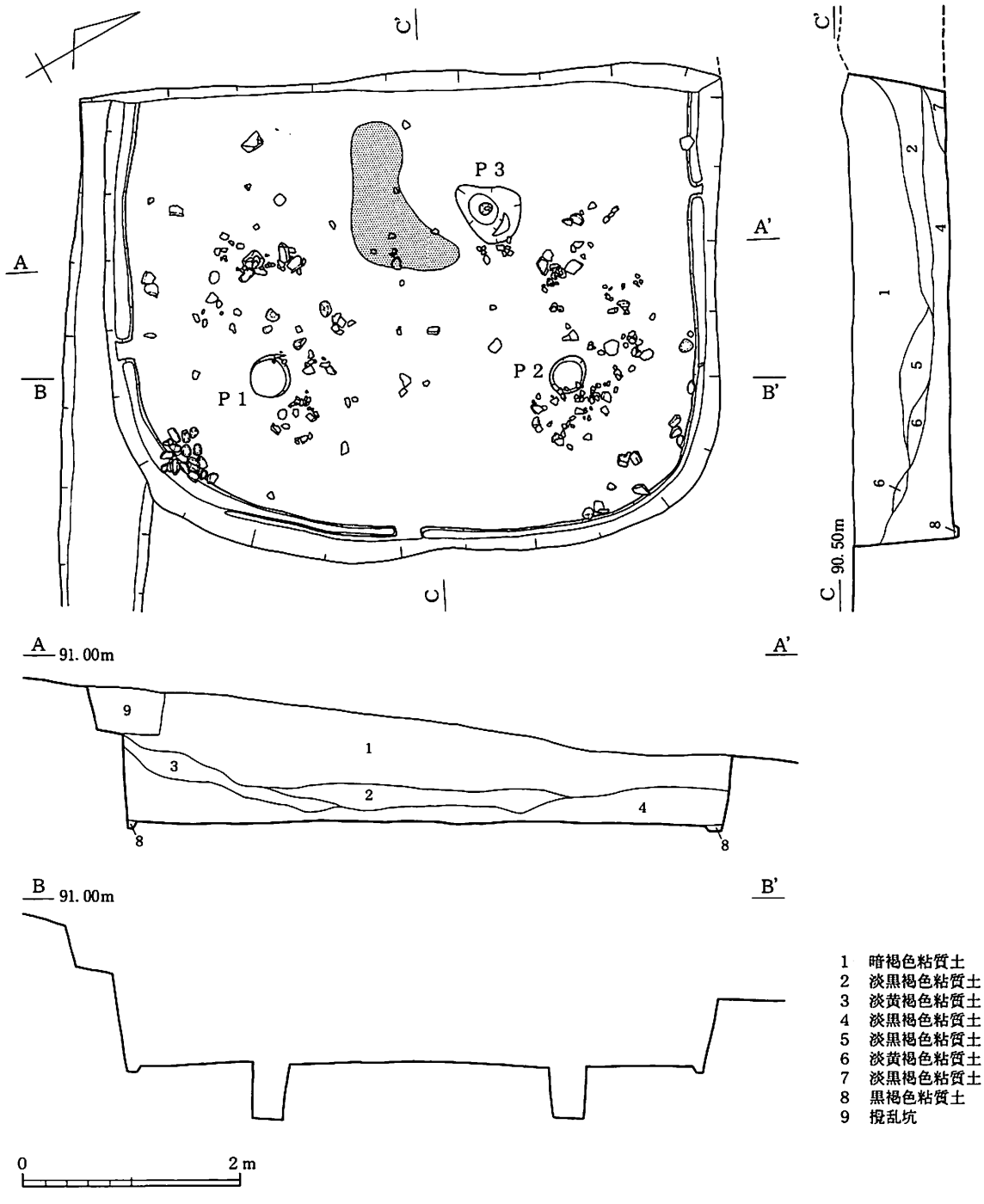
1　暗灰色粘質土
2　暗灰褐色粘質土
3　暗灰褐色粘質土（やや黒い）
4　暗灰褐色粘質土（やや黄）
5　暗灰褐色粘質土
6　暗灰褐色粘質土（炭化物含む）
7　黒褐色粘質土（柱根）
8　黄褐色粘質土
9　暗黄褐色粘質土
10　黄褐色粘質土（しまりない）

第14図　ＳＢ９実測図（1:60）（アミ目は焼土）

ＳＢ10（第15図，図版12）

位置　調査区の中央からやや北側にあり，ＳＢ９から北に20.6m，ＳＢ11から西に12.8mの調査区境に位置している。本住居跡は調査区の境にあるため西側の1/4程が未掘である。本調査に先立つ分布調査時の試掘坑により南側が破壊されている。

規模・平面形　平面形は5.6×4.7mの隅丸方形であると思われるが，西側部分が未調査のため推定の域を出ない。遺存状況はすこぶる良好で，検出面から床面までの深さは深いところで118cm

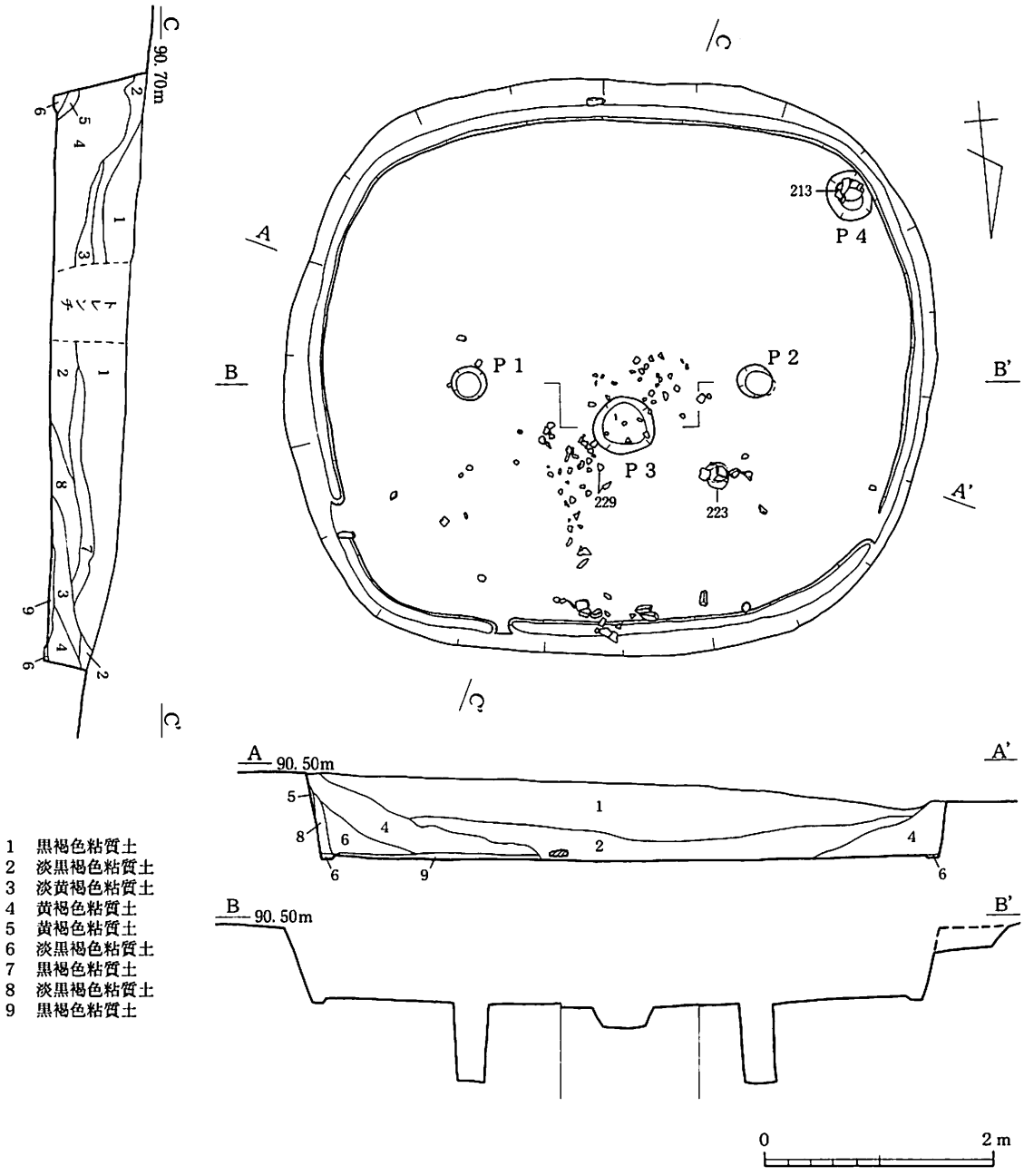


第15図　ＳＢ10実測図（1:60）（アミ目は焼土）

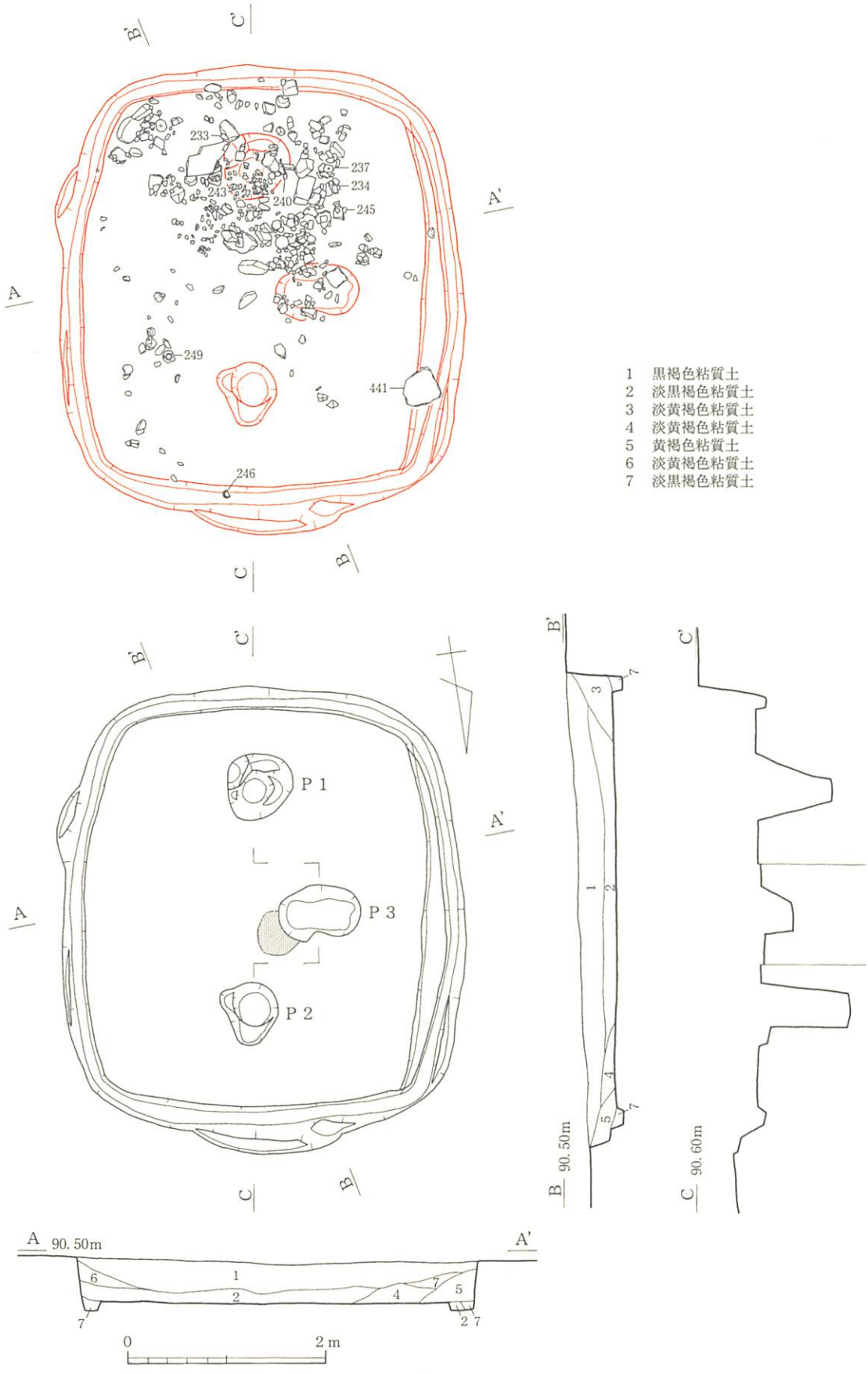
浅いところでも59cmと全体的にかなりの深さであった。

床面・柱穴　床面はほぼ平らである。壁の内側に沿って幅15cm・深さ５cmの壁溝が巡っている。しかしこの壁溝は全周するものではなく，北側と東側のほぼ中央及び南側の隅よりで平坦面を残して途切れている。柱穴は平面形と配置状況から４本柱の構造になると思われるが，未掘部分があるので断定は出来ない。南東隅のＰ１は径40×35cm・深さ45cm，北東隅のＰ２は径37×30・深さ47cmである。Ｐ１－Ｐ２の距離は2.7mである。

炉跡　中央部からやや北寄りにある径68×54cm・深さ40cmのＰ３は炉跡であると思われ，Ｐ３から少し南に134×89cmの範囲で炭化物混じりの焼土が広がっていた。



第16図　ＳＢ11実測図（1:60）



第17図　ＳＢ12実測図（1:60）（アミ目は焼土）

遺物出土状況　遺物は１層の下面付近からの出土が多く，住居跡がある程度埋没してからの投棄を窺わせる。床面に伴うものには小片が僅かに存在するのみである。

ＳＢ11（第16図，図版13）

位置　調査区の中央から若干北側にあり，ＳＢ10から東に12.8m，ＳＢ12から西に6.4mの位置にある。南から北側にかけて若干傾斜している。住居跡の西側の一部が予備調査に伴う試掘坑により破壊されている。

規模・平面形　平面形は5.7×5.0mの楕円形である。検出面からの深さは深いところで88cm，浅いところで34cmであった。北側に行くほど上面が削平されているようである。

床面・柱穴　床面はほぼ平坦である。壁の内側に沿って幅18cm・深さ４cmの溝が巡っている。但しこの溝は全周するものではなく，北西の隅と北側中央からやや東よりの所及び北東隅付近で一旦途切れている。柱穴は２本柱構造で，東側のＰ１は径30cm・深さ66cm，西側のＰ２は径32×26cm・深さ68cmである。そしてＰ１とＰ２を結ぶ線上中央部から若干北側にずれて径54×50cm・深さ18cmのＰ３が存在する。南西隅近くで検出したＰ４は径44×37cm・深さ16cmで，性格ははっきりしないものの本住居跡に伴うピットである。なおＰ１－Ｐ２の距離は2.5mである。

炉跡　炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　遺物は床面から高杯（223），甕（229）が，Ｐ４から甕（213）が出土している。遺物の量は概して少ない。

ＳＢ12（第17図，図版14）

位置　本住居跡は調査区の中央部から北側にあり，ＳＢ11から東に6.4mに位置している。

規模・平面形　平面形は4.5×4.0mの長方形である。南から北側にかけて緩く傾斜しており上面は削平を受けている。検出面からの深さは深いところで48cm，浅いところで30cmとなっている。北側のほうが浅くなっている。

床面・柱穴　床面は平坦である。壁の内側に沿って幅18cm・深さ10cmの壁溝が巡っている。西側の壁溝は二条であり，土層では内側から外側への拡張が確認できた。しかし面積的には小規模である事から，西側部分の補強あるいは補修程度であったと見るのが妥当であろう。柱穴は南北に対峙するように二本配されており，南側のＰ１は径67cm・深さ77cm，北側のＰ２は63×51cm・深さ90cmであった。そしてＰ１とＰ２を結んだ線上の中心から少し西側にずれて84×47cm・深さ31cmの長方形をしたＰ３が配されている。Ｐ１－Ｐ２の距離は2.2mである。

炉跡　Ｐ１とＰ２及びＰ３で囲われた空間すなわち住居跡のほぼ中央部に45×40cmの範囲で焼土が存在する。いわゆる炉跡は確認できなかった。

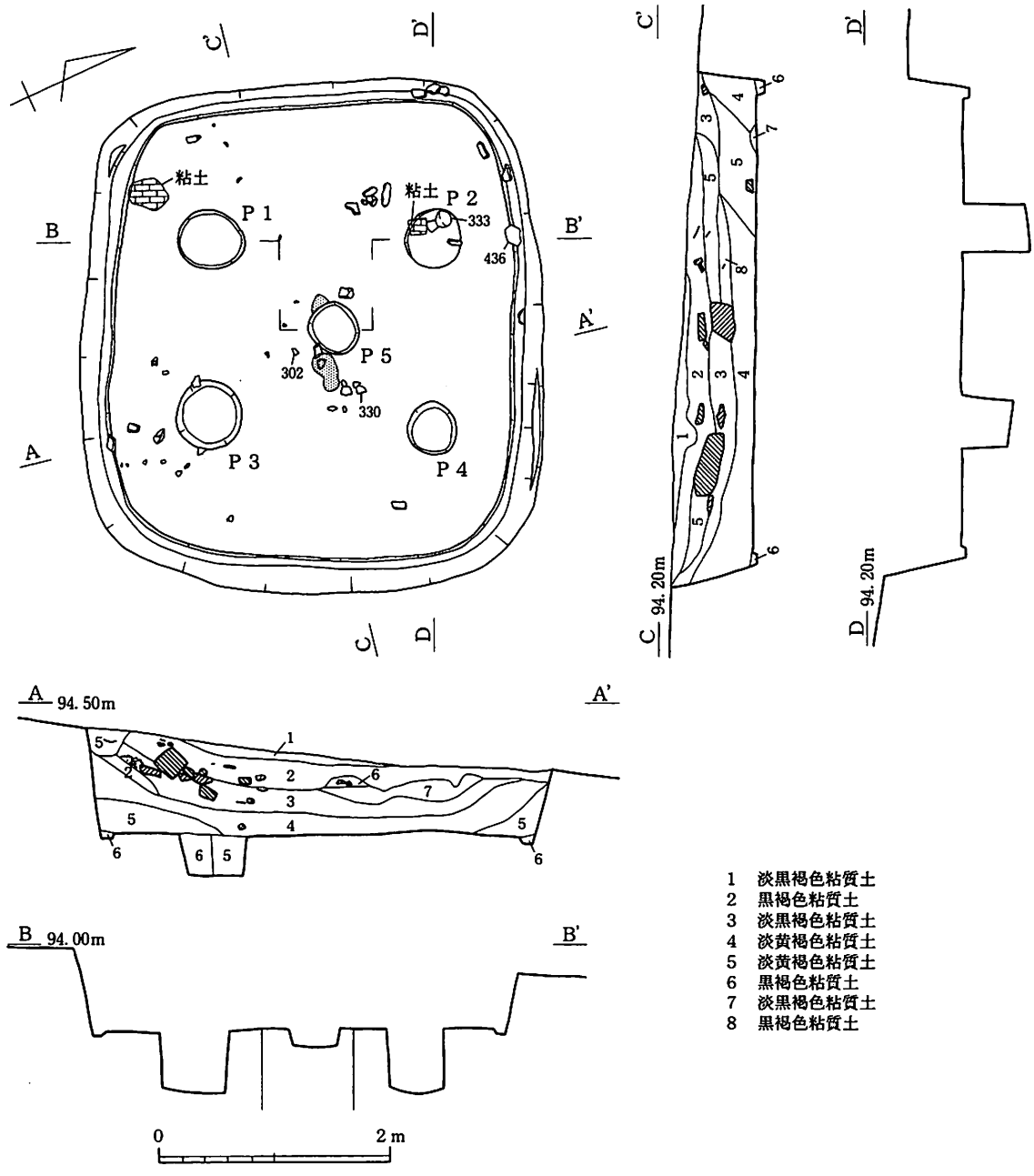
遺物出土状況　遺物は床面近くから若干南側に片寄った感じで土器や台石が出土している。床面からは壺（233, 234），甕（237, 240, 243），高杯（245, 249），底部（246），台石（441）がある。

ＳＢ13（第18図，図版15，16）

位置　調査区の中央から若干東側にあり，ＳＢ９から東に29.6m，ＳＢ14から西に12.5mに位置する。南から北側にかけて傾斜する斜面上で検出した。

規模・平面形　平面形は4.4×4.0mの隅丸方形である。検出面からの深さは91～45cmで，壁の内側に沿って幅15cm・深さ６cmの壁溝が巡っている。

床面・柱穴　床面はほぼ平らである。柱穴は四隅から適当な距離を置いて４本確認できた。南西側のＰ１は径51×57cm・深さ53cm，北西側のＰ２は径49cm・深さ56cm，南東側のＰ３は径58cm・深さ36cm，そして北東側のＰ４は径44cm・深さ43cmであった。住居跡のほぼ中央部には径46×40

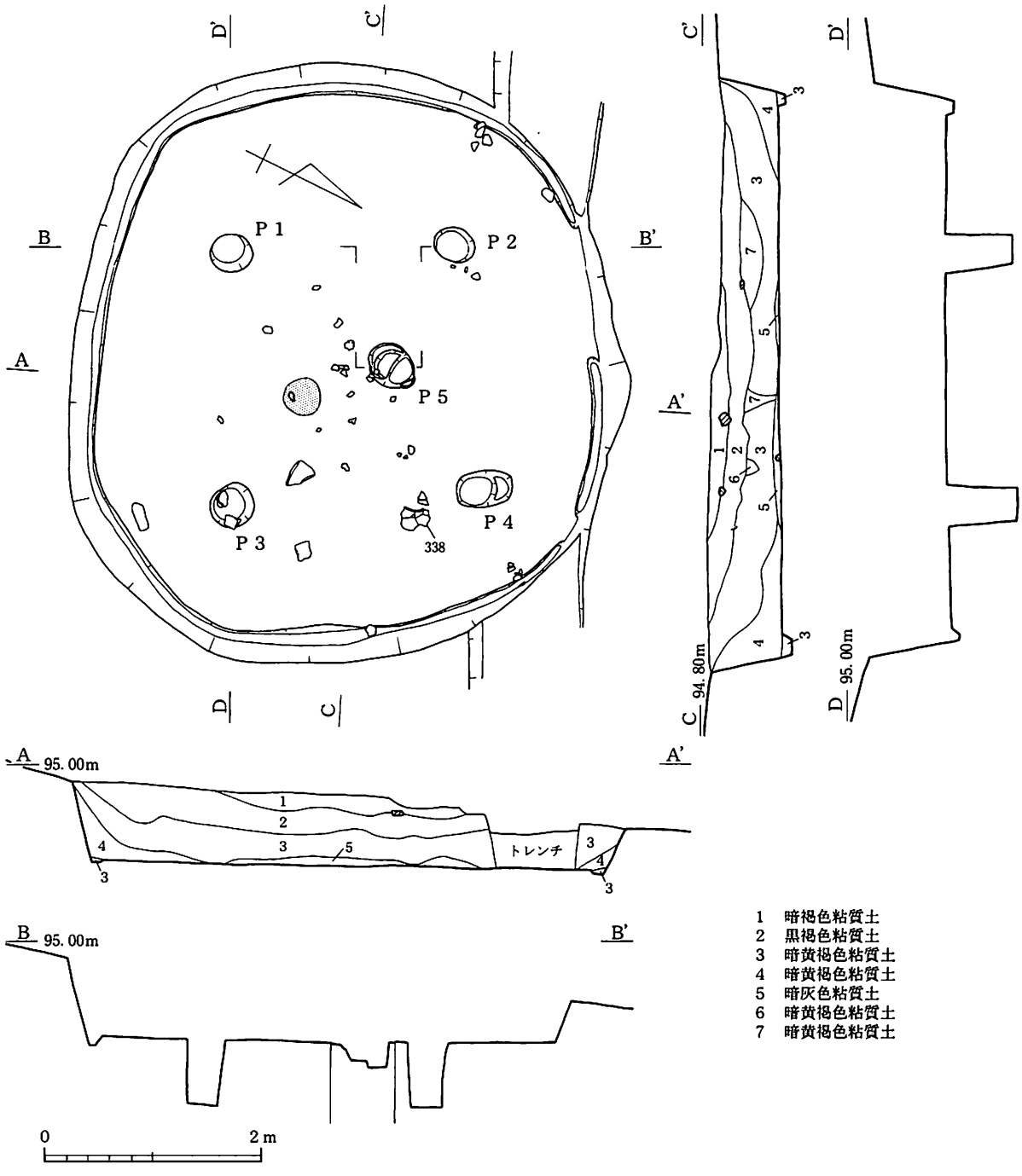


第18図　ＳＢ13実測図（1:60）（アミ目は焼土）

cm・深さ17cmのＰ５がある。各柱間距離はＰ１－Ｐ２及びＰ３－Ｐ４が2.0m，Ｐ１－Ｐ３が1.6m，Ｐ２－Ｐ４が1.7mで，南北方向が東西方向に較べて若干長くなっている。

炉跡　中央部にあるＰ５の周りから東側に35×20cmの範囲で，また西側に15×10cmの範囲で焼土が確認できた。さらにＰ５からは炭化物が検出できたので，炉跡であろうと思われる。

遺物出土状況　遺物は南東部を中心に上面から多量の土器が重なったように出土した。これらの土器は住居跡がある程度埋没してから意図的に破棄されたようで，完形もしくは完形品に近いものが多い。さらに南東隅には中位から粘土塊が見つかっている。しかしながら，住居跡の床面に



第19図　ＳＢ14実測図（1:60）（アミ目は焼土）

伴う遺物は意外に少なく甕（302），椀（330），壺（333），砥石（436）がある程度である。

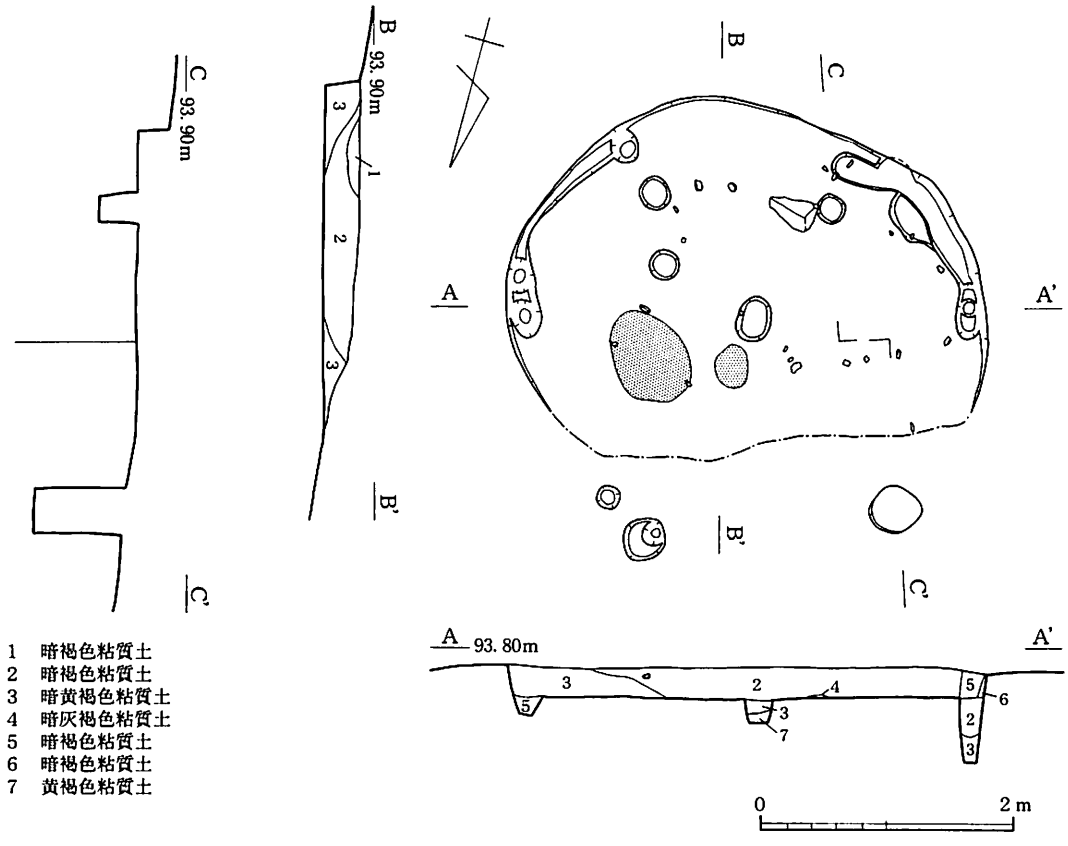
ＳＢ14（第19図，図版17）

位置　調査区の中央部からやや東側にあり，ＳＢ13から東に12.5m，ＳＢ15から南に9.1mに位置する。南から北側にかけて緩やかに下る斜面に存在する。

規模・平面形　平面形は5.5×5.2mの楕円形である。検出面から床面までの深さは深いところで79cm，浅いところでも38cmであった。壁の内側に沿って幅15cm・深さ10～５cmの壁溝が巡っている。但し，北側部分は予備調査による試掘坑により破壊されており，現状では一旦切れている壁溝がここに巡っていた可能性は否定できない。

床面・柱穴　床面はほぼ平らである。柱穴は４隅にあり，隅部から適当な距離を置いて存在する。南西側のＰ１は径36cm・深さ61cm，北西側のＰ２は径37×30cm・深さ61cm，南東側のＰ３は径42cm・深さ65cmそして北東側のＰ４は径51×34cm・深さ65cmであった。住居跡の中央部から若干北寄りに径48×36cm・深さ25cmのＰ５がある。各柱間距離は南北方向のＰ１－Ｐ２が2.1m，Ｐ３－Ｐ４が2.2mで，東西方向のＰ１－Ｐ３が2.4m，Ｐ２－Ｐ４が2.3mとなっており，東西方向が南北方向よりも若干長くなっている。

炉跡　中央部付近に35×35cmの範囲で円形の焼け土が確認できる。前述したＰ５から焼土や炭化物が検出できたことなどからＰ５は炉跡である可能性が強い。



第20図　ＳＢ15実測図（1:60）（アミ目は焼土）

遺物出土状況　遺物は上面から床面まで疎らに出土している。床面に伴う遺物は甕（338）などがある。

ＳＢ15（第20図，図版18）

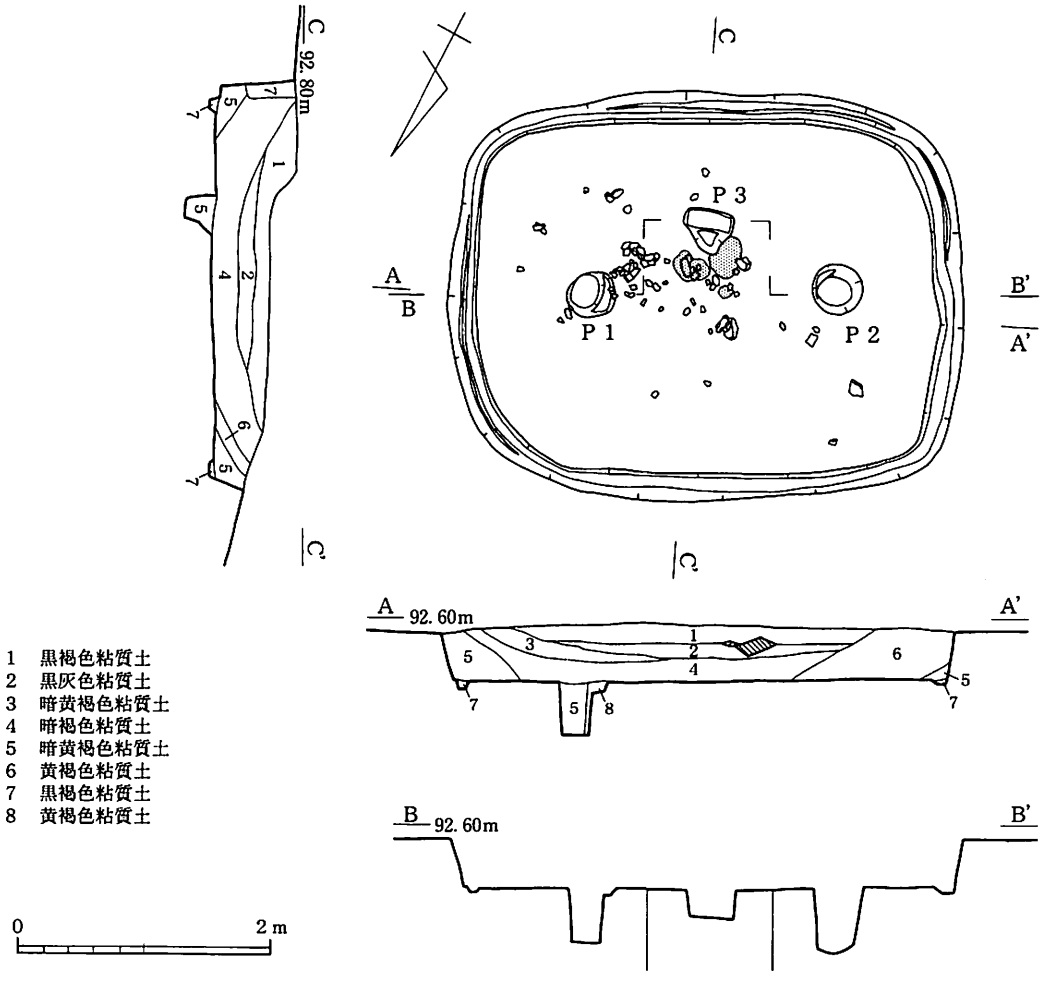
位置　調査区の東側にあり，ＳＢ14から北に9.1m，ＳＢ16から南東に6.1mに位置する。北側部分は田の段に当たるため消滅している。

規模・平面形　平面形は北側部分が消滅しているが，3.8×2.9mのほぼ円形になると思われる。壁の内側に沿って幅25～6cm・深さ21～10cmの壁溝が一部途切れながら巡っている。検出面からの深さは残りの良いところで31cmである。

床面・柱穴　床面はほぼ平らである。ピットが住居内にはいくつか存在するものの，確実に住居跡に伴うと思われる柱穴は確認できなかった。

炉跡　住居跡の中央やや北寄りに76×55cmの楕円形を呈する範囲と33×24cmの範囲の二カ所で焼土を検出した。この近くに存在するピットが炉跡である可能性は高い。

遺物出土状況　小片が埋土中から若干量出土している。



第21図　ＳＢ16実測図（1:60）（アミ目は焼土）

ＳＢ16（第21図，図版19）

位置　調査区の東側にあり，ＳＢ15から北西へ6.1ｍのところに位置する。これより北東では住居跡は確認していない。おおよそ２／３程が水田に伴う段により上面を削平されている。

規模・平面形　平面形は4.1×3.2ｍの隅丸長方形である。検出面から床面までの深さは深いところで62cm，浅いところで19cmとなっている。壁の内側に沿って幅15cm・深さ８～４cmの壁溝が巡る。

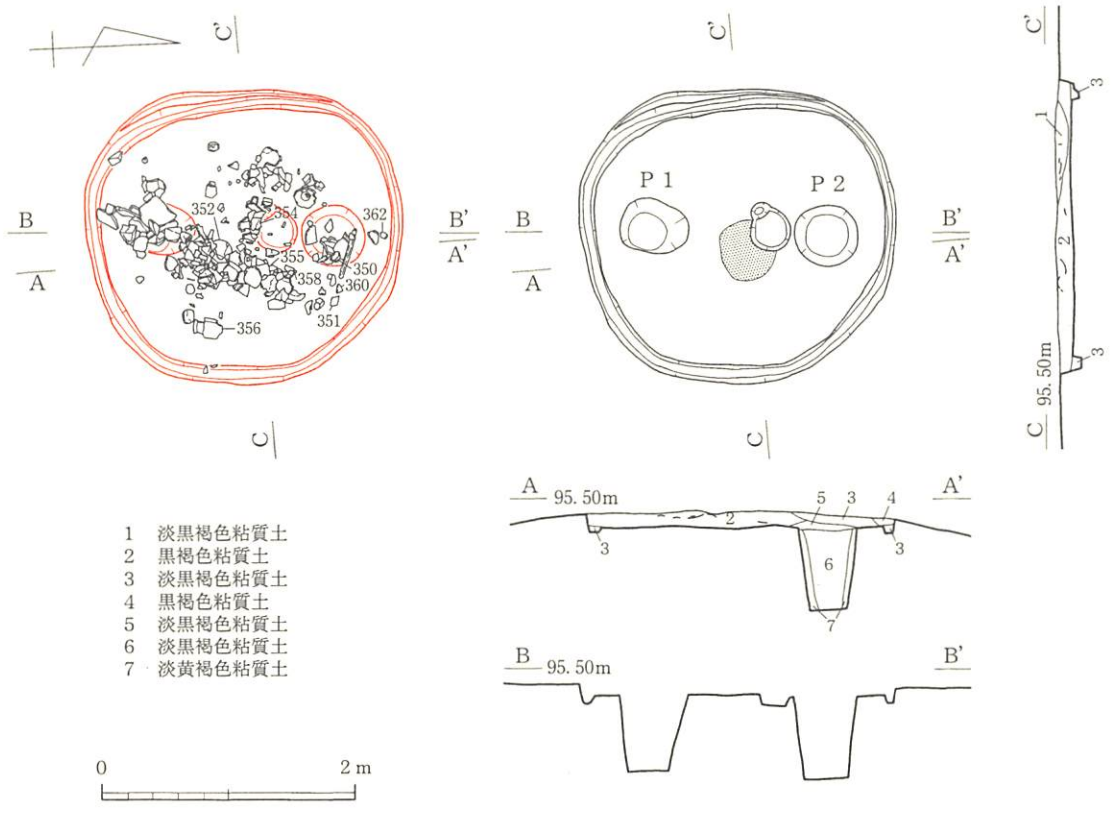
床面・柱穴　床面はほぼ平らである。柱穴は２本で，東側のＰ１は径39×34cm・深さ44cmで，西側のＰ２は径39cm・深さ53cmであった。Ｐ１とＰ２を結ぶ線の中央よりやや東にずれて径42×37cm・深さ24cmのＰ３が存在する。Ｐ１－Ｐ２の距離は2.0ｍである。

炉跡　Ｐ１とＰ２の中間に53×49cmの範囲で焼土が広がっている。炉跡を物語るものは確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中及びＰ３の周辺から小片が出土している。いずれも床面から少し浮いた状態で出土している。

ＳＢ17（第22図，図版20）

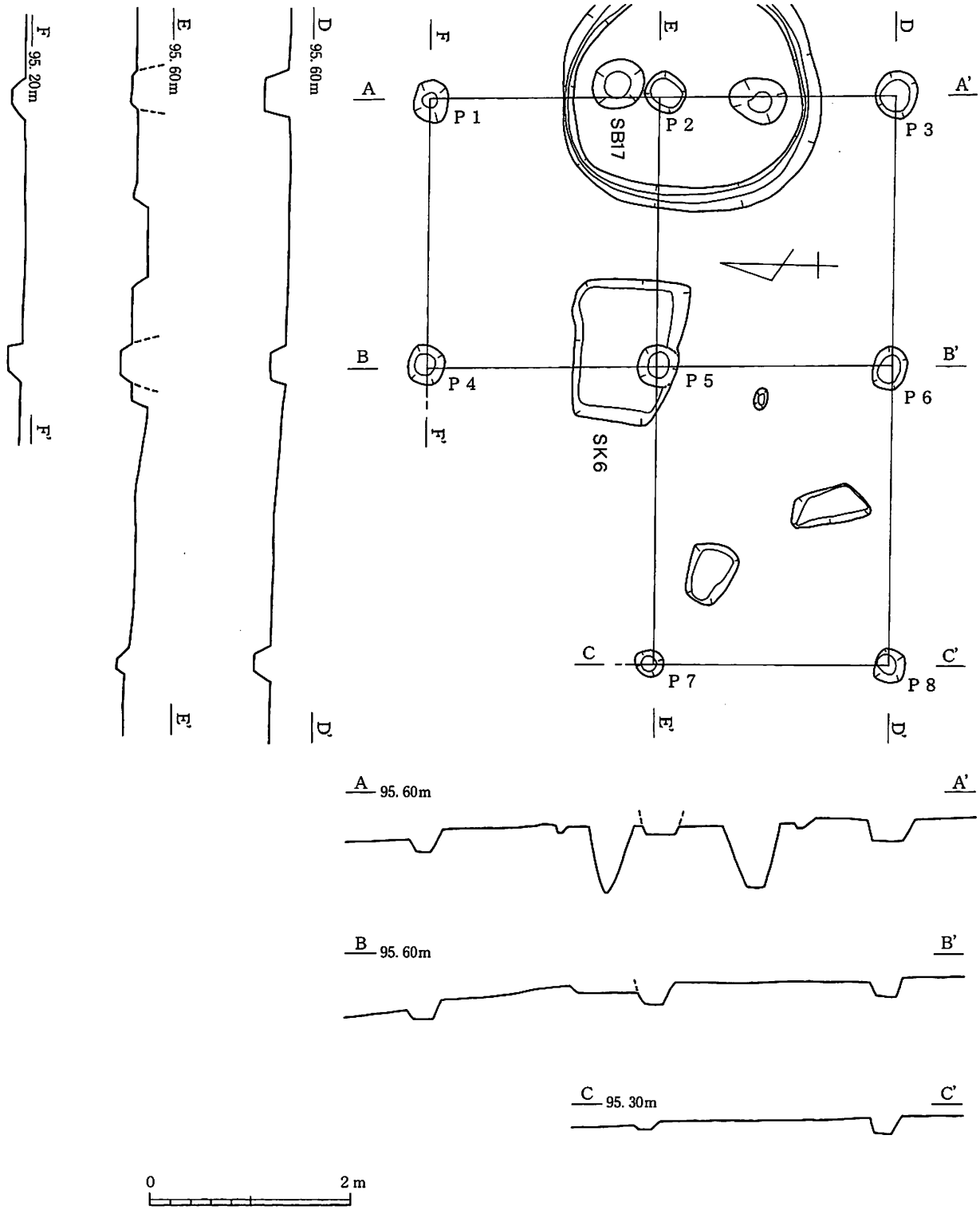
位置　調査区の南東側にあり，ＳＢ14から南に4.9ｍに位置している。後述するＳＢ18に切られており，遺構の大半が削平されている。



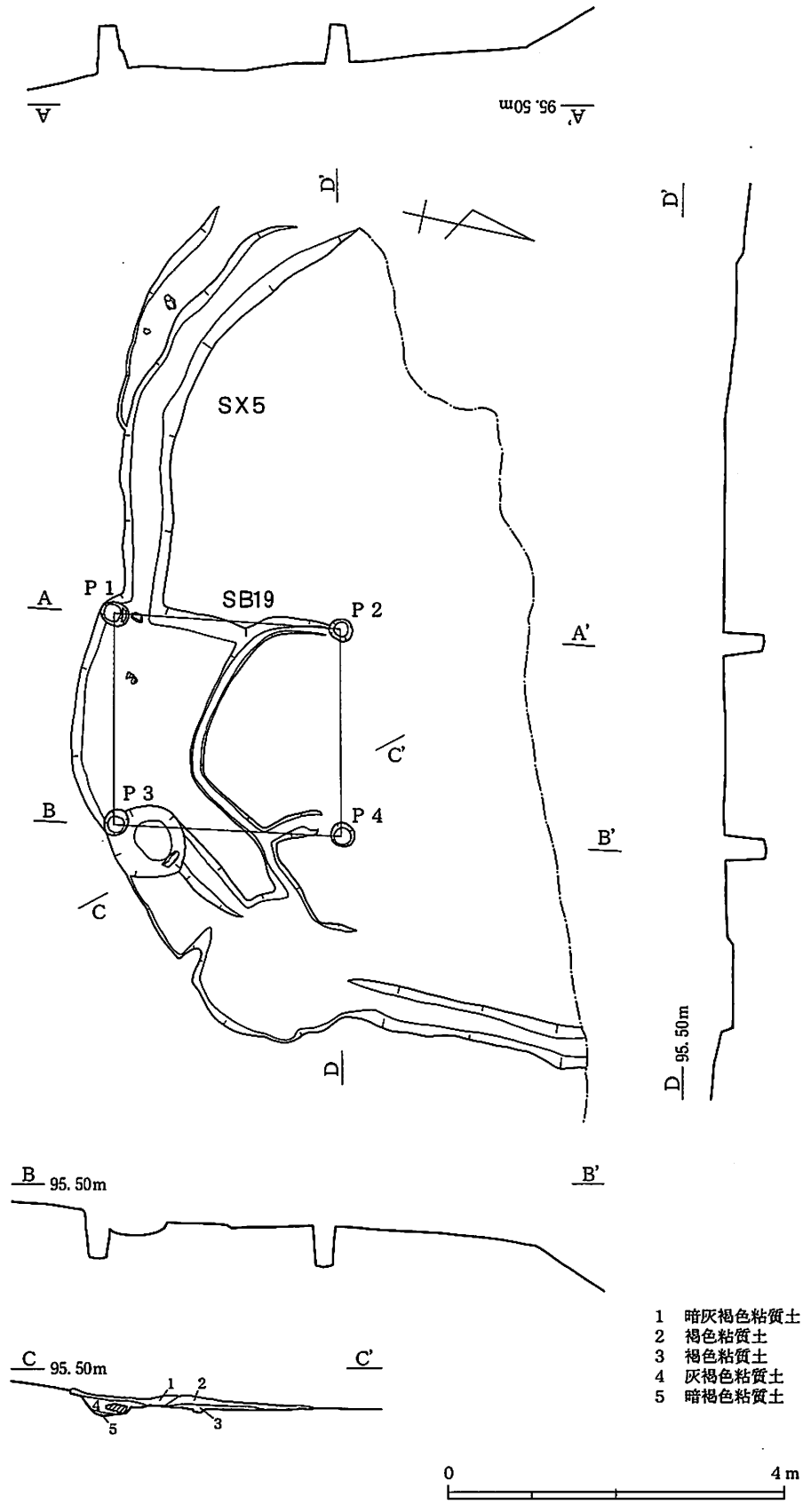
第22図　ＳＢ17実測図（1:60）（アミ目は焼土）

規模・平面形　平面形は2.5×2.3mの楕円形である。遺存状況は不良で，検出面から床面までの深さは10cmであった。辛うじて壁の内側に沿って幅15～11cm・深さ７～３cmの壁溝が巡っている。

床面・柱穴　床面はほぼ平らである。２本柱で，南側のＰ１は径54×42cm・深さ60cm，北側のＰ



第23図　ＳＢ18実測図（1:60）



第24図　ＳＢ19・ＳＸ５実測図（1:80）

２は径48cm・深さ65cmである。Ｐ１－Ｐ２の距離は1.5mである。なお，Ｐ１とＰ２の間のピットは後述するＳＢ18に伴うものである。

炉跡　ほぼ中央部に48×42cmの範囲で焼土を確認した。

遺物出土状況　遺存状況が良くないにも拘わらず，ほぼ床一面から遺物が出土している。出土遺物には壺（350），甕（351～358），椀（359,360），底部（361），高杯（362）がある。

B　掘立柱建物跡

ＳＢ18（第23図，図版21ａ）

位置　調査区の南東側にあり，ＳＢ17と東側が重なるが，Ｐ２がＳＢ17を，またＰ５がＳＫ６を切っているので，少なくともＳＢ17とＳＫ６よりは新しい時期の遺構である。但し上面がＳＢ17同様にかなり削平されているため，場所によっては本来存在するべき柱穴が消滅している箇所もある。

規模・平面形　北西隅の柱穴が消滅しているが，２間×２間の総柱の掘立柱建物跡である。桁行5.6m・梁間4.6mである。桁行はN88°　30′　Ｅを指向する。各柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２が2.3m，Ｐ２－Ｐ３が2.3m，Ｐ４－Ｐ５が2.3m，Ｐ５－Ｐ６が2.3m，Ｐ７－Ｐ８が2.4m，Ｐ３－Ｐ６が2.6m，Ｐ６－Ｐ８が3.0m，Ｐ２－Ｐ５が2.6m，Ｐ５－Ｐ７が3.0m，Ｐ１－Ｐ４が2.6mであった。

床面・柱穴　各柱穴については，Ｐ１は径20×15・深さ17cm，Ｐ２は径33cm・深さ７cm，Ｐ３は径23×20cm・深さ21cm，Ｐ４は径18cm・深さ18cm，Ｐ５は径20cm・深さ20cm，Ｐ６は径21×16cm・深さ17cm，Ｐ７は径18cm・深さ８cm，Ｐ８は径16cm・深さ17cmであった。

炉跡　痕跡は見あたらない。

遺物出土状況　柱穴内から出土した遺物は確認できなかった。

ＳＢ19（第24図，図版21ｂ）

位置　調査区の南東にあり，ＳＢ15から東に16.7m程離れたところにある。上面をかなり削平されているので遺存状況は良くない。ＳＸ５と接するが伴うかどうか不明である。

規模・平面形　１間×１間の掘立柱建物跡である。桁行2.7m・梁間2.5mである。

床面・柱穴　柱穴の規模はＰ１が径35×28cm・深さ62cm，Ｐ２が径27cm・深さ46cm，Ｐ３が径34×28cm・深さ58cm，Ｐ４が径28cm・深さ49cmとなっている。

炉跡　焼土面は確認できない。

遺物出土状況　供伴する出土遺物は確認できなかった。

2　土坑

ここでいう土坑とは後述する墳墓群を構成する墓坑以外の土坑を指し，具体的には陥穴や性格不明土坑がある。土坑の多くは調査区全般にわたり疎らに存在しており，他の遺構との切り合い

関係を持つものはほとんどない。形状も円形や楕円形，長方形と多様で，遺物を伴うものは少なく，時期について推測できるものは一部を除いて皆無であった。

ＳＫ１（第25図，図版22ａ）

調査区の南西側に位置する。ＳＢ１から北1.6ｍに存在する。上面がかなり削平されており，中央部を試掘坑により破壊されている。規模は160×130cm，深さは21cmで，平面形はおおむね楕円形である。床面はほぼ平らで，中央からやや東よりに径34×32cm，深さ32cmの円形の小ピットがある。この小ピットが伴ものかどうかは定かではないが，断面観察等からは上面からの掘り込みは見あたらなかったので，伴うかもしくは小ピットを破壊したかのどちらかであろう。その性格等については不明である。なお，遺物は出土していない。

ＳＫ２（第25図，図版22ｂ）

調査区の南西側に位置する。ＳＢ４の南側2.2ｍに存在する。平面形は128×106cmの楕円形で，検出面からの深さは20cmである。上面がかなり削平されているようである。断面形は台形状である。床面はほぼ平らで，床面の少し上から土器の小片が数点出土している。

性格等については不明であるが，他の遺構との位置関係や全体の形状から推測すれば，食料貯蔵用の土坑であった可能性も否定できない。

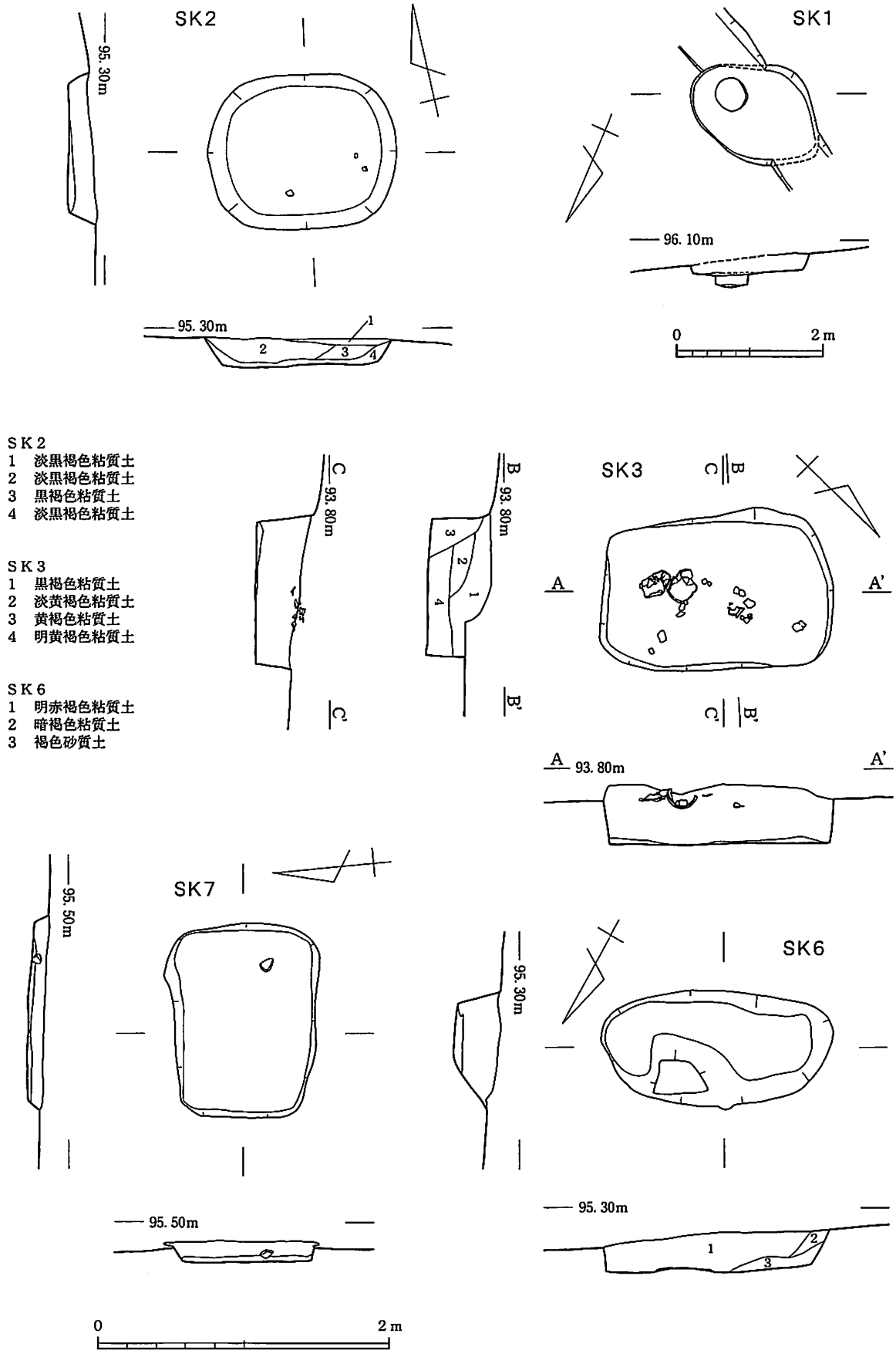
ＳＫ３（第25図，図版22ｃ，23ａ）

調査区の西側に位置する。ＳＢ５の東側3.7ｍ，ＳＢ９の西側8.7ｍに存在する。平面形は157×105cmの長方形である。南から北に傾斜しているため，北側の遺存状況は南に較べると悪いが，検出面から坑底面までの深さは深いところで43cm，浅いところで26cmであった。床面はおおむね平坦である。土坑の断面は若干上面が開くものの坑底面と大きさが余り変わらず垂直に近い形をしている。

遺構の上面から中央部から東側にかけて弥生土器や土師器（384～389）がまとまって出土している。上面のため遺構に伴うかどうかは不明であるが，土層観察では淡黄褐色粘質土層の上面～黒褐色粘質土層中からの出土しているので，土器は土坑がある程度埋まった後に投棄された可能性が高い。その性格については不明であるが，形状等から墓坑の可能性も存在する。ただし同時期ないしは近接した時期の墓坑は北東の一角に集中していることなどから，現状では墓坑の可能性は低いと考えられる。

ＳＫ４（第26図，図版23ｂ，23ｃ，24ａ）

調査区の中央部若干西よりに位置する。ＳＢ11の南側11.6ｍに存在する。平面形は160×106の長方形で，検出面から坑底面までの深さは66cmである。断面は逆台形をなし，坑底面からの立ち上がりの角度は75°～60°で，検出面のほうが坑底面よりも大きくなっている。坑底面は中央部が緩く窪む形状となっている。



ＳＫ２
1　淡黒褐色粘質土
2　淡黒褐色粘質土
3　黒褐色粘質土
4　淡黒褐色粘質土

ＳＫ３
1　黒褐色粘質土
2　淡黄褐色粘質土
3　黄褐色粘質土
4　明黄褐色粘質土

ＳＫ６
1　明赤褐色粘質土
2　暗褐色粘質土
3　褐色砂質土

第25図　ＳＫ１～３・６・７実測図（1:40, 1:80）

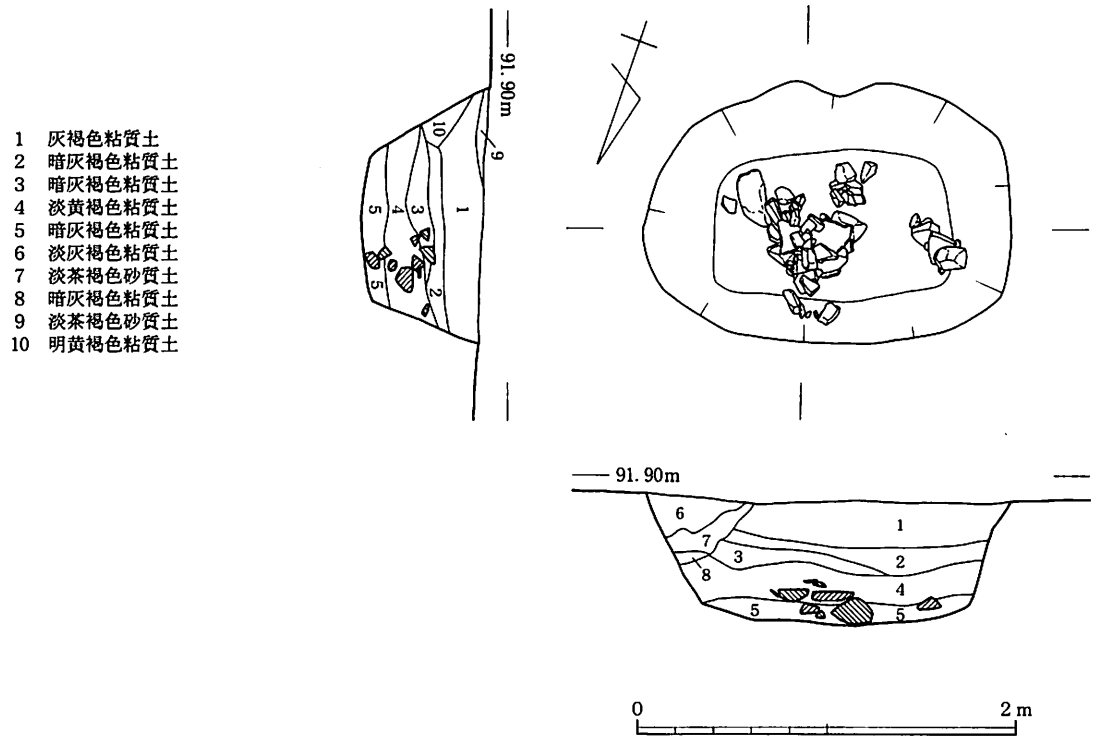
遺構の中位から床面付近にかけて人頭大の角礫が存在する。これらの角礫は中央部から概ね東側に集中する傾向があるものの西側や北側さらに南側にもブロック状に存在している。角礫には人為的に積み上げたり並べたりしている様子が見えず，乱雑で小さな礫の上に大きな礫が重なっていたり，円礫の上に角礫があったりと規則性は見いだせなかった。したがってこれらの角礫は本土坑内に投棄されたものであろうと思われる。

時期については不明であるが，他の遺構の多くが黒褐色土粘質土を指標として検出できたのに較べると灰褐色粘質土であることから少なくとも本遺跡の主体となる時代とは異なる時期の遺構である可能性が強い。さらにその性格については不明な部分が多く断定は出来ないが，何らかの廃棄的性格を持つ遺構であった可能性は否定できない。

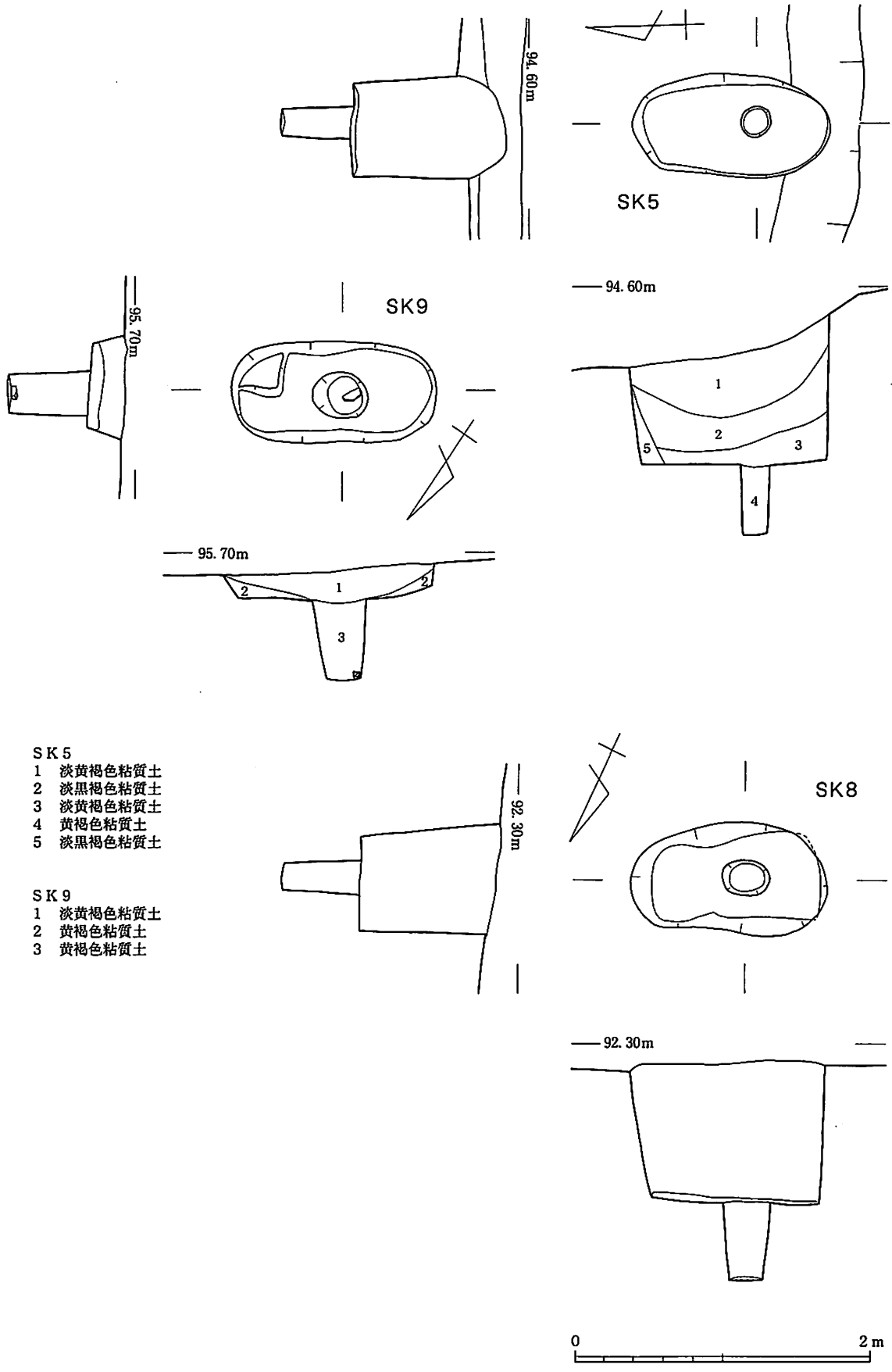
ＳＫ５（第27図，図版27ａ）

調査区の中央部付近に位置する。ＳＢ４から東に9.8mのところに存在する。平面形は138×69cmの楕円形である。坑底面はほぼ平坦で，中心部から少し南側に直径20cm・深さ47cmの円形の小ピットが付設されている。水田の段に当たるため南側は傾斜に沿って北側の平坦面に移行する。検出面から坑底面までの深さは南側で98cm，北側で64cmである。断面は壁面の一部で若干窄まるもののほぼ垂直である。なお，遺物は出土していない。

時期については不明であるが，中央部のピットは杭を設置した穴と想定できることや全体的な形状から陥穴と思われる。



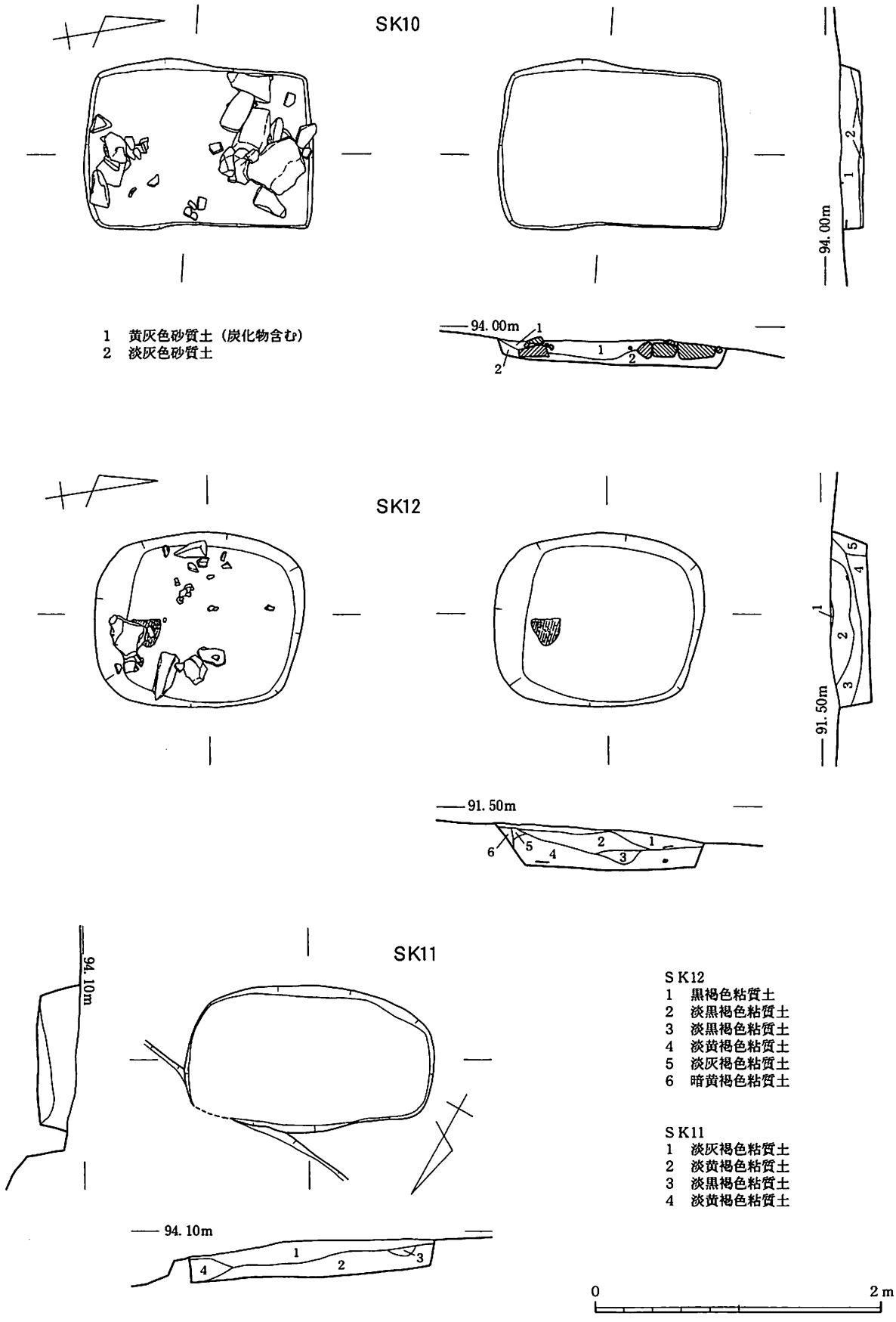
第26図　ＳＫ４実測図（1:40）



ＳＫ５
1　淡黄褐色粘質土
2　淡黒褐色粘質土
3　淡黄褐色粘質土
4　黄褐色粘質土
5　淡黒褐色粘質土

ＳＫ９
1　淡黄褐色粘質土
2　黄褐色粘質土
3　黄褐色粘質土

第27図　ＳＫ５・８・９実測図（1:40）



第28図　ＳＫ10～12実測図（1:40）

ＳＫ６（第25図，図版24ｂ）

調査区の南に位置する。ＳＢ13から南西に7.3ｍに存在する。上面がかなり削平されており遺存状況は良くない。平面形は160×80cmの若干歪な楕円形である。検出面から坑底面までは32～18cmの深さであった。北側隅の付近に38×23cmの台形状のテラス部分が存在する。断面は少し坑底面が小さくなる逆台形を呈する。遺物は出土していない。性格については不明である。

ＳＫ７（第25図，図版24ｃ）

調査区の南東に位置する。ＳＢ13から南東に８ｍ，ＳＢ14から南西3.8ｍに存在する。ＳＢ18に切られている。上面はかなり削平されており，遺存状況は不良である。平面形は137×97cmの長方形で，検出面から坑底面までの深さは13cmとかなり浅い。断面は概ね逆台形状を呈するものと思われるが，上面の遺存状況が不良のため推定の域を出ない。東側に拳大の角礫が出土している。内部の埋土は淡黒褐色粘質土一層のみであった。遺物は出土せず，その性格についても不明である。

ＳＫ８（第27図，図版27ｂ）

調査区のほぼ中央部に位置する。ＳＢ13から北に5.4ｍに存在する。平面形は134×75cmのやや不揃いの楕円形である。検出面から坑底面までの深さは97～87cmである。坑底面はほぼ平坦で，ほぼ中心部に34×24cm，深さ52cmの楕円形のピットがある。西側で若干オーバーハングする部分が存在するが，概ね逆台形から長方形状の断面を呈する。遺物は出土していない。

時期については不明であるが，全体的な形状や中央部のピットが杭を設置した穴と推定可能であることから，ＳＫ５と同様に陥穴であると思われる。

ＳＫ９（第27図，図版27ｃ）

調査区の南東に位置する。ＳＢ14から東に13.2ｍに存在する。上面がかなり削平されていると思われる。検出面から坑底面までの深さは27cmである。南西隅に三角形状のテラス部分が存在する。坑底面の中心部には37×30cm・深さ58cmの楕円形のピットが存在する。断面は概ね逆台形状を呈するようであるが，上面の削平が激しく推定の域を出ない。遺物は出土していない。

中央部のピットの底面に棒状の小角礫があった。杭を安定させるために使ったものかも知れない。以上のことや全体の形状から推測すれば本土坑も前述したＳＫ５やＳＫ８と同様の陥穴であると思われる。

時期については同様な形状の陥穴と思われる遺構が縄文時代の遺跡からしばしば発見されていることなどから同時代である可能性もあるが，断定は出来ない。

ＳＫ10（第28図，図版25ａ，25ｂ）

調査区の中央部に位置する。ＳＢ13から西13.7ｍに存在する。上面はかなり削られている可能性がある。平面形は159×118cmの長方形である。検出面から坑底面までの深さは17cmと浅い。検

出面から坑底面の少し上に厚みのあまりない角礫が置かれていた。この角礫は南側と北半部で堀方いっぱいに敷かれており，特に北側が密に設置されている。底面はほぼ平らである。遺物が若干出土している。これらは礫の間に挟まるように出土している。

上面が破壊されているのでその性格等については不明な部分が多いが，厚さが均等な角礫を敷いて面を一定の高に揃えていることから，何かをその上に置く台あるいは基礎の一部と推測可能である。ただし単独での検出のため詳細については不明である。

ＳＫ11（第28図，図版25ｃ）

調査区の東側に位置する。ＳＢ14から北3.7ｍに存在する。上面が削平されていると思われ，遺存状況はあまり良くない。平面形は172×103cmの長方形である。断面は概ね逆台形状を呈する。検出面から抗底面までの深さは21～17cmである。坑底面は西から東に若干傾斜している。土坑の北東隅は田の段になっており削平され消滅している。弥生土器椀（393）が出土している。性格については不明である。あるいは若干墳墓群と離れてはいるが，墓坑の可能性も存在する。

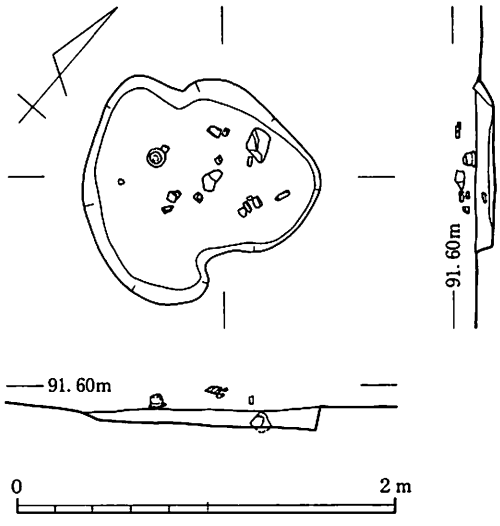
ＳＫ12（第28図，図版26ａ，26ｂ）

調査区のやや北側の斜面上にある。ＳＢ12から南西6.7ｍに位置する。上面は削平されていると思われる。平面形は145×120cmのほぼ方形で，検出面は南から北に緩やかに傾斜しており，検出面から坑底面までの深さは29～18cmである。断面は概ね逆台形状である。検出面付近から須恵器（397～399），土師器（400・401）が出土している。この他床面近くに炭化物が存在していた。その性格については不明である。

ＳＫ13（第29図，図版26ｃ）

調査区の北側に位置する。ＳＢ16から北西に12.4ｍに存在する。上面がかなり削平されているようで，遺存状況は不良である。平面形は118×95cmの円形のほぼ対向する部分が内側に押されたようになる瓢箪形をしている。検出面から坑底面までの深さは10～５cmで，かなり浅い。また床面は西から東へ緩やかに下っている。土師器壺（394）・土師器甕（395）が出土している。とりわけ土師器壺は口縁部を下に底部を上にと，土器を逆さまに設置したように出土している。

性格については不明である。



第29図　ＳＫ13実測図（1:40）

ＳＫ15（第30図，図版28ｃ，29ａ）

調査区の北東にある。ＳＫ16により上面を破壊

されている。平面形は直径86cmの円形である。検出面から坑底面までの深さは41cmである。土坑の断面形はほぼ垂直に坑底面から立ち上がる長方形をなす。坑底面は平らであるが，西側に一段約５cm上がって57×17cmの三日月状の平坦部が存在する。内部には坑底面付近に小礫があった。性格については不明であるが，全体の形状などから貯蔵穴も想定できよう。

3　墓坑（第６図，図版28ａ）

調査区北東部で弥生時代後期の墓坑計15基を検出した。周辺は南東から北西方向にごく緩やかに下るもののほぼ平坦な地形である（標高91～92m）。墓坑は調査区際から南に10m，東西に12mの範囲に集中しており，墓域はさらに北側ないし北東側調査区外に広がるものと思われる。

墓坑の主軸は東西方向７基，西北西－東南東方向４基，北西－南東方向２基，南西－北東方向・南北方向各１基と東西方向及び西北西－東南東方向を指すものが主体を占め，ほぼ西南西－東北東方向に延びる等高線に概ね斜交ないしは平行している。調査区内に限れば，東西に２～３列，主軸を揃えてほぼ重複することなく南北に並列しており，３基程度で小さなまとまりをつくっている。これらのことから，本墳墓群はごく短期間に営まれたものとみられる。

墓坑内容としては土坑墓14基と土器棺墓１基で構成されるが，土坑墓のうちの５基には坑底の両小口部分に小口板差込用と思われる溝状の穴がみられることから，組合式木棺を納めた木棺墓と考えられる。土器棺墓は二重口縁の壺形土器を用いている。土器棺以外の出土遺物は，土坑墓ＳＫ24・26の埋土から弥生土器の小片が，木棺墓ＳＫ27の坑底から鉄鏃１点が出土している。

ＳＫ14（第30図，図版28ｂ）

墳墓群の南西側にやや離れて存在する土坑墓で，東4.5mに土坑墓ＳＫ16，北２～2.5mに土坑墓ＳＫ18や木棺墓ＳＫ17などが存在する。平面形楕円形で，長径95cm，短径77cm，深さ13cmとごく浅く小規模な墓坑である。墓坑の主軸はＮ７°Ｅとほぼ南北方向を指し，等高線に斜交する。出土遺物はない。

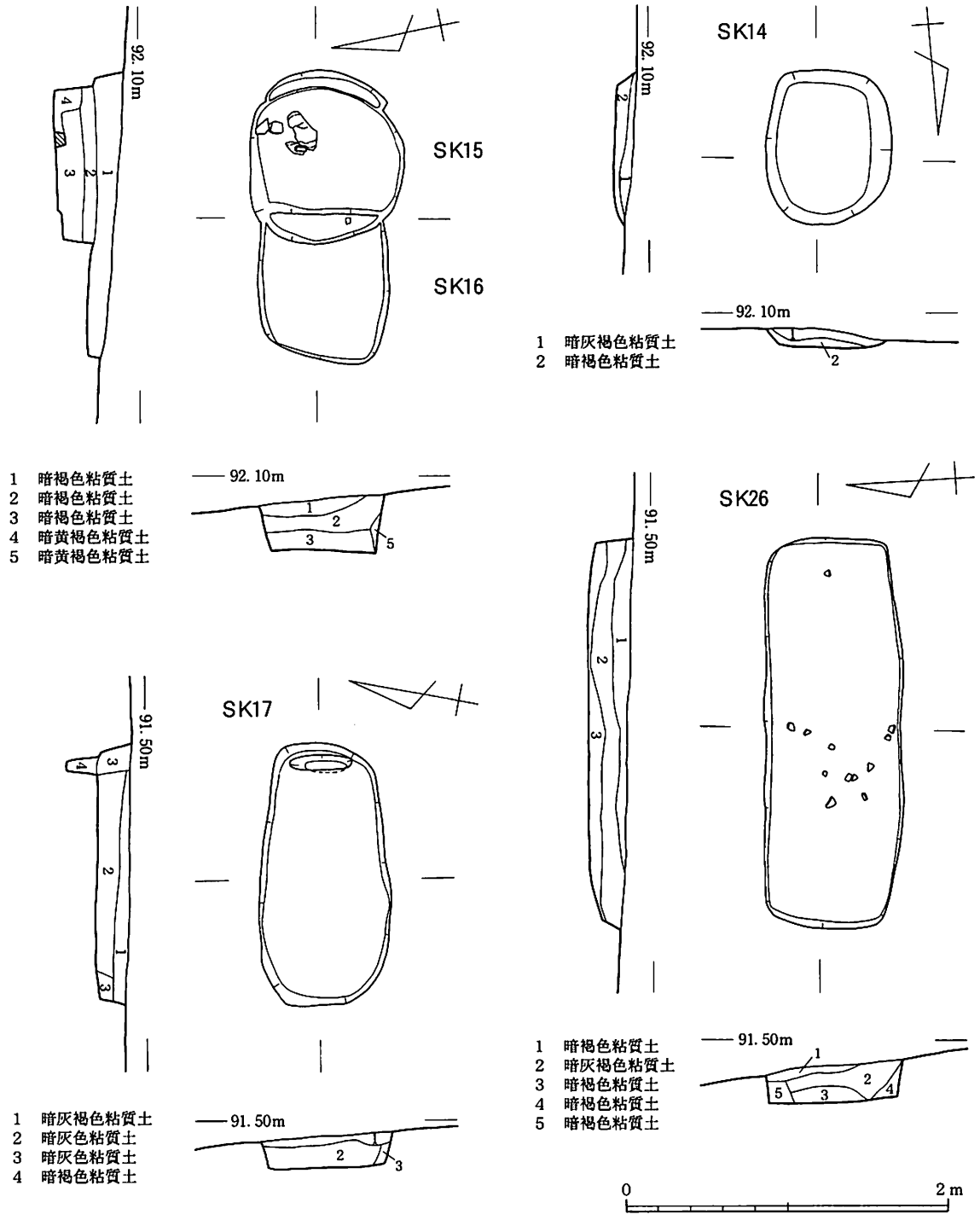
ＳＫ16（第30図，図版28ｃ，29ａ）

墳墓群の南東側にやや離れて存在する土坑墓で，円形土坑ＳＫ15を壊している。西4.5mに土坑墓ＳＫ14，北3.5mに土坑墓ＳＫ26，北西４mに土坑墓ＳＫ18～21などがある。墓坑の平面形は長方形で，長さ177cm，幅80cm，深さ15cmとごく浅い。墓坑の主軸はほぼ東西方向を指し（Ｎ79°Ｗ），等高線に斜交する。出土遺物はない。

ＳＫ17（第30図，図版29ｂ，29ｃ）

墳墓群の南西部に位置する木棺墓で，南2.8mに土坑墓ＳＫ14が，東から北にかけて土坑墓ＳＫ18～21，木棺墓ＳＫ23，土器棺墓ＳＫ22が１m内外の位置に近接する。墓坑の平面形は隅丸長方形で，長さ162cm，幅71cm，深さ25cmである。東側小口の坑底には長さ38cm，幅10cm，深さ20cm

と深い溝状の穴が掘り込まれており，木棺の小口板の差込穴と思われるが，対する西側小口にはこのような穴はみられない。しかし，東西両小口及び南側辺の土層断面にみられる暗灰色粘質土（３層）は木棺小口板・側板の痕跡である可能性が高い。これらのことから，本墓坑には推定規模が長さ118cm，幅64cm程度の組合式木棺が納められていたものと考えられる。墓坑の主軸はほぼ東西方向を指し（N80° E），等高線に平行する。出土遺物はない。



第30図　ＳＫ14～17・26実測図（1:40）

ＳＫ18（第31図，図版30，31ａ）

墳墓群の南半に位置する土坑墓で，北側に土坑墓ＳＫ19～21が，北西に木棺墓ＳＫ17が１ｍ以内の範囲に近接して存在する。ＳＫ21と一部重複し，これを壊している。墓坑の平面形は長方形で，長さ117cm，幅60cm，深さ30cmである。墓坑の主軸は北西－南東方向を指し（N49°W），等高線に斜交する。出土遺物はない。

ＳＫ19（第31図，図版30，31ｂ）

墳墓群の南半に位置する土坑墓で，南側に土坑墓ＳＫ18・20・21が，西側には木棺墓ＳＫ17が，北東には土坑墓ＳＫ26が，そして北西には木棺墓ＳＫ23や土器棺墓ＳＫ22がいずれも１ｍ内外の範囲に近接する。ＳＫ20・21とは一部重複し，これらをいずれも壊している。墓坑の平面形は長方形で，長さ95cm，幅44cm，深さ15cmと小規模で浅い。墓坑の主軸は東西方向を指し（N84°W），等高線に斜交する。出土遺物はない。

ＳＫ20（第31図，図版30，31ｃ，32ａ）

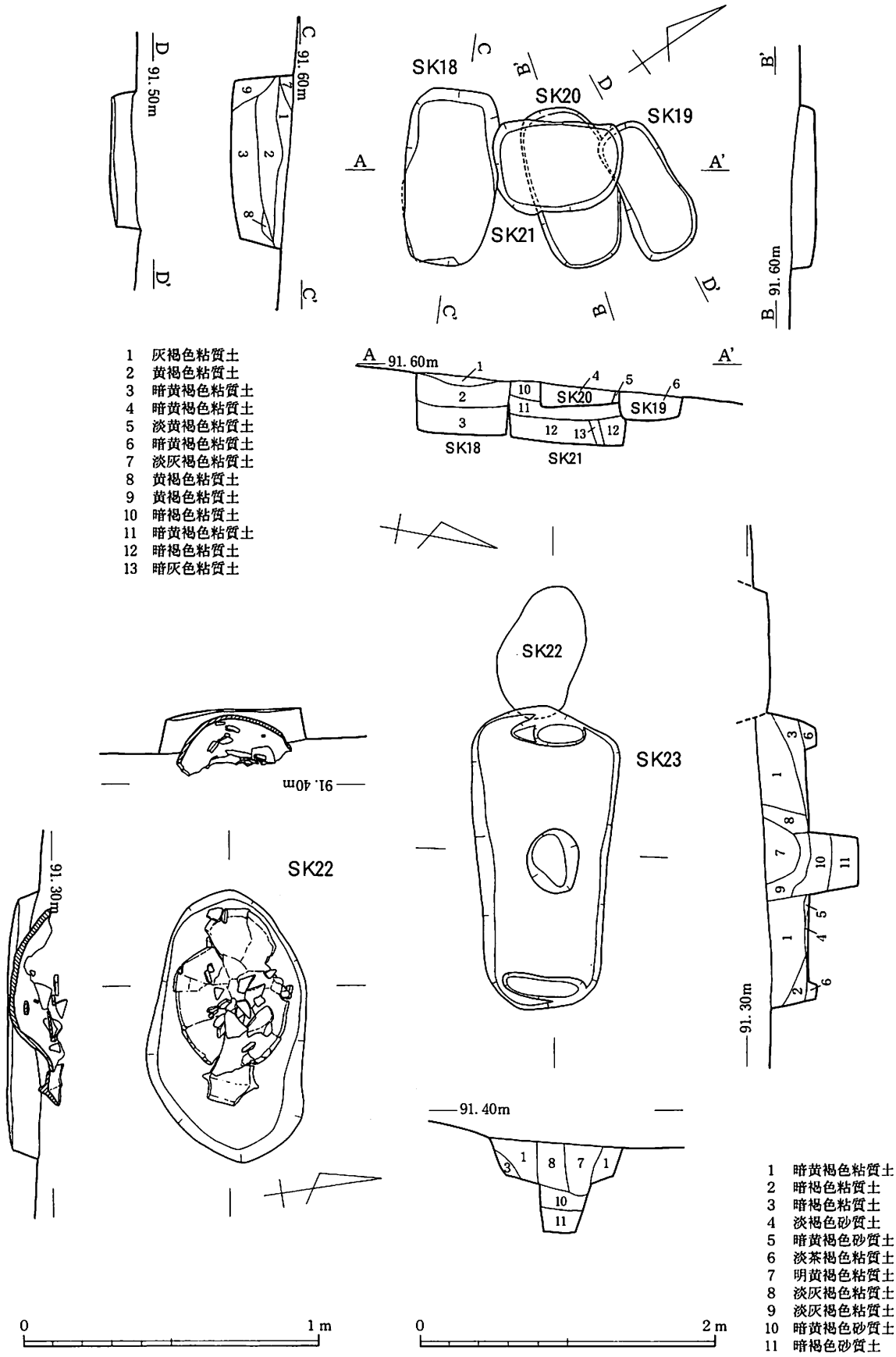
墳墓群の南半に位置する土坑墓で，ＳＫ21の直上にこれを壊して作られている。近接するＳＫ18・19にほぼ平行する。北側壁をＳＫ19に壊されている。西側に木棺墓ＳＫ17，北東側に土坑墓ＳＫ26がいずれも１ｍほどの位置に近接する。墓坑の平面形は長方形で，長さ110cm，幅57cm，深さ13cmと小規模で，ごく浅い。墓坑の主軸は西北西－東南東方向を指し（N70°W），等高線に斜交する。出土遺物はない。

ＳＫ21（第31図，図版30，32ａ，32ｂ）

墳墓群の南半に位置する土坑墓である。南側にＳＫ18，北側にＳＫ19が部分的に接してこれらに壊され，直上には土坑墓ＳＫ20があってこれに壊されている。即ち，近接する土坑墓ＳＫ18～20すべてに壊されており，これらの土坑墓のなかで最も先行する。西側に木棺墓ＳＫ17，北東側に土坑墓ＳＫ26がいずれも１ｍほどの近距離に存在する。墓坑の平面形は長方形で，長さ86cm，幅59cm，深さ32cmと小規模だが，比較的深い。墓坑の主軸は北東－南西方向を指し（N36°E），等高線に斜交する。出土遺物はない。

ＳＫ22（第31図，図版32ｃ，33）

墳墓群の西半中央に位置する唯一の土器棺墓で，木棺墓ＳＫ23の西側小口と接し，これを壊している。南側１ｍに近接して木棺墓ＳＫ17が，北側１ｍにやはり近接して木棺墓ＳＫ24が存在する。墓坑の平面形は楕円形で，長径91cm，短径54cm，深さ12cmと小規模でごく浅い。この墓坑内に縦に半分に割れた二重口縁の壺形土器が，口縁を東に向けた状態で置かれていた。墓坑の主軸はほぼ東西方向を指し（N81°W），等高線に平行する。出土遺物は棺に用いられた弥生土器・壺（403）１点がある。



第31図　ＳＫ18～23実測図（1:20, 1:40）

ＳＫ23（第31図，図版34ａ，34ｂ）

墳墓群のほぼ中央に位置する木棺墓で，西側に小口を接して土器棺墓ＳＫ22が，南北には１ｍの近さに木棺墓ＳＫ17とＳＫ24が，東側１ｍには土坑墓ＳＫ26が，南側１～２ｍの距離にＳＫ18～21の土坑墓群がそれぞれ存在する。土器棺墓ＳＫ22には西側小口壁を壊されている。墓坑の平面形は長方形で，長さ201cm，幅100cm，深さ30cmと大型の墓坑である。坑底中央には径43cm×35cm，深さ34cmの円形ピットが掘り込まれているが，これは埋土を掘り込んだもので，墓坑に後出するものである。やはり坑底の西小口・東小口に溝状の穴が掘り込まれているが，いずれも木棺小口板の差込用の穴と思われることから，本墓坑には組合式木棺が納められていたと思われる。西側の差込穴の大きさは長さ52cm，幅20cm，深さ15cm，東側の差込穴の大きさは長さ58cm，幅15cm，深さ10.5cmである。両差込穴間の距離は168cmであることから，木棺の推定規模は，長さ168cm，幅52～58cm程度と考えられる。墓坑の主軸はほぼ東西方向を指し（N80°Ｅ），等高線にほぼ平行する。出土遺物はない。

ＳＫ24（第32図，図版34ｃ）

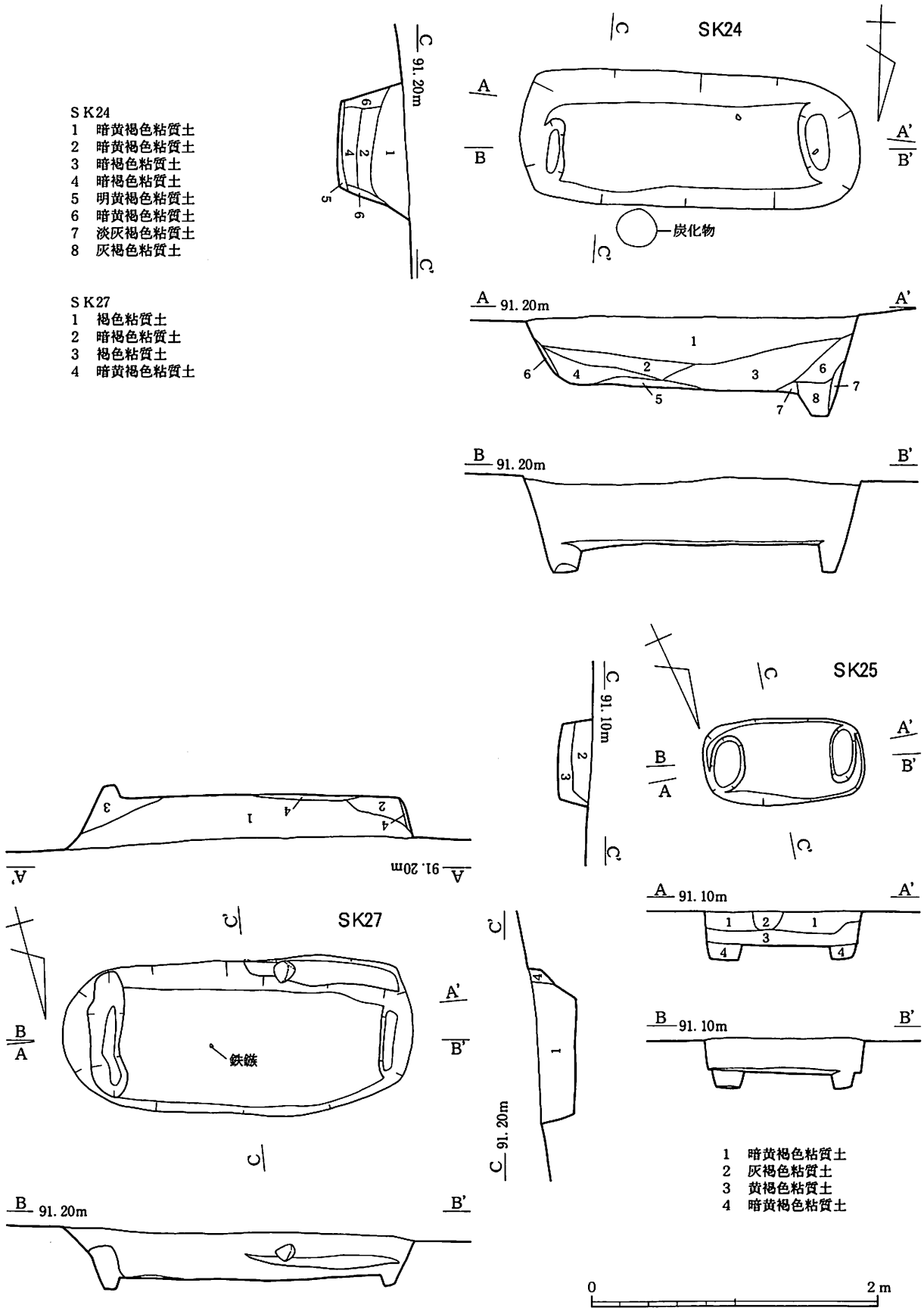
墳墓群の西辺北半に位置する木棺墓で，南側に近接して木棺墓ＳＫ23と土器棺墓ＳＫ22，北側１ｍに小型の木棺墓ＳＫ25などが存在する。墓坑の平面形は長方形で，長さ236cm，幅94cm，深さ52cmと大型で深い。坑底の両小口壁際に溝状の穴があり，木棺小口板の差込用の穴とみられることから，本墓坑には組合式木棺が納められていたと思われる。いずれの差込穴も小口壁に接しており，西側の穴が長さ56cm，幅24cm，深さ22cm，東側の穴が長さ42cm，幅16cm，深さ21cmである。両小口穴間の距離は188cmであることから，木棺の推定規模は長さ188cm，幅42～56cm程度と考えられる。墓坑の主軸は東西方向を指し（N90°Ｗ），等高線に平行する。出土遺物としては弥生土器の小片があるが，図示できなかった。

ＳＫ25（第32図，図版35ａ）

調査区際にあり，墳墓群の北西に位置する木棺墓である。南側１ｍに木棺墓ＳＫ24，東側１ｍに木棺墓ＳＫ27・28などがある。墓坑の平面形は長方形で，長さ113cm，幅59cm，深さ22cmと小型である。坑底の両小口には楕円形の穴があり，木棺小口板の差込用の穴と考えられることから，本墓坑には組合式木棺が据えられていたとみられる。小口穴の大きさは，西側のものが長さ40cm，幅18cm，深さ13cm，東側の穴が長さ38cm，幅24cm，深さ13cmである。両小口穴間の距離は84cmであることから，木棺の推定規模は長さ84cm，幅18～24cm程度と考えられる。墓坑の主軸は西北西－東南東方向を指し（N67°Ｗ），等高線にほぼ平行する。出土遺物はない。

ＳＫ26（第30図，図版35ｂ，35ｃ）

墳墓群のほぼ中央に位置する土坑墓で，南南東3.5mに土坑墓ＳＫ16，北東3.4mに土坑墓ＳＫ29，北1.6mに木棺墓ＳＫ27，西１ｍに木棺墓ＳＫ23，南西0.4mに土坑墓ＳＫ19が存在する。墓

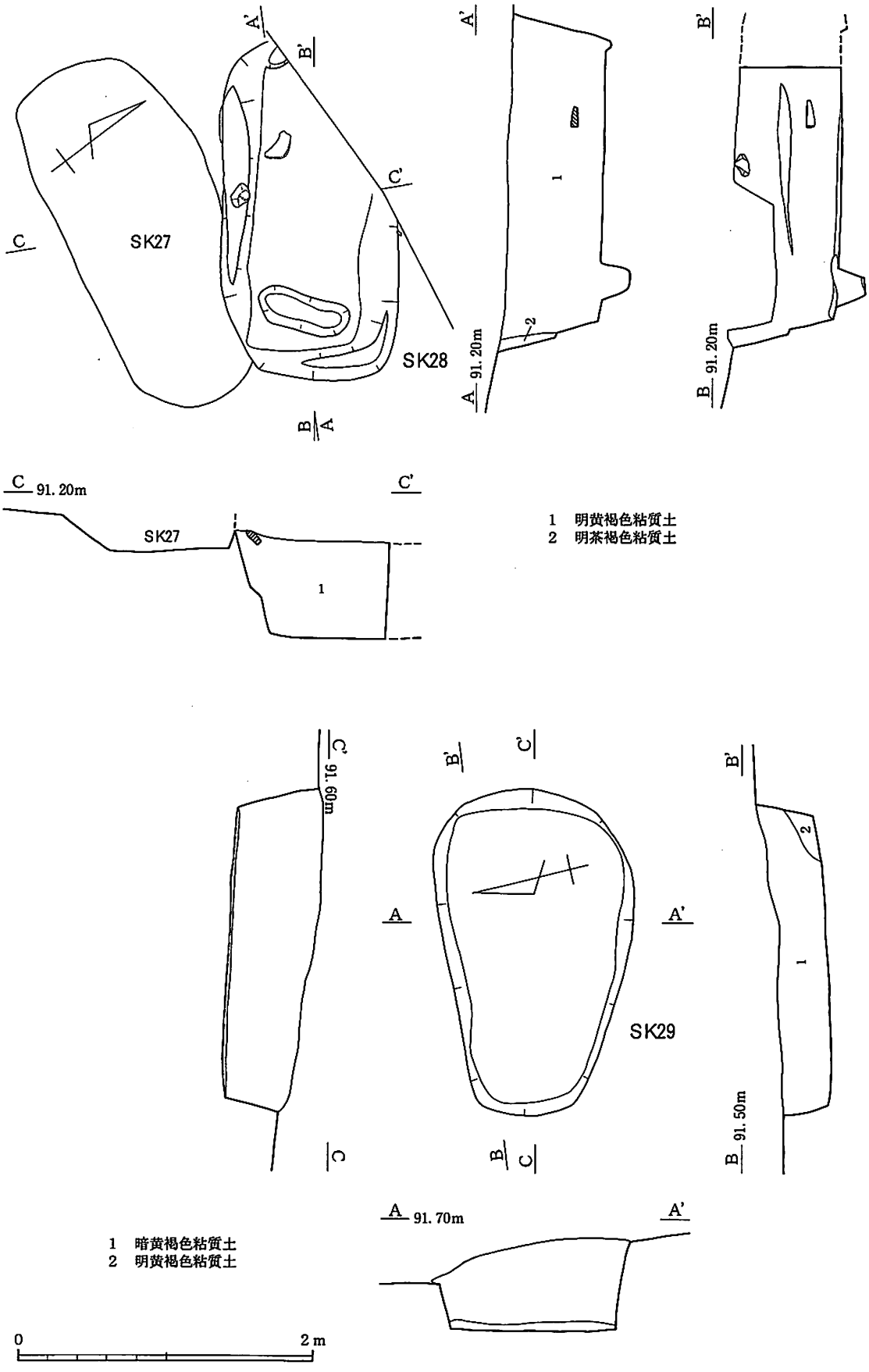


SK24
1 暗黄褐色粘質土
2 暗黄褐色粘質土
3 暗褐色粘質土
4 暗褐色粘質土
5 明黄褐色粘質土
6 暗黄褐色粘質土
7 淡灰褐色粘質土
8 灰褐色粘質土

SK27
1 褐色粘質土
2 暗褐色粘質土
3 褐色粘質土
4 暗黄褐色粘質土

1 暗黄褐色粘質土
2 灰褐色粘質土
3 黄褐色粘質土
4 暗黄褐色粘質土

第32図 SK24・25・27実測図（1:40）



第33図　ＳＫ28・29実測図（1:40）

坑の平面形は長方形で，長さ240cm，幅84cm，深さ26cmと規模は大きいが浅い。墓坑の主軸はほぼ東西方向を指し（N87° W），等高線に斜交する。埋土から弥生土器の小片が出土しているが，甕形土器の口縁部片（402）を除いて図示できなかった。

ＳＫ27（第32図，図版36ａ）

調査区際の墳墓群北辺中央に位置する木棺墓である。北側は木棺墓ＳＫ28と側壁部分が重複し，ＳＫ28を壊している。南側1.6mには土坑墓ＳＫ26，東側2.8mには土坑墓ＳＫ29，南西1.5mには木棺墓ＳＫ23・24，西側0.5mには木棺墓ＳＫ25が存在する。墓坑の平面形は長方形で，長さ244cm，幅107cm，深さ35cmと大型である。坑底の両小口壁際にはそれぞれ溝状の穴が掘り込まれている。木棺の小口板差込用の穴と考えられることから，本墓坑には組合式木棺が納められていたものと思われる。穴の大きさは，東小口のものが長さ86cm，幅25cm，深さ９cm，西側の穴が長さ60cm，幅14cm，深さ９cmと浅い。両小口穴間の距離は196cmであることから，木棺の推定規模は長さ196cm，幅60～86cm程度と考えられる。南側壁西半の壁面中位には幅10～18cmの細長い段状部分がみられ，14cmの大きさの亜角礫１点がみられた。墓坑の主軸は西北西－東南東方向を指し（N75° W），等高線に斜交する。坑底ほぼ中央で鉄鏃（449）１点が出土した。

ＳＫ28（第33図，図版36ｂ）

墳墓群北端中央の調査区際にある木棺墓で，北側壁西半から西小口壁北半にかけて調査区外に延びる。南側壁をＳＫ27に壊されている。南西1.2mに小型の木棺墓ＳＫ25が，東2.5mには土坑墓ＳＫ29が存在する。墓坑の平面形は長方形で，長さ（現存規模）227cm，幅119cm，深さ70cmと規模が大きく深い。西小口はごく部分的だが，坑底の両小口壁寄りに溝状の穴が掘り込まれている。木棺小口板の差込用の穴とみられることから，本墓坑には組合式木棺が納められていたものと思われる。穴の大きさは，東小口のものが長さ62cm，幅26cm，深さ20cm，西小口のものは大半が北側調査区外にあるため，南端のごく一部しか判明しておらず，穴の大きさは明確ではない。両小口穴間の距離は172cmであることから，木棺の推定規模は長さ172cm，幅62cm程度と思われる。南側壁の壁面ほぼ中位と北東隅の壁面中位に幅の狭い段が残る。墓坑の主軸は北西－南東方向を指し（N53° W），等高線に斜交する。出土遺物はないが，南側壁寄りの埋土から板状の10～20cm大の礫が２点みつかっている。

ＳＫ29（第33図，図版36ｃ）

墳墓群の北東端部，北側調査区際に位置する土坑墓で，南6.4mに土坑墓ＳＫ16，南西3.4mに土坑墓ＳＫ26，西2.5～2.8mには木棺墓ＳＫ27・28が存在する。墓坑の平面形は洋梨形で，長さ217cm，幅（最大）135cm，深さ50cmである。坑底は東が高く，西に向かって下傾している。墓坑の主軸は西北西－東南東方向を指し（N71° W），等高線に斜交している。出土遺物はない。

4　その他の遺構

性格不明の遺構と溝状遺構を検出した。これらの遺構は調査区内に疎らに存在しているが，東側部分から中央部にかけて比較的多く検出されている。時期については判明する遺構がほとんどない。

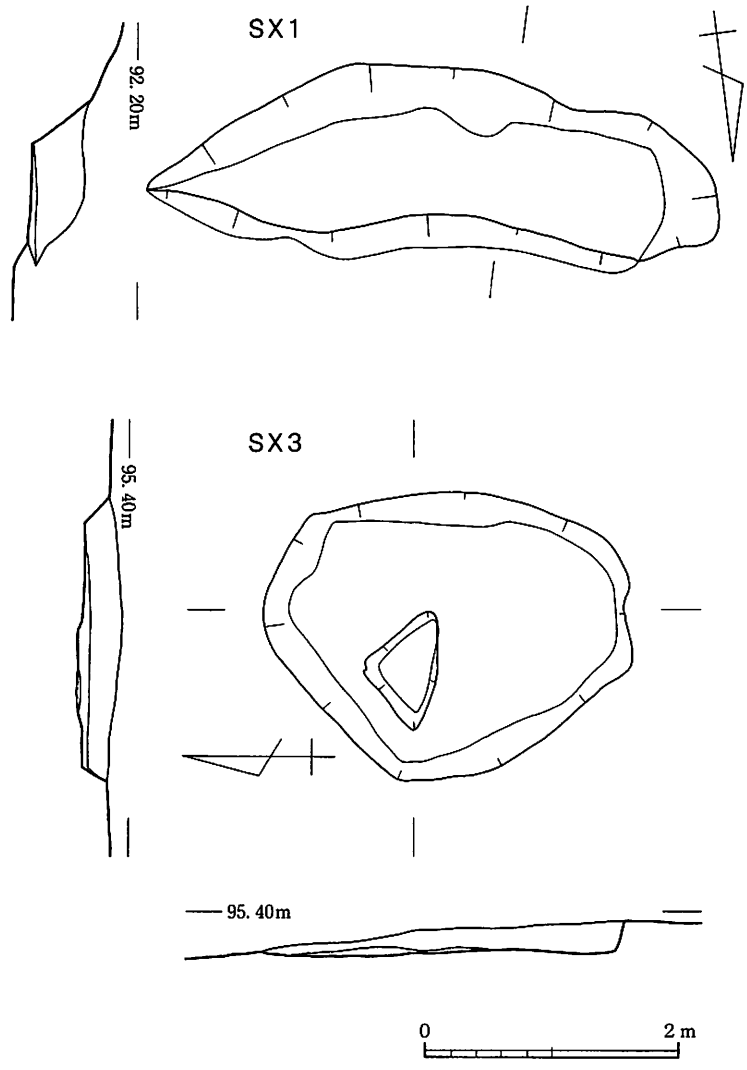
A　性格不明遺構

ＳＸ１（第34図，図版37ａ）

位置　調査区の中央部からやや北西側に位置する。ＳＢ９から北西に3.4m，ＳＢ８から東12.7mにある。遺構は水田と北側の通路部分の境目にあたり，南から北への緩い傾斜が通路で破壊されて急に傾斜が変換する斜面に存在する。

規模・形態　残存規模は456×117cmで，遺存する部分の状態から平面形は方形ないしは長方形と思われるが，北側部分の大半が削平されているため全形は不明である。検出面から遺構底面までの深さは48cmである。断面は逆台形状に立ち上がる。床面は少しだけ南側から北側に傾斜するがほぼ平坦である。

施設・遺物等　柱穴，壁溝等は確認できなかった。また，遺物も出土していない。遺存状態が不良なのでその性格についてははっきり出来ないが，柱穴や壁溝等が確認できなかったとはいえ遺構底面が概ね平坦であること，周辺には竪穴住居跡が散在することなどから，竪穴住居跡の一部である可能性が高いと思われる。



第34図　ＳＸ１・３実測図（1:60）

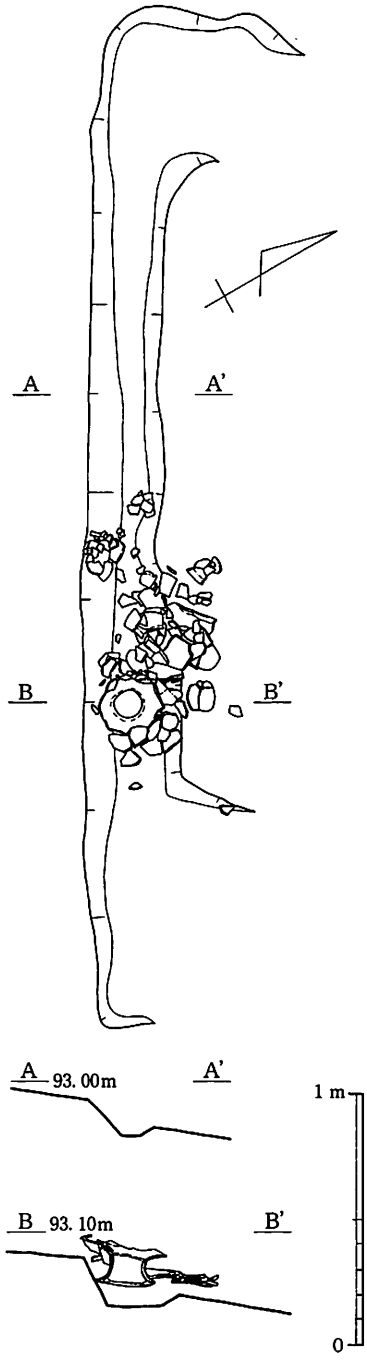
ＳＸ２（第35図，図版37ｂ）

位置　調査区の中央部やや西側に位置し，ＳＢ８から東に１m，前述したＳＸ１から西に8.6mの所にある。南から北側にかけて下る斜面上に位置するが，北側は通路として大きく削られている。

規模・形態　残存規模は406×

85cmで，平面形は長方形ないしは方形になると思われるが，遺構の上面及び北側部分が削平されているので，詳細については不明である。検出面から遺構底面までの深さは12cmと浅い。壁の周りを幅28～32cm・深さ５cmの壁溝が巡っている。ただしこの溝は東西部分ではかなり曖昧になっており，南側部分と較べると幅に相当の開きがある。また，遺構底面は南から北に緩く傾斜しており，検出段階で既に遺構大半が消滅していたと思われる。

施設・遺物等　壁溝周辺から遺構底面に密着して土師器壺（404）・土師器甕（405～408）が出土している。なお，柱穴等は確認できなかった。本遺構もＳＸ１と同様に遺存状況が極めて悪くその性格については曖昧な部分が多い。しかしながら，柱穴が確認できなかったとはいえ壁溝と思われる溝が存在することや周辺に竪穴住居跡が散在することなどから，竪穴住居跡である可能性も否定できない。



第35図　ＳＸ２実測図（1:30）

ＳＸ３（第34図）

位置　調査区の中央から若干南によった場所にある。ＳＢ13から南に6.6mの位置である。上面がかなり削平されていると思われ遺存状況は不良である。

規模・形態　平面形は286×217cmの中央部からやや北西よりの部分が少し外側に張り出した歪な楕円形ないしは五角形を呈する。検出面から遺構底面までの深さは深いところで25cmである。遺構底面は概ね平らであるが，中央部から北西に94×55cm，深さ５cmの三角形の落ち込みがある。断面は逆台形である。北側部分は削平されて僅かに段をなす程度である。

施設・遺物等　溝や柱穴は確認できない。また，遺物も出土していない。遺構の性格については不明であるが，坑底面に存在する三角形状の落ち込みが礫等を付設した痕跡の一部であると仮定すれば，建築物あるいは仮設物の基礎であった可能性もある。

ＳＸ４（第36図，図版37ｃ，38ａ，38ｂ）

位置　調査区の中央からやや東側に位置する。ＳＢ13から東に3.4m，ＳＢ14から西に5.1mに存在する。遺構の中央部には南側山裾にある直径1.5m程の簡易貯水施設（水貯め井戸）から水を畑に引くための暗渠が走っている。遺構のほぼ中央部はこの暗渠により破壊されている。

規模・形態　平面形は630×337cmのかなり歪な楕円形である。検

出面から遺構底面までの深さは66cmで，西側に250×230cm・深さ18cmの楕円形の落ち込みが存在する。遺構底面は概ね平らである。遺構の中央部から西側にかけて南北に広がる礫群がある。これらの礫の大きさは様々で，遺構の底面や壁に沿うように乱雑に積み重なっていた。面を揃えたり並べたりしたような状態ではなく人為的に投棄したと思われる。

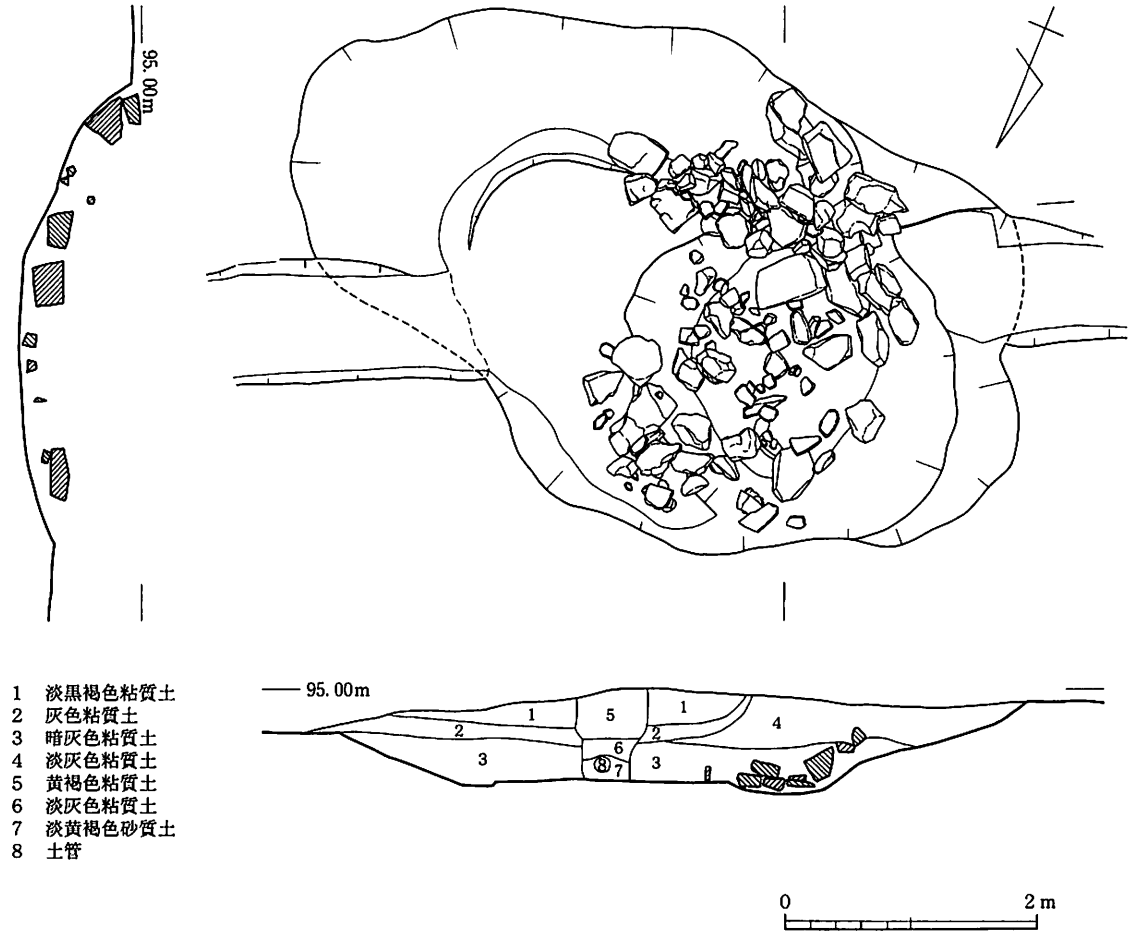
施設・遺物等　南側に幅28～20cm・深さ３cmの溝が壁に沿って巡る溝を確認した。この溝は南側を半周ほどして終わる。柱穴は確認できなかった。なお，礫間から土師質土器土鍋（409）が出土している。性格については不明であるが，礫の重なりや並びに規則性がないことや遺構底面に密着する礫があること，平面形が不定形であることなどから，投棄場所的な様相が窺えよう。

ＳＸ５（第24図，図版21ｂ）

位置　調査区の南東に位置する。ＳＢ19と重複する。前後関係はＳＸ５→ＳＢ19である。

規模・形態　平面形は861×343cmの方形ないしは長方形になると思われるが，東側は斜面側で自然地形に移行する。また，北側は田の段にかかるため途中で消滅している。上面がかなり削平されている。

施設・遺物等　西側及び南側に幅60～50cm・深さ５～３cmの溝がある。この溝は壁の沿って巡っ

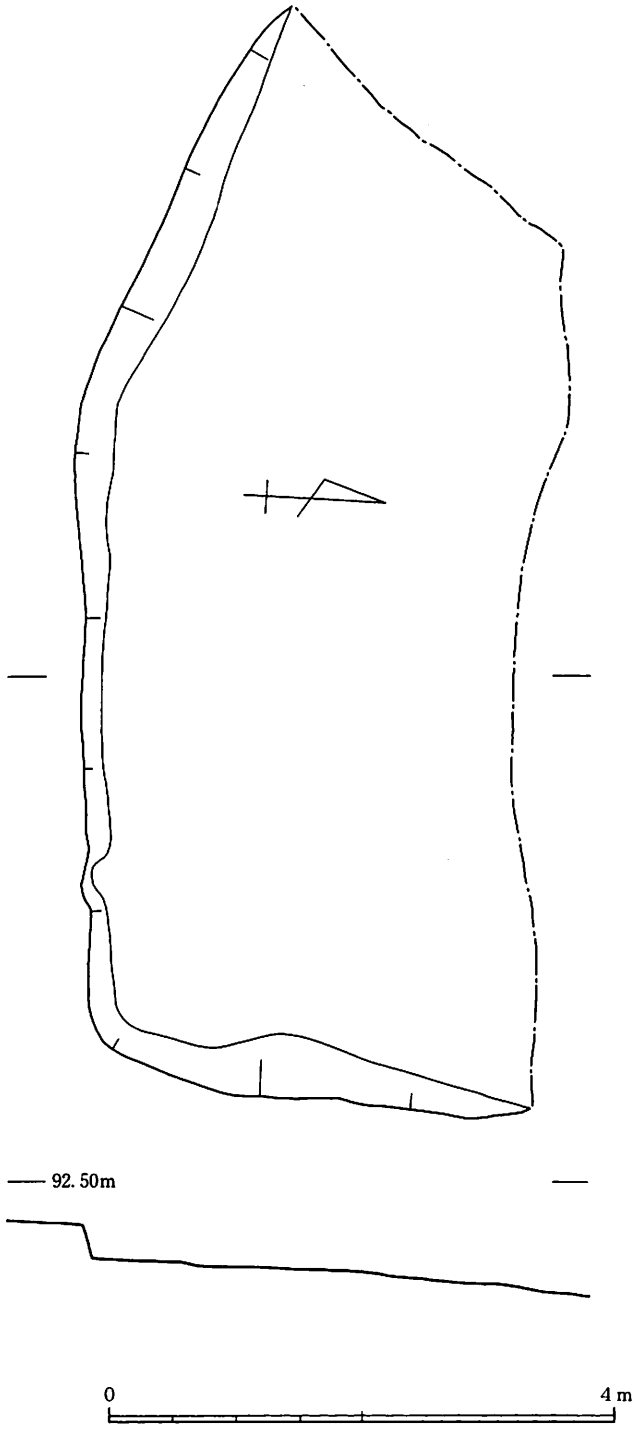


第36図　ＳＸ４実測図（1:60）

ている。少しだけ遺物が出土している。性格については不明であるが，遺構底面が平坦であることから，建物的性格の強い遺構であると思われる。

ＳＸ６（第37図，図版38ｃ）

位置　調査区の中央から若干北に位置している。ＳＢ12から南11.8mに存在する。



第37図　ＳＸ６実測図（1:60）

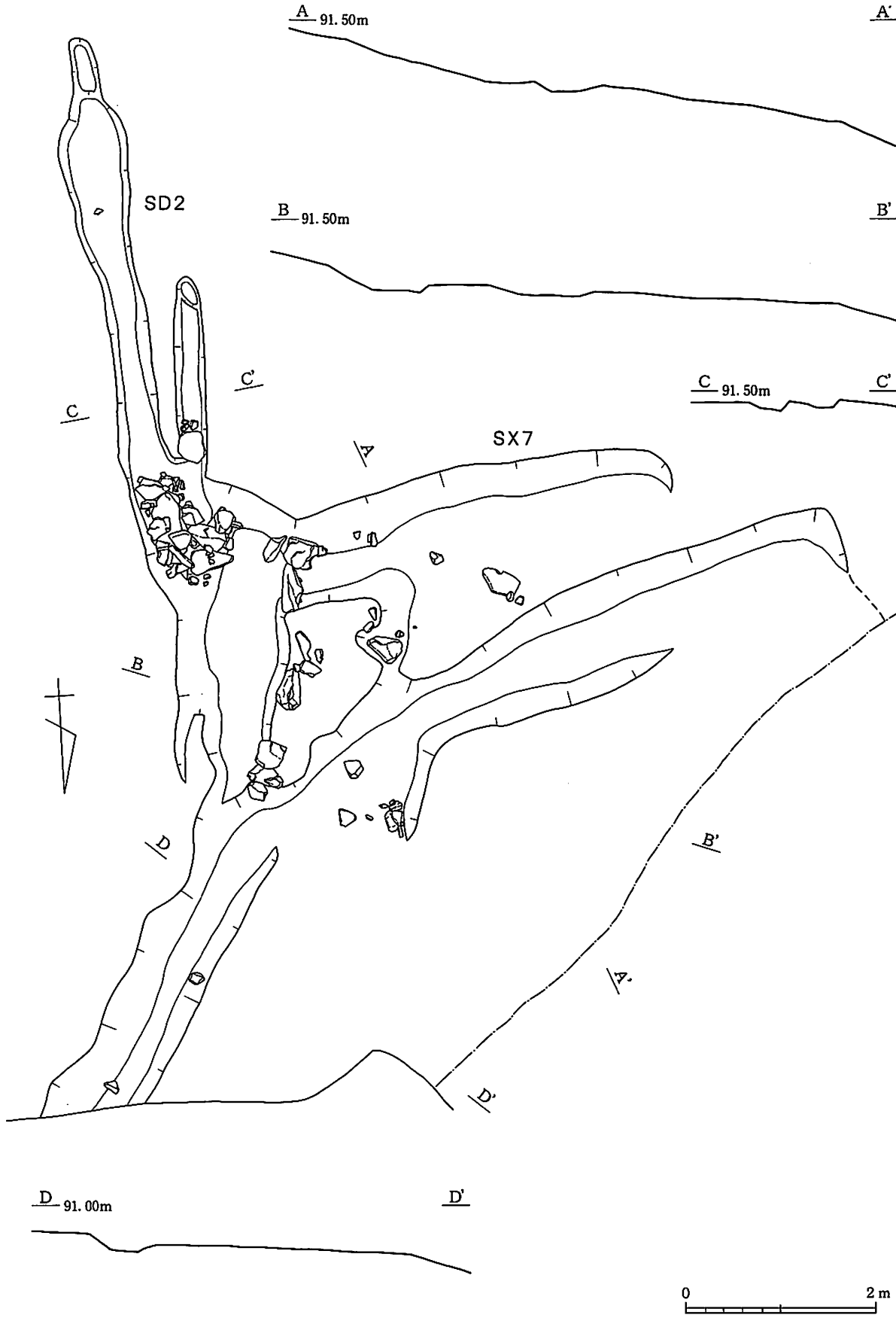
規模・形態　残存規模は536×958cmで，平面形は方形ないしは長方形になると思われるが，北側及び西側は自然地形に移行して消滅する。検出面から遺構底面までの深さは20cmである。

施設・遺物等　壁溝や柱穴は確認できなかった。また遺物は出土していない。性格については不明である。段状遺構の可能性もある。

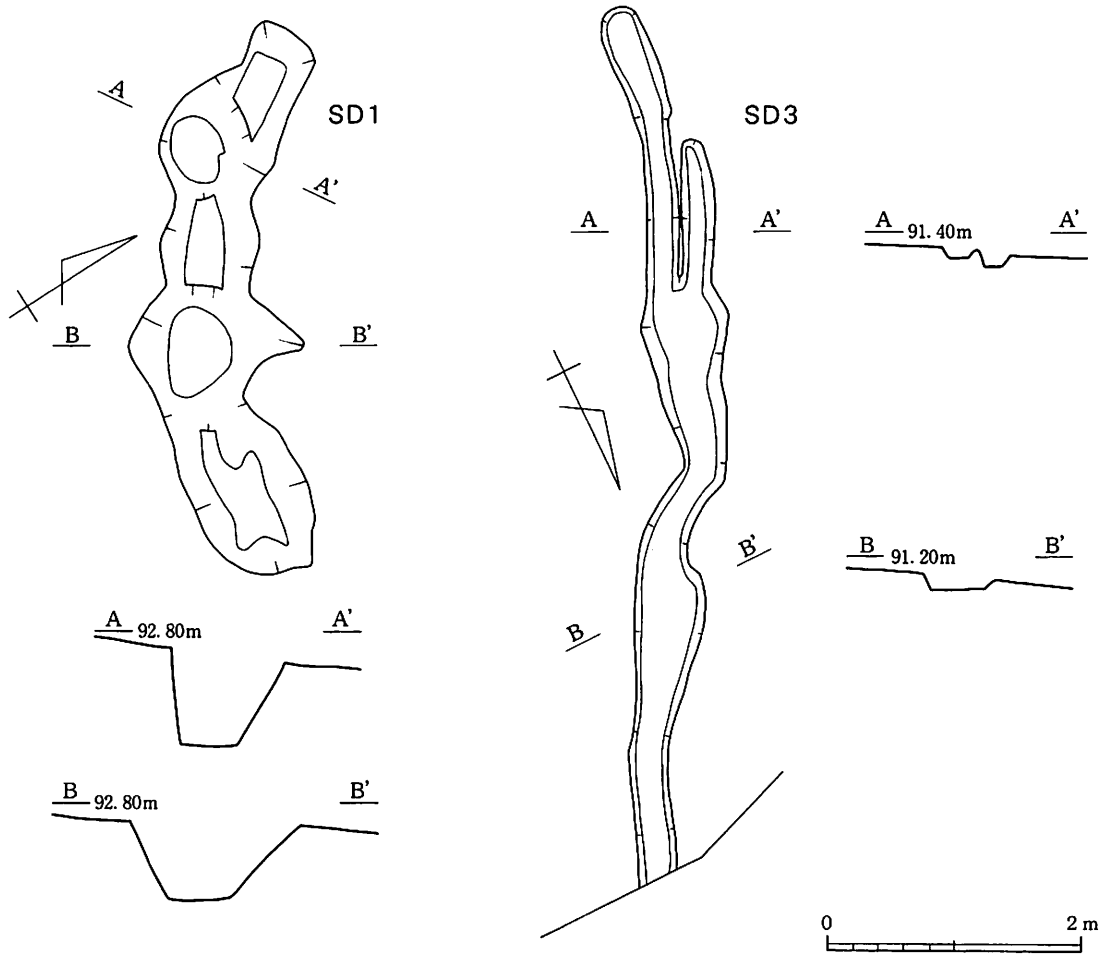
ＳＸ７（第38図，図版39ａ，39ｂ）

位置　調査区の中央部から北側に位置している。ＳＢ12から東1.2mに存在する。北側は調査区境となっており続きは不明である。また西側は自然地形に移行して消滅する。

規模・形態　残存規模は1088×542cmであるが，北側に未調査部分がそして西側は自然地形に移行して消滅するため全形は不明である。南東側でＳＤ２に続いている。平坦部は２カ所あり，南側の平坦部は495×166cm・深さ32cmで，東側に172×104cm，高さ15cmの小さな平坦部がある。北側の平坦部は983×315cm・深さ16cmで立ち上がりに沿って幅83～116cm・深さ10cmの溝が巡っている。



第38図　ＳＸ７・ＳＤ２実測図（1:60）



第39図　ＳＤ１・３実測図（1:60）

施設・遺物等　礫や土師器鍋（410）が若干量出土している。

B　溝状遺構

ＳＤ１（第39図，図版39ｃ）

遺跡中央部から若干北側に位置する。ＳＸ６から南2.8mにある。幅は83～52cm・深さ30cmで，全長427cmである。所々に若干深い部分が存在する。なお，遺物は出土していない。

ＳＤ２（第38図，図版39ａ，39ｂ）

遺跡中央部から北に位置する。ＳＸ７に壊される。溝は二条あり，東側は長さ460cm，幅73～40cm，深さ10cmで，西側は長さ211cm，幅33cm，深さ8cmである。遺物は確認できなかった。

ＳＤ３（第39図）

遺跡の中央部から北に位置する。ＳＸ７から東に3.8mにある。北側部分が調査区境のため全形は不明である。現状では長さ693cm，幅42～30cm，深さ13cmである。遺物は出土していない。

5 遺　　物

出土遺物

遺物は住居跡・土坑・性格不明遺構および調査区内から弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器などの土器類や石匙・石鏃・スクレイパー・砥石・台石などの石器類や鉄鎌・ヤリガンナ・鉄鏃などの鉄器類も出土している。このうち量的には土器類が圧倒的に多く石器や鉄器は少ない。

土器類のうち主体をなすのは弥生土器・土師器で，須恵器や土師質土器は極めて少ない。弥生土器・土師器は遺構により若干の差があるものの全般的には遺存状況が非常に悪く，器表面の風化や剥落により調整や整形の痕跡が観察できるものは僅少である。

遺構の種類により遺物の出土量にはかなりの多寡があった。土坑，性格不明遺構や溝状遺構の大半は出土遺物がなく，出土遺物がある遺構でも量としては少ない。対して竪穴住居跡は遺物は他の遺構に較べると出土量は格段に多く，ＳＢ17では上面が削られているものの良好な状態で床面一括資料が，さらにＳＢ３，ＳＢ９，ＳＢ10やＳＢ13では上層から中位にかけては遺構に伴わないものの多量の土器が出土している。

以下，出土量の多かった土器類については遺構毎に，また石器と鉄器はまとめて記述した。

1　土器類

a　遺構内出土土器

遺構から出土した土器である。前節の遺構の記述にそって，竪穴住居跡から土坑さらに性格不明遺構の順に述べる。なお，遺物が確認できなかった遺構や出土遺物があっても小片・細片のため図化できなかった遺構については省略した。

ＳＢ１（１～18，第40図，図版40）

弥生土器・土師器・須恵器が出土している。

１，２は壺である。１はやや外反気味の頸部からほぼ直立し立ち上がって口縁端部に至る。端部は若干外側に拡張して丸くおさめる。頸部と口縁部の境が若干三角形気味に尖っている。外面は横方向のナデ，内面は風化により不明である。２は外側にやや広がり気味の口縁部で，端部は若干尖り気味におさめる。頸部と口縁の境に凸帯をもつ。外面は調整不明。内面は横方向のナデである。

３～11は甕である。３は頸部から口縁部で，頸部は内側に緩やかに伸び「く」字形に強く外反して口縁端部に至る。口縁部は外面に一条の凹線が巡っており，端部は上方に少し尖り気味におさめる。内外面ともヨコナデで調整している。４は頸部から口縁部片である。「く」字形に外反して口縁端部に至る。口縁端部は端面を持つ。調整は頸部については不明であるが，口縁部は内外ともに横方向のナデである。５は口縁部片である。頸部から僅かに外反気味に緩やかな弧を描いて口縁端部に至る。端部は丸くおさめる。調整は内外面とも横方向のナデ，頸部以下については

不明である。６は頸部～口縁部である。やや内傾気味に緩やかな弧を描いて頸部にいたりここから外反気味に直線的に立ち上がる。端部付近ではさらに外反度が増して平行気味に口縁端部に至る。端部は丸くおさめる。調整は外面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下がハケ目後横ナデ。内面は口縁部は横方向のナデ，頸部以下はヘラケズリである。器壁は概して薄い。７は口縁部である。内傾気味の頸部から少し強めに外反して，口縁端部に至る。端部は丸くおさめる。調整は外面は横方向のナデ，内面は口縁部は横方向のナデ，頸部以下はヘラケズリで屈曲部の周辺にナデが施されている。８は口縁部片である。「く」字形に強く外側に伸びて口縁端部に至る。端部には狭いながらも端面を有する。調整は口縁部外面が横方向のナデと思われるが，その他については摩滅が激しく不明である。９は胴部中位から口縁部である。胴部最大径付近から緩やかに内側に弧を描きながら頸部に至る。口縁部は頸部から「く」字形に直線気味に立ち上がり口縁端部付近でほんの少しだけ垂下気味に肥厚する。端部は狭い端面を持つ。調整は外面頸部以下はハケ目でその他については不明である。10は口縁部である。頸部から若干開き気味に立ち上がり端部付近でさらに傾きが大きくなって口縁端部に至る。端部は丸くおさめる。外面及び口縁部内面は横方向のナデ，内面頸部以下はヘラケズリである。11は胴部上半から口縁部である。頸部付近で「く」字形に屈曲する。口縁部は短く外側開いて立ち上がり，上方に拡張されている。端部は若干尖り気味におさめる。調整等は不明である。

12～14は高杯の口縁部である。12は若干内傾気味の口縁部で，端面を持つ。端部は内側に若干拡張されている。調整は横方向のナデである。13は直線的に外側に緩く「ハ」字形に開く口縁部で，口縁端部には端面を持ち，端面には凹線が３条さらに端面直下の口縁外面に一条巡っている。調整については不明である。14はラッパ状に直線的に外側に開く口縁部で，まっすぐ伸びて口縁端部に至る。端部は丸くおさめる。調整は内外面ともに横方向のナデである。

15・16は底部である。15は平底，16はやや尖り気味の丸底である。

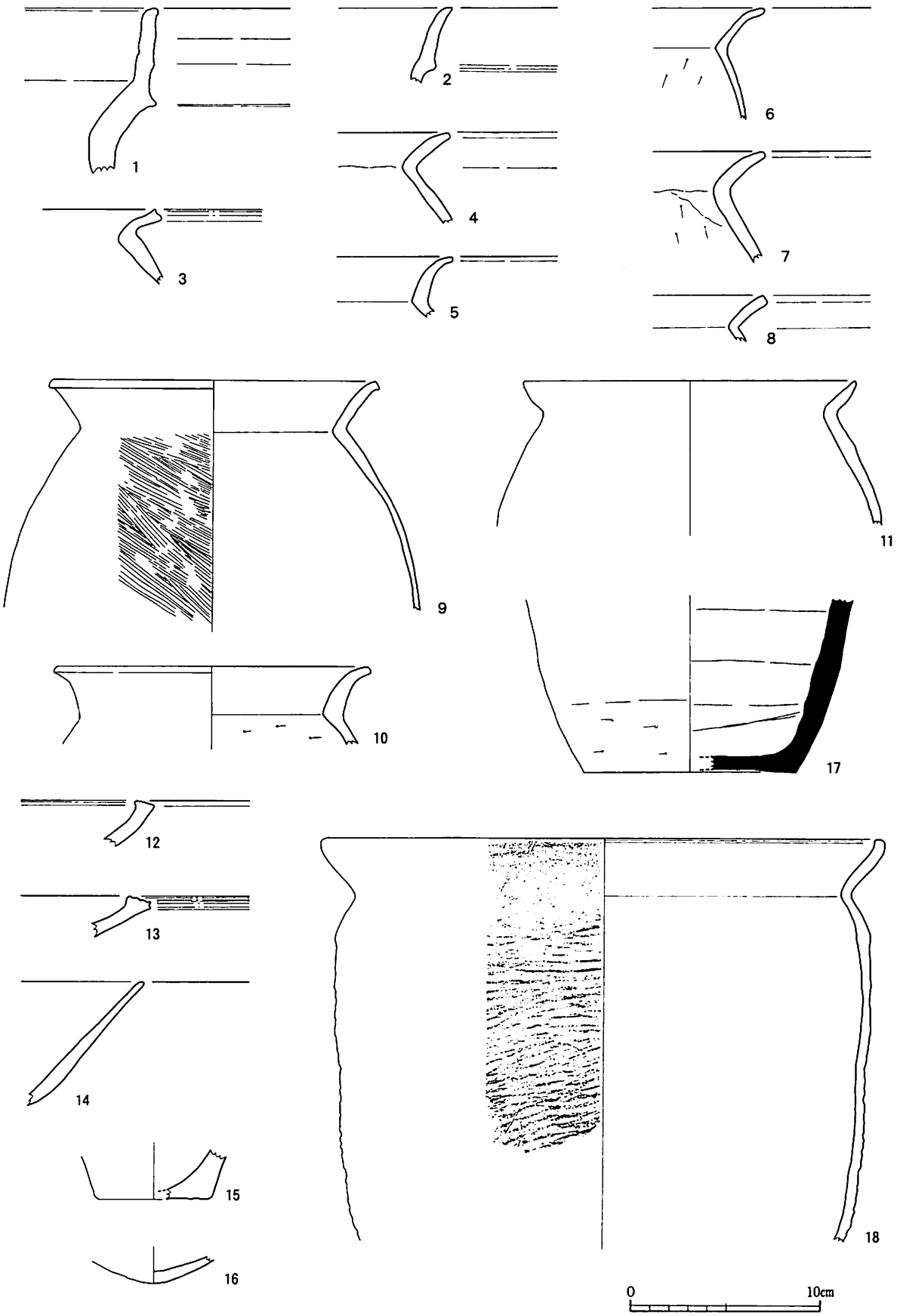
17は須恵器壺の底部から胴部下半である。底部は平底で，垂直気味に立ち上がる。底部外面はヘラケズリ後横方向のナデ，内面はナデ，胴部下半は外面が回転ナデ，内面はタタキ後回転ナデである。底部付近の接合痕跡が顕著で，調整もこのあたりを境に異なることから，底部と胴部下半は製作時に合体された可能性が高い。

18は土師器甕の胴部下半から口縁部にかけてである。胴部は若干外側に開くもののほぼ直線的に頸部周辺にいたり，頸部直下で一旦内傾する。口縁部は頸部から「く」字形にやや内傾気味に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面の端部直下は段状となっている。調整は内面はナデ，外面は口縁部及び頸部周辺までは横方向のナデ，頸部周辺以下は平行タタキ目である。

ＳＢ２（19～46，第41図，図版40，41）

弥生土器・土師器・有孔円盤が出土している。

19～24は壺である。19は口縁部である。頸部から外側に強く開いて口縁端部に至る。口縁端部



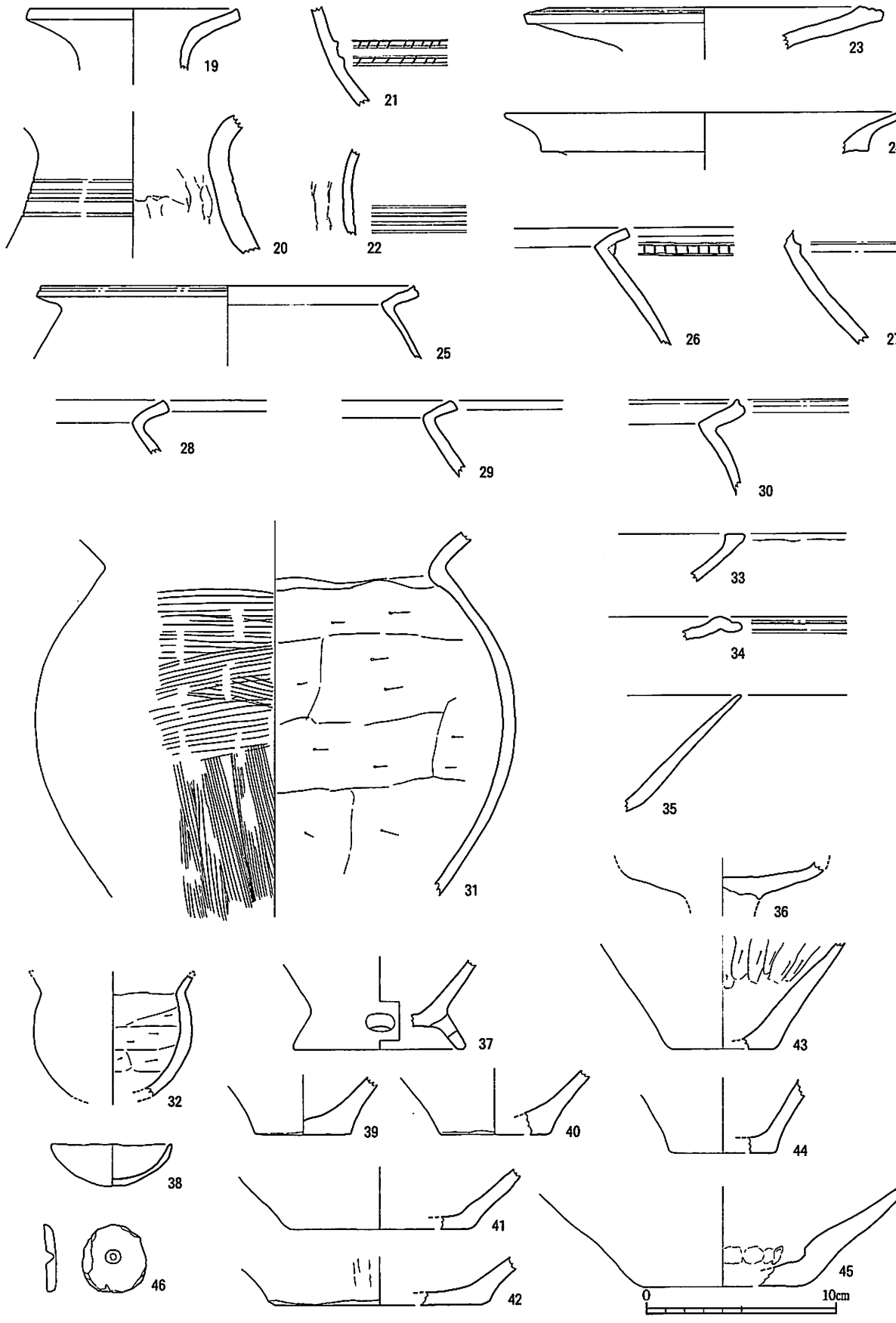
第40図　出土遺物実測図（1）（1:3）

は端面をなし，上方を僅かに拡張している。調整は不明である。20は頸部である。最もくびれる部分からやや下方に幅の狭い凹線が四条巡っている。内面には絞り痕跡が確認できる。21は頸部下半である。断面三角形状の刻み目凸帯を二条巡らせる。刻み目の間隔は疎らである。外面は横方向のナデ，内面の調整は不明である。22も頸部であるが，20や21に較べると個体は小さいと思われる。頸部上半が若干外側に開き気味になるもののほぼ垂直に伸びている。外面に幅の狭い沈線が四条巡っている。外面の調整は横方向のナデ，内面は絞り痕が確認できる。23は口縁部である。「ハ」字形に大きく外側に伸び端部直下で付近で垂直気味に短く立ち上がる。口縁端部は端面をなし凹線が三条巡っている。端部はいずれも角張っている。24は口縁部である。頸部から垂直に屈曲して短く立ち上がった後，「ハ」字形に外側に強く開いて口縁端部に至る。端部は丸くおさめる。

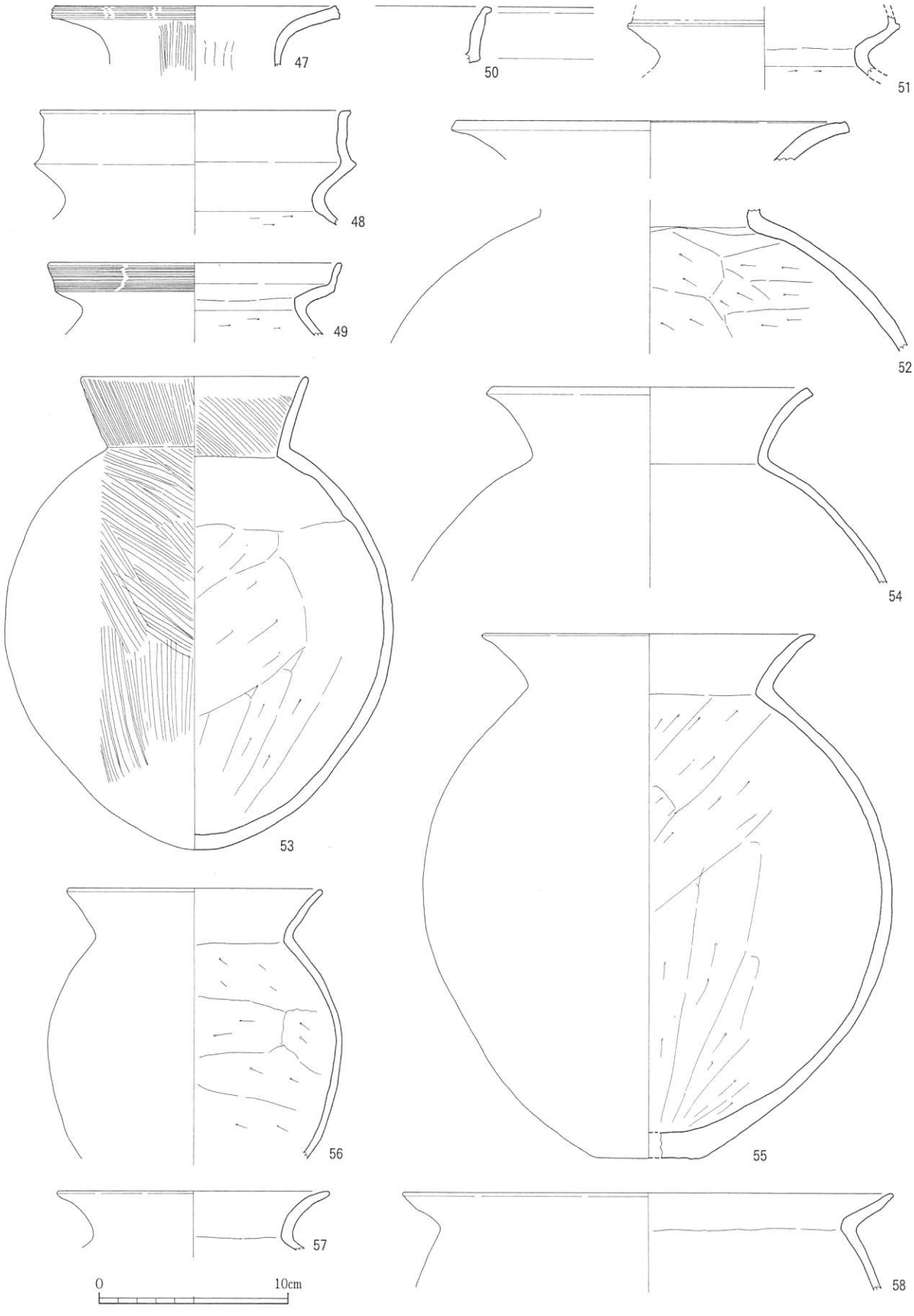
25～31は甕である。25は胴部上半から口縁部である。頸部で「く」字形に屈曲して外側に強く開いて口縁端部に至る。口縁端部は上方に拡張されて端面をなし，中央に凹線が一条巡っている。口縁部は内外面ともに横方向のナデである。26は胴部上半から口縁部である。頸部で「く」字形に屈曲して外側に開いて口縁端部に至る。口縁端部は端面を形成している。頸部の屈曲部には断面三角形の粘土を帯状に巡らせ，この凸帯に５～６㎜間隔で縦方向に刻み目を施している。27は胴部上半である。頸部の下方に断面三角形の貼り付け凸帯を巡らせる。28は頸部から口縁部である。頸部で「く」字形に外側に開いて口縁端部に至る。端部は上方に若干拡張した端面をなす。調整等は不明である。29は頸部周辺から口縁部である。頸部で「く」字形に屈曲して外側に強く開いて口縁端部に至る。口縁端部は端面をなす。外面は口縁部がナデ，頸部以下は横方向のナデで，内面は横方向のナデである。30は胴部上半から口縁部である。頸部で「く」字形に屈曲し外側に開いてやや内傾気味の弧を描いて口縁端部に至る。端部は上方に若干拡張された端面を形成し，凹線が中央から少し上に一条巡っている。調整は内外面ともに口縁部が横方向のナデである。31は胴部下半から口縁部直下である。底部が欠失しているが，胴部最大径が中央部から少し上になる倒卵形をしている。頸部は「く」字形に屈曲し，外側に強く開いて口縁端部に至ると思われる。外面は口縁部周辺は横方向のナデ，頸部以下はハケ目を施すが，胴部最大径のあたりでハケ目の方向及び単位が横から縦へまた疎から密へと変化する。内面は口縁部が横方向のナデで，頸部以下はヘラケズリである。

32は鉢である。体部は緩く内側に弧を描きながら頸部に至る。頸部は少し「く」字形に屈曲しする。口縁部は頸部から若干外側に開き気味にまっすぐ伸びる。体部内面はヘラケズリ，その他は調整不明である。

33～36は高杯である。33は口縁部である。体部は外側強く開いて口縁端部に至る。口縁端部は内外に拡張され端面となっている。内面は口縁周辺が横方向のナデ，以下がナデである。34も口縁部である。体部はかなり強く外側に開いて伸び，口縁部は外側に拡張されれ端面となっている。端面には凹線が一条巡っている。調整等については不明である。35は体部から口縁部である。体部は「ハ」字形に外側に開いてまっすぐ伸びて口縁端部に至る。端部は若干角張り気味におさめ



第41図　出土遺物実測図（2）（1:3）



第42図　出土遺物実測図（3）（1:3）

る。内外面ともに横方向のナデで調整している。36は杯底部である。若干内側に傾きながら体部へと至っている。内外面ともに回転ナデである。37は脚台である。脚部には径10㎜の円孔が存在する。脚部は底部と接する部分で「く」字形に外側に若干開いてまっすぐ伸びて脚端部に至る。脚端部は丸くおさめる。底部は平底である。底部外面は横方向のナデ，脚部はナデ，内面は底部がナデ，脚部が横方向のナデである。

38は椀である。丸底でほぼ球形に緩やかに内傾しつつ口縁端部に至る。端部は丸くおさめる。内面は横方向のナデと思われるが，その他については不明である。

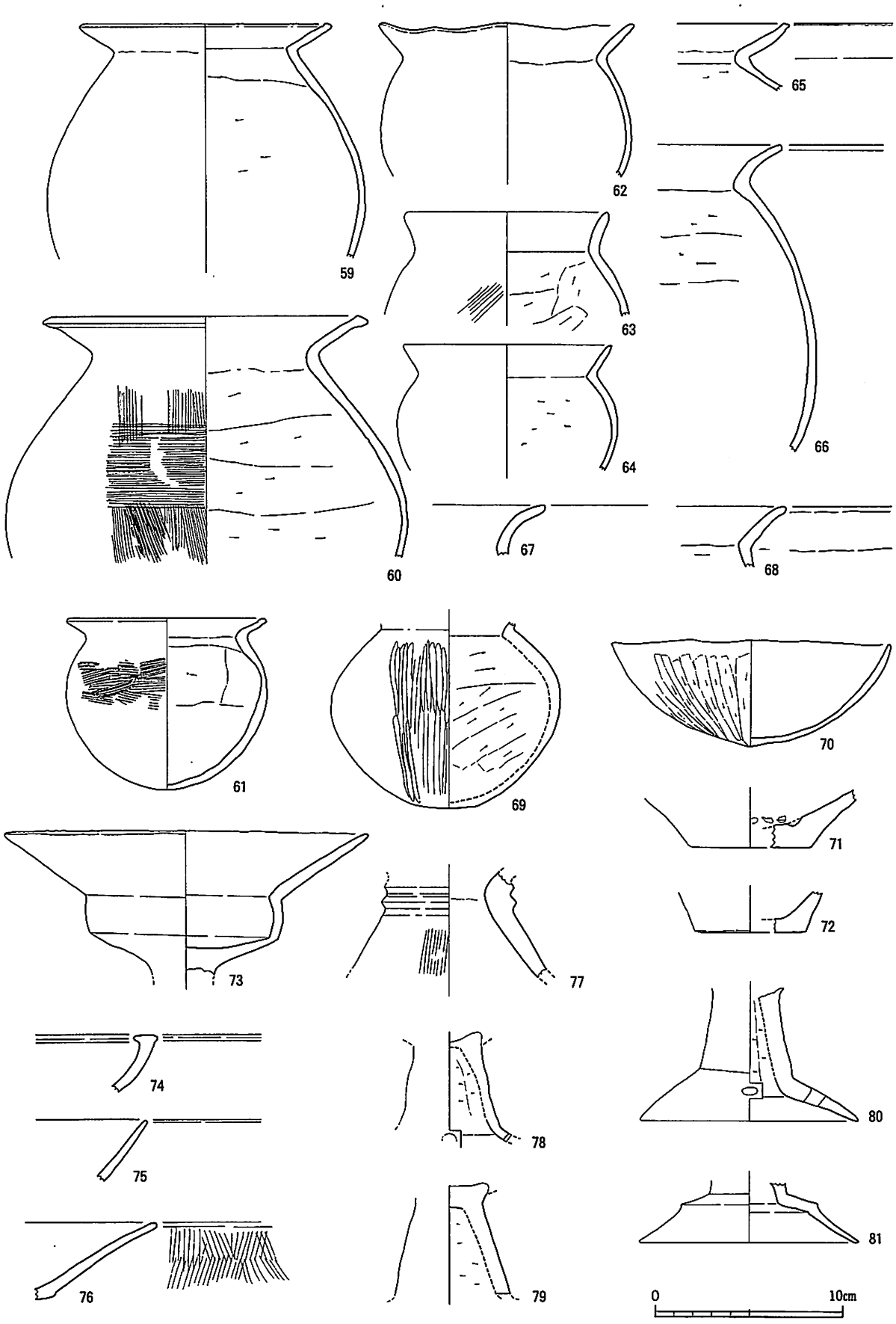
39～45は底部である。いずれも平底の底部である。39は底部から胴部下半である。胴部は若干外傾しつつ伸びており，底部との境に稜をなす。調整等は不明である。40は底部から胴部下半である。プロポーションは39と類似する。調整はナデである。41は底部から胴部下半である。胴部は逆「ハ」字形に外側に開いてまっすぐ伸びている。外面は胴部が横方向のナデ，底部はナデ，内面は胴部は不明，底部が横方向のナデである。42も底部から胴部下半である。胴部は逆「ハ」字形に広がり若干外傾しつつ伸びる。底部付近には稜がある。外面は胴部がミガキ？，底部がナデで，内面はナデである。43は底部から胴部下半である。胴部は逆「ハ」字形にまっすぐ伸びる。外面は胴部が横方向のナデ，底部がナデ，内面はヘラケズリで，底部付近が横方向のナデである。44は底部から胴部下半である。胴部は逆「ハ」字形に直線的に伸びる。調整は内外面ともにナデである。45は底部から胴部下半である。胴部は逆「ハ」字形に大きく開いて直線的に伸びる。器壁もかなりの厚さである。外面はナデ，内面の底部と胴部の境に指頭圧痕が残っている。

46は有孔円盤である。土器の胴部片の再利用である。34×32㎜のほぼ円形で，厚さは４㎜である。外形を整えるために面取りをしている。円盤のほぼ中央には８×７㎜の円形のくぼみがある。しかしこのくぼみは反対側に１㎜ほどの厚さを残しており，貫通するものではない。またくぼみは土器の内面から外面に向けて穿たれている。

ＳＢ３（47～81，第42，43図，図版41，42）

弥生土器・土師器が出土している。

47・48・50・51・69は壺である。47は頸部から口縁部である。口縁部は垂直な頸部から大きく外側に開いて口縁端部に至る。口縁端部は上下に拡張した端面で凹線を三条巡らせている。外面はハケ目そして内面は口縁部は横方向のナデ，頸部は絞り目が確認できる。48は頸部から口縁部である。頸部は「く」字形に屈曲しやや外側に短く開き一旦段をなした後今度はほぼ垂直方向にやや外傾しつつ伸びて口縁端部に至る。端部は若干外側に拡張され端面となっている。口縁部は横方向のナデ，内面頸部はヘラケズリである。50は48と同じようなプロポーションをした口縁部である。わずかに外側に開くもののほぼ垂直に近い立ち上がりで，口縁端部は外側に若干拡張され，端面を持つ。調整は内外面ともに横方向のナデである。51は頸部の破片である。48と同じようなプロポーションをしている。ただし口縁部の折り返しは凹線により境を強調している。調整は外面は横方向のナデ，内面は口縁部にかかる部分が横方向のナデで，頸部以下はヘラケズリで



第43図　出土遺物実測図（4）（1:3）

ある。69は底部から頸部である。底部は平底気味の丸底で，胴部は球形である。外面はハケ目後にヘラミガキ，内面はヘラケズリである。色調は赤橙色で，器形は小型の無形壺あるいは広口壺になると思われるが，口縁部か欠失しているため不明である。

49・52～68は甕である。49は頸部から口縁部である。頸部で「く」字形に屈曲し外側に強く開いて短く伸び，口縁を上方に拡張している。口縁拡張部には擬凹線が巡っている。外面及び口縁内面は横方向のナデ，頸部内面はヘラケズリである。52は胴部上半から口縁部である。胴部は良く張っており，頸部で屈曲する。口縁部は頸部からラッパ状に外側に大きく開きやや外傾気味に伸びて口縁端部に至る。端部は端面をなす。内面の口縁端部が僅かにくぼむ。外面は口縁部が横方向のナデ，以下はナデ，内面は口縁部が横方向のナデで，頸部以下はヘラケズリである。53はほぼ完形品である。底部は丸底で，胴部は倒卵形である。頸部は屈折し，口縁部は少し外側に開くもののほぼ垂直方向にまっすぐ伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。外面は縦方向のハケ目，胴部は上半が斜め方向のハケ目で，下半が縦方向のハケ目となっている。内面は口縁部が斜め方向のハケ目，胴部がヘラケズリ，底部はナデである。胴部最大径付近から底部にかけては顕著なススの付着が認められる。丸底の外面は赤橙色をしている。54は胴部上半から口縁部である。少し肩の張った胴部から頸部に至る。頸部はほぼ直角に屈曲しており，口縁部は外に開き気味に外傾しつつ口縁端部に至る。口縁端部は端面をなす。調整等は不明である。55はほぼ完形品である。底部は平底で，胴部は少し間延びした球形をなす。頸部はほぼ直角に屈曲し，口縁部は逆「ハ」字形に外側にやや開き気味にやや外傾しつつ伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面胴部はヘラケズリである。その他の部分は調整等が不明である。56は胴部下半から口縁部である。胴部はほぼ倒卵形で，頸部はやや鈍角気味に屈曲する。口縁部は頸部から外に開いてまっすぐ伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。外面は口縁部及び胴部上半が横方向のナデ，以下は不明。内面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下はヘラケズリである。口縁端部外面と胴部中位（最大径部付近）以下にススが顕著に付着している。57は口縁部である。頸部から強く屈曲して外側に開き気味に外傾しつつ口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。58は胴部上半から口縁部である。頸部は内傾度の弱い胴部からほぼ直角に屈曲する。口縁部はかなり強く外側に開いて直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等については不明である。59は胴部下半から口縁部である。胴部は卵形で，頸部はほぼ直角に屈折する。口縁部は強く外側に開きまっすぐ伸びて口縁端部に至る。口縁端部はやや平坦気味におさめる。口縁端部直下の内面には凹線が一条巡っている。内面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下胴部上半は横方向のナデで，以下はヘラケズリである。60は胴部中位から口縁部である。胴部は卵形である。頸部は緩く「く」字形に屈曲する。口縁部は外に開き気味にまっすぐ伸びて口縁端部に至る。口縁端部は外側に拡張されている。外面は口縁部付近が横方向のナデで，以下はハケ目である。頸部から胴部中位にかけて縦方向のハケ目を施した後で，胴部中位から少し上に横方向のハケ目を施している。内面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下はヘラケズリである。61は完形品である。底部は丸底で，胴部は最大径部が器体の少し上になるやや胴が膨ら

む器形で，頸部は鋭く屈曲している。口縁部は外側にかなり開き短く伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張気味におさめる。外面は口縁部が横方向のナデ，胴部上半がハケ目，内面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下はヘラケズリである。なお，胴部下半については調整等は不明である。62は胴部中位から口縁部である。球形の胴部で，頸部はやや鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開いてまっすぐ伸びて口縁端部に至る。端部は丸くおさめる。口縁は安定しておらず，歪みが目立つ。なお，調整等については不明である。63は胴部上半から口縁部である。胴部は緩やかに頸部に至り頸部は少し屈曲する。口縁部は若干外側に開いてまっすぐ伸び口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。外面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下はハケ目である。内面は口縁部が横方向のナデで，頸部以下はヘラケズリである。64は胴部下半から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部は鈍角気味に屈曲する。口縁部はやや外側に開いて直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整は内面頸部以下がヘラケズリ，その他については不明である。65は口縁部である。頸部は鋭角気味に屈曲し，口縁部は外側にかなり開き，内傾しつつ口縁端部に至る。口縁端部は外側に少し拡張して，角張り気味におさめる。外面は横方向のナデ，内面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下はヘラケズリである。66は胴部下半から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部はほぼ直角に屈曲し，口縁部は外側に強く開き，外傾しつつ口縁端部に至る。口縁端部は若干平坦気味におさめる。外面は口縁部から頸部は横方向のナデで，以下は不明である。内面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下はヘラケズリである。67は口縁部である。外側に強く開き外傾してゆるやかな弧を描きながら口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。68は口縁部である。頸部は緩く「く」の字に屈曲する。口縁部は外に開いて直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。外面は頸部以下が横方向のナデ，内面は頸部以下がヘラケズリである。口縁部については不明である。

70は椀である。ほぼ完形品で，底部は若干尖り気味の丸底，体部は内傾しつつ緩やかに弧を描いて口縁端部に至る。口縁端部は少し尖り気味におさめる。外面は口縁部周辺が横方向のナデ，以下はヘラケズリで，底部付近で再びナデとなる。内面はナデである。

71・72は底部である。いずれも平底である。71は内面底部と胴部の境付近に指頭圧痕を留めている。72は底部外面はナデ，内面はナデである。

73～81は高杯である。73は脚柱部から口縁部である。杯底部は平底気味で，体部はそこからほぼ直角に屈曲して垂直に立ち上がる。体部は少し弧状をなす。体部は短く立ち上がった後，体部1/3程のところで外側に強く開いてまっすぐ伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面の体部弧状をなす部分が横方向のナデで，その他の部位については不明である。器壁が脆く赤変気味なことから２次焼成を受けた可能性が高い。74は体部の口縁部である。やや内傾しながら口縁端部に至る。口縁端部は内外に拡張され端面をなす。内面はヘラみがきで，その他は不明である。75は体部の口縁部である。逆「ハ」字形に外側に開いて直線的に伸び口縁端部に至る。口縁端部は角張気味におさめる。内外面ともに回転ナデである。76は体部である。体部は杯底部から外側に強く開いてほぼまっすぐ伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。外面はハケ

目，内面はナデである。77～80は脚柱部である。77は「ハ」字形に外側に開いて脚端部に伸びる。杯底部付近に断面三角形状の凸帯を２条巡らせる。外面はハケ目，内面は脚柱付近はナデで，以下は不明である。78は少しだけ外側に開いて脚端部に至る。脚部付近には円形の透かしがある。外面は回転ナデ，内面は脚柱部がヘラケズリである。79も78同様に少しだけ外側に開き気味に脚端部に至る。外面は回転ナデ，内面はヘラケズリである。80は脚柱部は少しだけ外側に開き気味に脚部にいたり，脚部は外側に大きく開いて屈曲し，まっすぐ伸びて脚端部に至る。脚端部は丸くおさめる。脚部中央から少し脚柱部よりに直径８㎜の円形の透かしがある。内面は脚柱部がヘラケズリ，脚部は横方向のナデである。81は脚柱部下半から脚端部である。脚部は脚柱部との境で外側に大きく開いて屈折する。脚部はそこから短く伸びた後段をなして少し屈曲度をゆるめながら，直線的に伸びて脚端部に至る。脚端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のナデである。

ＳＢ４（82～89，第44図，図版42，43）

弥生土器が出土している。

82は壺である。頸部である。胴部から緩く外側に弧をなしている。頸部下半には断面三角形状の刻目凸帯が巡っている。その直上には段がある。頸部の中位には凸帯が四条巡っている。口縁部近くの内面には断面が台形状の角張った凸帯が巡っている。内面には絞り目が顕著に確認できる。

83は甕である。頸部から口縁部である。頸部は「く」字形に強く外側に屈曲する。口縁部は水平方向に直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は上下方向に若干拡張されて端面をなす。頸部直下に小さな段を持つ。外面は横方向のナデ，内面はナデである。

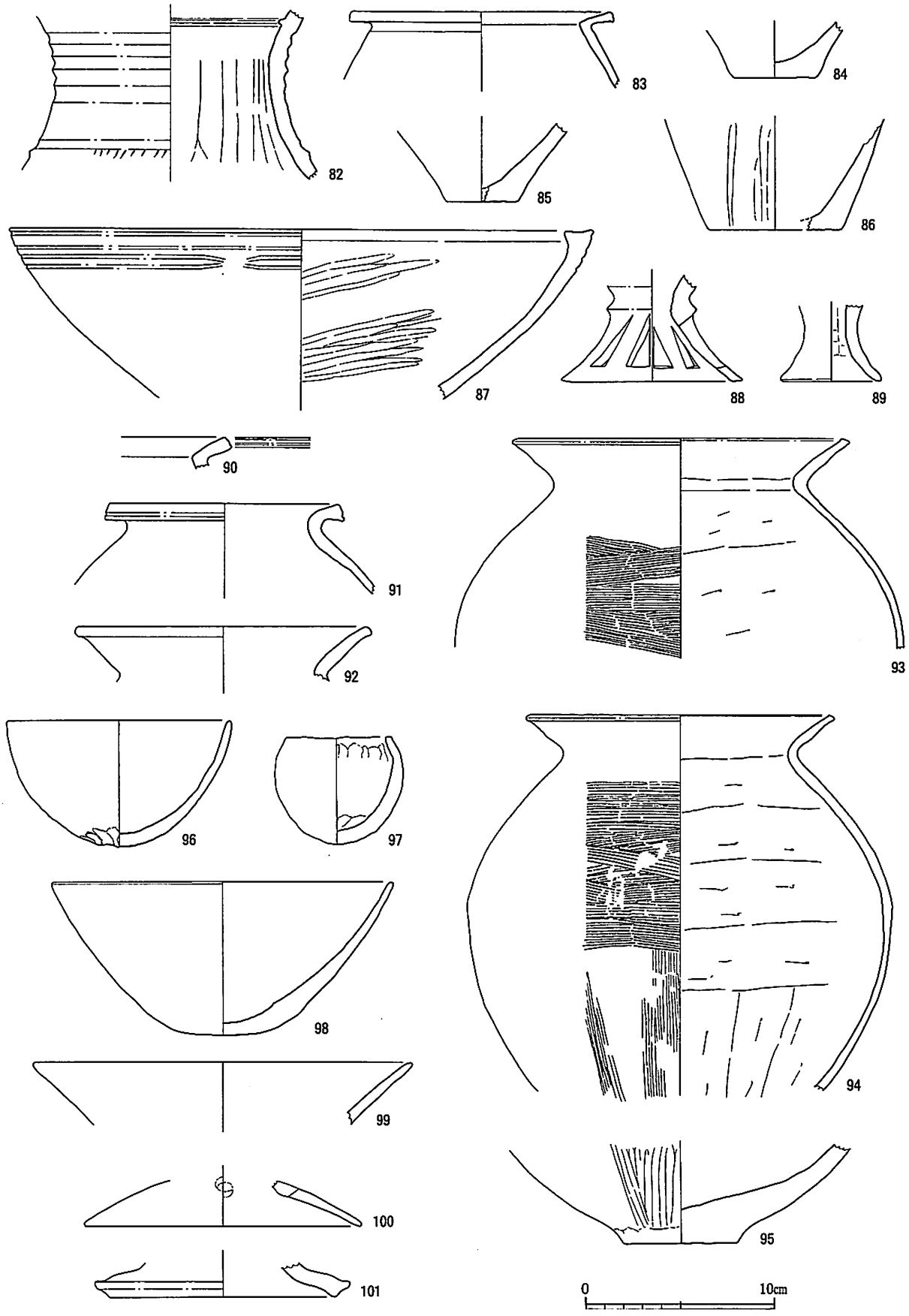
84～86は底部である。いずれも平底である。84は底部内面が丸くなる。調整は内外面ともナデと思われる。85も底部内面が丸くなるタイプである。調整等については不明である。86は底部内面は平坦で，少し大きくなっている。外面はヘラみがき，内面はナデである。

87～89は高杯である。87は体部で杯底面から上の部分である。体部は緩やかに内傾しながら弧状に伸びて口縁端部に至る。口縁部は内外に拡張しており内側が少しくぼむ端面をなす。口縁外面直下には凹線が一条，さらにその直下にもう一条平行して巡っており，その下にある三条目と四条目の凹線は平行した巡るものの途中で交差するようである。内面は口縁端部付近がナデ，以下はヘラみがきである。88と89は脚柱部である。88は脚柱部に断面三角形状の凸帯がめぐり，「ハ」字形に外側に開いた脚柱部には三角形の透かしが施されている。脚端部は端面をなす。調整等は不明である。89は少し脚部が外側に開き，弧を描いて脚端部に至る。脚端部は丸くおさめる。内面は脚柱部がヘラケズリ，脚部が横方向のナデである。

ＳＢ５（90～101，第44図，図版43）

弥生土器・土師器が出土している。

90～94は甕である。90は口縁部である。屈曲した頸部から外側に強く開いて直線的に伸びて口



第44図　出土遺物実測図（5）（1:3）

縁端部に至る。口縁端部は下方に若干拡張し端面を持つ。この拡張部に幅狭の凹線が二条巡っている。調整は内外面ともにヨコナデである。91は胴部上半から口縁部である。頸部は強く屈曲しており，口縁部はほぼ水平方向に短く伸びて口縁端部に至る。口縁端部は上下に拡張され，拡張部の中央からやや下方に凹線が一条巡る。口縁部は横方向のナデである。92は口縁部である。頸部から外側に開いて直線的に伸び口縁端部に至る。口縁端部は少し外側に拡張されるがおおむね丸くおさめる。調整は内外面ともに横方向のナデである。93は胴部中位から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部はほぼ直角に屈曲している。口縁部は外側に開いて直線的に伸び口縁端部に至る。口縁端部は若干内側に拡張され角張り気味におさめる。外面は口縁部から胴部上半が横方向のナデ，以下横方向のハケ目，内面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下がヘラケズリである。94は胴部下半から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部はほぼ直角に屈曲している。口縁部は少し強めに外側に開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は少し角張り気味におさめる。外面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下はハケ目である。内面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下はヘラケズリである。口縁部の外面直下と頸部以下にススが付着している。

95は底部である。平底の底部で，胴部は大きく外に広がっており，器壁はかなりの厚みを持つ。外面は胴部がヘラみがき，底部はナデである。内面は胴部が横方向のナデ，底部はナデである。

96・98は椀である。96は完形品である。底部は丸底で，体部は緩やかに内側に弧を描きながら口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。外面は体部が横方向のナデ，底部は指ナデである。内面はナデと思われる。98は底部から口縁部である。底部は平底気味の丸底で緩く外側に開いて少し内傾しつつ口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。調整等は不明である。

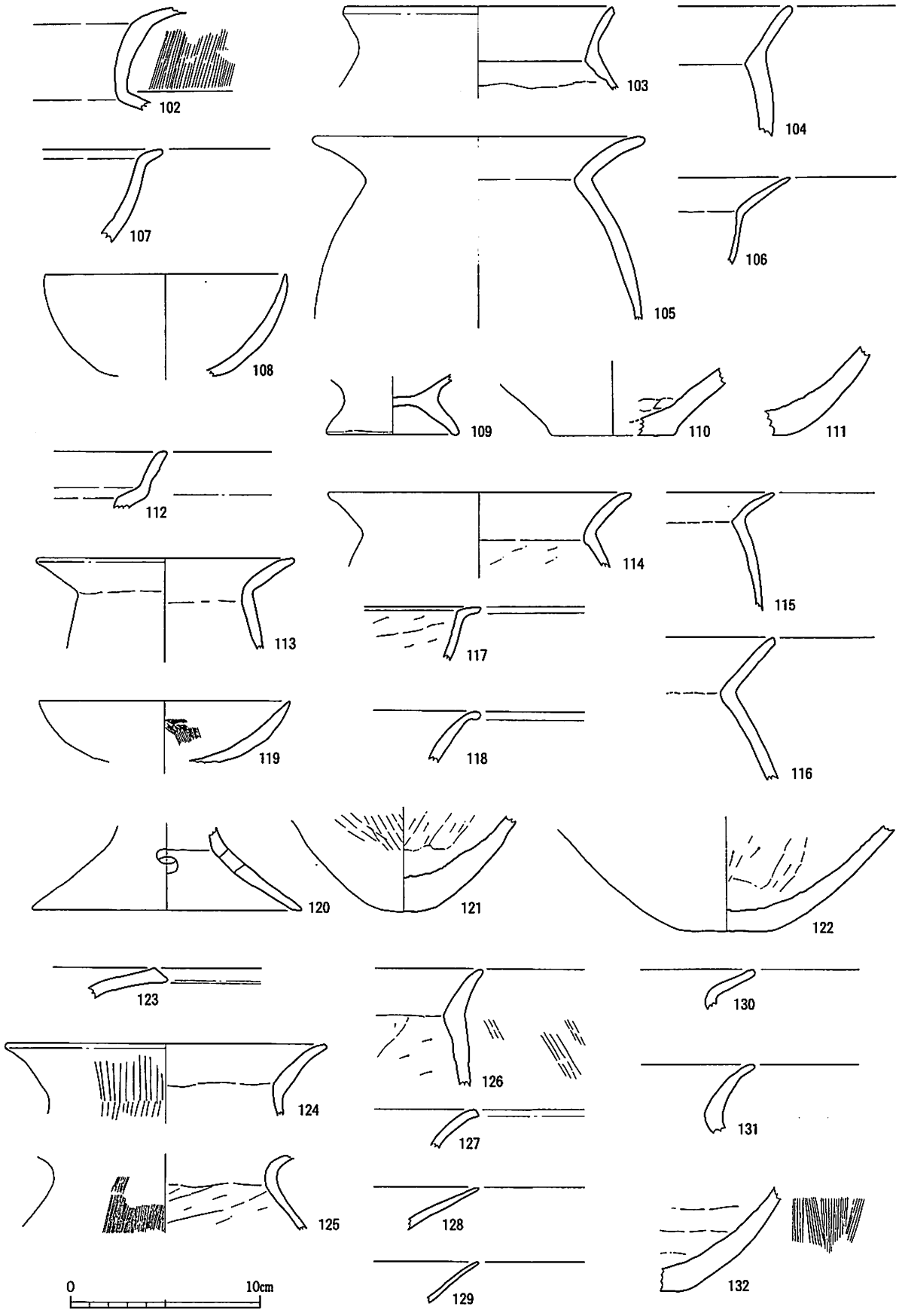
97は手捏ね土器である。底部から口縁部である。底部は丸底で，体部は弧状に伸びて口縁端部付近では外側から内側に窄まっている。口縁端部はやや角張り気味におさめる。内面は指押さえが顕著で，外面はナデが見られる。

99～101は高杯である。99は体部の口縁部である。「ハ」字形に外側に直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面ともに回転ナデである。100・101は脚部である。100は「ハ」字形に強く外側に広がり直線的に伸びて脚端部に至る。脚端部は丸くおさめる。脚部上位に円形の透かしを施す。なお調整は不明である。101は外側に大きく広がって口縁端部に至る。口縁端部は上下方向に少し拡張され，中央が少しくぼむ端面をなす。調整は内外面ともに横方向のナデである。

ＳＢ６（102～111，第45図，図版43）

弥生土器・土師器が出土している。

102は壺である。頸部から口縁部である。頸部で一旦緩く屈曲し，やや外側に開き気味に上方に伸びる。口縁部付近では開き具合が一段と強くなりほぼ水平方向に伸びている。外面は口縁部周辺が横方向のナデ，以下がハケ目，内面は口縁部周辺が横方向のナデである。二重口縁壺の頸部と思われる。



第45図　出土遺物実測図（6）（1:3）

103～105は甕である。103は頸部から口縁部である。頸部の屈曲は弱く，口縁部は若干外側に開き気味に直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。端部は角張り気味におさめる。頸部以下の内面がヘラケズリである。104は胴部上半から口縁部である。頸部の屈曲は極弱い。口縁部は外側に少し開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。105は胴部上半から口縁部である。卵形の胴部で，頸部はほぼ直角に屈曲し，口縁部は強く外側に開いて外傾気味に弧を描いて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。

106・107は鉢である。106は体部上半から口縁部である。若干外側に開き気味に立ち上がった胴部から頸部付近で外側にさらに屈曲し口縁部に至る。口縁部は強く外側に開いて直線的に伸び口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整は不明である。器壁は薄い。107は体部上半から口縁部である。緩やかに内傾する弧を描き口縁部に至る。口縁部は外側に強くかつ短く屈曲してそのまま口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。

108は椀である。体部下半から口縁部である。底部はやや平底に近い丸底と思われる。体部は緩やかに弧を描きながら立ち上がりそのまま伸びて口縁端部に至る。口縁端部は少し尖り気味におさめる。内外面ともにナデである。

109～111は底部である。109は脚台である。平底の底部に脚が付いたものである。脚部は「ハ」字形に外に広がり直線的に伸びて脚端部に至る。脚端部は丸くおさめる。調整等は不明である。脚部と外部の器壁の厚さに著しい相違があることから脚部は後付けであろう。110は平底の底部である。胴部は逆「ハ」字形に外側に伸びている。内面はナデで底部と胴部の境に指頭圧痕が認められる。外面は胴部が横方向のナデ，底部はナデである。111は丸底の底部である。器壁はかなり厚い。内面は胴部が横方向のナデ，底部周辺はナデである。

ＳＢ７（112～122，第45図，図版43）

弥生土器・土師器が出土している。

112は壺である。口縁部である。頸部で一旦屈曲して大きく外側に短く開き途中で一転して内側に屈曲し，外上方に直線的に伸びて口縁端部に至る。端部は角張り気味におさめる。調整等は不明である。

113～116は甕である。113は胴部上半から口縁部である。頸部でやや鈍角気味に外側に屈曲する。口縁部は外側に強く開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は少し尖り気味に丸くおさめる。調整等は不明である。114は頸部から口縁部である。頸部は少し鈍角気味に外側に屈曲する。口縁部は外側に開いてやや外反しながら口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。頸部内面がヘラケズリである。115は胴部上半から口縁部である。頸部はやや鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に強く開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。116は胴部上半から口縁部である。頸部はやや鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は少し角張り気味におさ

める。調整等は不明である。

117・118は鉢である。117は体部上半から口縁部である。体部はすこし外側に直線的に伸びて口縁部に至る。口縁部は外側に強く開いて短く伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。内面は口縁部が横方向のナデ，体部はヘラケズリ，外面は横方向のナデである。118は体部上半から口縁部である。体部は外側に開き気味に直線的に伸び口縁部に至る。口縁部はほぼ水平方向に短く伸び端部を丸くおさめる。内面は横方向のナデである。

119・120は高杯である。119は杯部の体部から口縁部である。体部は緩やかな弧を描いて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。内面はハケ目である。その他は不明である。120は脚部である。「ハ」字形に外側に直線的に伸びて脚端部に至る。脚端部は尖り気味におさめる。脚部中位に直径12㎜の円形の透かしがある。調整等は不明である。121・122は底部である。121は尖り気味の丸底である。内面は体部がヘラケズリ，底部がナデである。外面は体部がハケ目で底部はナデである。122は平底である。体部は緩やかに外側に伸びている。内面は体部がヘラケズリで底部付近はナデである。

ＳＢ８（123～132，第45図，図版43）

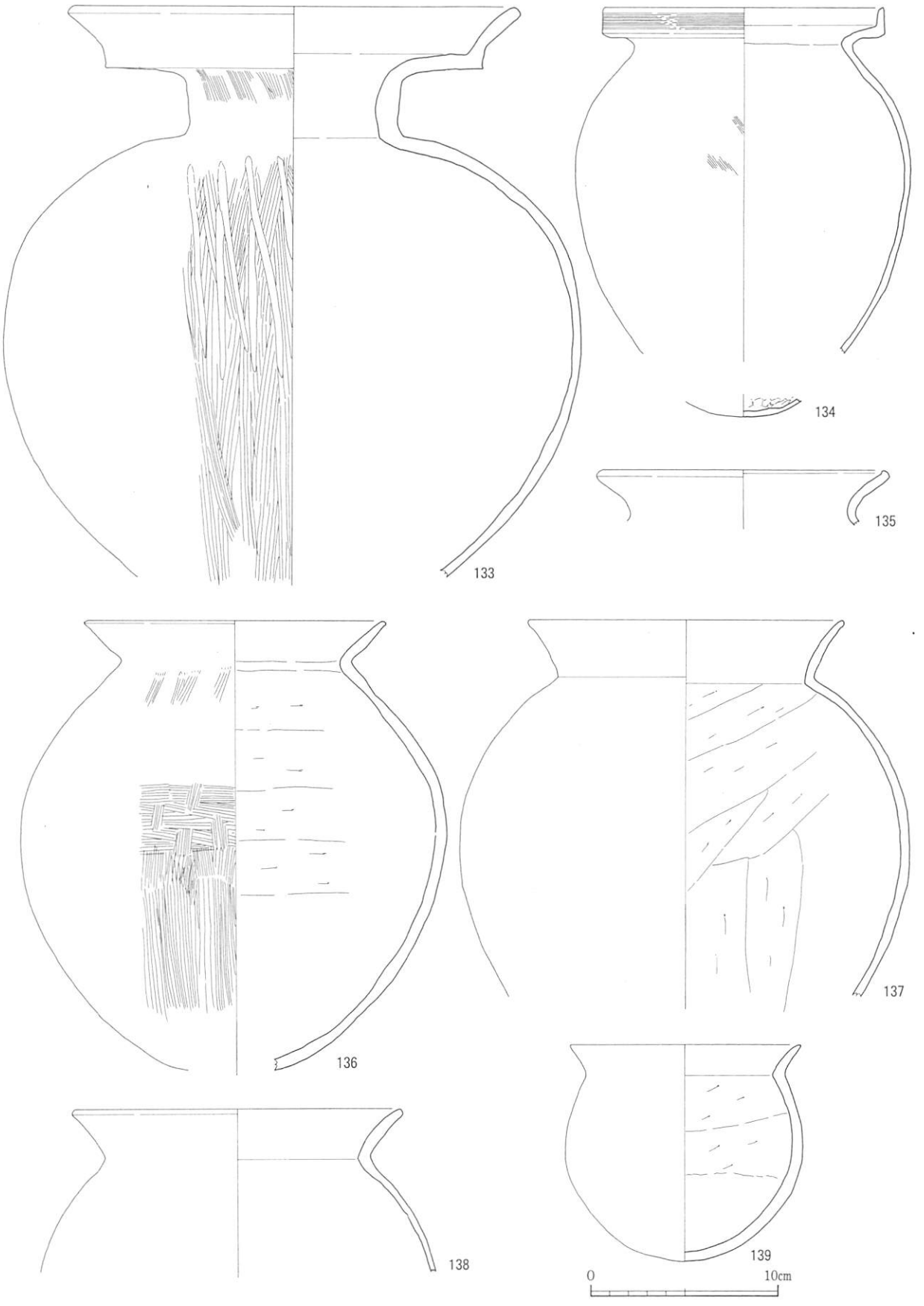
弥生土器・土師器が出土している。

123は壺である。口縁部である。外側に強く開いてほぼ水平方向に直線的に伸び口縁端部に至る。口縁端部は上方に拡張して端面をなす。調整等は不明である。

124～127・130・131は甕である。124は口縁部である。頸部で少しだけ屈曲する。口縁部は外側に開き少しだけ外反気味に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は少し角張り気味におさめる。外面は口縁端部周辺が横方向のナデで，以下はハケ目である。125は胴部上半から口縁部である。頸部で緩く屈曲している。外面は頸部より上が横方向のナデで，以下がハケ目である。内面は頸部の上半がナデで，以下がヘラケズリである。126は胴部上半から口縁部である。頸部付近でほんの少し曲がる。口縁部は少しだけ外側に開き気味に直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面は頸部以下がヘラケズリ後ナデ，胴部外面がハケ目である。127は口縁部である。外側に開き気味に外反し弧を描きながら口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。調整等は不明である。130は口縁部である。頸部で鋭く屈曲して，口縁部は外側に大きく開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のナデである。131は口縁部である。外側に少し開きやや外反気味に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。

128・129は高杯である。いずれも体部の口縁部と思われる。128は外側に大きく開いて直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面にハケ目が少しだけ確認できる。129は外側に開いて直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。

132は底部である。平底もしくは平底気味の丸底になると思われる。胴部は緩やかに内傾しながら立ち上がる。概して器壁は厚い。内面は胴部が横方向のナデで，底部はナデ，外面は胴部が



第46図　出土遺物実測図（7）（1:3）

ハケ目である。

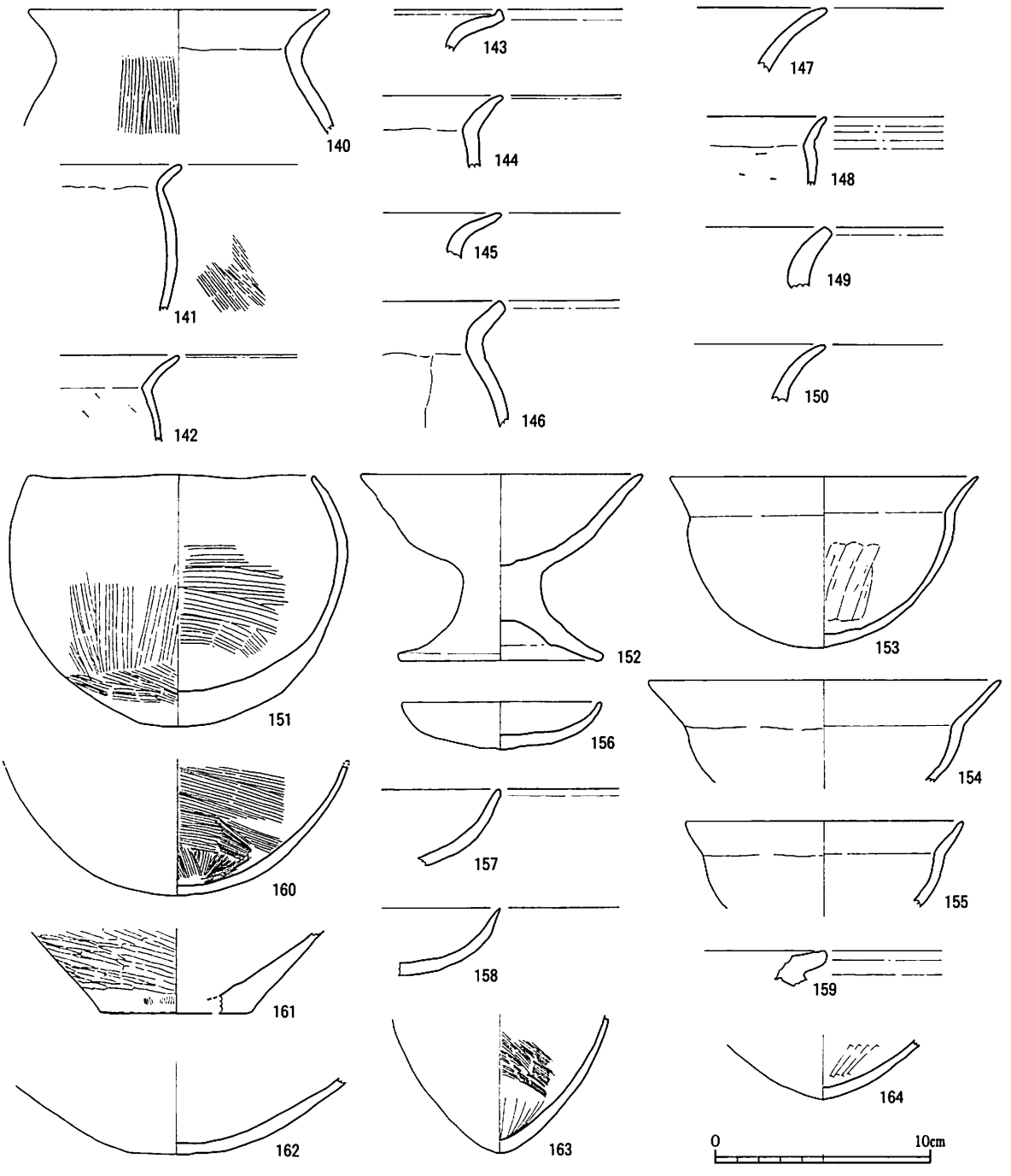
ＳＢ９（133～164，第46，47図，図版43，44）

弥生土器・土師器が出土している。

133は壺である。胴部下半から口縁部である。胴部はほぼ球胴である。頸部はほぼ垂直に立ち上がり少しだけ外反して次の屈曲部に至る。頸部の上側の屈曲はほぼ水平方向に直線的に伸びている。口縁部はこの頸部端から若干外側に開いて外反して口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。いわゆる二重口縁をなす。内面は口縁部が横方向のナデで，頸部以下がヘラケズリ後ナデである。外面は口縁部が横方向のナデで，胴部上半以下がハケ目で暗文風のヘラミガキが縦方向に施されている。

134～150は甕である。134は底部から口縁部である。底部は平底状の丸底である。胴部はやや倒卵形で頸部で強く屈曲する。口縁部は一旦強く外側に伸び，上方向に拡張されほぼ垂直に立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。拡張した口縁部の外面には擬凹線が巡っている。外面は口縁部周辺は横方向のナデ，胴部にハケ目が散見できる。器壁が３㎜程度とかなり薄くできている。135は口縁部である。外側に開いて若干内傾しつつ口縁端部に至る。口縁端部は若干上方に拡張され，やや角張り気味におさめる。調整等は不明である。136は底部付近から口縁部である。底部は平底気味の丸底になるかと思われる。胴部は球胴形である。頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部は外側に逆「ハ」字形に開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は若干角張り気味におさめる。外面は口縁部が横方向のナデで，胴部はハケ目である。内面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下がヘラケズリである。胴部にはススが付着している。137は胴部下半から口縁部である。少し肩が張る胴部で，頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部は若干外側に開いて少し外反気味に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面は口縁部が横方向のナデで，頸部以下はヘラケズリである。138は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部は外側に開いてほぼ直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。調整等は不明である。139は底部から口縁部である。底部は丸底である。胴部はほぼ球形で，頸部が少し屈曲する。口縁部は外側に少し開いて直線的に上方に短く伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面は口縁部が横方向のナデで，頸部以下はヘラケズリである。底部付近はナデである。外面は口縁部が横方向のナデで以下は不明である。140は胴部上半から口縁部である。頸部は「く」字形に屈曲する。口縁部は外側に少し開きやや外反し弧を描いて口縁端部に至る。端部は若干尖り気味に丸くおさめる。胴部外面にハケ目が施されている。141は胴部上半から口縁部である。胴部は若干内湾しつつ頸部に至る。頸部は「く」字形に屈曲する。口縁部は外側に開き短く伸びて口縁端部に至る。端部は丸くおさめる。胴部外面にハケ目が施されている。142は胴部上半から口縁部である。頸部は「く」字形に屈曲する。口縁部は外側に開いて外反しつつ弧を描きながら端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面は口縁部が横方向のナデで，以下ヘラケズリである。外面は横方向のナデである。143は口縁部である。外側に大

きく開いて外反しながら伸びて口縁端部に至る。口縁端部は上方に若干拡張して端面を形成している。調整等は不明である。144は口縁部である。頸部が少し屈曲する。口縁部は外側に直線的に伸びて端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。145は口縁部である。外側に強く開き外反しつつ伸び口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。146は胴部上半から口縁部である。頸部は少し屈曲する。口縁部は外側に開いて直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。外面は横方向のナデである。147は口縁部である。



第47図　出土遺物実測図（8）（1:3）

外側に強く開きやや外反して弧を描きながら口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面は横方向のナデである。148は胴部上半から口縁部である。頸部が僅かに屈曲する。口縁部は少し外側に開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面は横方向のナデで，以下はヘラケズリである。149は口縁部である。少し外側に開いて外反して口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。150は口縁部である。外側に開き外反して弧を描きながら口縁端部に至る。端部は丸くおさめる。調整等は不明である。

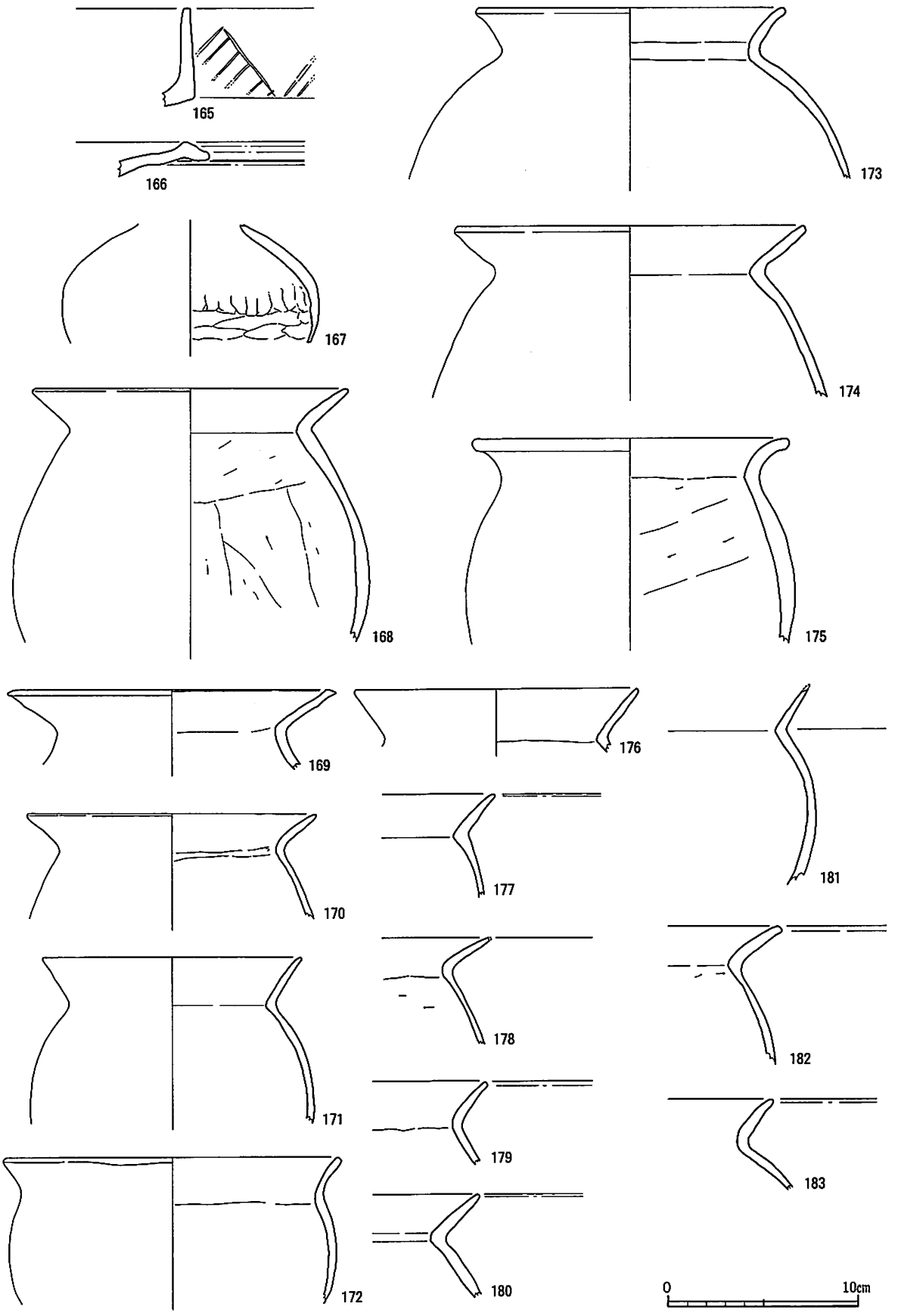
151・156～158・160は椀である。151はほぼ完形品である。底部は平底気味の丸底で，器壁は厚い。体部は緩やかに内側に弧を描きながら口縁端部へ至る。口縁端部は少し尖り気味におさめる。体部は内外面ともにハケ目である。156は底部から口縁部である。丸底である。内側に緩く弧を描きながら口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。157は体部下半から口縁部である。体部は内側に弧を描いて口縁端部に至る。口縁部は丸くおさめる。調整等は不明である。158は底部から口縁部である。底部は丸底と思われる。体部は緩やかに内側に弧を描きつつ，口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。調整等は不明である。160は底部から口縁部である。底部は丸底で，体部は内側に弧を描きながら口縁端部に続くと思われる。内面はハケ目で，底部付近は中心方向に収束するハケ目を施している。

152は高杯である。脚部から口縁部である。脚部は「ハ」字形に外側に開き直線的に伸びて脚端部に至る。端部は丸くおさめる。杯底部はやや丸みを帯びており，体部は外側に大きく開いて直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。脚柱部は分厚い。調整等は不明である。

153～155は鉢である。153は底部から口縁部である。底部は丸底で，体部は外側に少し内傾しながら緩やかな弧を描いて頸部に至る。頸部は僅かに屈曲し，口縁部は少し外側に開いて直線的に上に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。内面は頸部付近がナデ，以下がヘラケズリ後ナデ，底部はナデである。外面は口縁部が横方向のナデで，体部以下はナデである。154は体部上半から口縁部である。頸部で緩く屈曲する。口縁部は外側に開いて直線的に伸びる。調整等は不明である。155は154を一回り小さくしたもので，全体的に外側に開く。体部は頸部で緩く屈曲して，口縁部に続き，口縁部は外側に少し開いて若干内傾しつつ上方に伸び端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。

159は用途不明品である。脚が付く形をしているので，あるいは台形土器の可能性もある。小片のため詳細は不明といわざるを得ない。

161～164は底部である。161は平底である。胴部は逆「ハ」字形に立ち上がる。内面はナデ，外面は胴部がヘラミガキ，底部がナデである。162は133の底部である。少し平底気味の丸底である。調整等は不明である。163は尖り底である。ラグビーボール状の胴部をしている。内面はハケ目である。164も尖り底であるが，163に較べると尖りによる張り出しは弱い。内面は板状工具によるナデである。



第48図　出土遺物実測図（9）（1:3）

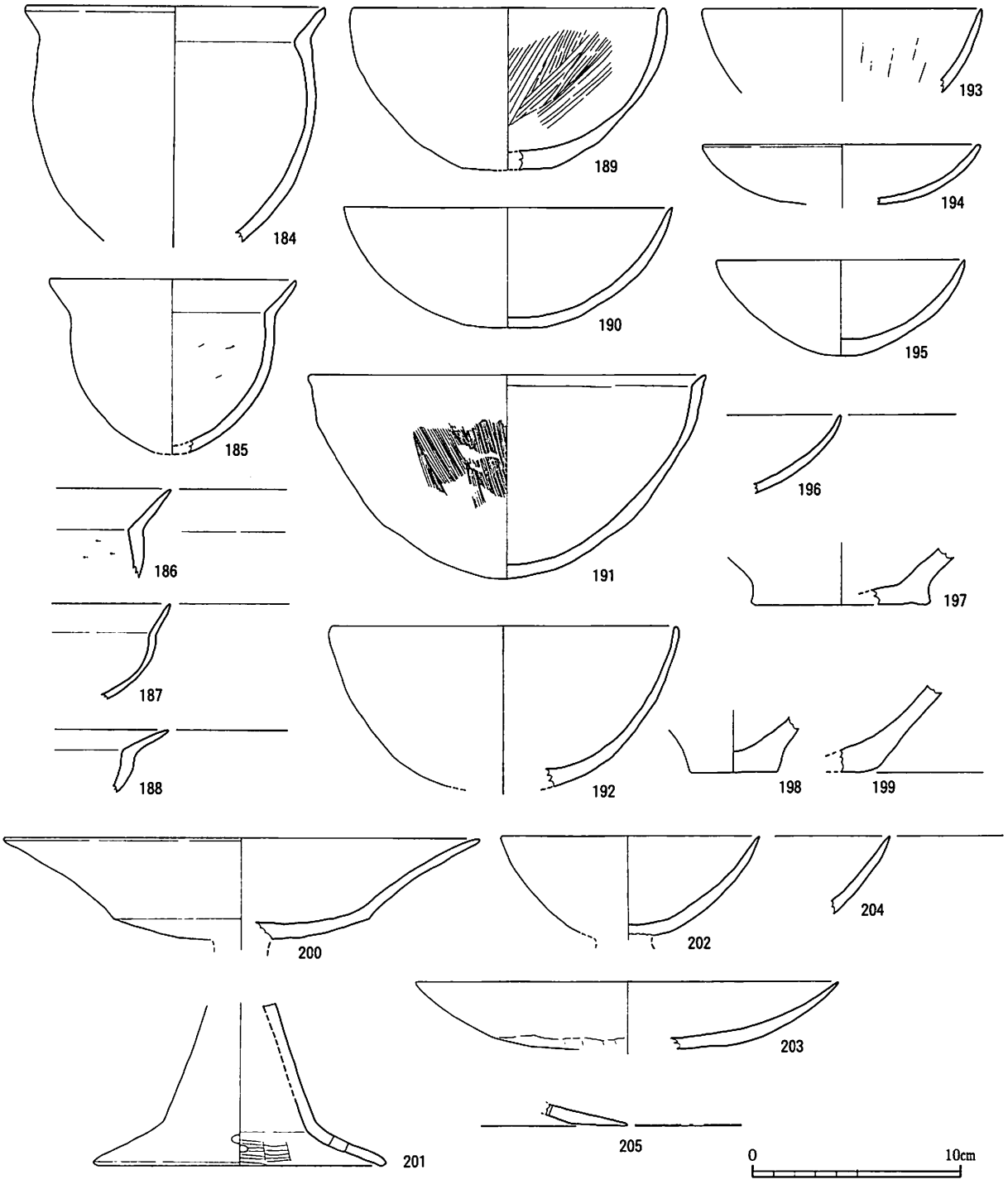
ＳＢ10（165～205，第48，49図，図版44，45）

弥生土器・土師器が出土している

165～167は壺である。165は口縁部である。水平方向に伸びた頸部から垂直に直線的に上方に立ち上がって口縁端部に至る。端部は若干角張り気味におさめる。外面には沈線による鋸歯文が巡る。鋸歯文は斜め方向に平行する複数の沈線と対向するほぼ垂直方向の沈線により構成されている。調整等は不明である。二重口縁壺と思われる。166は口縁部である。水平方向に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は上下方向に拡張されている。拡張された端面に凹線が一条巡っている。調整等は不明である。167は胴部中位から上半である。倒卵形をなす。内面胴部中央にナデや指頭圧痕が確認できる。

168～188は甕である。168は胴部下半から口縁部である。胴部はやや卵形で，頸部は直角に屈曲し，口縁部は外側に開いて直線的に上方に伸び口縁端部に至る。端部は角張り気味におさめる。内面は頸部以下がヘラケズリで，その他は不明である。169は口縁部である。頸部は少し緩く屈曲する。口縁部は大きく外側に開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は外側に若干拡張され端面をなす。口縁部外面は横方向のナデ，内面は頸部以下がナデである。170は胴部上半から口縁部である。頸部はやや鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。171は胴部中位から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部は鈍角気味に屈曲する。口縁部は少し外側に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。172は胴部中位から口縁部である。頸部の屈曲は弱く，口縁部は少し外側に開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部はやや角張り気味におさめる。173は胴部上半から口縁部である。胴部は球形で，頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部は外側に開き若干外反気味に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は少し角張り気味におさめる。調整等は不明である。174は胴部上半から口縁部である。胴部は卵形で，頸部は直角に屈曲している。口縁部は外側に強く開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部はやや角張り気味におさめる。調整等は不明である。175は胴部下半から口縁部である。胴部は内側に少しカーブし，頸部で緩く屈曲する。口縁部は外側に外反気味に開いて口縁端部に至る。口縁端部は外側に少し肥厚し断面がかまぼこ状の端面をなす。頸部内面がヘラケズリである。176は口縁部である。外側に開いて直線的に上方に伸び口縁端部に至る。口縁端部は若干尖り気味におさめる。177は胴部上半から口縁部である。頸部は鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開いて直線的に上方に伸びる。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。178は胴部上半から口縁部である。頸部は直角に屈曲する。口縁部は外側に少し強く開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面頸部以下はヘラケズリである。179は頸部から口縁部である。頸部は緩く屈曲する。口縁部は少し外側に開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部はやや角張り気味におさめる。調整等は不明である。180は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部は外側に開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部はやや角張り気味におさめる。調整等は不明である。181は胴部下半から口縁部である。胴

部は球胴形である。頸部は少し鈍角気味に屈曲する。頸部は外側に少し開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至ると思われる。調整等は不明である。182は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部はやや強く外側に開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。口縁部は横方向のナデ，内面頸部以下はヘラケズリである。口縁部外面にススが付着している。183は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部は外側に開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。端部は丸くおさめる。口縁部



第49図　出土遺物実測図（10）（1:3）

外面は横方向のナデである。また，口縁部外面にはススが付着している。184は胴部下半から口縁部である。胴部は少し底の尖ったボール状で，頸部で僅かに屈曲する。口縁部は外側に開いて短く伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。外面の口縁部から胴部下半付近までススが付着している。調整等は不明である。185は底部から口縁部である。底部は丸底もしくは尖り底と思われる。胴部は砲弾形で，頸部が少し屈曲する。口縁部は外側に強く開いて若干内傾しながら上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。内面頸部以下はヘラケズリである。胴部外面中位にススが付着している。また口縁部内面直下付近に熱を受けた痕跡がある。186は頸部から口縁部である。頸部は緩く屈曲する。口縁部は外側に開いて上方に直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。内面頸部以下はヘラケズリ，外面は口縁部が横方向のナデである。187は胴部下半から口縁部である。胴部は緩く内側に弧を描いて頸部に至る。頸部は少し屈曲し，口縁部はやや外側に開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。188は胴部中位から口縁部である。頸部は鈍角気味に屈曲する。口縁部は強く外側に開いて直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は少し尖り気味におさめる。調整等は不明である。

189～196は椀である。189は底部から口縁部である。底部は平底で，体部は緩やかに内側に弧を描いて上方に伸び口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面は直下がナデ，以下ハケ目である。190は底部から口縁部である。底部は少しだけ平底が残る。体部は緩やかに立ち上がり内側に弧を描いて上方に伸び口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。調整等は不明である。191は底部から口縁部である。底部は丸底で，体部は緩やかに立ち上がり内側に弧を描いて上方に伸び口縁端部に至る。口縁端部は上外方に拡張され，内面に端面を持つ。内面は口縁部が横方向のナデで，底部付近が定方向のナデである。外面は口縁部が横方向のナデ，体部中位がハケ目である。192は体部下半から口縁部である。体部は内側に弧を描きながら上方に伸び口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。193は体部中位から口縁部である。少し外側に開きながら上方に内傾して伸び口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。体部内面は板ナデである。194は底部から口縁部である。体部は緩やかな弧を描いて上方に伸び口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。195は底部から口縁部である。底部は丸底で，体部は緩やかに立ち上がり内側に弧を描いて上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。196は体部下半から口縁部である。体部は内側に弧を描いて上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部はやや尖り気味におさめる。調整等は不明である。

197～199は底部である。197は平底である。内面はナデ，外面は胴部がナデで，底部はナデで部分的にミガキがある。198は平底である。底部外面はナデである。199は丸底ないしは平底に近い丸底になると思われる。調整等は不明である。

200～205は高杯である。200は杯底部から口縁部である。杯底部は水平方向に若干上向きに伸びる。体部は稜をなして外側に強く開いて立ち上がり外傾する弧を描いて上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。201は200の同一個体と思われる脚柱部

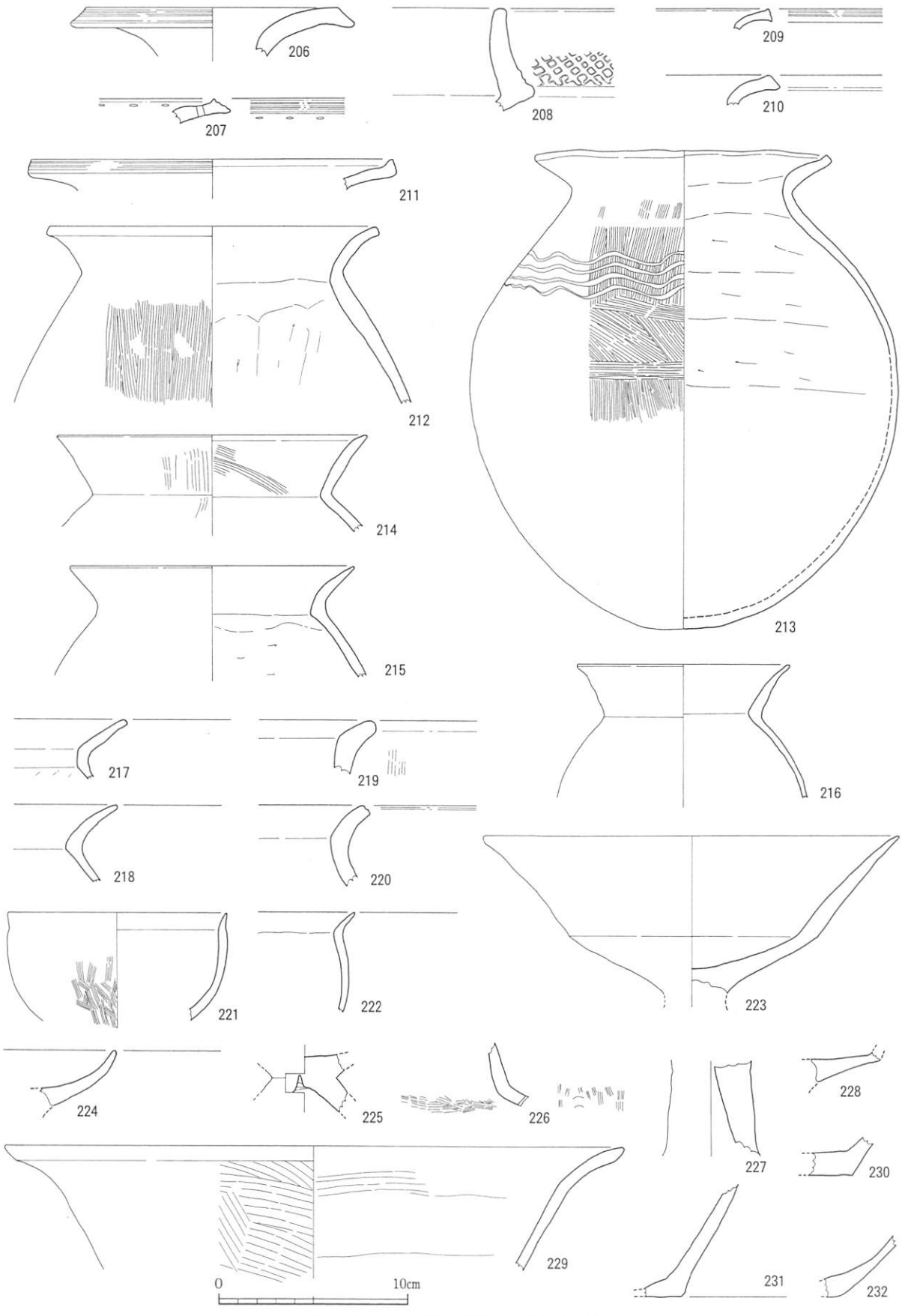
である。脚柱部は「ハ」字形に外側に少し開いて脚部に至る。脚柱部と脚裾部の境は鈍角気味に屈曲し脚部は外側に強く開いて直線的に下方に伸び脚端部に至る。脚端部は少し角張り気味におさめる。脚部中位には直径８㎜の円形の透かしがある。脚部の内面調整はハケ目である。脚柱部内面には絞り痕が確認できる。202は杯底部から口縁部である。体部は内側に緩やかな弧を描いて外上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部はやや尖り気味におさめる。調整等は不明である。203は杯底部から口縁部である。体部は緩やかに外上方に弧を描いて立ち上がり短く伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。杯部の器高は低い。外面体部がナデ，杯底部付近はケズリである。204は体部下半から口縁部である。外側に若干内傾しつつ上に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。調整等は不明である。205は脚部である。外側に大きく開き，ほぼ水平方向に伸びて脚端部に至る。脚端部は尖り気味におさめる。円形の透かしがある。内面はハケ目である。

ＳＢ11（206～232，第50図，図版45，46）

弥生土器・土師器が出土している。

206～208・211は壺である。206は口縁部である。口縁部はラッパ上に外側に大きく開き，口縁端部を外下方に拡張する。拡張された端面には凹線を三条巡らせている。調整等は不明である。頸部は長頸であろう。207は口縁部である。外側水平方向に大きく開いて，上と外下方に拡張された口縁端部へと続く。口縁端部には凹線が三条巡っている。また口縁端部の直下付近に直径４㎜の小孔が内面から外面に向けて焼成前に穿たれている。調整等については不明である。208は二重口縁壺の口縁部である。口縁部は少し内側へやや外傾しつつ伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。擬口縁部付近には交差するように沈線が巡らされており格子目状の浮文を作出している。調整等は不明である。211は口縁部である。逆「ハ」字形に強く外側に開いて直線的に伸び口縁端部に至る。口縁端部は上方に拡張されており，擬凹線が巡っている。口縁端部は内面直下が僅かにくぼむ。内面は口縁端部付近が横方向のナデ，以下ナデ，外面はナデである。

209・210・212～220・222は甕である。209は口縁部である。外側に大きく開き水平方向に伸びて，口縁端部に至る。口縁端部は上下に拡張され拡張部には二条の凹線が施されている。内外面ともに横方向のナデである。210は口縁部である。外側に大きく開きほぼ水平方向に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は内上方に拡張され，尖り気味におさめられている。内外面ともにナデである。212は胴部中位から口縁部である。頸部で鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開いて外反気味に弧を描きながら上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。内面は頸部以下がナデおよびヘラケズリ，外面は胴部がハケ目である。口縁部外面上半と胴部頸部より下にススが付着する。213は底部から口縁部である。底部は平底部分が若干残っている。胴部は球胴形で，頸部は直角に屈曲し，口縁部は外側に大きく開き，直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は内側に少し拡張する。口縁部は若干歪みがある。胴部上位に波状文が巡る。内面は口縁部から頸部が横方向のナデ，以下がヘラケズリである。外面は口縁部から頸部が横方



第50図　出土遺物実測図（11）（1:3）

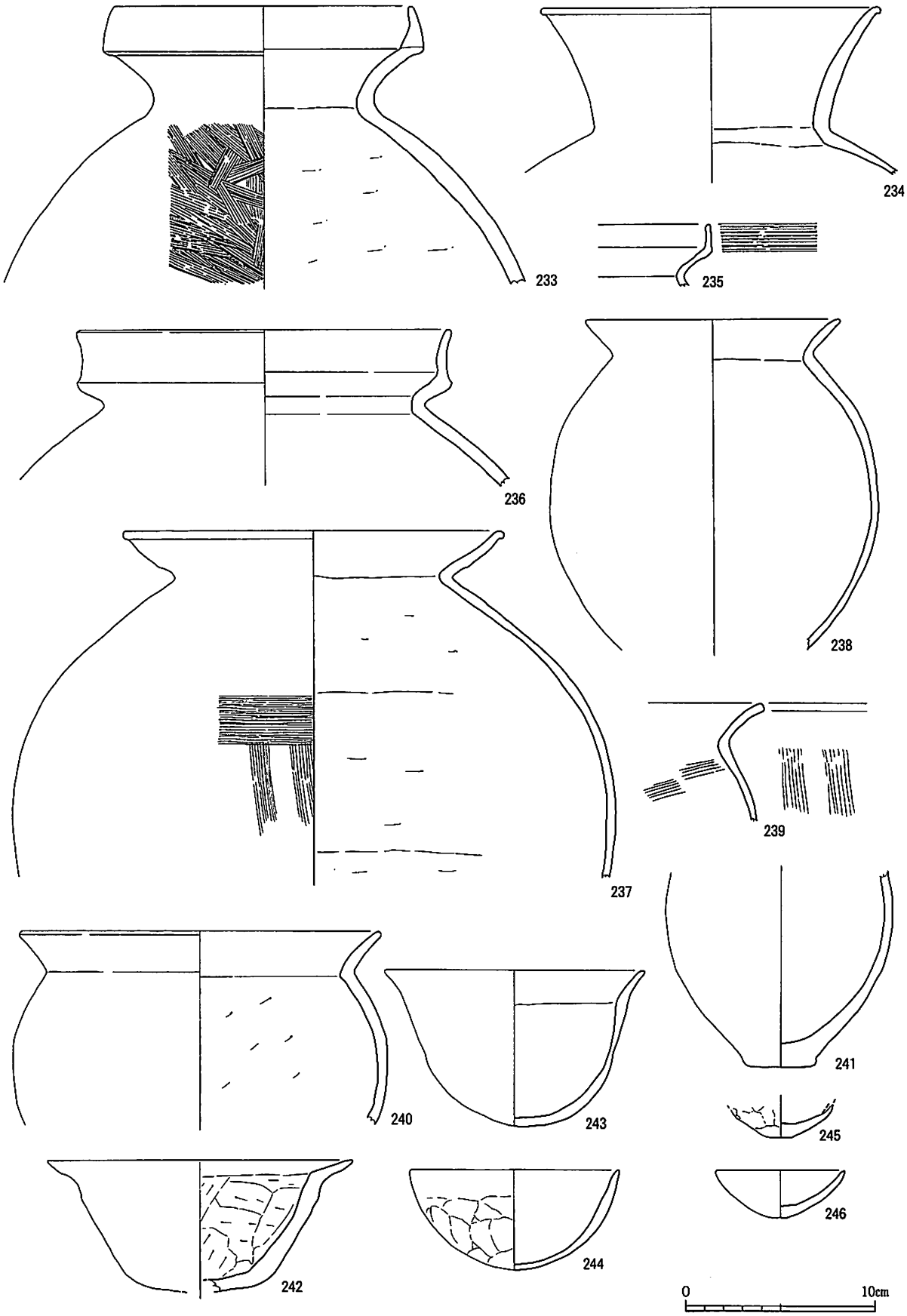
向のナデ，胴部上半はハケ目である。胴部上半から下半にかけてススが付着している。214は頸部から口縁部である。頸部は「く」字形に屈曲する。口縁部は外側に開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。内面は口縁部はハケ目，外面はハケ目である。215は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部は外側に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。頸部内面はヘラケズリである。216は胴部上半から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部は少し鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開き，若干外反して口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。217は口縁部である。頸部は直角気味に屈曲する。口縁部はわりと強く外側に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。端部は丸くおさめる。内面頸部はヘラケズリで，それ以外は横方向のナデである。頸部外面にススが付着している。218は口縁部である。頸部は「く」字形に屈曲する。口縁部は外反しながら外側に強く開いて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。頸部内面がヘラケズリである。219は口縁部である。頸部が僅かに屈曲してそのまま短い口縁部となる。口縁端部は丸くおさめる。外面頸部以下がハケ目である。220は頸部から口縁部である。頸部は緩く屈曲する。口縁部は少し外反して上方に短く伸びて口縁端部へ至る。端部は端面をなし，中央に凹線が一条巡る。内面は口縁部が横方向のナデ，以下がヘラケズリ後ナデ，外面は横方向のナデである。222は胴部中位から口縁部である。胴部はやや内傾しつつほぼ垂直に立ち上がる。頸部で緩く屈曲し，口縁部は短く外上方に伸びて口縁端部に至る。端部はやや尖り気味におさめる。

221は椀である。体部下半から口縁部である。体部はボール状に緩やかに上方に立ち上がって口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。内面はナデ，外面は胴部がハケ目である。

223～228は高杯である。223は杯底部から口縁部である。底部は逆「ハ」字形に緩く外側に伸びて体部に移る。体部は少し内側に屈曲してほぼ直線的に外上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。224は体部から口縁部である。体部は緩やかに内側に弧を描いて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。225は杯底部から脚柱部である。脚柱部の中央付近には径４㎜・深さ６㎜の小孔が穿たれている。調整等は不明である。226は脚柱部から脚裾部である。脚部はラッパ状に外側に広がって下方に伸びる。脚部に円形の透かしがある。内面は脚柱部がナデ，脚部はハケ目，外面は脚柱部が横方向のナデ，脚部がハケ目である。227は脚柱部である。少し裾が広がっているがほぼ垂直な棒状を呈する。器壁は厚い。調整等は不明である。228は杯底部である。水平方向に直線的に伸び，先端あたりで体部に移行すると思われる。内外面ともにヘラミガキである。

229は鍋である。体部下半から口縁部である。体部は外側に開き気味にほぼ直線的に上方に伸び口縁端部付近で外反する。口縁端部は端面をなす。内面は口縁部付近がナデで，体部は板ナデである。外面はハケ目である。

230～232は底部である。230は平底である。底部外面はナデである。231は平底である。胴部は少し垂直気味に立ち上がっている。調整等は不明である。232は丸底と思われる。外面底部付近はナデである。胴部と底部の器壁の厚さの違いが顕著である。



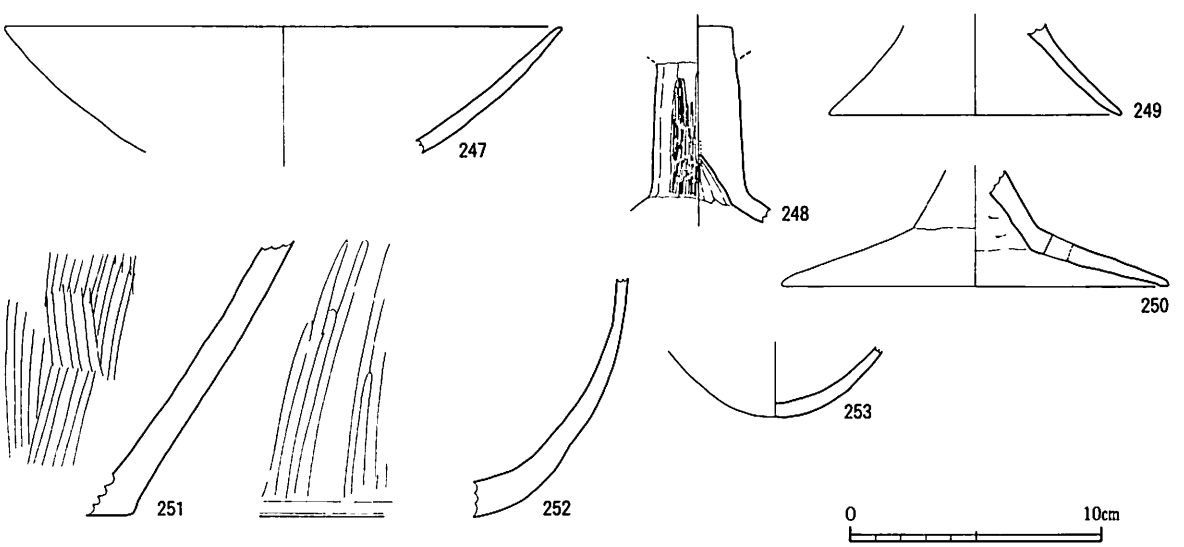
第51図　出土遺物実測図（12）（1:3）

ＳＢ12（233～253，第51，52図，図版46，47）

弥生土器・土師器が出土している。

233・234・236は壺である。233は胴部上半から口縁端部である。胴部は球胴形で，頸部で屈曲する。頸部は外側に開き気味に外反しながら弧を描きつつ擬口縁部に至る。擬口縁部は外側に拡張され上面が平坦な端面となっている。口縁部はこの擬口縁部から直立気味に若干内湾しつつ立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面は口縁部が横方向のナデ，胴部はヘラケズリ後ナデ，外面は口縁部から頸部までは横方向のナデで，頸部以下はハケ目である。234は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲し，口縁部は外側に少し開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は外側に拡張して丸くおさめる。口縁部は内外面ともに横方向のナデで，頸部内面はヘラケズリである。236は胴部上半から口縁部である。胴部はやや肩が張っており，頸部で「く」字形に短く屈曲する。口縁部はほぼ垂直方向にやや外反しつつ伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。

235・237～240は甕である。235は頸部から口縁部である。頸部は直角に屈曲し，口縁部はほぼ直角に直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。外面には多条化した擬凹線が巡っている。調整等は不明である。237は胴部中位から口縁端部である。胴部は倒卵形で，頸部は「く」字形に鋭角気味に屈曲する。口縁部は外側に強く開きやや内傾しつつ上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は外側に若干肥厚して丸くおさめられている。内面は頸部以下がヘラケズリ後ナデ，外面は口縁部が横方向のナデ，胴部上半がナデ，胴部中位がハケ目である。238は胴部下半から口縁部である。胴部は楕円球で頸部は直角方向に屈曲する。口縁部は外側に開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。239は胴部上半から口縁部である。頸部は鈍角気味に屈曲しており，口縁部は外側に開き少し外反しつつ上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部はやや角張り気味におさめる。内面は頸部以下がハケ目，外面も頸部以下がハケ目である。240は胴部下半から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部で「く」字形に屈曲する。口縁部は外側に少し開きほぼ直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部はやや角張り気味にお



第52図　出土遺物実測図（13）（1:3）

さめる。口縁部は内外面ともに横方向のナデ，内面頸部以下はヘラケズリである。

241は鉢である。底部から胴部上半である。底部は平底である。ボタン状にほんの僅か盛り上がる。胴部は砲弾形である。調整等は不明である。

242～244・246・247は椀である。242は底部から口縁部である。底部は平底気味の丸底である。体部は外側に少し開き気味にまっすぐ立ち上がって頸部に至る。頸部は少し屈曲し，口縁部は外側に強く開き短く伸びて口縁端部に至る。口縁端部は少し尖り気味におさめる。内面は口縁部がナデ，頸部以下はヘラケズリである。高杯脚部の可能性もある。243は底部から口縁部である。底部は丸底である。体部は砲弾形で，少し開き気味に立ち上がりほぼ直線的に上方に伸びて，頸部で僅かに屈曲し口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。244は底部から口縁部である。底部は丸底で，体部は緩やかに弧を描いて外上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。246は底部から口縁部である。底部は尖り気味の丸底である。体部は緩やかに外上方に弧を描き口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。底部の可能性もある。247は体部下半から口縁部である。体部は逆「ハ」字形に外上方に直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面は口縁部が横方向のナデで，以下がナデである。

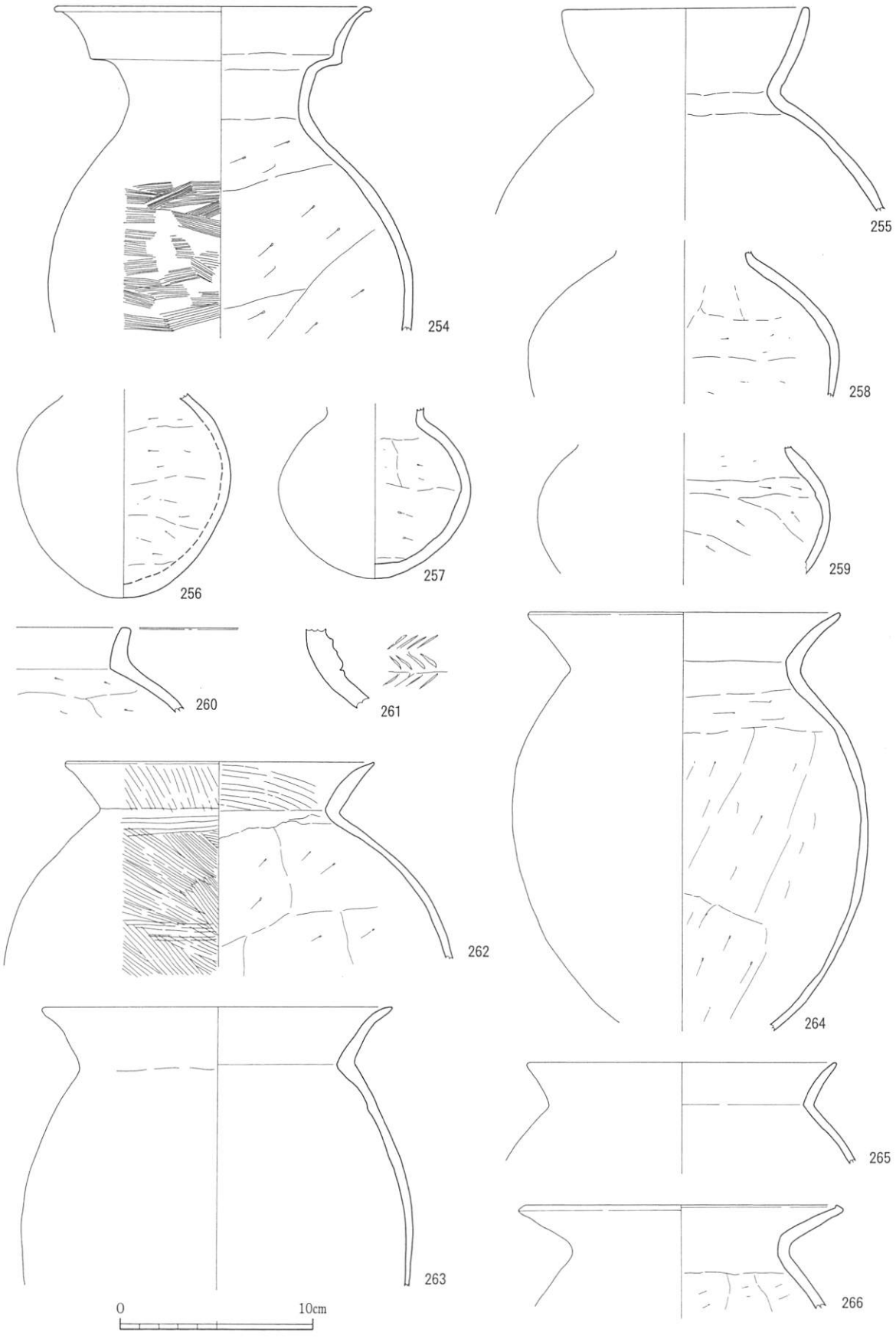
245・248～250は高杯である。245は杯底部である。小さな丸底である。脚部接合面がわりと残っている。調整等は不明である。248は脚柱部である。脚柱部はほぼ垂直に下方に伸びて脚部に至る。脚部は部境で屈曲し，外側に大きく開いて下方に伸びると思われる。脚部内面に絞り痕，外面はハケ目である。249は脚部である。「ハ」字形に外側下方に直線的に伸びて脚端部に至る。脚端部は丸くおさめる。調整等は不明である。250は脚柱部下半から脚部である。脚柱部は「ハ」字形に外側に開いて下方に伸びる。脚部は脚柱部との境で屈曲し，外側に大きく開いて直線的に下方に伸びて脚端部に至る。脚端部は丸くおさめる。脚部に透かし（円形か）がある。脚柱部内面はヘラケズリである。

251～253は底部である。251は底部から胴部下半である。底部は平底で，体部は外側に少し開いて直線的に上方に伸びている。内面はハケ目，外面は体部がミガキ，底部周辺がナデである。252は底部から胴部下半である。丸底である。底部か器壁が厚い。体部は外側に内湾しつつ弧を描きながら上方に伸びている。調整等は不明である。253は丸底である。立ち上がりは若干ゆるめである。調整等は不明である。

ＳＢ13（254～337，第53～58図，図版47～51）

弥生土器・土師器が出土している。

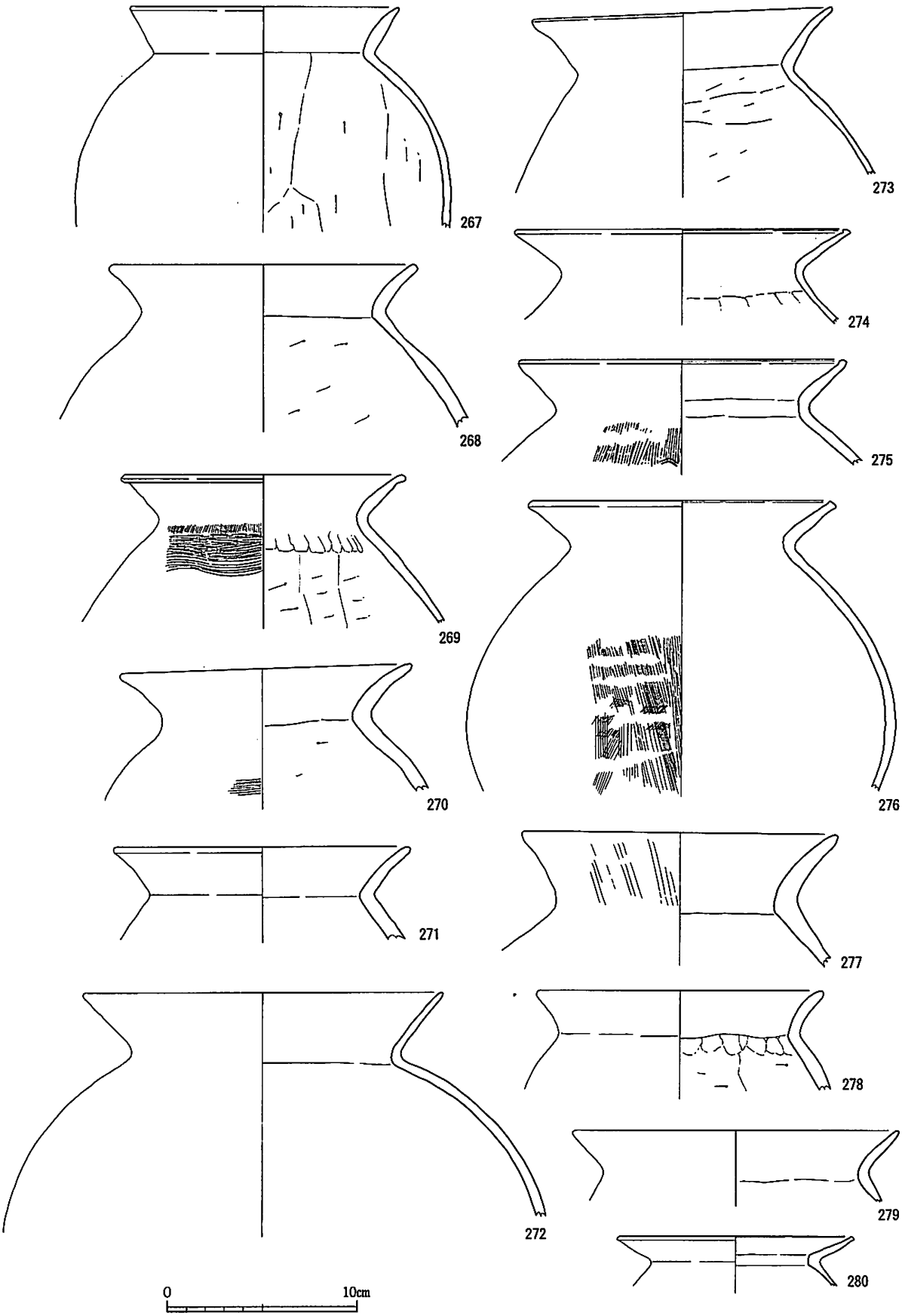
254～261は壺である。254は胴部中位から口縁部である。胴部は楕円球形で，頸部は緩やかに屈曲して擬口縁部に至る。擬口縁部は外側に拡張され，口縁部は外側に少し開き外反気味に弧を描いて口縁端部に至る。口縁端部は外側に少し拡張し，端部を丸くおさめる。胴部内面はヘラケズリ，外面は口縁部が横方向のナデ，胴部上半以下はハケ目である。255は胴部上半から口縁部



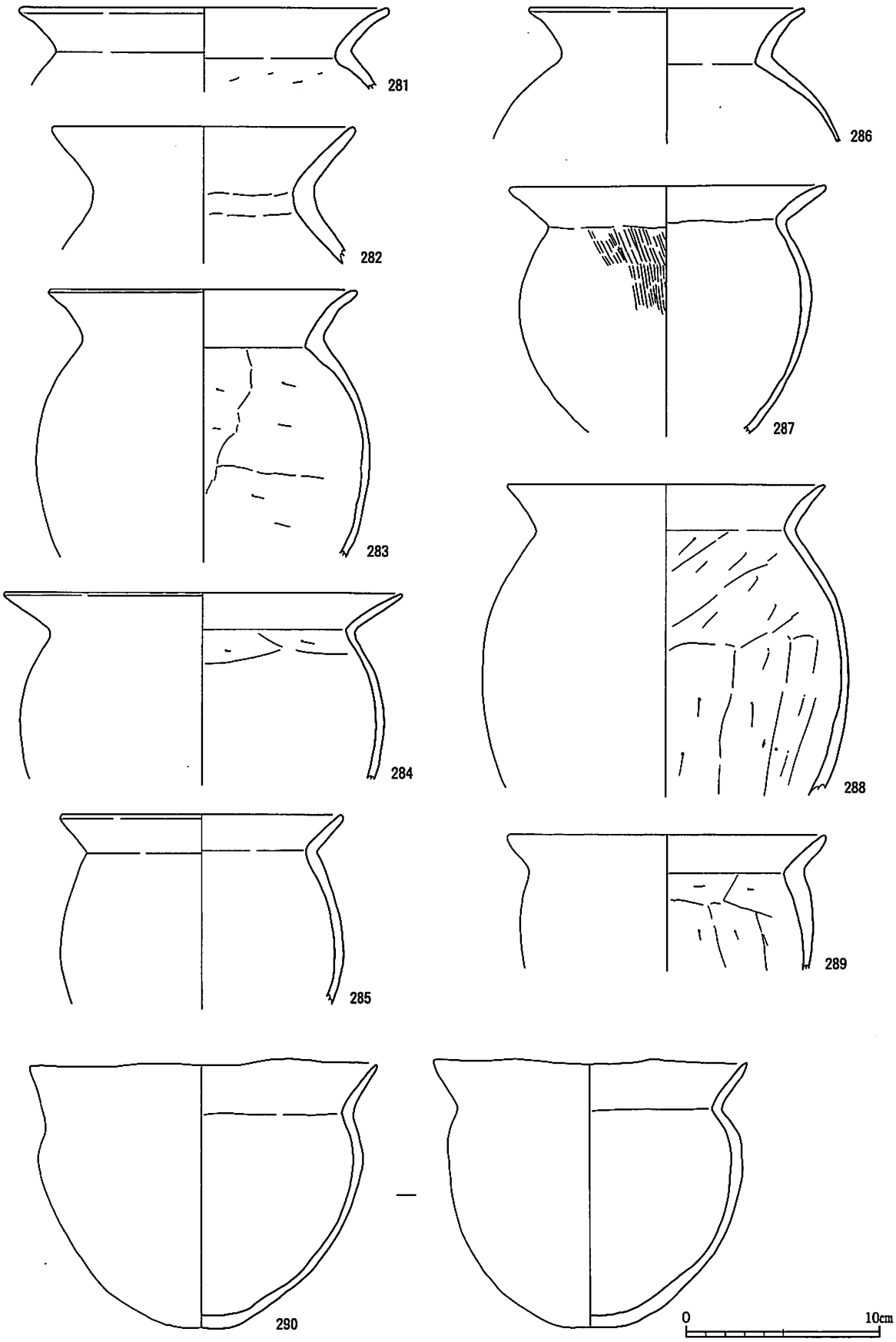
第53図　出土遺物実測図（14）（1:3）

である。胴部は球胴形で，頸部でほぼ直角に屈曲する。口縁部はやや外側に開いて内傾気味に上方に弧を描いて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。胴部内面はヘラケズリである。256は底部から胴部上半である。底部は丸底で，胴部は楕円球形である。最大胴部が中央部からやや上位にある。内面はヘラケズリで，底部はナデである。小型の壺になると思われる。257は底部から頸部である。底部は丸底で，胴部は球胴形をなす。頸部は鈍角気味に屈曲して，口縁部は上方に伸びると思われる。内面頸部はナデで，胴部はヘラケズリ後ナデ，底部はナデである。258は胴部中位から頸部である。胴部は倒卵形をなし，肩が少し張る。頸部は緩く屈曲して，口縁部に至る。内面は胴部上半がナデ，以下がヘラケズリである。259は胴部中位から頸部である。球胴形の胴部で，頸部で僅かに屈曲する。内面頸部付近はヘラケズリ後ナデ，以下はヘラケズリである。無頸壺の可能性が高い。260は胴部上半から口縁部である。頸部が鈍角気味に屈曲する。口縁部はほぼ垂直に短く立ち上がって口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。胴部内面はヘラケズリである。261は頸部である。外面に台形状の幅広凸帯を巡らせ，凸帯とその周囲に綾杉状の押し引き文が施されている。

262～322は甕である。262は胴部中位から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部は直角に屈曲する。口縁部は外側に開いて直線的に上方に伸び口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。口縁部は内外面ともハケ目，胴部は頸部直下がナデで，以下はヘラケズリである。263は胴部下半から口縁部である。胴部は寸胴形で，頸部は鈍角気味に屈曲する。口縁部は少し外側に開き気味に直線的に上方に伸び，口縁端部直下でさらに外反する。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。264は胴部下半から口縁部である。胴部は肩の張らない倒卵形である。頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部は外側に開いて上方に緩く外反する弧を描いて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面頸部はナデで，以下はヘラケズリである。265は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲し，口縁部は外側に開いてほぼ直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面頸部以下はヘラケズリである。266は胴部上半から口縁部である。頸部は鋭角気味に屈曲し，口縁部は外側に大きく開いて上方に直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は上方に少しだけ拡張し，端面をなす。口縁部内面はナデ，頸部以下はヘラケズリである。267は胴部中位から口縁部である。胴部は球胴形で，はやや鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開いて上方に直線的に伸び口縁端部に至る。口縁端部は少し尖り気味に丸くおさめる。内面頸部以下はヘラケズリである。268は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部は外側に開いて上方に緩く外反して口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。口縁部は横方向のナデで，頸部内面はヘラケズリである。269は胴部上半から口縁部である。胴部は楕円球形で，頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部は外側に開いて上方に直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は外側に僅かに肥厚し，丸くおさめる。内面は口縁部が横方向のナデ，頸部周辺はナデ，以下はヘラケズリである。外面は頸部周辺が横方向のナデ，以下はハケ目である。口縁端部は黒変している。270は胴部上半から口縁部である。頸部は直角に屈曲し，口縁部は大きく開いて若干外反して口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面頸部以下はヘラケズリ



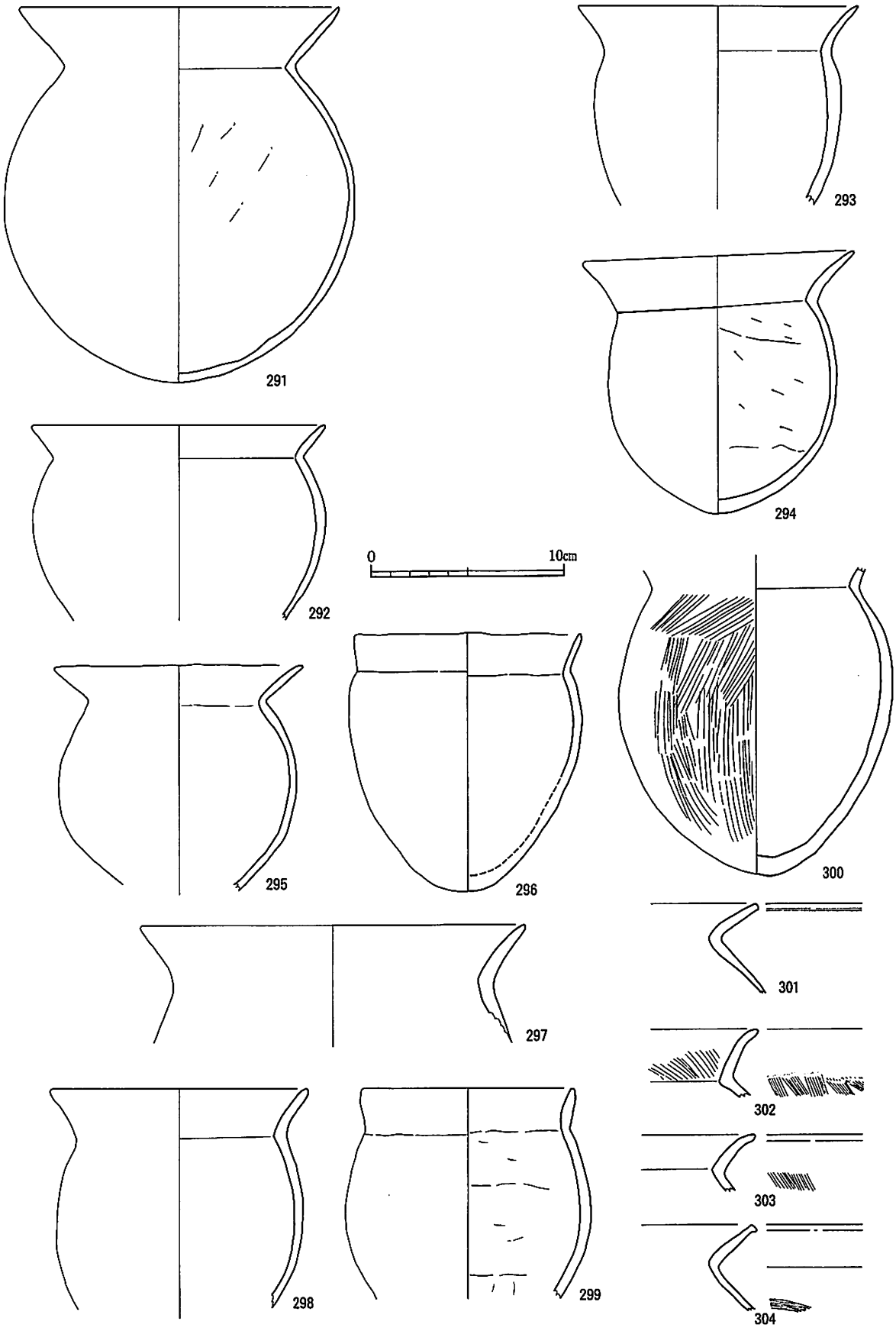
第54図　出土遺物実測図（15）（1:3）



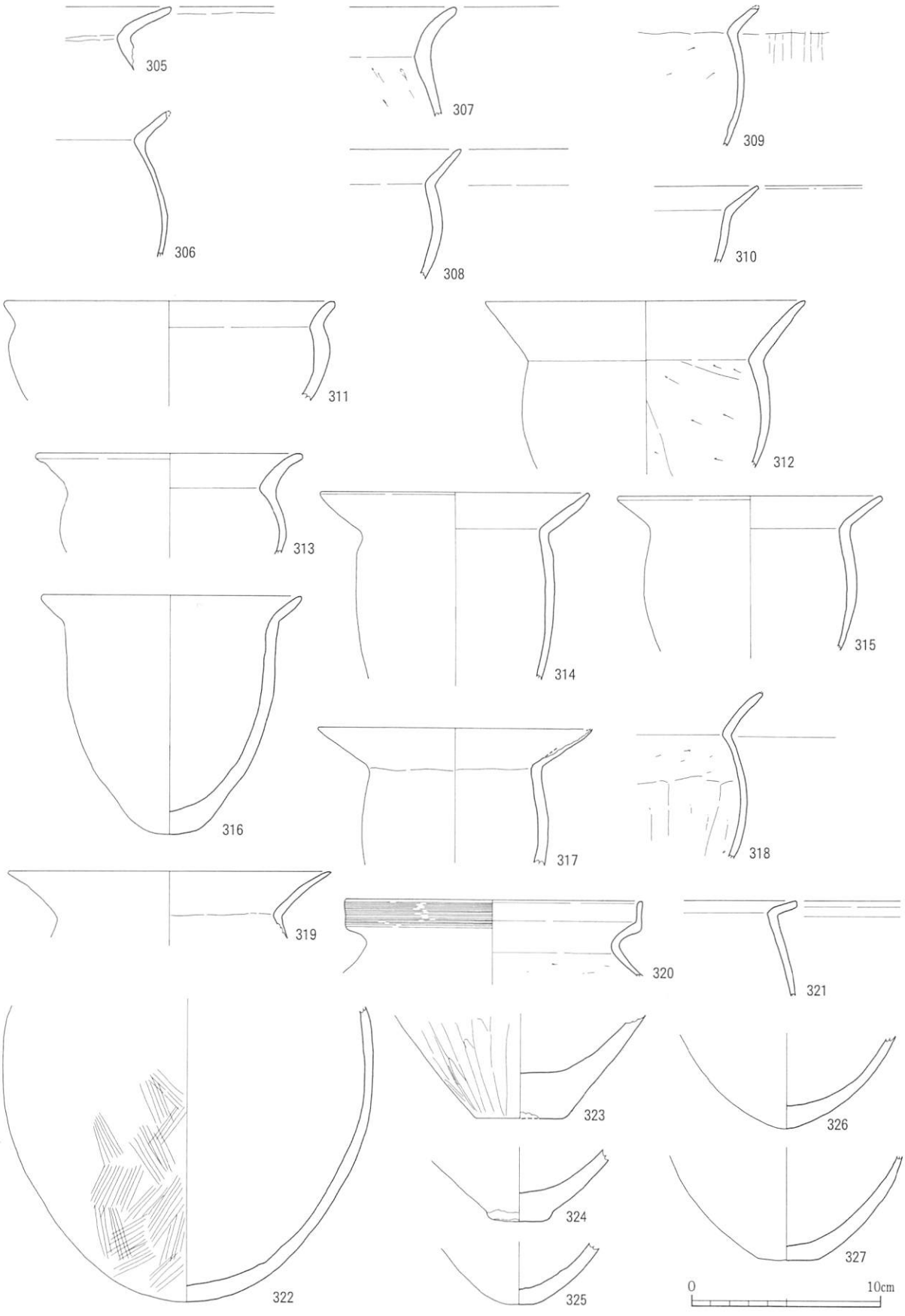
第55図　出土遺物実測図（16）（1:3）

である。胴部外面はハケ目である。271は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲し，口縁部は外側に少し強く開き若干外反して口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。272は胴部中位から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部はやや鋭角気味に屈曲する。口縁部は外側に開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。273は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲し，口縁部は外側に開き若干外反しつつ口縁端部に至る。口縁端部は少し角張り気味におさめる。内面頸部以下はヘラケズリである。274は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部は少し強く外側に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は若干上内方に肥厚させ，やや角張り気味におさめる。端部と内面の境目に凹線が一条巡っている。口縁部内面は及び口縁部外面上半は横方向のナデである。275は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲し，口縁部は外側に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は若干上内方に肥厚させ，丸くおさめる。端部と内面の境目に凹線が一条巡っている。胴部内面はヘラケズリ後ナデ，口縁部はヨコナデ，胴部上半からハケ目である。276は胴部下半から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部はほぼ直角に屈曲し，口縁部は外側にやや強く開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は上方に若干拡張し端面をなす。胴部外面はハケ目である。また，外面は口縁端部直下からススが付着している。277は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲し，口縁部は外側に開き上方に外反して口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。器壁がやや厚い。口縁部外面はハケ目である。278は胴部上半から口縁部である。頸部はやや鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開きやや外反しつつ口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。頸部内面はナデ，以下はヘラケズリである。279は頸部から口縁部である。頸部は鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部はやや角張り気味におさめる。口縁部内面が横方向のナデである。280は胴部上半から口縁部である。頸部は「く」字形に鋭く屈曲する。口縁部は外側に強く開き若干内反しつつ上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。内面頸部以下はヘラケズリである。器壁は薄い。281は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲し，口縁部は外側に開き外反気味に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。内面頸部以下はヘラケズリである。282は胴部上半から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部は外側に逆「ハ」字形に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。282は胴部下半から口縁部である。胴部は倒卵形で，頸部はやや鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開き直線的に上方に伸び口縁部中位で外反して口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。頸部内面はヘラケズリである。284は胴部中位から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部は直角に屈曲する。口縁部は外側に強く開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は少し角張り気味におさめる。頸部内面はヘラケズリである。285は胴部下半から口縁部である。胴部は寸胴気味で，頸部は鈍角気味に緩く屈曲する。口縁部は外側に開き上方に直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部はやや角張り気味におさめる。調整等は不明である。286は胴部上半から口縁部である。球胴形の胴部

で，頸部は直角に屈曲する。口縁部は外側に開き，外反気味に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部はやや角張り気味におさめる。調整等は不明である。287は胴部下半から口縁部である。胴部は砲弾形で，最大胴部が中位より少し上にくる。頸部は直角に屈曲し，口縁部は外側に強く開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。口縁部は肥厚気味である。胴部外面はハケ目である。288は胴部下半から口縁部である。胴部は寸胴気味で，頸部は鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面は頸部以下がヘラケズリ，外面は胴部上半がハケ目である。また，外面の口縁直下および胴部中位から下位にかけてススが付着している。289は胴部中位から口縁部である。頸部は緩く屈曲する。口縁部は外側に開き短く上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は少し尖り気味におさめる。内面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下はヘラケズリである。290は完形品である。楕円形を呈する。底部は平底に近い丸底である。胴部は砲弾形ないしはボール状である。頸部は鈍角気味に緩く屈曲する。口縁部は外側に開き直線的に上に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。調整等は不明である。291は底部から口縁部である。底部は丸底で，胴部は球胴形をしており，頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部は外側に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は若干尖り気味におさめる。胴部内面はヘラケズリである。292は胴部下半から口縁部である。胴部は楕円球形で，頸部は若干鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開いて直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。293は胴部下半から口縁部である。胴部はやや倒卵形で，頸部は緩く屈曲する。口縁部は外側に開き外反しつつ口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。294は底部から口縁部である。底部は丸底である。胴部は砲弾形で，頸部は若干鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側にやや強めに開き，外反しつつ口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下胴部下位まではヘラケズリ，底部はナデである。295は胴部下半から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部は直角に屈曲する。口縁部は外側に強く開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。296は底部から口縁部である。底部は平底に近い丸底で，胴部は砲弾形である。頸部は僅かに屈曲し，口縁部は外側に少し開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面は口縁部が横方向のナデで，頸部以下は粗いナデである。297は頸部から口縁部である。頸部は緩く屈曲して，口縁部は外側に開きやや外反して口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。298は胴部下半から口縁部である。胴部は寸胴気味で，頸部は少しだけ屈曲する。口縁部は少し外側に開きほぼ直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。299は胴部下半から口縁部である。胴部は寸胴気味で，頸部は僅かに屈曲する。口縁部は若干外側に開き気味に上方に短く直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面はナデ，頸部以下はヘラケズリである。300は底部から頸部である。底部は尖り気味の丸底である。胴部は砲弾形で，頸部が鈍角気味に緩く屈曲する。胴部外面はハケ目である。301は胴部上半から口縁部である。頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は強く外に開き直線的に上



第56図　出土遺物実測図（17）（1:3）

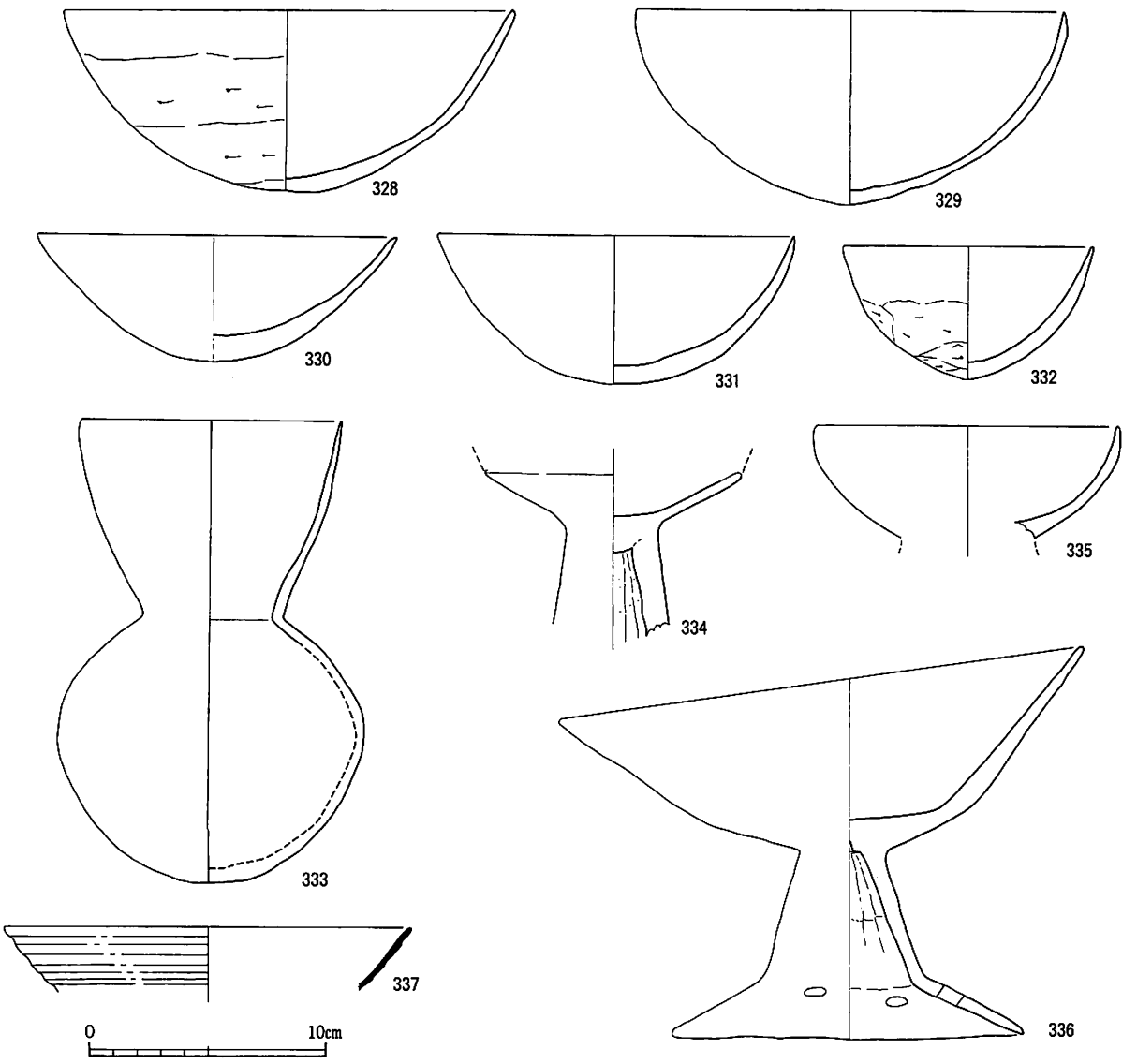


第57図　出土遺物実測図（18）（1:3）

方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。調整等は不明である。302は頸部から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲し，口縁部はやや外側に開き上方に直線的に伸び端部付近で僅かに外反する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面はハケ目，頸部はヘラケズリ，外面は口縁部がヨコナデで，頸部はハケ目である。303は口縁部である。頸部はやや鈍角気味に屈曲し，口縁部は外側に開き直線的に上方に伸び端部付近で僅かに外反する。端部やや角張り気味におさめる。口縁部は横方向のナデ，以下外面はハケ目，内面はヘラケズリである。304は胴部上半から口縁部である。頸部は直角に屈曲し，口縁部は外側にやや強めに開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は外側に若干肥厚し，角張り気味におさめる。胴部外面はハケ目である。305は頸部から口縁部である。口縁部は強く外側に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。調整等は不明である。306は胴部下半から口縁部である。胴部は寸胴気味で，頸部はやや鈍角気味である。口縁部は外側に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至ると思われる。調整等は不明である。307は胴部上半から口縁部である。頸部で僅かに屈曲する。口縁部は少し外側に開き外反気味に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。頸部内面はヘラケズリである。308は胴部下半から口縁部である。胴部は砲弾形で，頸部で鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。309は胴部下半から口縁部である。胴部はボール形で，頸部は少し屈曲する。口縁部は外側に開きややや外反気味に伸びて口縁端部に至ると思われる。内面胴部はヘラケズリ，外面胴部上半はハケ目である。310は胴部上半から口縁部である。頸部でやや屈曲し，口縁部は外側にやや強めに開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部はやや角張り気味におさめる。口縁部は横方向のナデ，内面頸部以下はヘラケズリ，外面はハケ目後横方向のナデである。311は胴部中位から口縁部である。胴部はボール形で，最大胴部がかなり上位にある。頸部は少し屈曲し，口縁部は少し外側に開き直線的に上方に短く伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。312は胴部下半から口縁部である。胴部は砲弾形で，頸部は鈍角に屈曲する。口縁部は外側に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面頸部以下はヘラケズリである。313は胴部中位から口縁部である。胴部はボール形で，頸部は緩く屈曲する。口縁部は外側に開き外反気味に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面頸部以下はヘラケズリである。口縁部は肥厚している。314は胴部下半から口縁部である。胴部は寸胴気味で，頸部で緩く屈曲する。口縁部は強く外側に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。調整等は不明である。315は胴部下半から口縁部である。胴部は寸胴気味で，頸部は少し屈曲する。口縁部は外側に強く開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。調整等は不明である。316は底部から口縁部である。底部はやや尖り気味の丸底で，胴部は砲弾形である。頸部は少し屈曲し，口縁部は外側に開き短く直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面頸部以下はナデである。外面にはススが付着している。317は胴部中位から口縁部である。胴部は寸胴気味で，頸部は鈍角気味に屈曲する。口縁部は外

側に強く開き直線的に伸びて口縁端部に至る。調整等は不明である。318は胴部下半から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部は鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開き若干外反気味に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめると思われる。内面は口縁部が横方向のナデで，頸部以下はヘラケズリである。319は口縁部である。口縁部は外側に強く開き若干外反気味に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は少し尖り気味におさめる。口縁部内面が横方向のナデである。320は頸部から口縁部である。頸部は「く」字形に屈曲する。口縁部は垂直に立ち上がり直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。口縁部には多条化した擬凹線が巡る。口縁部内面は横方向のナデ，頸部以下はヘラケズリである。321は胴部下半から口縁部である。胴部は卵形で，頸部は「く」字形に屈曲する。口縁部は外側に強く開き，上方に短く直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張っている。調整等は不明である。322は底部から胴部中位である。底部は丸底で，胴部は楕円球形である。内面はヘラケズリ，外面はハケ目である。

323～327は底部である。323は底部から胴部下半である。底部は平底で，器壁はかなり厚い。



第58図　出土遺物実測図（19）（1:3）

胴部は逆「ハ」字形に立ち上がる。胴部外面はヘラミガキ，底部はナデである。324は底部から胴部下半である。底部はボタン状の平底である。胴部はやや内傾しながら逆「ハ」字形に立ち上がる。内外面ともにナデである。325は底部から胴部下半である。底部は丸底である。僅かに平らな部分を残している。内面はナデである。326は底部から胴部下半である。底部は尖り気味の丸底である。胴部は内傾しつつ緩やかに上方に立ち上がる。調整等は不明である。327は底部から胴部下半である。丸底に近いが，僅かに平らな部分を残す平底である。胴部は内傾しつつ緩やかに上方に立ち上がる。調整等は不明である。

328～332は椀である。328は底部から口縁部である。底部は丸底で，体部はボール状に緩やかに弧を描きながら口縁部に至る。口縁部は若干外側に開き，端部を丸くおさめる。体部外面はヘラケズリである。329は底部から口縁部である。底部は若干尖り気味の丸底である。体部はボール状に緩やかに弧を描いて口縁端部に至る。口縁端部は少し尖り気味におさめる。調整等は不明である。330は底部から口縁部である。底部は丸底で器壁はやや厚い。体部は内傾しつつ緩やかに弧を描いて口縁端部に至る。口縁端部は少し尖り気味におさめる。調整等は不明である。331は底部から口縁部である。底部は丸底で体部はボール状である。口縁部は外側に僅かに開いて上方に伸び口縁端部に至る。口縁端部は若干尖り気味におさめる。332は底部から口縁部である。底部は尖り気味の丸底である。体部は砲弾形で，口縁部は外側に少し開いて直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。体部内面は横方向のナデ，外面は口縁部が横方向のナデで，体部上半以下がヘラケズリで，底部がナデである。

333は長頸壺である。完形品である。底部は丸底で，胴部は球胴形である。頸部は緩やかに屈曲し，口縁部は外側に少し開き，内湾気味に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。

334～336は高杯である。334は脚柱部から杯底部である。脚柱部は棒状で僅かに外側に開き下方に伸びる。杯底部はほぼ平坦で，体部は外側にやや強めに開いて直線的に伸びている。脚柱部内面はケズリである。335は体部から口縁部である。体部はボール状に弧を描いて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面は横方向のナデである。336は完形品である。杯底部はほぼ平らで，体部は外側に「ハ」字形に立ち上がって直線的に上方に伸び口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。脚柱部はやや外側に広がって下方に伸び，脚部は脚柱部との境で大きく外側に開き直線的に下方に伸びて脚端部に至る。脚端部は若干尖り気味におさめる。脚部には直径９㎜ほどの円形透かしが３カ所穿たれる。脚柱部は内面に絞り痕が確認できる。

337は杯身の口縁部で，外側に開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに回転ナデである。回転方向は反時計回りである。

ＳＢ14（338～345，第59図，図版51，52）

弥生土器，土師器が出土している。

338～342は甕である。338は胴部下半から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部は直角に屈曲

する。口縁部は外側にやや強く開いて若干外反しつつ伸び口縁端部に至る。口縁端部は少し角張り気味におさめる。内面頸部以下はヘラケズリである。339は胴部下半から口縁部である。胴部は楕円球形で，頸部は鈍角気味に屈曲する。口縁部は少し外側に開いて立ち上がり若干外反しつつ上方に伸びて口縁端部に至る。口縁部端部は丸くおさめる。口縁部は横方向のナデ，内面頸部以下はヘラケズリ後ナデ，外面はハケ目である。340は胴部上半から口縁部である。頸部は「く」字形に直角に屈曲する。口縁部は大きく外側に開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。口縁部は横方向のナデで，内面頸部以下はヘラケズリである。341は胴部上半から口縁部である。頸部は緩く屈曲し，口縁部は少し外側に開き気味に直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。内面頸部以下はヘラケズリ，外面は口縁部周辺が横方向のナデである。342は胴部中位から口縁部である。胴部は寸胴気味で，頸部が鈍角に緩く屈曲する。口縁部は外側に少し開き気味に直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。口縁部は横方向のナデで，内面頸部以下はヘラケズリである。外面中位にススが付着している。

343は高杯である。脚柱部下半から脚部である。脚柱部はやや外反気味に下方に伸び，脚部は脚柱部との境で鋭く屈曲し，やや内傾して下方に直線的に伸び脚端部に至る。脚端部は丸くおさめる。調整等は不明である。

344は椀である。体部から口縁部である。底部は丸底ないしは平底と思われる。体部は底部から緩やかに立ち上がり若干内反しつつ外上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。調整等は不明である。

345は底部である。平底で，器壁は厚い。外面胴部周辺はナデで，その他については不明である。

ＳＢ15（346～349，第59図）

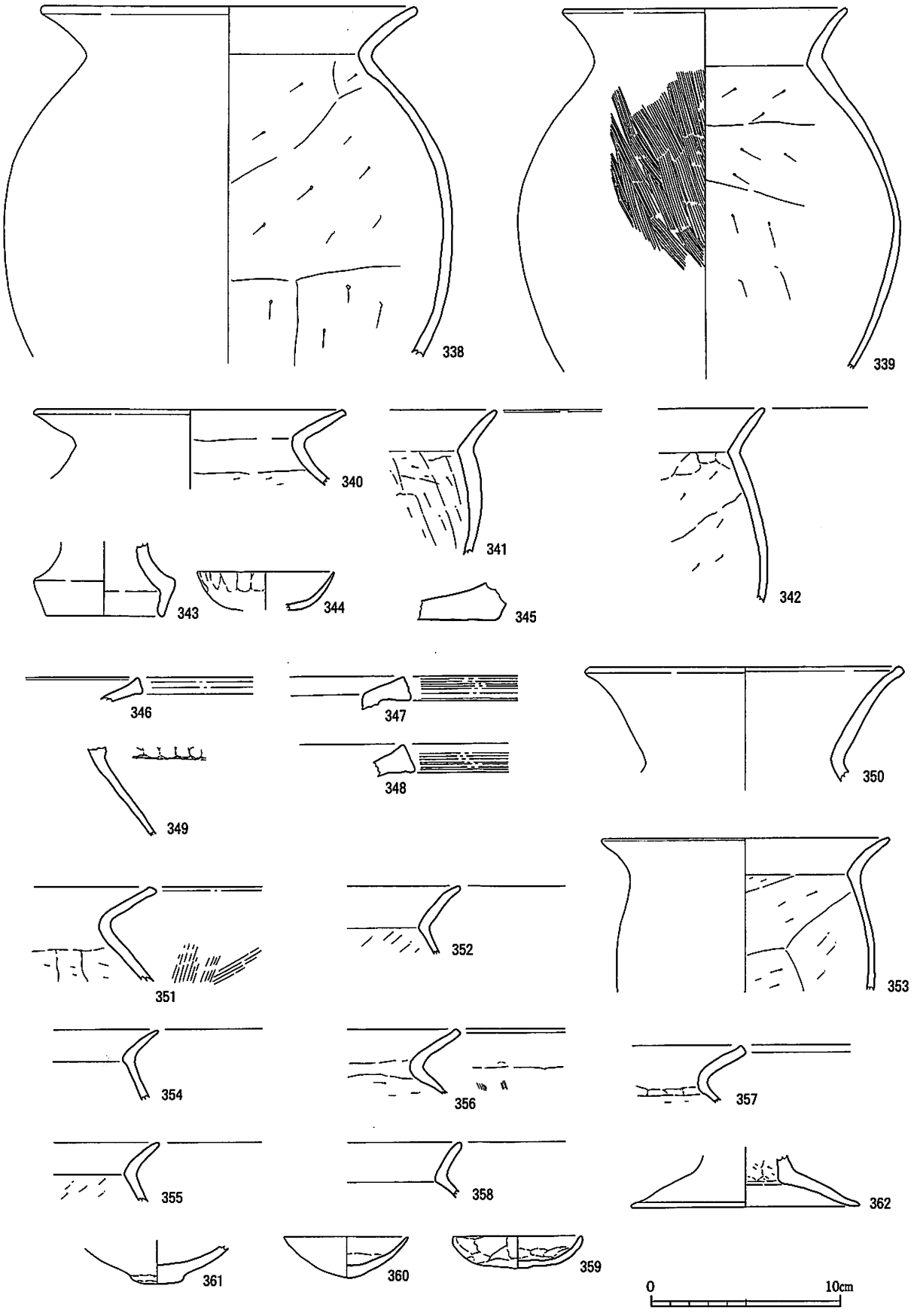
弥生土器が出土している。

全て甕である。346は口縁部である。外側水平方向に直線的に伸び口縁端部を上下に拡張している。口縁端部には中央部に凹線が一条巡っている。調整等は不明である。347は口縁部である。外側水平方向に直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は上下に拡張され，端面に凹線が３条巡っている。調整等は不明である。348は口縁部である。外側水平方向に直線的に伸びて上下に拡張された口縁端部に至る。口縁端部には凹線が巡っている。調整等は不明である。349は胴部上半から頸部である。胴部は長胴形で，頸部は「く」字形に屈曲して口縁部に至ると思われる。頸部屈曲部には粘土を充填し，刻み目凸帯を巡らせている。調整等は不明である。

ＳＢ16（350～362，第59図，図版52）

土師器である。

350は壺である。頸部から口縁部である。頸部は鈍角に屈曲し，口縁部は外側に少し開いて直線的に伸び，口縁端部直下付近から若干外反する。口縁端部は上方に少し拡張され内面直下に段



第59図　出土遺物実測図（20）（1:3）

が巡る。調整等は不明である。

351～358は甕である。351は胴部上半から口縁部である。頸部は「く」字形に鋭く屈曲する。口縁部は外側に強く開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。内面頸部以下はヘラケズリ後ナデ，外面は口縁部が横方向のナデ，胴部上半がハケ目である。352は頸部から口縁部である。頸部は鈍角気味屈曲し，口縁部は外側に開き直線的に伸びて，口縁端部直下でやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部は横方向のナデ，内面頸部以下はヘラケズリである。353は胴部中位から口縁部である。胴部は寸胴気味で，頸部は緩やかに屈曲する。口縁部は外側に開き外反して口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面から外面は横方向のナデ，内面頸部以下はヘラケズリである。354は頸部から口縁部である。頸部はほぼ直角に屈曲し，口縁部は外側に少し強めに開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。355は頸部から口縁部である。頸部は若干鈍角気味に屈曲する。口縁部は少し強く外側に開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面頸部以下はヘラケズリである。356は頸部から口縁部である。頸部は「く」字形に鋭角気味に屈曲する。口縁部は外側に強く開いて直線的に伸び口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。口縁部は横方向のナデ，内面頸部はナデ，以下ヘラケズリ，外面胴部はハケ目である。357は頸部から口縁部である。頸部は鋭角気味に屈曲する。口縁部は外側に強く開いて直線的に伸び口縁端部に至る。口縁端部は上方に若干拡張され，少し角張り気味におさめる。口縁部内面は横方向のナデ，頸部はナデ，以下はヘラケズリ，胴部外面は横方向のナデである。358は頸部から口縁部である。頸部は鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に少し開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。

359・360は椀である。359は底部から口縁部である。底部は少し凸凹しているが平底で，体部は緩やかに外上方に立ち上がり内傾しつつ短い弧を描いて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内外面共にナデである。360は底部から口縁部である。底部は尖り気味の丸底である。体部は外上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は少し尖り気味におさめる。

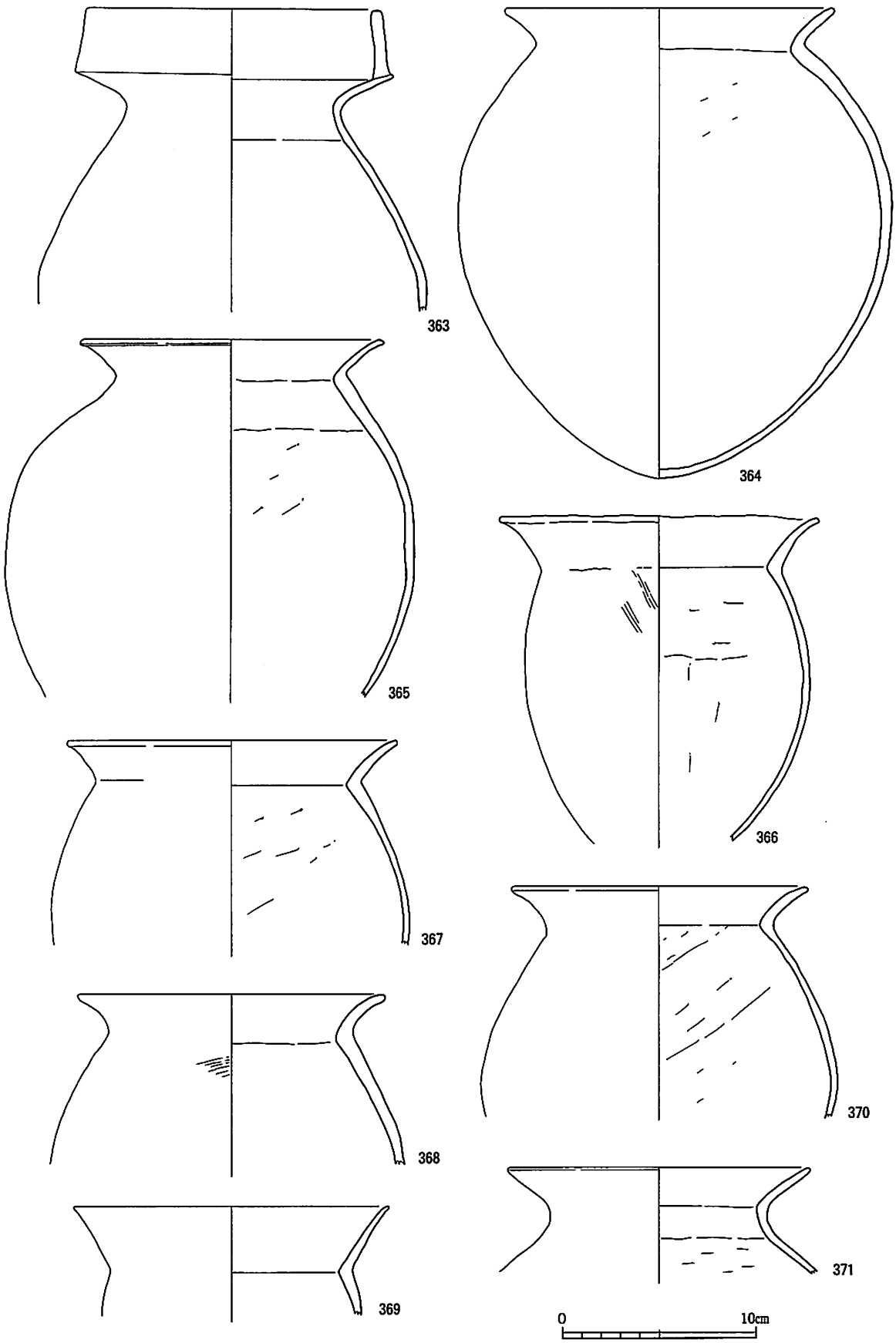
361は底部から胴部下半である。底部は直径27㎜・厚さ４㎜程のボタン状のやや扁平な丸底で，胴部は緩やかに外上方に広がると思われる。調整等は不明である。

362は高杯である。脚柱部下半から脚部である。脚部は脚柱部との境で強く外側に開きほぼ直線的に伸びて脚端部に至る。脚端部はやや尖り気味におさめる。内面脚柱部下半に絞痕が顕著に残っている。

ＳＢ17（363～383，第60，61図，図版52，53）

土師器が出土している。

363は壺である。胴部中位から口縁部である。胴部は卵形で，頸部はほぼ直角に屈曲して擬口縁部に至る。擬口縁部は外側に強く開いて直線的に伸びる。口縁部は擬口縁部からほぼ垂直に立ち上がり，僅かに内傾して上方に直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内



第60図　出土遺物実測図（21）（1:3）

面頸部は横方向のナデ，以下はヘラケズリと思われる。

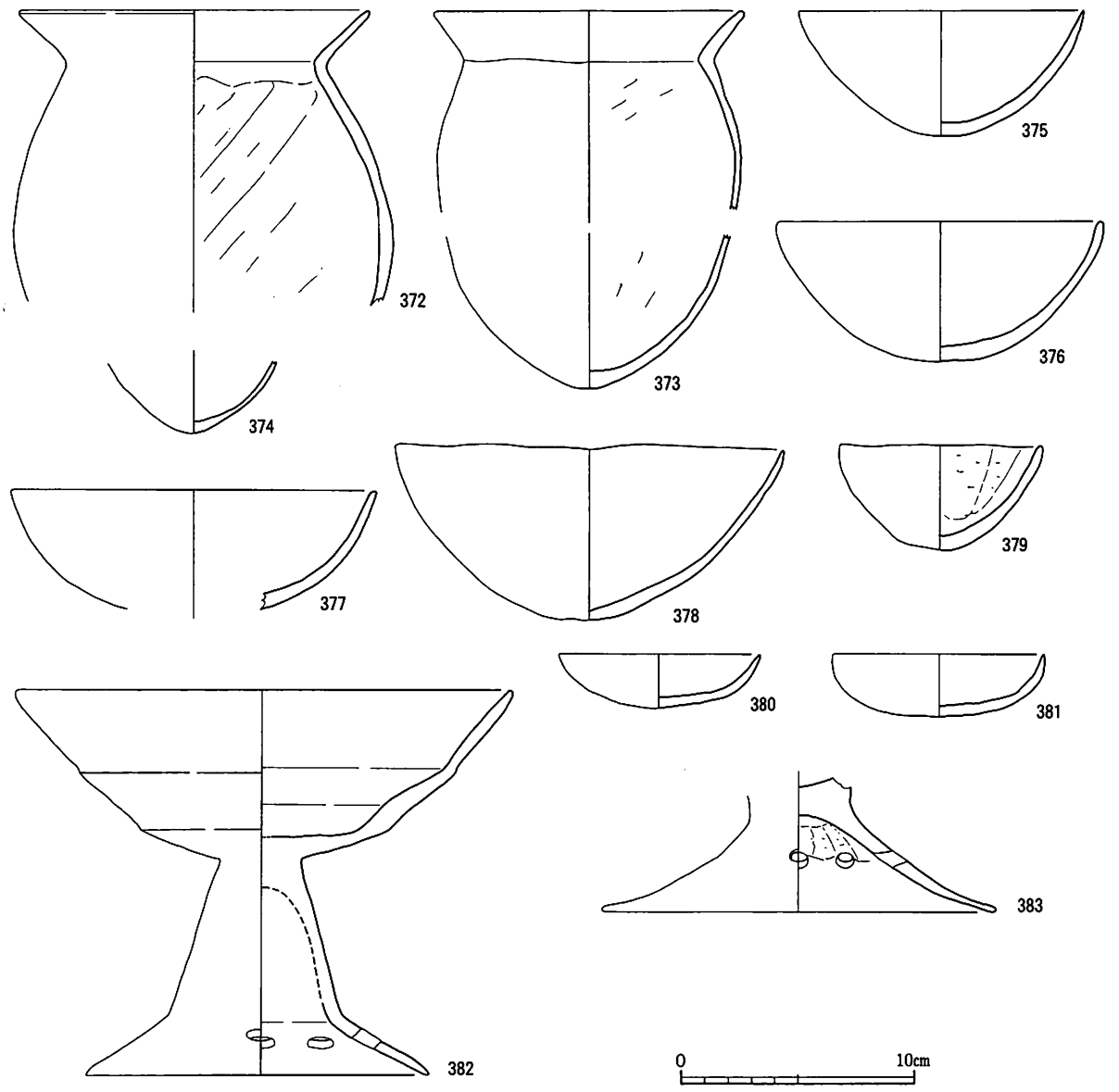
364～373は甕である。364は底部から口縁部である。底部は丸底で，胴部はほぼ球胴形で，頸部は直角に屈曲する。口縁部は外側に少し強く開き僅かに外反しつつ口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。365は胴部下半から口縁部である。胴部はやや歪みがあるもののほぼ球胴形で，頸部は直角に屈曲する。口縁部は外側に少し強く開き若干外反して口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。口縁部は横方向のナデ，内面頸部以下はヘラケズリ後ナデ，外面胴部上半はナデである。外面にはススが付着している。366は胴部下半から口縁部である。胴部は寸胴気味の楕円球形で，頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁部は外側に開き外反しつつ口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。内面頸部以下はヘラケズリで，外面胴部上半はハケ目である。367は胴部中位から口縁部である。胴部は寸胴気味で，頸部は直角に屈曲する。口縁部は外側にやや強く開き少し外反して口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。内面頸部以下はヘラケズリ，口縁部外面は横方向のナデである。368は胴部中位から口縁部である。頸部は少し鈍角気味に屈曲し，口縁部は外側にやや強く開き外反しつつ口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面は横方向のナデで，頸部以下はハケ目と思われる。369は頸部から口縁部である。頸部は揺るやかに屈曲し，口縁部は外側に開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。370は胴部中位から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部は直角に屈曲する。口縁部は外側にやや強く開き外反しつつ口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面頸部以下はヘラケズリである。371は胴部上半から口縁部である。頸部は「く」字形に弧を描きながら屈曲する。口縁部は外側にやや強く開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。外面及び口縁部内面は横方向のナデ，頸部はナデで，以下はヘラケズリである。372は胴部中位から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部はやや鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側にやや開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面頸部以下はヘラケズリ，外面口縁部は横方向のナデである。373は底部から口縁部である。現状では接合部を確認できなかった。底部は丸底で，胴部はやや間延びした砲弾形で，頸部は緩く屈曲している。口縁部は外側に少し開き直線的にわりと短く伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。口縁部は横方向のナデで，内面頸部以下はヘラケズリ，底部はナデである。

374は底部である。若干尖り気味の丸底である。器壁は薄い。調整等は不明である。

375～381は椀である。375は底部から口縁部である。底部は丸底で体部は緩やかに立ち上がり外上方に内傾しつつ弧を描き口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。調整等は不明である。376は底部から口縁部である。底部は丸底で，体部は緩やか立ち上がり外上方に内傾しつつ弧を描いて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。377は体部から口縁部である。体部は外上方に内傾しながら緩やかな弧を描いて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。378は底部から口縁部である。底部は丸底で，体部は外上方に立ち上がり若干内傾しつつ口縁端部に至る。端部は少し尖り気味におさめる。器形は若干歪ん

でいる。調整等は不明である。379は底部から口縁部である。底部は尖り気味の丸底で，体部は外上方に内傾しながら伸びて口縁端部に至る。口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。内面は体部がヘラケズリ，底部はナデである。380は底部から口縁部である。底部は丸底で，体部は外上方に立ち上がりやや内傾しつつ短く伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。381は底部から口縁部である。底部は丸底で，体部は外上方に強く立ち上がり内傾しつつ短く上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。調整等は不明である。

382・383は高杯である。382は完形品である。杯底部はほぼ平坦で，体部は「ハ」字形に外側に開いて杯底部との境および体部中位に段をなし，ほぼ直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。脚柱部は外側に少し開き気味に下方に伸びる。脚部は脚柱部との境で大きく外側にラッパ状に屈曲し直線的に伸びて脚端部に至る。脚端部は尖り気味におさめる。脚部中央からからやや上位に直径10㎜程の円形の透かしが３カ所穿たれている。調整等は不明である。383



第61図　出土遺物実測図（22）（1:3）

は脚柱部である。僅かに丸底気味の杯底部が残っている。脚柱部は短く脚部との境が不明瞭である。脚部はラッパ状の多く外側に広がり，やや外反しつつ口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。脚部中央付近に直径８㎜程の円形の透かしが３カ所穿たれている。内面脚柱部中央はナデで，以下円形透かし上部まではヘラケズリ後ナデである。

ＳＫ１（390，第62図）

弥生土器が出土している。底部である。胴部との境が少しくぼむ形になる。調整は胴部がナデ，底部もナデである。

ＳＫ３（384～389，第62図，図版53，54）

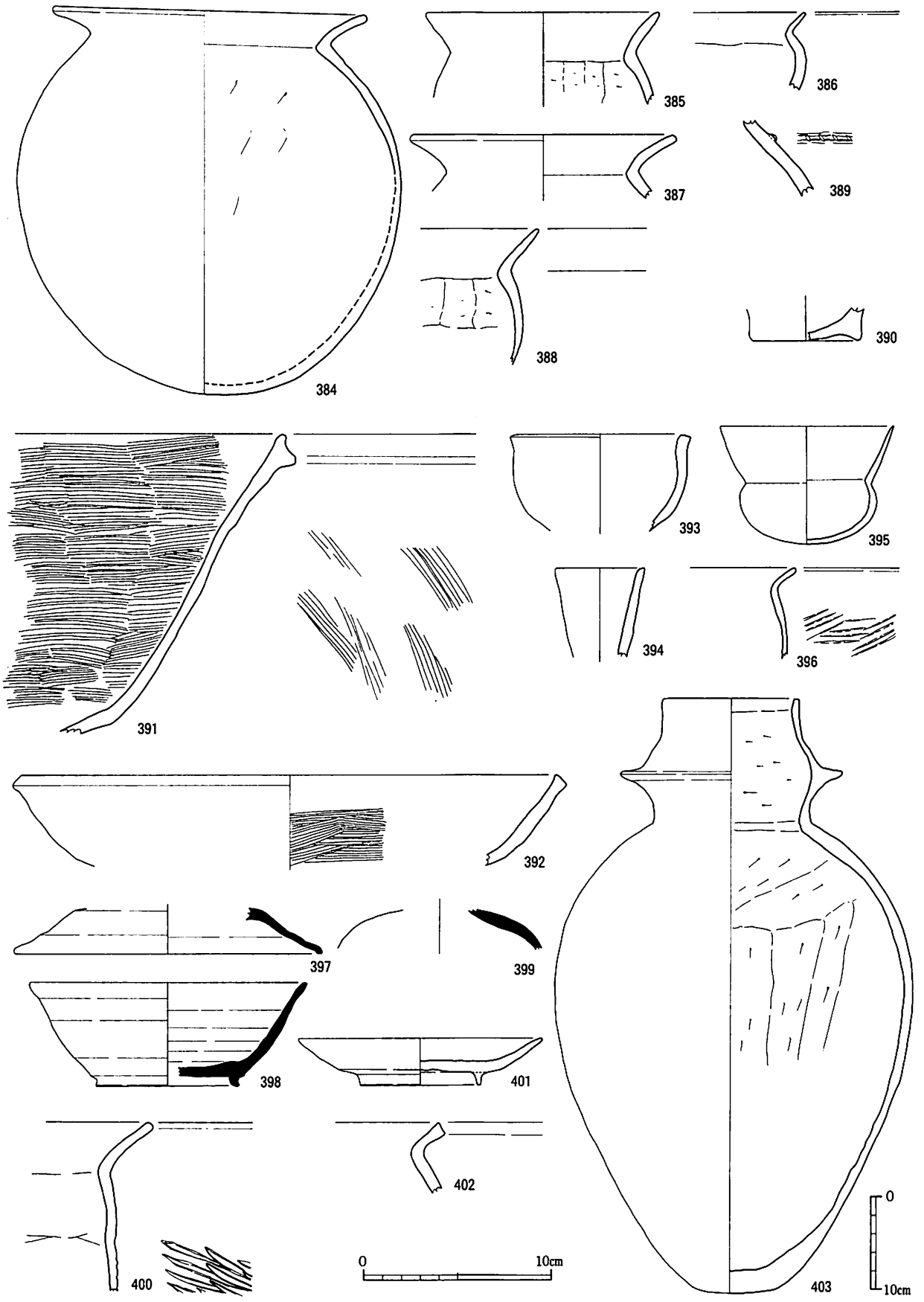
弥生土器・土師器が出土している。

384～388は甕である。384は底部から口縁部である。底部は丸底で，胴部は球胴形である。頸部は鋭角気味に「く」字形に屈曲し，口縁部は外側に強く開きが違反気味に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面頸部以下がヘラケズリである。385は胴部上半から口縁部である。頸部は緩く屈曲し，口縁部はやや外側に開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面頸部以下がヘラケズリである。386は胴部中位から口縁部である。胴部は球形で，頸部が「く」字形に屈曲する。口縁部は外側に開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。口縁部内面及び外面は横方向のナデで，内面頸部以下はヘラケズリである。387は頸部から口縁部である。頸部は「く」字形にほぼ直角に屈曲する。口縁部は外側にやや強く開き外反しつつ口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。調整等は不明である。388は胴部下半から口縁部である。胴部は楕円球形気味で頸部は鈍角気味に緩く屈曲する。口縁部は外側に開いて直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。内面頸部以下はヘラケズリである。

389は壺の胴部上半である。頸部の近くと思われる。貼り付けの刻み目凸帯が巡る。凸帯断面はカマボコ形である。調整等は不明である。

ＳＫ10（391・392，第62図，図版54）

土師質土器が出土している。いずれも土鍋である。391は胴部下半から口縁部である。底部との境に段を持つ。胴部は外上方に立ち上がり，胴部中位で若干外側に広がるが，概ね直線的に伸びて口縁端に至る。口縁部は外面端部の直下に断面台形状の凸帯が巡る。口縁端部は丸くおさめる。調整は内面が横方向のハケ目で，外面は口縁部がナデで，凸帯以下はハケ目後ナデである。凸帯以下にはススが付着している。392は胴部上半から口縁部である。胴部上半は逆「ハ」字形に外側に開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は上方に拡張し端面をなし，外面口縁部直下に稜をなす。調整は内面がハケ目，外面はナデである。



第62図　出土遺物実測図（23）（1:3;1:6）

ＳＫ11（393，第62図）

弥生土器が出土している。椀である。体部から口縁部である。体部は中位までは外側に少し開き気味に内傾しつつ上方に伸び，中位からやや外反して口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味に収まり，やや外下方に拡張された端面を持つ。調整等は不明である。

ＳＫ12（397～401，第62図，図版54）

須恵器・土師器が出土している。

397は杯蓋である。天井部下半から口縁部である。天井はおおむね平坦で，外側下方に緩やかに伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。内外面ともに回転ナデである。ロクロの回転方向は時計回りである。

398は杯身である。底部から口縁部である。底部はほぼ平らで，断面が台形状の貼り付け高台が付く。高台の端部は少し尖り気味である。体部は外側上方にやや内傾気味に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。内外面ともに回転ナデで，底部内面には定方向の仕上げナデを残す。ロクロの回転方向は時計回りである。

399は壺である。胴部上半（肩部）である。胴部は横長の楕円球形状をなすと思われ，少し強めに肩が張る器形となる。内外面ともに回転ナデである。

400は甕である。胴部上半から口縁部である。胴部は寸胴気味で，頸部は鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。口縁部は横方向のナデ，胴部は平行方向のタタキ目である。

401は杯である。底部から口縁部である。底部は中央部が少し窪み気味になるがほぼ平坦で，器壁の薄い貼り付け高台が付く。高台は台形状で端部を丸くおさめる。体部は緩く外上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。体部は回転ナデ，底部内面は定方向の仕上げナデ，底部外面はヘラ切り後ナデである。

ＳＫ13（394～396，第62図，図版54）

土師器が出土している。

394・395は壺である。394は長頸壺の口縁部である。少し外側に開き気味に直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整は不明である。395は小型丸底壺である。底部は丸底で，胴部は横長の楕円球形で，頸部で鈍角気味に屈曲する。口縁部は外側に開き気味に若干内傾しつつ伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。調整等は不明である。

396は甕である。胴部中位から口縁部である。頸部が鈍角気味に屈曲し，口縁部は外側に開き直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。口縁部内面は横方向のナデ，胴部はナデで，胴部外面はタタキ目である。

ＳＫ22（403，第62図，図版54）

弥生土器壺が出土している。壺棺に使用されていたもので中型品である。底部は平底気味の丸底で器壁はかなり厚い。胴部は胴部の中心より少し上が胴部最大径になる倒卵形である。頸部はやや鈍角気味に「く」字形に屈曲して外上方に伸びて，鍔状に外側に拡張された擬口縁部に至る。擬口縁部は断面三角形状を呈する。口縁部は内側に少し傾斜しながら伸びて，口縁部の中程より少し下位から直立気味に緩く屈曲し，上方に直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り，端面となっている。内面は口縁直下がナデで，以下胴部中位まではヘラケズリである。

ＳＫ26（402，第62図）

弥生土器甕が出土している。胴部上半から口縁部である。頸部は「く」字形にほぼ直角に屈曲し，口縁部は外側に開きながら直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は上下方向に拡張され，ややくぼむ端面をなす。端面端部は角張っている。調整等は不明である。

ＳＸ２（404～408，第63図，図版54，55）

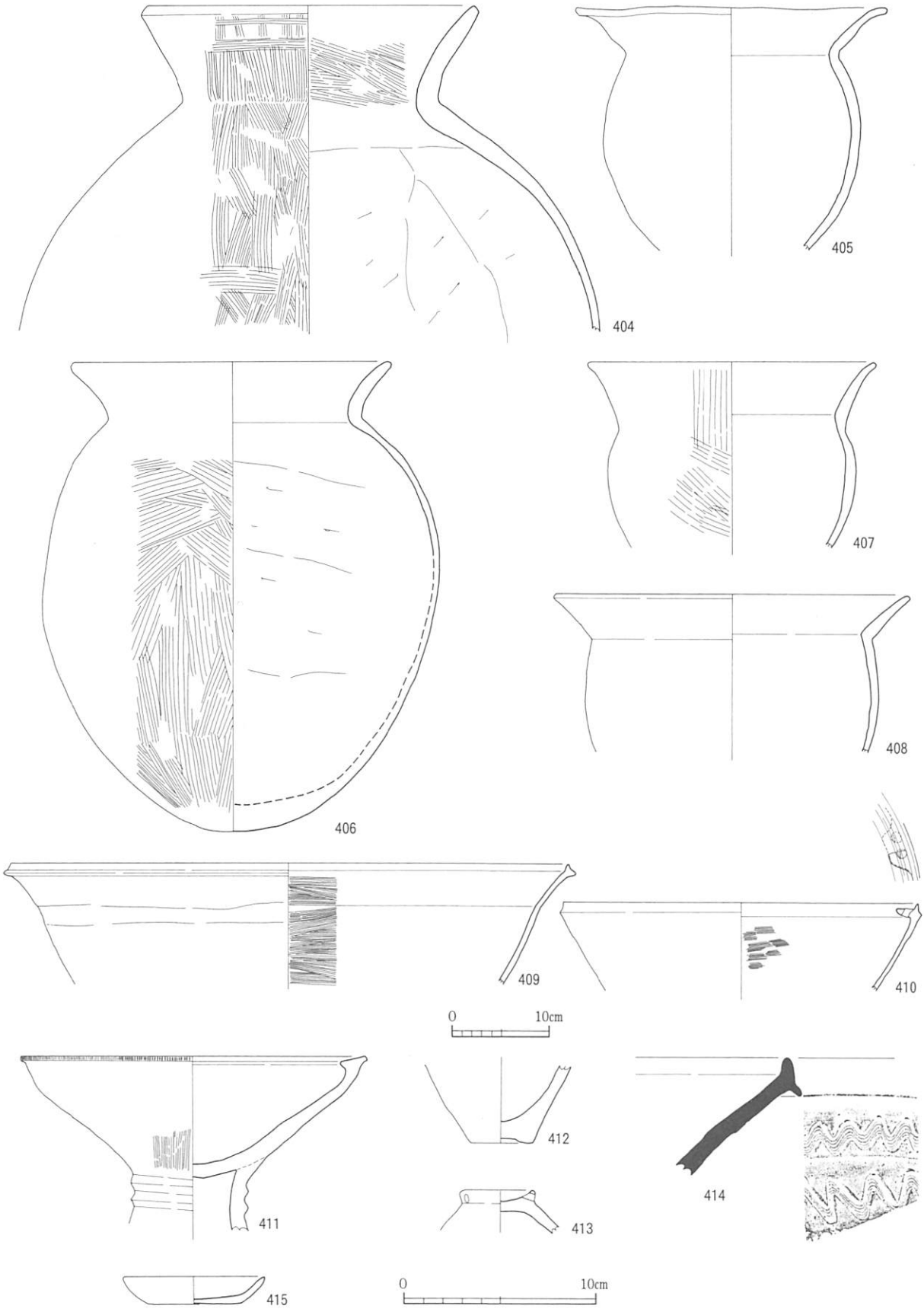
土師器が出土している。

404は壺である。胴部中位から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部は直角に屈曲する。口縁部は外側に少し開き直線的に上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。内面は口縁部直下がナデで，中位からはハケ目，頸部周辺はナデで，以下ヘラケズリである。外面は口縁端部が横方向のナデで，以下ハケ目である。

405～408は甕である。405は胴部下半から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部はやや鈍角気味に「く」字形に屈曲する。口縁部は外側に少し強く開き端部付近で外反してラッパ状になる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部は少し歪である。調整等は不明である。406は底部から口縁部である。底部は丸底で，胴部は少し歪になるが概ね楕円球形である。頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は肥厚して外側に開き外反しつつ上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面は口縁部が横方向のナデ，頸部以下はヘラケズリ後ナデである。外面胴部はハケ目である。407は胴部下半から口縁部である。胴部はボール状で頸部は少し屈曲する。口縁部は少し外側に開き気味に直線的に伸び口縁端部付近で短く外反する。口縁端部は丸くおさめる。外面はハケ目である。408は胴部中位から口縁部である。胴部は寸胴気味で，頸部は鈍角に緩く屈曲する。口縁部は外側に開き，直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は角張り気味におさめる。調整等は不明である。

ＳＸ４（409，第63図，図版55）

土師器質土器土鍋が出土している。胴部上半から口縁部である。胴部は球形で，口縁部は外反気味に外上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は上方及び外方に拡張され，中央が凹む端面を持つ。内面は口縁部周辺がナデ，以下がハケ目である。外面は口縁部周辺が横方向のナデ，以下は粗いナデである。



第63図　出土遺物実測図（24）（1:3）

ＳＸ７（410，第63図，図版55）

土師器土鍋が出土している。胴部上半から口縁部である。胴部はすり鉢状で，外上方に直線的に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は上方に拡張され，端部は尖り気味におさめる。口縁端部内面直下に耳が付く。耳の平面形は台形で穴は二つと想定できるが，現状では1/3程が残存しているに過ぎない。内面は口縁部周辺がナデ，以下はハケ目で，外面は粗いナデである。

b　調査区内出土土器（411～415，第63図，図版55）

遺構から遊離した状態で調査区内から出土した土器もあり，これらの土器は数量は遺構内から出土した土器に較べると少なくかつ遺存状況も悪い小片がほとんどである。出土遺物の内訳は弥生土器，土師器，須恵器，土師質土器などがあり，遺構内出土土器と同様に弥生土器や土師器が主体を占めている。ここではこれら調査内出土遺物のうちでも比較的遺存状態の良好なものを選択して図示した。

411～413が弥生土器，414が須恵器，415が土師器である。

411は高杯である。脚柱部から杯部である。脚柱部は断面三角形状の凸帯が二条巡っている。杯底部は丸底で，体部は外上方に直線的に広がり口縁端部付近で内反する。口縁端部は内外方向に拡張され端面をなす。また外面端面直下には刻み目が施されている。口縁部直下の体部は緩く窪む。内面は横方向のナデ，外面は体部上半が横方向のナデ，体部下半はハケ目，脚柱部は横方向のナデである。

412は底部から胴部下半である。底部は中央部が少し窪む凹底で，胴部は外上方に鋭く立ち上がっている。内面底部はナデである。

413は蓋である。つまみ部分から天井部上半である。つまみ部は高さが７㎜で直径39㎜の円形である。直径４㎜の小孔が二つずつ並んで対向している。天井部は平坦で，体部は少し外下方に傾斜して伸びるようである。天井部内面がナデである。

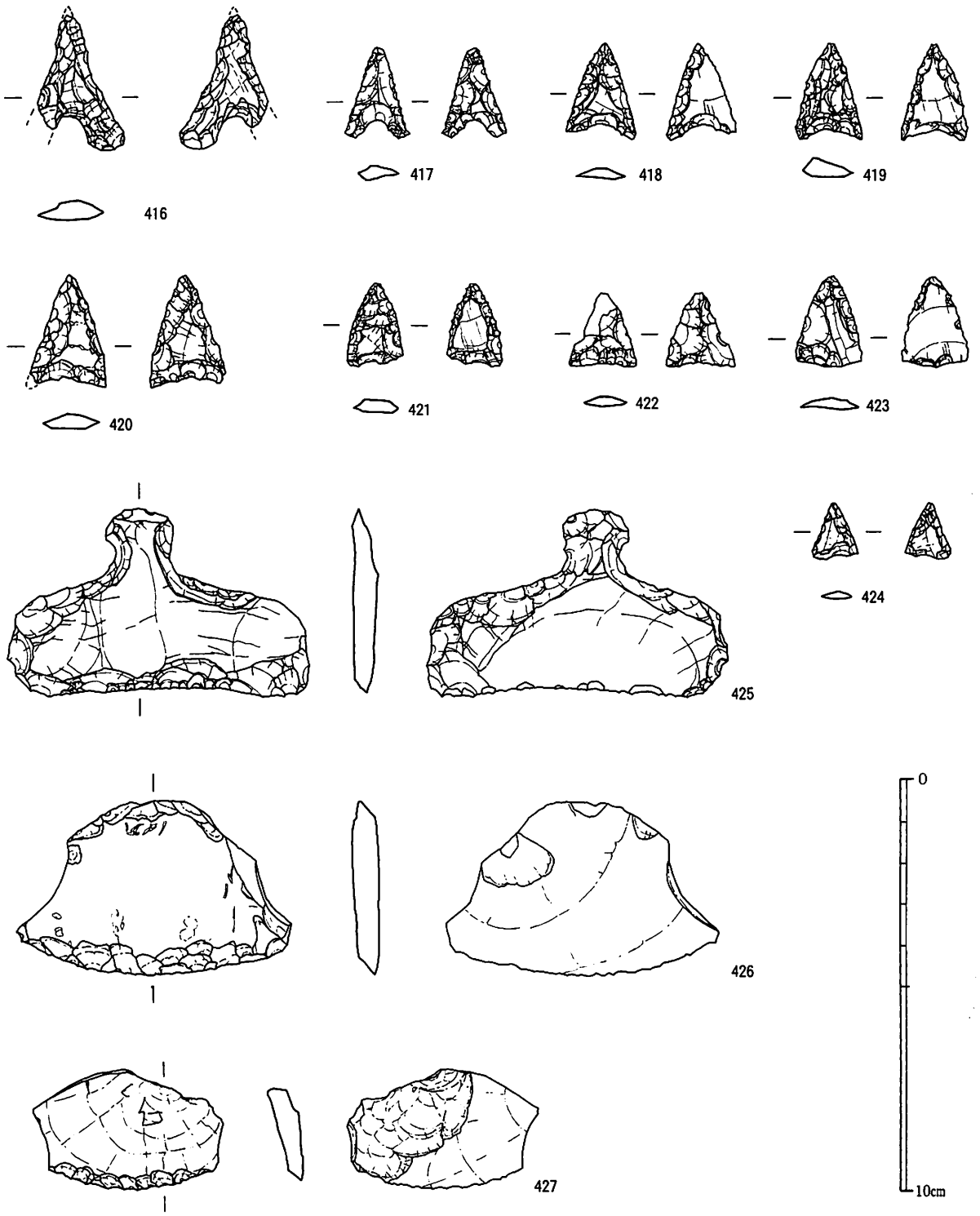
414は壺である。口縁部である。逆「ハ」字形に外側に強く開いて直線的に伸び口縁端部に至る。口縁端部は上方と下方に拡張されて端面をなす。外面には中央部に凸帯と沈線をはさんで波状文が各々施されている。内外面ともに横方向のナデである。

415は皿である。完形品である。底部は平底で，体部は上外方に直線的に立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内面及び外面体部は横方向のナデ，底部はヘラ切りである。

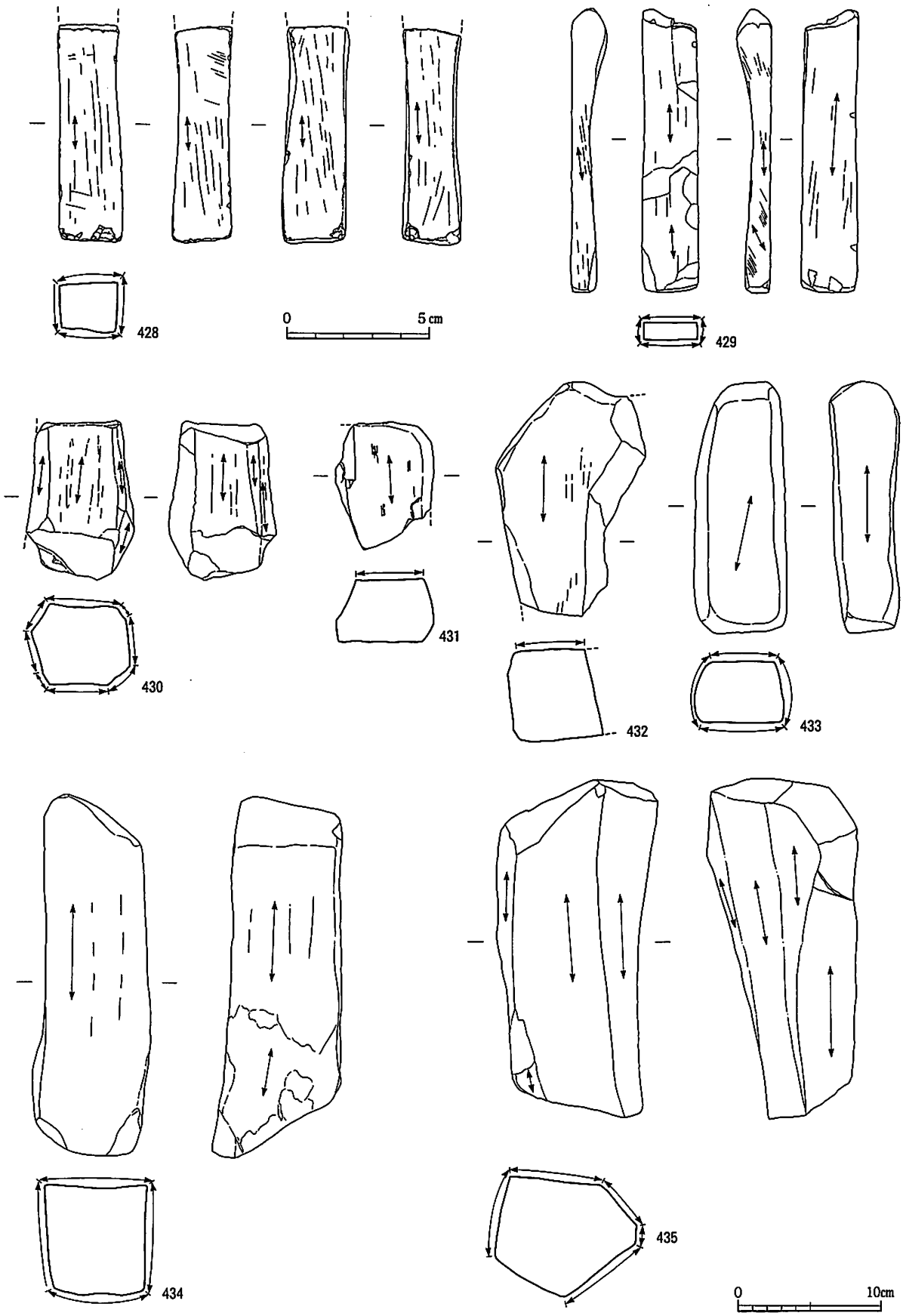
2　石器（416～442，第64～67図，図版56～59）

石鏃（416～424）

基部に抉りをいれた凹基式（416～422・424）と基部をやや突出ぎみに平坦につくりだす平基式（423）がある。さらに，凹基式は抉りの大きいもの（416・417）と浅い抉りの基部が内湾ぎみ



第64図　出土遺物実測図（25）（2:3）



第65図　出土遺物実測図（26）（1:2, 1:4）

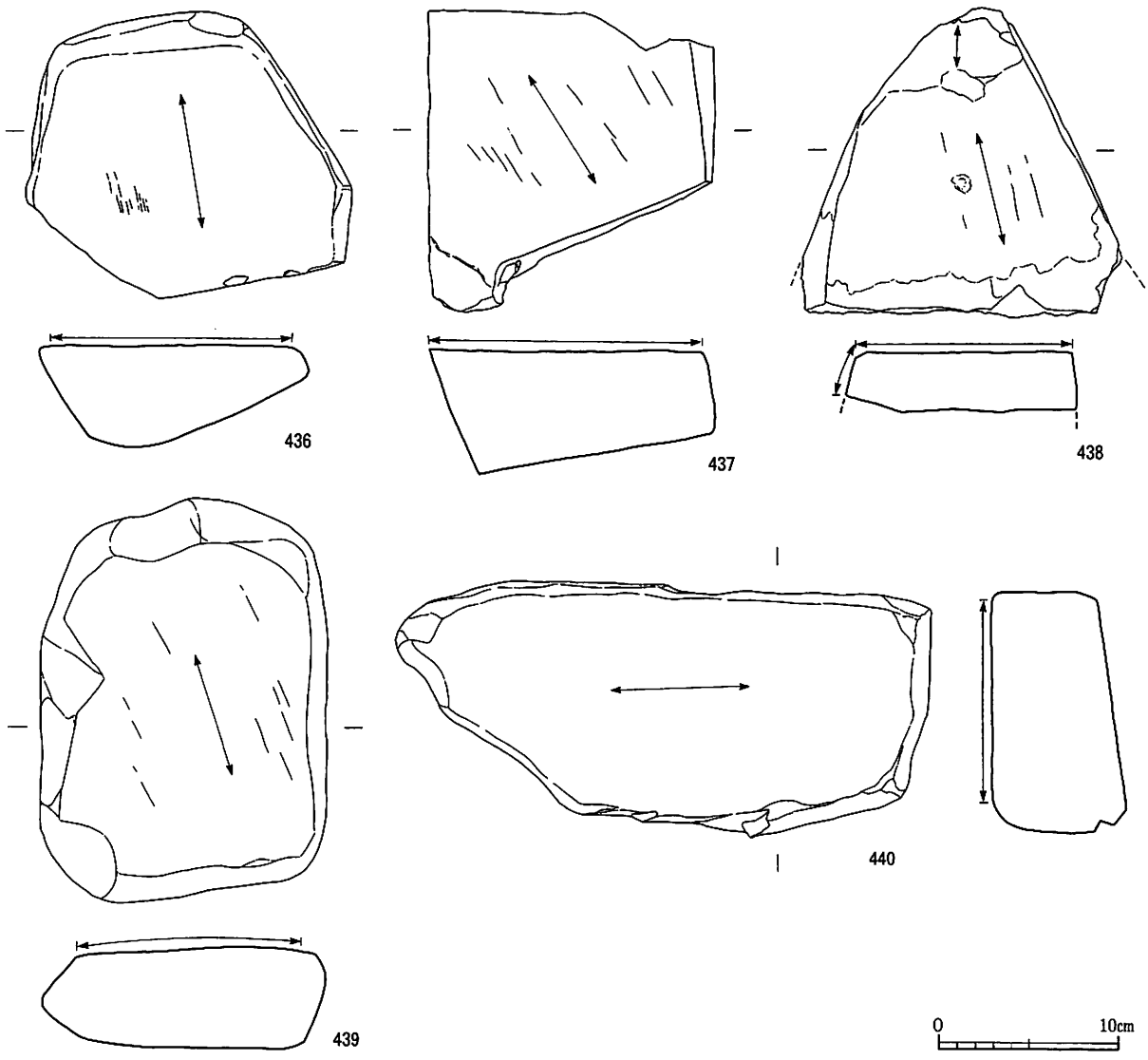
のもの（418～422・424）の二者に分けられる。ほとんどの石鏃が主要剥離面を大きく残し，概してつくりが粗雑であることから，きわめて弥生時代的な石鏃とすることができる。石材は416・424が安山岩で，他は珪質凝灰岩である。重量は２ｇから0.５ｇの間におさまり，小型軽量な石鏃である。

石匙（425）

やや内湾する刃部とその反対側に摘みをつくりだした石匙（サイドスクレイパー）で，両面に大きな主要剥離面を残し，刃部の加工は粗い。石材は珪質凝灰岩で，重量は20ｇ程度の小型の石匙である。

刃器（426～427）

不定形の剥片の片側に刃部をつくりだした不定形刃器（サイドスクレイパー）で，両面に主要剥離面や自然面を残し，刃部は片側から押圧剥離によってつくりだされている。426は刃部とは反対側に刃潰し（ブランティング）を行っているが，両側縁は加工したものではなく剥片の内湾

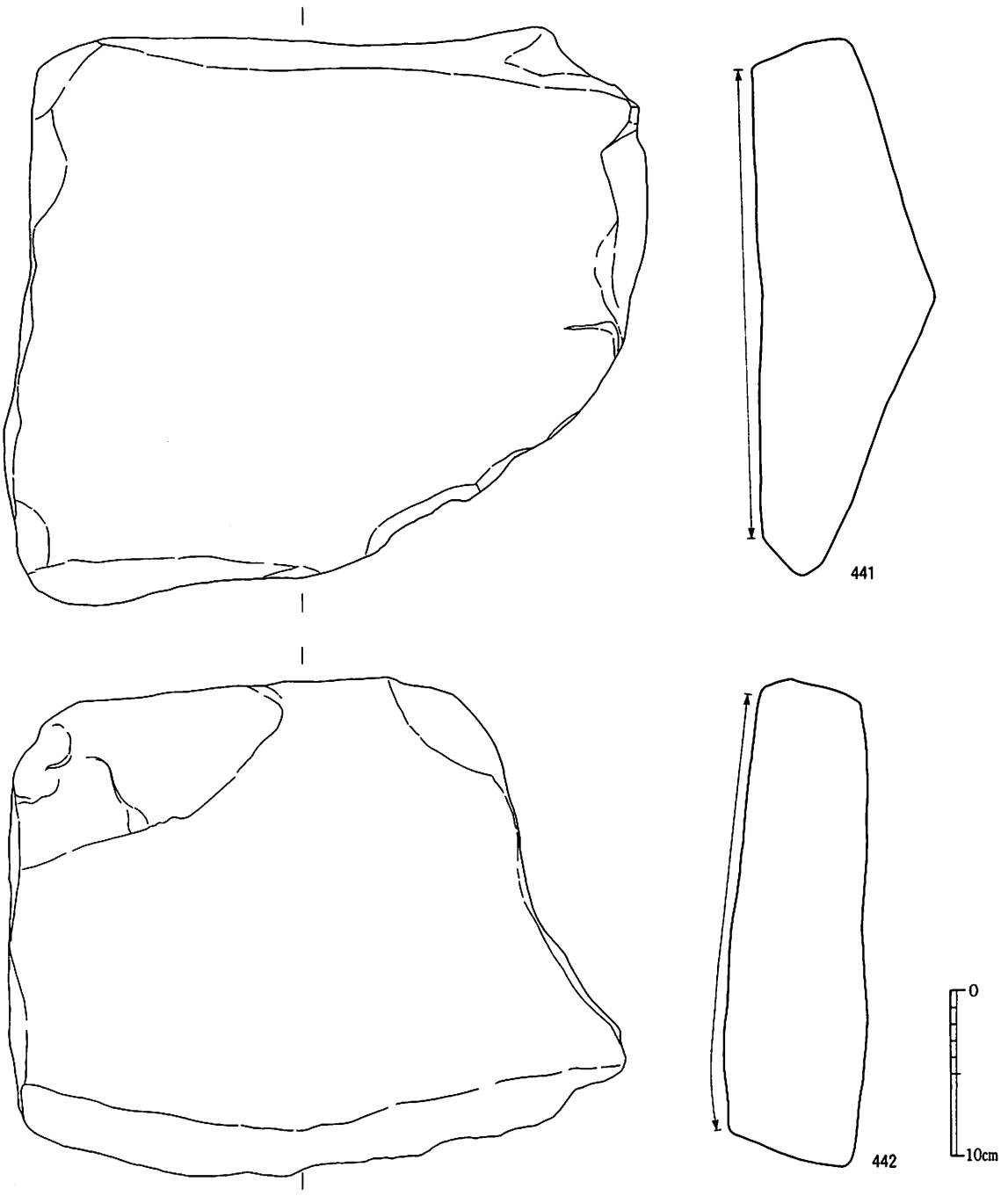


第66図　出土遺物実測図（27）（1:4）

する部分を利用している。427は両側縁を折損しているため全形は不明であるが，刃部以外の細部加工は認められず，やや横長の銀杏形を呈していたようである。石材はともに426が珪質凝灰岩，427が安山岩で，重量は20ｇから10ｇ程度の小型の刃器である。

砥石（428～440）

方柱状で石質がきめ細かく重量50ｇから300ｇ程度までの小型の砥石（428・429）とやや不整形の柱状あるいは板状で重量300ｇから1000ｇ程度までの中型の砥石（430・431・433），さらに不整形の柱状あるいは板状で，石質のきめがやや粗い重量3000ｇから5000ｇ程度の大型の砥石



第67図　出土遺物実測図（28）（1:4）

(432・434～440) の三者がある。小型の砥石は，石材の長辺の四面すべてを砥面として使用しており，四面とも研磨による磨耗・湾曲が認められる。中型の砥石は，石材長辺の大部分の面を砥面として使用したもの (430・433) もあるが，片面しか使用しないもの (431) もある。大型の砥石も石材長辺の大部分の面を砥面として使用したもの (434・435) もあるが，片面しか使用しないもの (432・436～440) が多い。こうした三者の形態や重量，石質の違いは，それぞれ使用目的に応じたものと推定される。小型の砥石は鉄器の再研磨用，中型の砥石は鉄器製作時の仕上げ砥ぎ用，大型の砥石は鉄器製作時の荒砥ぎや研磨加工用の砥石として使用されたものと想定される。

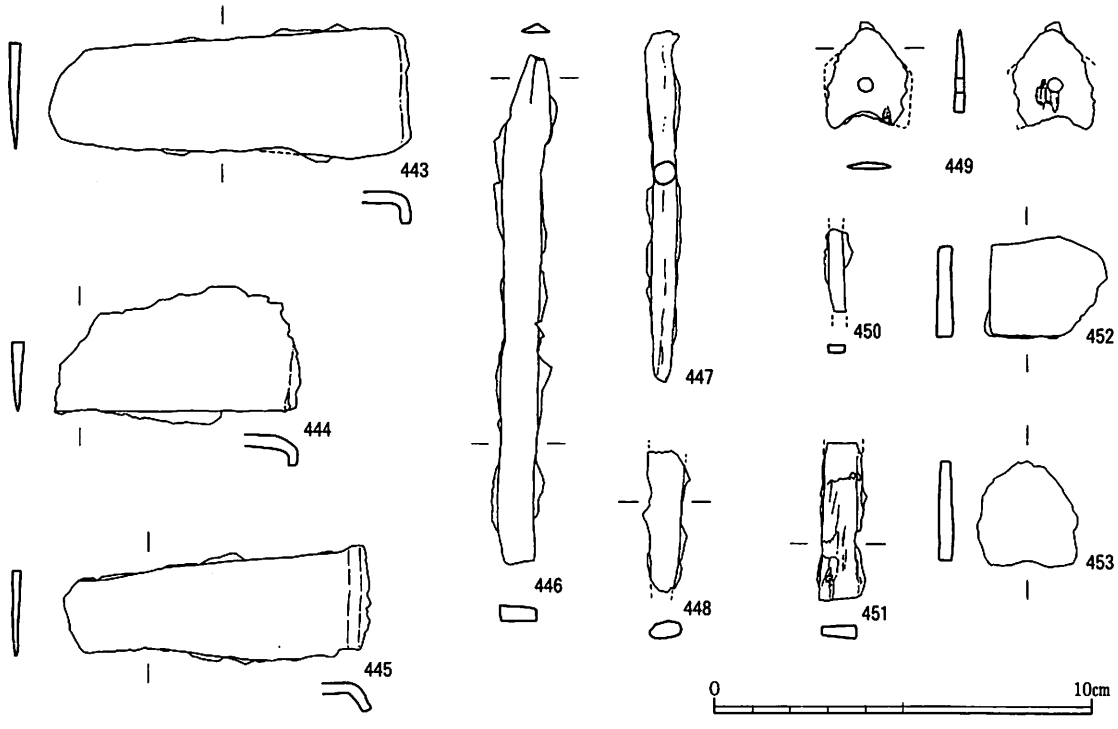
台石 (441・442)

板状の自然石を利用した作業台と推定されるもので，石質は中・大型の砥石 (430～440) と類似するが，重量は15kgから20kgと桁外れに重い。おもな使用面は平坦な方の片面で，作業場となった住居の床面に据え置かれたものと推定される。使用面にはほぼ全面に磨耗した痕が観察されるが，敲打痕はあまり明瞭ではない。このことはこれらの台石が鉄器製作に使用されたとすれば，鍛打より研磨をおもな作業内容としていたことを思わせる。なお，442の一部側縁には熱を受けて赤変した部分がわずかに観察される。

3 鉄器 (443～453，第68図，図版59)

鉄鎌 (443～445)

すべて直刃鎌で，基部を折り曲げて木柄に装着するようになっている。刃部には研ぎ減りの痕跡が明瞭で，実際に使用されたことがわかる。これらの刃部の幅は3cm前後であるが，長さは3点とも先端部を欠損しており本来の全長は不明である。もっとも残りのよい443で残存長9.5cmで



第68図　出土遺物実測図 (29) (1:2)

あるところから推定して，15～20cm程度であったものと推定される。

ヤリガンナ（446）

扁平な棒状の鉄板の先端にやや反りのある刃部をつくりだしたヤリガンナで，刃部の長さは約２cmである。刃部の断面は「へ」の字状で裏スキがあり，両側縁に比較的鋭利な刃をつけている。刃部先端と茎の基部を欠損しており全長は不明であるが，残存長から推定して15cm前後のヤリガンナと考えられる。茎部に木質等の着柄の痕跡は観察できない。

鉄釘状鉄製品（447）

細長い鉄釘状の鉄製品であるが，頭部の形状は釘の頭として明瞭に加工されたものではない。断面は円形に近い方形で，先端に向かって細くなっており，形態的には釘あるいは尖根鏃の茎のようであるが，頭部がタガネ等で切断されたようにもみられることから鉄素材の可能性もある。

茎状鉄製品（448・450・451）

形態的に鏃の茎（448），ヤリガンナの茎（451）などと思われる鉄片であるが，鉄器の茎としては異常に細いもの（450）や折損した破断面がタガネ等で切断されたような痕跡があるもの（448）がある。こうしたことから，これらは鉄釘状鉄製品（447）などと同様に鉄素材の可能性も考えられる。

鉄鏃（449）

やや多角形風に造形された無茎凹基式の鉄鏃である。鏃身の中央付近に箆の痕跡である木質が付着しているのが観察され，Ｘ線透過試験によってこの部分に穿孔があることが判明している。この穿孔は，箆を鏃身に緊結するためのものであることは明らかである。小型の弥生時代特有の鉄鏃である。

鉄板状鉄製品（452・453）

やや厚手の不定形の小鉄片（452）と三角形の無茎鏃の未製品（453）と推定されるものがある。前者は側縁の破断面に何ら加工の痕跡は認められないが，後者は鏃の刃部になるとみられる両側縁を鍛打によって薄く加工して刃部をつくりだしている。基部や逆刺の加工はなされておらず，何らかの理由で製作途中で放棄されたものとみられる。このようなことから不定形の小鉄片（452）も，大きさや形状から推定して，同様な鉄鏃を製作する素材として準備されたものと推定される。

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
1	弥生土器	壺	口縁部		黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB01	
2	弥生土器	壺	口縁部		黄褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB01	
3	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB01	凹線一条
4	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒若干	やや甘い	不良	SB01	
5	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB01	
6	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒少し	普通	普通	SB01	外面スス付着
7	弥生土器	甕	口縁部		明黄褐色	砂粒多し	やや甘い	やや不良	SB01	
8	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒若干	やや甘い	不良	SB01	
9	土師器	甕	口縁部	復元口径16.8cm，1/3残	淡黄褐色	砂粒少し	やや良い	やや不良	SB01	
10	弥生土器	甕	口縁部	復元口径16.6cm，1/7残	黄褐色	砂粒若干	普通	不良	SB01	
11	弥生土器	甕	口縁部	復元口径17.4cm，1/6残	赤橙色	砂粒多し	普通	不良	SB01	
12	弥生土器	高杯	口縁部		淡黄褐色	砂粒僅か	普通	やや良い	SB01	
13	弥生土器	高杯	口縁部		淡黄橙色	砂粒若干	やや良い	やや不良	SB01	凹線三条
14	土師器	高杯	口縁部		黄褐色	微砂粒若干	良い	やや不良	SB01	
15	弥生土器		底部	復元底径6.4cm，1/3残	赤橙色	微砂粒若干	普通	不良	SB01	
16	弥生土器		底部		淡黄褐色	砂粒少し	やや良い	普通	SB01	
17	須恵器	壺	底部	復元底径11.2cm，2/5残	青灰色	砂粒多し	良好	良好	SB01	長頸壺
18	土師器	甕	口縁部	復元口径28.6cm	黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB01	
19	弥生土器	壺	口縁部	復元口径10.8cm，1/6残	淡黄灰色	微砂粒少し	やや甘い	不良	SB02	
20	弥生土器	壺	頸部		淡黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB02	
21	弥生土器	壺	頸部		黄褐色	微砂粒若干	やや良い	普通	SB02	
22	弥生土器	壺	頸部		淡茶褐色	砂粒若干	やや良い	普通	SB02	
23	弥生土器	壺	口縁部	復元口径16.2cm，1/9残	黄白色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB02	
24	弥生土器	壺	口縁部	復元口径20.8cm，1/6残	黄白色	砂粒多し	普通	不良	SB02	
25	弥生土器	甕	口縁部	復元口径19.6cm，1/7残	淡黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB02	
26	弥生土器	甕	口縁部		淡黒褐色	微砂粒若干	普通	不良	SB02	
27	弥生土器	壺	頸部		黄褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB02	
28	弥生土器	甕	口縁部		黄白色	微砂粒若干	やや甘い	不良	SB02	
29	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒若干	普通	普通	SB02	
30	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒若干	良い	普通	SB02	凹線一条
31	弥生土器	甕	胴部	復元胴部径17.8cm，1/4残	淡黄橙色	砂粒多し	普通	普通	SB02	
32	弥生土器	鉢	胴部	復元頸部径8.6cm，1/3残	淡黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB02	
33	弥生土器	高杯	口縁部		黄褐色	微砂粒若干	やや良い	やや不良	SB02	
34	弥生土器	高杯	口縁部		淡黄褐色	微砂粒多し	やや甘い	不良	SB02	
35	土師器	高杯	口縁部		淡赤橙色	微砂粒僅か	良い	良い	SB02	
36	土師器	高杯	杯底部		黄橙色	微砂粒若干	普通	普通	SB02	
37	弥生土器		脚台	復元脚径9.0cm，1/3残	淡黄褐色	砂粒多し	普通	普通	SB02	
38	弥生土器	椀		口径6.0cm，器高2.2cm，70%残存	淡黄橙色	砂粒少し	普通	不良	SB02	
39	弥生土器		底部	復元底径10.0cm，1/4残	淡黄橙色	砂粒若干	普通	やや不良	SB02	
40	弥生土器		底部	復元底径5.6cm，1/4残	淡黄褐色	砂粒多し	普通	普通	SB02	
41	弥生土器		底部	復元底径9.6cm，1/6残	黄褐色	砂粒僅か	普通	やや不良	SB02	
42	弥生土器		底部	復元底径10.8cm，1/8残	淡黄褐色	砂粒若干	良い	普通	SB02	
43	弥生土器		底部	復元底径5.4cm，1/4残	淡黄褐色	砂粒多し	普通	やや良い	SB02	

出土遺物（土器）観察表1

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
44	弥生土器		底部	復元底径5.6cm，1/4残	淡黄褐色	砂粒少し	良い	普通	SB02	
45	弥生土器		底部	復元底径8.2cm，1/6残	黒褐色	砂粒多し	やや甘い	やや不良	SB02	
46	有孔円盤								SB02	土器転用品，孔は途中まで
47	弥生土器	壺	口縁部	復元口径14.6cm，2/17残	黄褐色	微砂粒若干	普通	普通	SB03	
48	土師器	壺	口縁部	復元口径15.4cm，2/11残	黄褐色	砂粒若干	普通	普通	SB03	
49	弥生土器	甕	口縁部	復元口径15.0cm，2/13残	淡黒褐色	砂粒若干	良い	良い	SB03	
50	弥生土器	壺	口縁部		黄褐色	砂粒多し	やや甘い	やや不良	SB03	
51	弥生土器	壺	頸部	復元頸部径11.0cm，1/6残	黄褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB03	
52	土師器	甕	口縁部	復元口径20.4cm，1/6残	黄褐色	砂粒若干	良い	普通	SB03	
53	土師器	甕		口径11.6cm，器高24.8cm	黄褐色	砂粒少し	普通	普通	SB03	
54	土師器	甕	口縁部	復元口径16.6cm	黄褐色	砂粒若干	やや甘い	不良	SB03	
55	弥生土器	甕		復元口径16.6cm，器高27.5cm	黄褐色	砂粒若干	普通	不良	SB03	
56	土師器	甕	口縁部	復元口径13.1cm	黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB03	
57	弥生土器	甕	口縁部	復元口径13.8cm，1/6残	黄褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB03	
58	弥生土器	甕	口縁部	復元口径25.4cm，1/7残	黄褐色	砂粒若干	普通	不良	SB03	
59	土師器	甕	口縁部	復元口径12.6cm，1/3残	淡茶褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB03	
60	土師器	甕	口縁部	復元口径16.0cm	黄褐色	砂粒少し	やや甘い	普通	SB03	
61	土師器	甕		復元口径10.0cm，器高10.5cm	黄橙色	砂粒多し	やや甘い	やや不良	SB03	
62	土師器	甕	口縁部	口径13.0cm	黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB03	
63	弥生土器	甕	口縁部	復元口径10.6cm，1/4残	黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB03	
64	土師器	甕	口縁部	復元口径11.0cm，1/5残	黄褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB03	
65	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒少し	普通	普通	SB03	
66	土師器	甕	口縁部		淡黒褐色	微砂粒少し	普通	不良	SB03	
67	弥生土器	甕	口縁部		赤橙色	砂粒少し	普通	不良	SB03	
68	弥生土器	甕	口縁部		淡赤橙色	砂粒少し	やや甘い	やや不良	SB03	
69	土師器	壺	胴部	胴部径12.1cm	赤橙色	砂粒少し	良い	やや不良	SB03	
70	土師器	椀		口径14.9cm，器高5.6cm	黄褐色	砂粒少し	普通	普通	SB03	
71	弥生土器		底部	復元底径6.4cm，2/9残	淡黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB03	
72	弥生土器		底部	復元底径6.0cm，1/4残	淡黒褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB03	
73	土師器	高杯	口縁部	復元口径19.2cm	赤橙色	砂粒若干	やや良い	やや不良	SB03	
74	弥生土器	高杯	口縁部		淡黄褐色	砂粒若干	やや良い	不良	SB03	
75	土師器	高杯	口縁部		赤橙色	砂粒僅か	良好	良好	SB03	
76	土師器	高杯	口縁部		黄褐色	砂粒多し	普通	普通	SB03	
77	弥生土器	高杯	柱部		淡茶褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB03	
78	土師器	高杯	脚柱部		淡黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB03	円形透かしあり
79	土師器	高杯	柱部		淡黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB03	
80	土師器	高杯	脚柱部	復元脚端径11.4cm	黄褐色	砂粒若干	やや甘い	やや不良	SB03	
81	土師器	高杯	脚部	復元口径11.4cm	淡黒褐色	砂粒僅か	普通	やや不良	SB03	
82	弥生土器	壺	頸部	復元頸部径12.2cm，1/4残	黄褐色	砂粒若干	普通	不良	SB04	
83	弥生土器	甕	口縁部	復元口径13.6cm，1/6残	淡赤褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB04	
84	弥生土器		底部	復元底径4.2cm，2/9残	淡黄褐色	砂粒多し	普通	普通	SB04	
85	弥生土器		底部	復元底径3.8cm，2/7残	淡黄褐色	砂粒僅か	甘い	不良	SB04	

出土遺物（土器）観察表２

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
86	弥生土器		底部	復元底径7.0cm，1/6残	淡黄褐色	砂粒若干	良い	普通	SB04	
87	弥生土器	高杯	口縁部	復元口径27.8cm，1/4残	黄褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB04	
88	弥生土器	高杯	脚柱部	復元脚端径8.6cm，1/4残	黄褐色	微砂粒少し	普通	不良	SB04	
89	弥生土器	高杯	脚柱部	脚端径5.0cm	黒褐色	砂粒多し	やや良い	普通	SB04	
90	弥生土器	甕	口縁部		黒褐色	砂粒多し	普通	普通	SB05	
91	弥生土器	壺	口縁部	復元口径11.6cm，1/3残	淡黄褐色	微砂粒若干	普通	やや不良	SB05	
92	弥生土器	甕	口縁部	復元口径14.8cm，1/4残	黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB05	
93	土師器	甕	口縁部	復元口径16.8cm，1/3残	黄褐色	微砂粒若干	普通	普通	SB05	
94	土師器	甕	口縁部	復元口径15.8cm，1/2残	淡黄褐色	砂粒若干	普通	普通	SB05	
95	弥生土器		底部	復元底径6.0cm，1/4残	淡黄褐色	砂粒多し	良い	普通	SB05	
96	土師器	椀		口径11.6cm，器高6.6cm	黄褐色	砂粒多し	普通	普通	SB05	
97	土師器	手捏ね		復元口径10.2cm，器高5.7cm，1/5残	黄褐色	砂粒多し	やや甘い	やや不良	SB05	
98	弥生土器	椀		復元口径17.6cm，器高8.1cm，1/5残	黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB05	
99	弥生土器	高杯	口縁部	復元口径19.8cm，1/7残	淡赤橙色	微砂粒僅か	良い	普通	SB05	
100	土師器	高杯	脚端部	復元脚端径14.2cm，1/6残	淡黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB05	円形透かしあり
101	弥生土器	高杯	脚端部	復元脚端径11.4cm，2/9残	黄褐色	砂粒少し	普通	普通	SB05	
102	弥生土器	壺	頸部		淡黄褐色	砂粒少し	良い	普通	SB06	二重口縁壺
103	弥生土器	甕	口縁部	復元口径14.0cm，1/3残	黄褐色	砂粒若干	やや甘い	不良	SB06	
104	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB06	
105	土師器	甕	口縁部	復元口径16.6cm，1/4残	黄褐色	砂粒若干	やや甘い	不良	SB06	
106	弥生土器	鉢	口縁部		黄褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB06	
107	土師器	鉢	口縁部		黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB06	
108	弥生土器	椀	口縁部	復元口径12.6cm，2/3残	茶褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB06	
109	弥生土器		底部	底径6.2cm	淡黒褐色	砂粒若干	普通	不良	SB06	
110	弥生土器		底部	復元底径6.2cm，1/5残	黒褐色	砂粒若干	普通	普通	SB06	
111	土師器		底部		黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB06	
112	土師器	壺	口縁部		黄褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB07	
113	弥生土器	甕	口縁部	復元口径13.2cm，1/7残	黄褐色	砂粒若干	普通	不良	SB07	
114	弥生土器	甕	口縁部	復元口径15.4cm，2/7残	淡黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB07	
115	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB07	
116	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB07	
117	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB07	
118	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB07	
119	土師器	高杯	口縁部	復元口径13.0cm，1/6残	黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB07	
120	土師器	高杯	脚部	復元脚端径14.2cm，2/5残	黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB07	
121	弥生土器		底部		黄褐色	砂粒多し	やや甘い	やや不良	SB07	
122	弥生土器		底部	底径4.9cm	黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB07	
123	弥生土器	壺	口縁部		黄白色	砂粒若干	普通	不良	SB08	
124	土師器	甕	口縁部	復元口径16.6cm，1/9残	淡黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB08	
125	土師器	甕	頸部	復元頸部径11.8cm，2/9残	黄褐色	砂粒少し	良い	普通	SB08	
126	土師器	甕	口縁部		黄橙色	砂粒多し	普通	やや不良	SB08	
127	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒少し	普通	不良	SB08	
128	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	やや良い	やや不良	SB08	

出土遺物（土器）観察表３

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
129	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒多し	甘い	不良	SB08	
130	弥生土器	甕	口縁部		黒褐色	微砂粒若干	普通	やや不良	SB08	
131	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒若干	やや甘い	不良	SB08	
132	弥生土器		底部		淡茶褐色	砂粒少し	普通	普通	SB08	
133	土師器	壺		復元口径23.3cm，1/5残	淡黄褐色	砂粒若干	良い	普通	SB09	
134	弥生土器	甕		復元口径14.2cm	黄褐色	砂粒若干	普通	不良	SB09	
135	弥生土器	甕	口縁部	復元口径14.7cm，1/6残	淡黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB09	
136	土師器	甕		口径15.6cm	淡黄褐色	微砂粒多し	普通	普通	SB09	
137	土師器	甕	口縁部	復元口径16.4cm，1/4残	黄灰色	砂粒若干	普通	やや不良	SB09	
138	土師器	甕	口縁部	復元口径17.2cm，1/4残	黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB09	
139	土師器	甕		復元口径11.8cm，器高11.6cm	淡黄褐色	砂粒若干	普通	普通	SB09	
140	土師器	甕	口縁部	復元口径13.6cm，1/3残	黄褐色	砂粒僅か	普通	不良	SB09	
141	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SB09	
142	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒僅か	普通	普通	SB09	
143	弥生土器	甕	口縁部		淡黒褐色	微砂粒若干	普通	不良	SB09	
144	土師器	甕	口縁部		淡赤橙色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB09	
145	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒少し	やや甘い	不良	SB09	
146	弥生土器	甕	口縁部		淡赤橙色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB09	
147	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	やや甘い	やや不良	SB09	
148	弥生土器	甕	口縁部		黒褐色	砂粒僅か	普通	やや不良	SB09	
149	弥生土器	甕	口縁部		黄灰色	微砂粒若干	甘い	不良	SB09	
150	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB09	
151	土師器	椀		口径12.4cm，器高11.6cm	黄褐色	砂粒若干	やや甘い	不良	SB09	
152	土師器	高杯		復元口径12.8cm，復元脚端径12.8cm，器高8.5cm	黄褐色	微砂粒少し	普通	不良	SB09	
153	土師器	椀		復元口径14.4cm，器高7.9cm，2/5残	黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB09	
154	土師器	鉢	口縁部	復元口径16.2cm，1/6残	淡黄褐色	微砂粒僅か	普通	不良	SB09	
155	土師器	鉢	口縁部	復元口径12.8cm，2/3残	淡黄褐色	砂粒僅か	普通	不良	SB09	
156	土師器	椀		口径8.9cm，器高2.2cm	黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SB09	
157	土師器	椀	口縁部		赤橙色	砂粒僅か	良好	不良	SB09	
158	土師器	椀	口縁部		赤橙色	砂粒僅か	普通	やや不良	SB09	
159	弥生土器？	壺？	口縁部		淡黄褐色	微砂粒若干	普通	普通	SB09	
160	土師器	椀	底部		赤橙色	砂粒僅か	良い	普通	SB09	
161	弥生土器		底部	復元底径7.0cm，1/5残	淡茶褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB09	
162	土師器	壺	底部	復元口径23.3cm，133の底部？1/5残	淡黄褐色	砂粒若干	良い	普通	SB09	
163	土師器		底部		黄白色	砂粒少し	やや甘い	やや不良	SB09	
164	土師器		底部		黄褐色	砂粒僅か	やや甘い	普通	SB09	
165	土師器	壺	口縁部		黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SB10	二重口縁壺・鋸歯文
166	弥生土器	壺	口縁部		淡茶褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB10	
167	弥生土器	壺	胴部	復元胴部径13.4cm，2/9残	黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB10	
168	土師器	甕	口縁部	復元口径16.3cm，1/3残	黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB10	
169	土師器	甕	口縁部	復元口径16.2cm，1/4残	淡黄褐色	砂粒少し	普通	普通	SB10	

出土遺物（土器）観察表4

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
170	土師器	甕	口縁部	復元口径15.0cm，1/6残	黄褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB10	
171	土師器	甕	口縁部	復元口径13.3cm，1/3残	黄橙色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB10	
172	土師器	甕	口縁部	復元口径17.2cm，1/6残	黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB10	
173	土師器	甕	口縁部	復元口径15.8cm，1/4残	黄橙色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB10	
174	土師器	甕	口縁部	復元口径18.0cm，1/4残	黄白色	砂粒多し	普通	不良	SB10	
175	土師器	甕	口縁部	復元口径16.1cm，1/3残	黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB10	
176	土師器	甕	口縁部	復元口径14.6cm，1/6残	黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB10	
177	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒若干	普通	不良	SB10	
178	土師器	甕	口縁部		淡赤橙色	砂粒多し	普通	不良	SB10	
179	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB10	
180	土師器	甕	口縁部		淡茶褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB10	
181	土師器	甕	口縁部		茶褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB10	
182	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	普通	普通	SB10	スス付着
183	土師器	甕	口縁部		黒褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB10	
184	土師器	甕	口縁部	復元口径14.2cm，1/4残	黄橙色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB10	
185	土師器	甕		復元口径11.0cm，1/3残	黒褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB10	
186	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB10	
187	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒若干	普通	普通	SB10	
188	土師器	甕	口縁部		淡茶褐色	砂粒多し	普通	不良	SB10	
189	土師器	椀		復元口径14.6cm，2/9残	黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB10	
190	土師器	椀		復元口径15.7cm，器高5.7cm	黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB10	
191	土師器	椀		復元口径18.8cm，器高9.7cm，2/3残	黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB10	
192	土師器	椀	口縁部	復元口径16.2cm，1/4残	淡黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB10	
193	土師器	椀	口縁部	復元口径13.2cm，1/6残	黄白色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB10	
194	土師器	椀	口縁部	復元口径13.0cm，1/6残	淡茶褐色	砂粒多し	普通	不良	SB10	
195	土師器	椀		復元口径11.8cm，器高4.6cm，1/3残	淡黄褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB10	
196	土師器	椀	口縁部		黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB10	
197	弥生土器		底部	復元底径8.4cm，1/4残	淡黄褐色	砂粒少し	良い	良い	SB10	
198	弥生土器		底部	復元底径4.2cm，1/5残	淡茶褐色	砂粒若干	普通	普通	SB10	
199	弥生土器		底部		淡黄褐色	微砂粒多し	やや甘い	不良	SB10	
200	土師器	高杯	口縁部	復元口径22.4cm，1/5残	黄褐色	微砂粒少し	やや甘い	不良	SB10	
201	土師器	高杯	脚柱部	脚端径13.3cm	黄褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB10	
202	土師器	高杯	口縁部	復元口径12.2cm，1/8残	黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SB10	
203	土師器	高杯	口縁部	復元口径20.0cm，1/8残	黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB10	
204	土師器	椀	口縁部		黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SB10	
205	土師器	高杯	脚端部		黄褐色	砂粒僅か	普通	不良	SB10	
206	弥生土器	壺	口縁部	復元口径13.3cm，1/6残	淡黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB11	
207	弥生土器	壺	口縁部		黄褐色	砂粒僅か	普通	不良	SB11	
208	弥生土器	壺	口縁部		黄褐色	砂粒若干	普通	不良	SB11	
209	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒少し	普通	普通	SB11	
210	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒少し	やや良い	普通	SB11	
211	弥生土器	壺	口縁部	復元口径19.0cm，1/4残	黒褐色	砂粒若干	やや甘い	普通	SB11	

出土遺物（土器）観察表５

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
212	弥生土器	甕	口縁部	復元口径17.0cm，1/6残	黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB11	
213	土師器	甕		口径15.0cm，器高25.1cm，胴部径22.7cm，頸部径11.6cm	黄褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB11	スス付着
214	土師器	甕	口縁部	復元口径16.1cm，1/6残	黄褐色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB11	
215	土師器	甕	口縁部	復元口径15.0cm，1/4残	赤橙色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB11	
216	土師器	甕	口縁部	復元口径11.0cm，1/5残	黄白色	砂粒少し	甘い	不良	SB11	
217	弥生土器	甕	口縁部		淡黒褐色	砂粒若干	良い	良い	SB11	
218	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB11	
219	弥生土器	甕	口縁部		黄橙色	砂粒若干	やや甘い	不良	SB11	
220	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	微砂粒少し	普通	普通	SB11	
221	弥生土器	椀		復元口径11.5cm，1/5残	黄褐色	砂粒僅か	普通	やや不良	SB11	
222	弥生土器	甕	口縁部		淡茶褐色	砂粒多し	普通	不良	SB11	
223	土師器	高杯	口縁部	口径21.8cm	黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB11	
224	弥生土器	高杯	口縁部		赤橙色	砂粒僅か	普通	不良	SB11	
225	弥生土器	高杯	柱部		黄褐色	砂粒僅か	普通	不良	SB11	
226	土師器	高杯	脚柱部		赤褐色	微砂粒若干	普通	普通	SB11	
227	弥生土器	高杯	柱部	1/3残	黄褐色	砂粒若干	普通	不良	SB11	
228	土師器	高杯	杯底部		茶褐色	砂粒少し	良い	やや不良	SB11	
229	土師器	鍋	口縁部	復元口径32.5cm，1/9残	黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB11	
230	弥生土器		底部		淡黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB11	
231	弥生土器		底部		赤橙色	砂粒少し	普通	やや不良	SB11	
232	弥生土器		底部		淡黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB11	
233	土師器	壺	口縁部	復元口径15.5cm，2/3残	黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB12	
234	土師器	壺	口縁部	復元口径17.5cm，2/5残	淡黄褐色	微砂粒少し	普通	やや不良	SB12	
235	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒僅か	普通	不良	SB12	
236	土師器	壺	口縁部	復元口径19.0cm，1/5残	黄褐色	砂粒若干	普通	不良	SB12	
237	土師器	甕		復元口径19.2cm，2/13残	淡黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB12	
238	土師器	甕		復元口径13.0cm，2/9残	黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB12	
239	土師器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒少し	普通	やや不良	SB12	
240	土師器	甕	口縁部	復元口径18.5cm，1/5残	赤褐色	砂粒少し	普通	不良	SB12	
241	土師器	鉢			黄白色	微砂粒僅か	やや甘い	不良	SB12	
242	土師器	椀		復元口径16.0cm，1/2残	赤橙色	砂粒多し	普通	やや不良	SB12	
243	土師器	椀		復元口径13.2cm，1/2残	黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB12	
244	土師器	椀		口径10.8cm，器高5.3cm	淡黄白色	砂粒少し	普通	やや不良	SB12	
245	土師器	高杯	杯底部		黄褐色	砂粒僅か	普通	やや不良	SB12	
246	土師器	椀	底部		赤橙色	砂粒僅か	普通	不良	SB12	
247	土師器	椀	口縁部	復元口径21.8cm，1/6残	黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SB12	
248	土師器	高杯	柱部		淡黄褐色	砂粒若干	普通	普通	SB12	
249	土師器	高杯	脚部	脚端径11.5cm	黄褐色	微砂粒僅か	普通	やや不良	SB12	
250	土師器	高杯	脚柱部	復元脚端径14.8cm，1/3残	黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SB12	
251	弥生土器		底部		淡黄褐色	微砂粒僅か	やや良い	普通	SB12	
252	土師器		底部		赤橙色	砂粒少し	普通	不良	SB12	
253	土師器		底部		黄褐色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB12	
254	土師器	壺	口縁部	口径15.8cm	黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB13	

出土遺物（土器）観察表６

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
255	土師器	壺	口縁部	口径12.2cm	黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB13	
256	土師器	壺	胴部	胴部径11.0cm	淡黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB13	
257	土師器	壺	胴部	胴部径8.9cm	淡黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB13	
258	土師器	壺	胴部	復元胴部径16.0cm，1/7残	黄褐色	砂粒僅か	普通	やや不良	SB13	
259	土師器	壺	胴部	無頸壺，復元胴部径15.1cm，1/6残	黄褐色	砂粒僅か	普通	やや不良	SB13	
260	土師器	壺	口縁部		淡黒褐色	砂粒多し	普通	不良	SB13	無頸壺？
261	土師器	壺	頸部		黄白色	微砂粒若干	普通	やや不良	SB13	
262	土師器	甕	口縁部	口径15.8cm	黄褐色	微砂粒多し	普通	やや不良	SB13	
263	土師器	甕	口縁部	口径17.8cm	黄褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB13	
264	土師器	甕		口径16.0cm	黄褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB13	スス付着
265	土師器	甕	口縁部	復元口径15.8cm，1/8残	淡黄褐色	砂粒若干	やや甘い	不良	SB13	
266	土師器	甕	口縁部	復元口径16.0cm，2/9残	黄褐色	砂粒若干	普通	やや不良	SB13	
267	土師器	甕		復元口径14.0cm，1/5残	黄橙色	砂粒多し	普通	やや不良	SB13	
268	土師器	甕	口縁部	復元口径15.5cm，1/2残	黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB13	
269	土師器	甕	口縁部	復元口径14.3cm，1/6残	黄褐色	砂粒多し	やや良い	普通	SB13	
270	土師器	甕	口縁部	口径15.1cm	黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB13	
271	土師器	甕	口縁部	復元口径15.0cm，1/6残	淡黄褐色	砂粒若干	やや甘い	不良	SB13	
272	土師器	甕	口縁部	口径18.6cm	黄白色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB13	
273	土師器	甕	口縁部	口径15.5cm	黄褐色	微砂粒多し	普通	不良	SB13	
274	土師器	甕	口縁部	復元口径17.0cm，1/3残	淡黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB13	
275	土師器	甕	口縁部	復元口径16.7cm，1/3残	黄褐色	砂粒少し	やや良い	やや不良	SB13	
276	土師器	甕	口縁部	復元口径15.4cm，1/3残	淡黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB13	
277	土師器	甕	口縁部	口径16.2cm	黄橙色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB13	
278	土師器	甕	口縁部	復元口径14.6cm，1/5残	黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB13	
279	土師器	甕	口縁部	復元口径17.0cm，2/13残	黄褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB13	
280	土師器	甕	口縁部	復元口径12.0cm，2/9残	黄白色	砂粒少し	普通	不良	SB13	
281	土師器	甕	口縁部	復元口径18.7cm，1/6残	淡黄褐色	砂粒少し	やや甘い	やや不良	SB13	
282	土師器	壺	口縁部	復元口径16.3cm，2/9残	黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB13	
283	土師器	甕	口縁部	復元口径15.6cm，1/3残	黄橙色	砂粒多し	普通	やや不良	SB13	
284	土師器	甕	口縁部	復元口径20.4cm，1/10残	黄褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB13	
285	土師器	甕	口縁部	復元口径14.4cm，2/11残	黄橙色	砂粒少し	普通	不良	SB13	
286	土師器	甕	口縁部	復元口径13.8cm，1/4残	黄橙色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB13	
287	土師器	甕		口径15.9cm	淡黄褐色	微砂粒若干	普通	不良	SB13	
288	土師器	甕	口縁部	復元口径16.0cm，1/3残	淡黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SB13	
289	土師器	甕	口縁部	復元口径16.1cm，1/5残	黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB13	
290	土師器	甕		口径17.9cm×15.9cm，器高13.9cm	黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB13	
291	土師器	甕		口径16.4cm，器高19.3cm	黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB13	
292	土師器	甕	口縁部	復元口径14.8cm，1/4残	黄白色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB13	
293	土師器	甕	口縁部	復元口径14.4cm，1/3残	黄白色	砂粒少し	甘い	不良	SB13	
294	土師器	甕		口径13.8cm，器高13.5cm	淡黄褐色	微砂粒若干	普通	やや不良	SB13	
295	土師器	甕		口径12.7cm	黄白色	砂粒僅か	甘い	不良	SB13	
296	土師器	甕		口径11.6cm，13.3cm	黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB13	
297	土師器	甕	口縁部	復元口径19.8cm，1/5残	赤橙色	砂粒多し	普通	不良	SB13	

出土遺物（土器）観察表７

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
298	土師器	甕		口径13.2cm	黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB13	
299	土師器	甕	口縁部	復元口径10.8cm，1/4残	黄橙色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB13	
300	土師器	甕		胴部径14.4cm	黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB13	
301	土師器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB13	
302	土師器	甕	口縁部		黄白色	砂粒僅か	普通	やや不良	SB13	
303	土師器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒僅か	普通	普通	SB13	
304	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB13	
305	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB13	
306	土師器	甕	口縁部		黄白色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB13	
307	土師器	甕	口縁部		淡赤橙色	砂粒少し	普通	やや不良	SB13	
308	土師器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB13	
309	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB13	
310	土師器	甕	口縁部		淡茶褐色	砂粒多し	普通	普通	SB13	
311	土師器	甕	口縁部	復元口径16.8cm，2/11残	黄褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB13	
312	土師器	甕	口縁部	復元口径16.5cm，1/3残	淡黄褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB13	
313	土師器	甕	口縁部	口径13.4cm	淡黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB13	
314	土師器	甕	口縁部	復元口径13.8cm，1/4残	黄白色	砂粒少し	普通	不良	SB13	
315	土師器	甕	口縁部	復元口径13.7cm，1/7残	黄褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB13	
316	土師器	甕		復元口径12.6cm，器高12.5cm	赤橙色	砂粒少し	普通	不良	SB13	
317	土師器	甕	口縁部	復元口径14.4cm，1/8残	淡黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SB13	
318	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB13	
319	土師器	甕	口縁部	復元口径16.5cm，1/5残	淡黄褐色	微砂粒若干	普通	やや不良	SB13	
320	土師器	甕	口縁部	復元口径15.3cm，2/9残	淡黄褐色	微砂粒若干	やや良い	やや不良	SB13	
321	土師器	甕	口縁部		黄白色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB13	
322	土師器	甕	胴部	復元胴部径19.4cm	黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB13	
323	弥生土器		底部	底径4.6cm	淡黄褐色	砂粒少し	良い	普通	SB13	
324	弥生土器		底部		茶褐色	砂粒多し	普通	普通	SB13	ボタン状
325	土師器		底部		淡赤橙色	砂粒多し	普通	やや不良	SB13	
326	土師器		底部		淡黄橙色	砂粒若干	普通	やや不良	SB13	
327	弥生土器		底部	底径3.2cm	赤橙色	砂粒若干	普通	不良	SB13	
328	土師器	椀		口径19.0cm，器高7.8cm	黄褐色	砂粒多し	やや甘い	やや不良	SB13	
329	土師器	椀		口径18.0cm，器高8.2cm	淡赤橙色	砂粒多し	普通	不良	SB13	
330	土師器	椀		復元口径15.2cm，器高5.2cm	黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB13	
331	土師器	椀		口径15.0cm，器高6.2cm	黄褐色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB13	
332	土師器	椀		復元口径10.4cm，1/2残	淡黄褐色	砂粒多し	やや甘い	普通	SB13	
333	土師器	長頸壺		口径10.8cm，器高19.5cm	黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SB13	
334	土師器	高杯	脚柱部		赤褐色	微砂粒僅か	普通	やや不良	SB13	
335	土師器	高杯	口縁部	復元口径12.6cm，1/7残	赤橙色	微砂粒僅か	普通	やや不良	SB13	
336	土師器	高杯		円形透かし，口径22.0cm，脚径14.7cm，器高16.7cm	赤橙色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB13	円形透かし
337	須恵器	杯身	口縁部	復元口径17.1cm，1/6残	青灰色	砂粒僅か	良好	良好	SB13	
338	土師器	甕		復元口径19.6cm，1/2残	淡黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB14	
339	土師器	甕		口径14.8cm	淡赤橙色	砂粒少し	普通	普通	SB14	

出土遺物（土器）観察表８

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
340	土師器	甕	口縁部	復元口径15.8cm，1/6残	黄褐色	砂粒僅か	普通	普通	SB14	
341	土師器	甕	口縁部		淡黄橙色	砂粒多し	普通	やや不良	SB14	
342	弥生土器	甕	口縁部		黄橙色	砂粒少し	普通	やや不良	SB14	
343	土師器	高杯	脚部	復元脚端径6.4cm，2/9残	淡黄褐色	微砂粒僅か	普通	不良	SB14	
344	土師器	椀		復元口径7.2cm，1/4残	淡黒褐色	微砂粒多し	普通	不良	SB14	
345	弥生土器		底部		黄褐色	微砂粒僅か	普通	やや不良	SB14	
346	弥生土器	甕	口縁部		黒褐色	砂粒多し	普通	不良	SB15	
347	弥生土器	甕	口縁部		黄白色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB15	
348	弥生土器	甕	口縁部		黄白色	微砂粒多し	やや甘い	不良	SB15	
349	弥生土器	甕	頸部		淡黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SB15	
350	土師器	壺	口縁部	復元口径16.0cm，1/8残	黄褐色	微砂粒僅か	普通	不良	SB16	
351	土師器	甕	口縁部		黄橙色	砂粒若干	良い	やや良い	SB16	
352	土師器	甕	口縁部		黄褐色	微砂粒僅か	普通	普通	SB16	
353	土師器	甕	口縁部	復元口径15.1cm，2/11残	淡黄褐色	砂粒少し	普通	普通	SB16	
354	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SB16	
355	土師器	甕	口縁部		黒褐色	砂粒多し	やや甘い	不良	SB16	
356	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	普通	普通	SB16	
357	土師器	甕	口縁部		赤褐色	砂粒僅か	やや良い	普通	SB16	
358	土師器	甕	口縁部		黄白色	砂粒僅か	普通	不良	SB16	
359	土師器	椀		復元口径6.6cm，器高1.7cm	茶褐色	砂粒若干	普通	普通	SB16	
360	土師器	椀		口径6.4cm，器高2.2cm	黄褐色	砂粒少し	普通	普通	SB16	
361	土師器		底部		黄白色	微砂粒僅か	普通	不良	SB16	
362	土師器	高杯	脚部	復元脚端径12.0cm，1/6残	赤褐色	砂粒少し	普通	不良	SB16	
363	土師器	壺	口縁部	口径14.3cm	淡黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB17	
364	土師器	甕		口径16.3cm，器高24.0cm	淡赤橙色	砂粒多し	普通	不良	SB17	
365	土師器	甕	口縁部	スス付着，復元口径15.0cm	赤橙色	砂粒多し	普通	やや不良	SB17	スス付着
366	土師器	甕	口縁部	口径15.8cm	赤橙色	微砂粒多し	普通	不良	SB17	
367	土師器	甕	口縁部	口径16.5cm	淡赤橙色	砂粒少し	普通	やや不良	SB17	
368	土師器	甕	口縁部	口径16.4cm	淡黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SB17	
369	土師器	甕	口縁部	復元口径15.9cm，1/4残	淡黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB17	
370	土師器	甕	口縁部	口径14.8cm	黄褐色	微砂粒若干	普通	やや不良	SB17	
371	土師器	甕	口縁部	復元口径15.3cm，1/4残	淡黄白色	砂粒少し	普通	普通	SB17	
372	土師器	甕	口縁部	復元口径14.8cm，2/9残	赤橙色	砂粒多し	良い	普通	SB17	
373	土師器	甕		復元口径12.9cm，2/5残	黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB17	
374	土師器		底部		黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SB17	
375	土師器	椀		口径12.2cm，器高6.3cm	淡黄褐色	砂粒多し	普通	不良	SB17	
376	土師器	椀		口径13.6cm，器高6.0cm	赤橙色	砂粒僅か	普通	やや不良	SB17	
377	土師器	椀	口縁部	復元口径15.4cm，1/2残	黄白色	微砂粒少し	普通	不良	SB17	
378	土師器	椀		口径16.4cm，器高7.5cm	赤橙色	砂粒多し	普通	不良	SB17	
379	土師器	椀		口径8.2cm，器高4.5cm	淡黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SB17	
380	土師器	椀		口径8.4cm，器高2.3cm	黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SB17	
381	土師器	椀		口径8.9cm，器高2.2cm	淡黒褐色	砂粒多し	普通	不良	SB17	
382	土師器	高杯		口径20.6cm，器高16.6cm	黄橙色	砂粒僅か	やや甘い	不良	SB17	

出土遺物（土器）観察表９

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
383	土師器	高杯	脚柱部	復元脚端径16.8cm	黄白色	砂粒少し	やや甘い	不良	SB17	
384	土師器	甕		復元口径16.6cm，器高20.4cm，1/2残	黄褐色	砂粒少し	普通	普通	SK03	
385	土師器	甕	口縁部	復元口径12.0cm，2/9残	黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SK03	
386	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒僅か	普通	普通	SK03	
387	弥生土器	甕	口縁部	復元口径13.7cm，2/13残	淡黄褐色	微砂粒僅か	やや甘い	不良	SK03	
388	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SK03	
389	弥生土器	壺	胴部		黄褐色	微砂粒僅か	普通	やや不良	SK03	貼付凸帯＋刻目
390	弥生土器		底部	復元底径5.6cm，1/5残	淡黄褐色	砂粒少し	普通	普通	SK01	
391	土師質土器	土鍋			黒褐色	微砂粒少し	普通	やや不良	SK10	
392	土師質土器	土鍋	口縁部	復元口径28.4cm，1/6残	淡黒褐色	砂粒僅か	普通	普通	SK10	
393	弥生土器	椀		復元口径8.5cm，1/7残	淡黄褐色	微砂粒多し	普通	不良	SK11	
394	土師器	壺	口縁部	復元口径4.4cm，2/9残	黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SK13	
395	土師器	壺		口径9.2cm，器高6.2cm	黄褐色	微砂粒少し	普通	不良	SK13	小型丸底壺
396	土師器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒僅か	普通	やや不良	SK13	スス付着
397	須恵器	杯蓋	口縁部	復元口径16.2cm，1/4残	淡青灰色	砂粒若干	良好	良い	SK12	
398	須恵器	杯身		復元口径15.4cm，器高5.5cm，1/3残	淡青灰色	微砂粒若干	良好	良い	SK12	貼付高台
399	須恵器	壺	肩部	1/4残	淡青灰色	微砂粒若干	良好	良い	SK12	
400	土師器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SK12	
401	土師器	杯		復元口径12.8cm，2/7残	灰白色	微砂粒僅か	普通	普通	SK12	貼付高台
402	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒多し	普通	やや不良	SK26	
403	弥生土器	壺		復元口径13.0cm，器高63.1cm	黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SK22	
404	土師器	壺	口縁部	口径16.8cm	黒褐色	砂粒若干	普通	普通	SX02	
405	土師器	甕	口縁部	復元口径15.3cm，1/3残	淡黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SX02	
406	土師器	甕		口径16.3cm，器高24.3cm	黄褐色	砂粒少し	普通	やや不良	SX02	
407	土師器	甕	口縁部	復元口径14.6cm，1/5残	黄褐色	砂粒少し	やや甘い	不良	SX02	
408	土師器	甕	口縁部	復元口径16.4cm，1/2残	淡黄褐色	砂粒少し	普通	不良	SX02	
409	土師質土器	鍋	口縁部	復元口径57.4cm，1/4残	淡黒褐色	砂粒少し	普通	普通	SX04	
410	土師質土器	鍋	口縁部	復元口径36.6cm，1/4残	淡黒褐色	微砂粒少し	普通	やや不良	SX07	耳あり
411	弥生土器	高杯	杯部	口径18.0cm	黒褐色	砂粒僅か	普通	普通	中段中央	端部に刻目
412	弥生土器		底部	底径3.2cm	赤褐色	砂粒多し	普通	やや不良	下段西側	
413	弥生土器	蓋	つまみ部	つまみ径3.2cm	黄白色	砂粒僅か	普通	やや不良	下段西側	
414	須恵器	壺	口縁部		青灰色	砂粒僅か	良好	良好		
415	土師器	皿		復元口径7.2cm，器高1.4cm，1/2残	黄白色	微砂粒僅か	やや甘い	不良	F-9区	

出土遺物（土器）観察表10

遺物（石器・鉄器）計測表

遺物番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	出土地点	備考
416	石鏃	(33)	(20)	5	2.04	安山岩	SB02 No59	先端・片脚欠損
417	石鏃	22	(16)	3	0.61	珪質凝灰岩	SB11 北東区	両脚端欠損
418	石鏃	23	17	3	0.65	珪質凝灰岩	SX02	
419	石鏃	23	16	4	1.39	珪質凝灰岩	SB08 南東区	
420	石鏃	27	(18)	3.5	1.54	珪質凝灰岩	SB12 北西区	片脚端欠損
421	石鏃	20	(13)	3	0.75	珪質凝灰岩	SB08 北東区	片脚端欠損
422	石鏃	(18)	17	2.5	0.58	珪質凝灰岩	表採	先端欠損
423	石鏃	(21)	(16)	3	0.9	珪質凝灰岩	SB10 北側表採	基部欠損
424	石鏃	14	11	2	0.27	安山岩	SB08 西側畦	
425	石匙	45	73	5	20.31	珪質凝灰岩	SB03 No125	横型
426	刃器	42	(66)	6	23.1	珪質凝灰岩	SB02 No5	両側欠損
427	刃器	30	(46)	6	9.7	安山岩	SB14 北東区	両側欠損
428	砥石	(75)	21	20	57.37	砂岩？	SB16 北東区	片側欠損
429	砥石	197	39	13	284.2	細粒砂岩	SB09 No8, 9, 10	
430	砥石	111	75	56	719.2	細粒黒雲母花崗岩	SB03 No86	片側欠損
431	砥石	85	70	43	445.1	熱変質泥質岩	SB02 No40	部分片
432	砥石	158	106	64	1458.2	細粒黒雲母花崗岩	SB09 No 2	部分片
433	砥石	174	62	43	1002.5	黒雲母花崗岩	SB09 No112, 114	
434	砥石	251	79	78	2942.3	細粒半花崗岩	SB14 No21	
435	砥石	234	108	81	2960.2	細粒黒雲母花崗岩	SB09 No113	
436	砥石	154	180	56	2273.5	半花崗岩	SB13 No269	
437	砥石	165	154	69	2420.1	細粒黒雲母花崗岩	SB09 No25	部分片
438	砥石	168	172	37	1478.2	細粒黒雲母花崗岩	SX07 No 9	部分片
439	砥石	224	159	57	3818.2	結晶凝灰岩	SB04 No31	
440	砥石	298	140	75	4641.1	半花崗岩	表採	
441	台石	386	346	110	19132.1	細粒黒雲母花崗岩	SB12	
442	台石	368	300	85	15532.8	細粒黒雲母花崗岩	SB03	
443	鉄鎌	95	33	2.5	31.1	—	SB09 No103	
444	鉄鎌	64	32	3	38.9	—	SB03 No126	
445	鉄鎌	81	27	2.5	21.5	—	SB14 No31	
446	ヤリガンナ	134	10	4	18.2	—	SB01	
447	不明（鉄釘状）	91	5	5	8.8	—	SB10 南東区	茎部
448	不明（茎状）	38	8	4	4.3	—	SB10 No20	茎部
449	鉄鏃	26	21	2	3.3	—	SK27 No01	中央部に穿孔あり
450	不明（茎状）	21	4	2	0.6	—	SB09 No111	茎部
451	不明（茎状）	42	9	3	4.6	—	SB01 No41	茎部
452	鉄板	25	31	4	8.3	—	SB05 南東区	
453	鉄板	28	26	4	6.4	—	SB06 No40	

＊単位はmm，g　（　）は現在値

6 まとめ

塔之原遺跡は弥生時代後期末から古墳時代初頭頃の竪穴住居跡を主とした集落跡である。また，住居跡の他，土坑や掘立柱建物跡，性格不明遺構，溝状遺構を検出した。この他に，ほぼ同時期と思われる墳墓群も検出した。さらにこれらの遺構に伴って土器や石器，鉄器などの遺物も出土している。ここでは，これらのうち集落跡と遺構の主体をなす２本柱住居跡及び墳墓群について若干の検討を加えて結びとしたい。

（１）集落跡について

本遺跡で検出した住居跡の年代については各住居跡に供伴する遺物等の特徴から以下のような変遷を想定できる[1]。もちろん個々の住居跡は時間軸における点ではなくてある程度の時空間を持つ線として表現できるので，前後する時間軸上の点と共存関係にある可能性は否定できない。

竪穴住居跡変遷表

１期	ＳＢ２，ＳＢ４，ＳＢ15	（弥生時代後期後半相当）
	↓	
２期	ＳＢ１，ＳＢ５，ＳＢ７	（弥生時代後期末相当）
	↓	
３期	ＳＢ３，ＳＢ６，ＳＢ11，ＳＢ16	（弥生時代後期末～古墳時代初頭相当）
	↓	
４期	ＳＢ８，ＳＢ９，ＳＢ12，ＳＢ17	（古墳時代初頭相当）
	↓	
５期	ＳＢ10，ＳＢ14	（古墳時代初頭～前半相当）

全体的な土器相から見ればこれらの住居跡はかなり近接した年代を付与することが可能で，おおむね弥生時代後期後半相当期に最初の住居跡が出現し，以後弥生時代末から古墳時代初頭まで継続的に４軒前後の集落跡が営まれたと推定できる。そして，現状では古墳時代前半には集落は規模を縮小し廃絶されたようである。

（２）２本柱住居跡について

ここでは本遺跡の主体をなす竪穴住居跡とりわけ竪穴住居跡の2/3を占める２本柱構造の住居跡について若干の検討をする。

２本柱構造の住居跡はその起源及び展開については多くの論考があり，既に論じられてきたが，その性格については不明な部分が多い。

名称　先ずその呼称については中間研志[2]の「北部九州において，弥生前期から中期中葉（地域に

よっては中期後葉）までは，正円形に近い平面形をなす竪穴住居が圧倒的に盛行する。・・・（中略）・・・これらのうち，中央に楕円形の土坑を有し，その両端に二柱穴を持ち，他床面に主柱穴が認められないものを，韓国忠清南道扶余郡草村面所在の松菊里遺跡調査後，北部九州の一部研究者間で『松菊里型住居』と呼称してきた。・・(中略)・・ここではこれらのうち，基本的に正円形タイプのものに類似する日本例を『松菊里型住居』と呼んでおく。」に端的に示されている。

さらにそのタイプについては「即ち，「古期松菊里型住居」は，夜臼新式～板付Ⅱ式古段階までのもの。「新期松菊里型住居」は，前期末以降～中期前半までのものとする。更に，中央土坑両端の二主柱穴以外に，四本以上の主柱穴が床面に巡らされるものを「発展松菊里型住居」と呼ぶ。[3]」と細分している。

そして以後ここで提唱された呼称は定着するかに見えたのであるが，この中間論文から３年後に発表された石野博信『日本原始・古代住居の研究』[4]では北牟田型住居・神辺型住居なる言葉が登場する。

石野論文によると，「・・(中略)・・筑後・北牟田遺跡では，円形５・６主柱住居（円５＋型）の中央部に土坑があり，その両端に柱穴状小穴がある住居が三棟ある。土坑両端の小穴が柱穴であり，主柱穴となるかどうかは明らかではない。備後・神辺御領遺跡では，円形住居の中央部に土坑があり，土坑両端に主柱穴がある。つまり，住居周縁部には主柱穴がなく，中央部の二本の主柱によって上屋を支えていたらしい。・・(中略)・・北牟田遺跡の住居を北牟田型とし，神辺御領遺跡の住居を神辺型として，・・(以下略)・・」[5]。

さらに「北牟田型住居の中心地域と考えた筑後では，弥生時代後期に長方二柱穴の住居跡が主流となる（室岡型住居)。・・(中略)・・室岡型住居は，筑後を中心として，筑前・肥前・豊前各地域に分布する北部九州弥生後期の主要な住居型であり，・・(中略)・・」と室岡型住居が登場する。そして同論文では北牟田型→室岡型が想定されており，さらに神辺型も構造的に室岡型に極めて類似することから，積極的な根拠はないものの北牟田型→神辺型が予想されている。

以上，若干整理すると発展松菊里型住居＝北牟田型住居としてもよいだろう。神辺型住居と室岡型住居は発展松菊里型住居＝北牟田型住居の在地継承型と理解できる。

したがって，本遺跡で検出した住居跡を敢えて従来の呼称にあてはめれば，神辺型住居といえなくもない。ただしここでは無用の混乱を避けるため単に２本柱住居と呼称する。

性格　次に問題となるのはその性格である。わけても特徴的な中央土坑の解釈は重要である。中央土坑内から炭化物や灰などの炉としての使用を明瞭に示す事例と全くない事例の二通りが存在する。前者の場合は明らかに炉であるが，後者については炉を示す積極的な根拠に欠ける。ただし，引っ越しする際に灰などを住居外に廃棄する可能性は否定できないので，見つからないからといって直ちに炉跡ではないとは言えず，炉跡説も成立する。

したがって，後者の場合，この中央土坑の炉的使用を消去すれば，作業用土坑説が有力となる。

しかしながら作業に係わる道具類は中央土坑以外の場所からも出土している例があることから，必ずしも機能を裏付けるものではない。以上，現状では中央土坑の性格は炉と作業坑の二つの可能性が存在する。このことはこのタイプの住居の建築物としての機能が作業場と住居という全く別の可能性を持つことを示唆している。よって個々の機能については遺跡毎に類推するのが自然と思われる。

さて以上の事柄を考慮した上で改めて本遺跡で検出した２本柱住居について検討する。

構造　最初に検討したいのは中央土坑とそれを挟む二つの対向土坑の位置関係である。前述したように２本柱住居の核を形成するのは中央土坑と二柱穴である。二柱穴には棟持ち柱的な性格を持つものと作業用の支柱的性格を持つものに分離できるが，それは二柱穴間の距離や他の柱穴との関係である程度は推測可能である。

本遺跡の場合，ＳＢ２，ＳＢ３，ＳＢ５，ＳＢ９，ＳＢ11，ＳＢ12，ＳＢ16，ＳＢ17は床面上に他の主柱穴が確認できず，柱間距離も順に2.0，1.9，2.0，1.7，2.5，2.2，2.0，1.5m，平均値は1.97とほぼ２ｍとなる。さらに最大値と最短値を除外しても1.96mと概ね２ｍ前後に落ち着く。この柱間距離は本遺跡で検出した４本柱構造の竪穴住居跡のそれとほぼ同じ値となる。以上のことからこの対向柱穴は棟持ち柱と解したほうが自然である。

さらに中央土坑が確認できなかったＳＢ17を除く他の住居では中央土坑は中央部には留まるものの，二柱穴を結ぶ線の左右いずれかに偏在する。しかも多くの場合，中央土坑の周囲で二柱穴を結ぶ線上のほぼ中央には焼土が存在する。即ち中央部の焼土を避けるように中央土坑が存在する。

このことは中央部に即ち二柱穴間を結ぶ線上には土坑を造らず，意図的にずらして配する規制が強く作用していると考えられる。さらにそれは中央部での火の使用を前提としている。そこには住居をめぐる構造的理解を超えた理念的な世界の存在の可能性が窺えなくもない。ただし現状ではこの規制が構造的なものに由来するかあるいは精神的なものに由来するのか定かではない。

したがって，住居跡の性格についても一般的な寝食を常とする住居の想定も出来るし，中央土坑に台石がのっていたＳＢ５のように作業場的な性格を持っている可能性も指摘できる。面積の大小も建物の性格を反映しているという確証はない。なるほど例えばＳＢ17のように円形の小規模な竪穴住居跡が居住するには狭すぎると感じなくはない。だたしこれとて単に現代に生きる者の感覚の産物でしかない。限りなく作業場的な性格を持つ建物であると想定は出来るが，住居の可能性は否定できない。

以上の点を考慮して敢えてその性格について類推すれば，居住空間として機能したと思われる住居跡はＳＢ２・ＳＢ３・ＳＢ９・ＳＢ11，前者に比べると作業空間としてしての性格がより強くあらわれていると思われる住居跡にはＳＢ５・ＳＢ12・ＳＢ16・ＳＢ17がある。

広島湾岸の状況　では，次に広島市周辺での２本柱住居の状況を概観してみよう。数としてはそ

れほど多くはないが，国重城跡第２号竪穴住居跡[6]，芳ヶ谷遺跡第３号住居跡[7]，下沖５号遺跡[8]第９号住居跡・第11号住居跡・第12号住居跡・第14号住居跡・第18号住居跡，毘沙門台東Ａ地点遺跡[9]第１号住居跡，毘沙門台東Ｂ・Ｃ地点遺跡[10]第３号住居跡・第４号住居跡・第13号住居跡，城ノ下Ａ地点遺跡[11]第２号住居跡・第４号住居跡，黒谷遺跡[12]第５号住居跡，大町七九谷遺跡群Ａ地点遺跡[13]ＳＨ１・ＳＨ６，長尾遺跡[14]ＳＨ１ａ・ＳＨ２の９遺跡・18例が２本柱住居として報告されている。

図面を見る限りでは２本柱住居とするには疑問がある例もないわけではないが，報告者の考えを尊重した。

このうち，中央土坑を伴うのは国重城跡第２号竪穴住居跡，下沖５号第９号住居跡，毘沙門台東Ａ地点遺跡第１号住居跡，城ノ下Ａ地点遺跡第４号住居跡，長尾遺跡ＳＨ２の５例がある。さらに中央土坑がずれる構造のものは城ノ下Ａ地点遺跡第４号住居跡と長尾遺跡ＳＨ２の２例がある。

絶対数が少ないとはいえ18例中２例であるからその割合は一割強である。集落内の全住居跡に対する割合を出せばもっと少なくなると思われるので，本遺跡での出現頻度の高さは異常とも言えよう。勿論，これらは同時期に存在したとは思えないが，仮に継続して存在したと仮定しても，比較的長期間に渡り通時的に２本柱住居を採用しており，ここでも何らかの規範ないしは習慣を窺わせるのである。

なお県内における弥生時代の一般的な住居跡の平面形が円形・楕円形から隅丸方形ないしは方形に変遷するという傾向が２本柱住居にも反映されるという指摘は本遺跡[15][16][17]でも概ね当てはまる。

（３）墳墓群について

前章で見たように本遺跡では集落が営まれていた時期とほぼ同じ頃の墓坑群を北東の一角で検出した。これらの墓坑は規模からは大中小と３分可能で，墓坑の配置状況から東西に２～３列で，主軸を揃えて並列しており，３基程度の小群で構成される。

また墓坑のほとんどが土坑墓でこの他のタイプの墓坑としては壺棺墓が一基存在するのみである。さらに土坑墓のうち５基は木棺を納めた木棺墓と想定できる。小型の５基を除けば概ね２基に１基が木棺墓となる。もちろん，木棺痕跡の未確認は木棺墓の可能性を否定するものではない。

墳墓群は住居跡からは離れた場所に集中しており，墓域を区画する溝やマウンドは確認できなかったが，明らかに住居との間に空間が存在する。そしてこの空間の存在は居住空間と埋葬空間を区別する意識の存在を示唆する。

以上，本墳墓群は

1　その構成の最小単位が同時存在する可能性のある住居跡の数と概ね一致すること。

2　明瞭な区画を持たないものの埋葬空間＝墓域を強く意識していると想定できること。

3　個々の墓坑の状況に若干のばらつきはあるものの概ね均一であること。

などから，本集落を営んだ集団の共同墓地と考えられる。

（4）結び

以上主として遺構を中心に検討した。ただし，瀬野川流域における弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡の調査例は極めて限定的で，早くから調査が進展した太田川流域に比べるとまだまだ緒に着いたばかりで，不明な点が多々存在する。とは言え，本遺跡に近接する段之原山遺跡は竪穴住居跡一棟建つのがやっとの広さしか確保できない狭小で急峻な斜面に集落が営まれており，本遺跡の立地状況と比べると対照的といえる。時期的な問題はあるにせよ近接地に比較的平坦な空間がまとまって存在するにも拘わらず，敢えてかの地を選択した理由あるいは平易な空間を選択しなかった理由が不明である。

本遺跡の集落が飽和状態で分村化せざるを得なかったと仮定するには居住可能な空間がまだまだ存在することから有効ではない。となると，時系列が同じであれば分村化ではなく，集落を営む集団における力関係に帰すのが自然なのかも知れない。

さらに前節で検討したように２本柱住居跡の出現頻度の高さは広島湾岸の集落と比較しても突出しており，この突出ぶりの由来を例えば生業であるとか血縁であるとかに帰すことは種々想像は可能であるが，現状では不明と言わざるを得ない。

いずれにしても，実態の解明はこれからであり，周辺の集落跡の状況が具体化した段階で検討すべき事柄であろう。

註

（1）広島湾岸では伝統的に上深川式あるいは上深川Ⅰ～Ⅲ式という形式名で弥生時代後期～古墳時代初頭頃の土器を呼称しているようであるが，形式設定が明瞭でないことや本遺跡が広島湾岸と西条盆地の中間に位置していることなどから，この形式名称ではなく，相対的な時期名称を使用した。
　なお，土器の変遷については正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社 1992年を基本としている。
（2）中間研志「松菊里型住居－我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究－」『東アジアの考古と歴史 中　岡崎敬先生退官記念論集』同朋舎　1987年
（3）註（2）に同じ
（4）石野博信「西日本における弥生中期の二つの住居跡」『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館　1993年
（5）註（4）に同じ
（6）広島市教育委員会　『国重城跡発掘調査報告』 1982年
（7）広島市教育委員会　『広島経済大学校内遺跡群発掘調査報告』 1984年
（8）広島市教育委員会　『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』 1988年
（9）広島市教育委員会　『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』 1990年
（10）註（9）に同じ
（11）財団法人広島市歴史科学教育事業団『城ノ下Ａ地点遺跡発掘調査報告』 1991年
（12）財団法人広島市歴史科学教育事業団『黒谷遺跡発掘調査報告』 1995年
（13）財団法人広島市文化財団『大町七九谷遺跡群』 1999年
（14）財団法人広島市文化財団『長尾遺跡』 1999年
（15）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『植谷遺跡・根野見遺跡・植谷古墳発掘調査報告書』 2002年
（16）三良坂町教育委員会『杉谷遺跡群』2003年
（17）県内における二本柱構造の住居跡については註（15）及び（16）によくまとめられている。二本柱構造の住居跡は既に集成の段階から，個々の遺跡内あるいは地域内での評価に移行する段階に差し掛かっていると考えるので，ここでは地域性を重視して広島湾岸の資料にとどめた。

図版１

a　遺跡遠景（北東から）

b　遺跡全景（北東から）

c　遺跡西半部（北から）

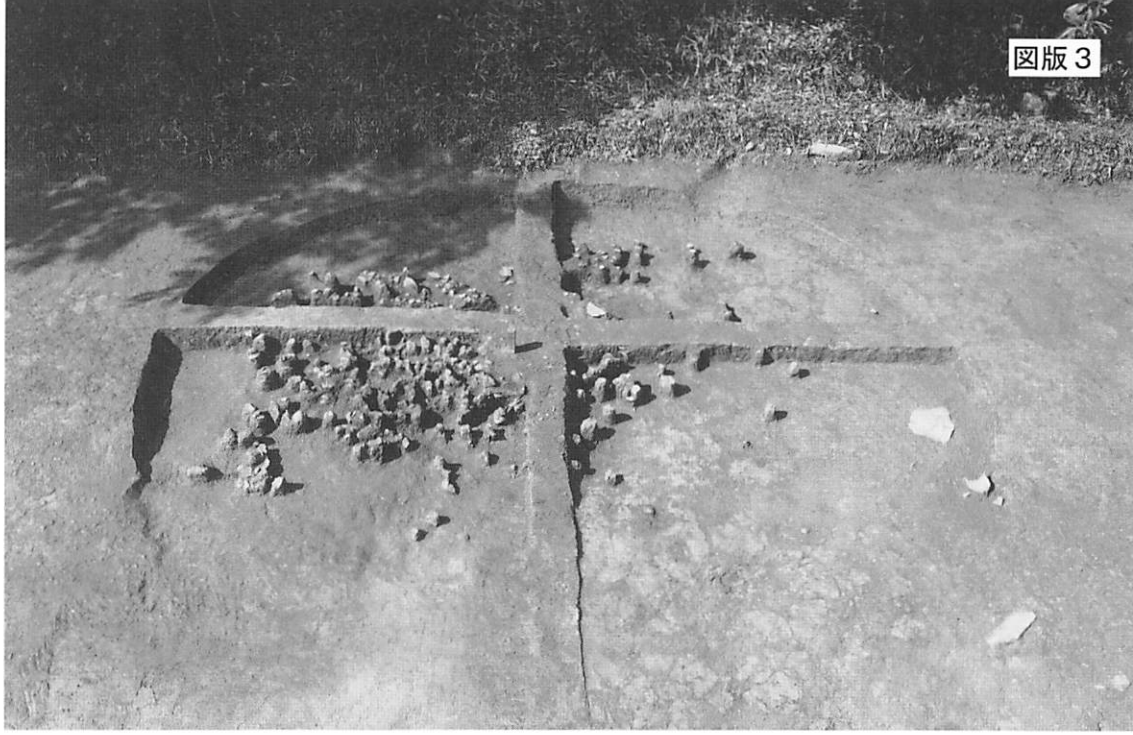
図版２

a　遺跡東半部（北から）

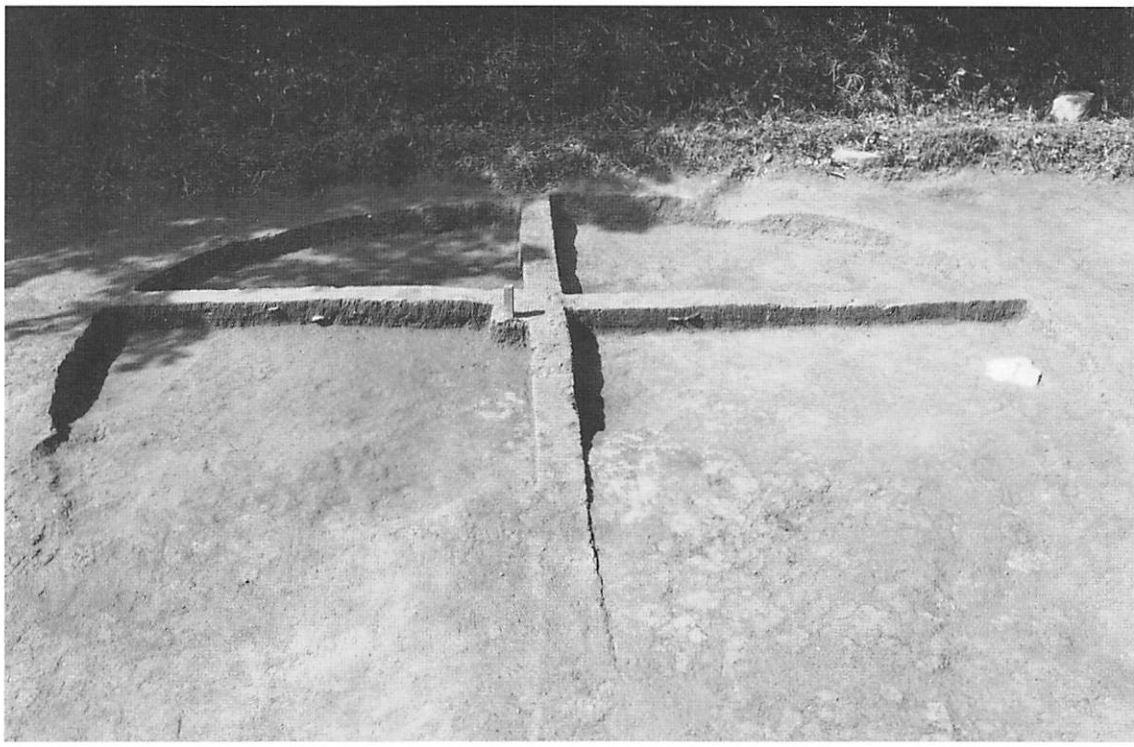
b　ＳＢ２・３・５
（北から）

c　ＳＢ２～５・９
（北から）

図版３



a　ＳＢ１遺物出土状況
（北から）

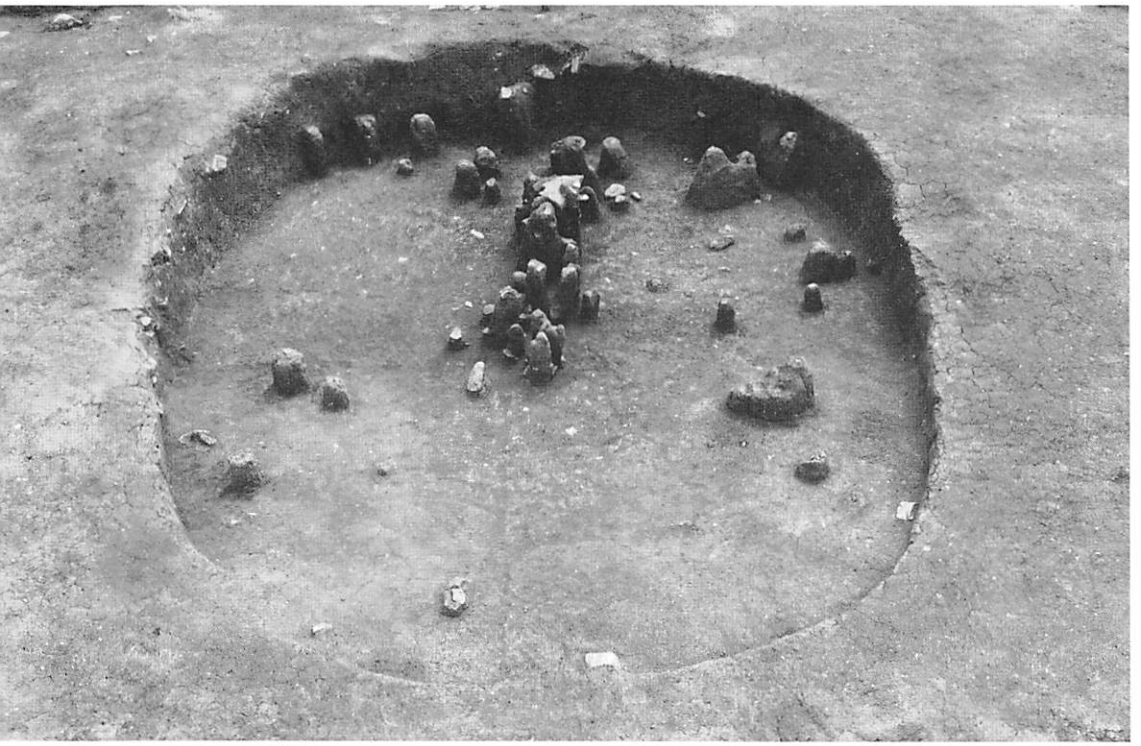


b　ＳＢ１断面（北から）

c　ＳＢ１完掘（北から）

図版４

a　ＳＢ２断面（南東から）



b　ＳＢ２遺物出土状況
（北東から）

c　ＳＢ２完掘（北東から）

図版５

a　ＳＢ３遺物出土状況
（北から）

b　ＳＢ３断面（北から）

c　ＳＢ３完掘（北から）

図版６

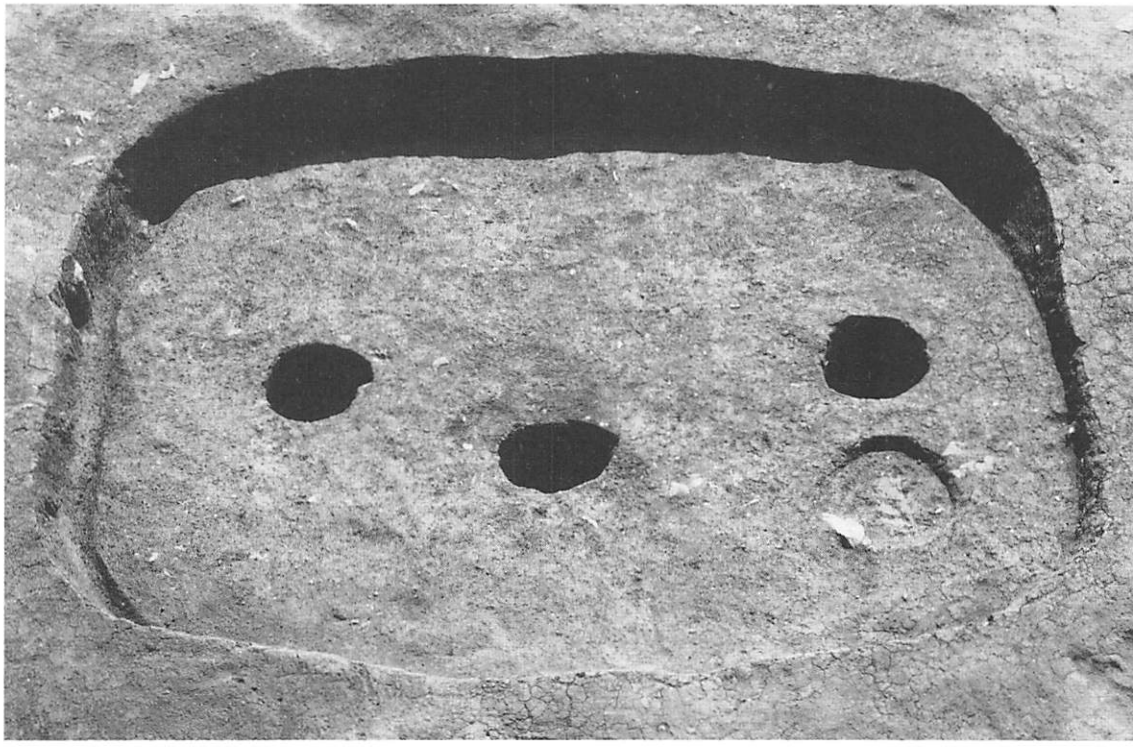
a　ＳＢ４遺物出土状況
（北から）

b　ＳＢ５遺物出土状況
（北から）

c　ＳＢ６～８完掘
（東から）

図版７

a　ＳＢ４完掘（北から）



b　ＳＢ５完掘（北から）

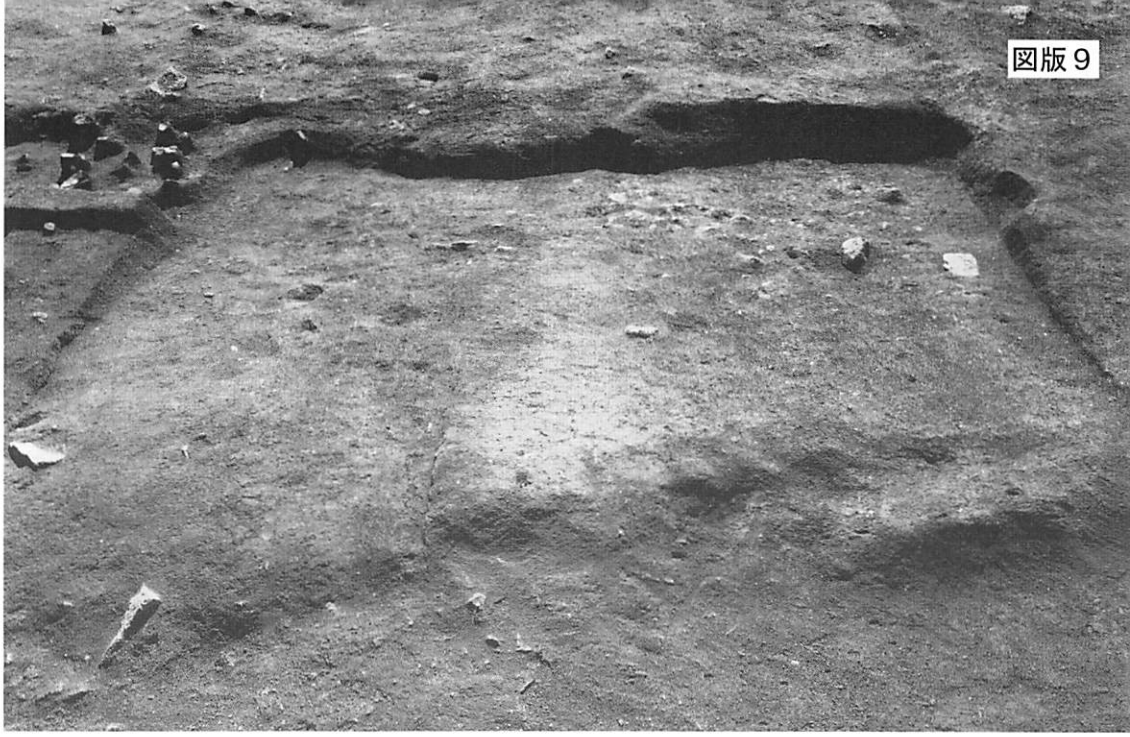
c　ＳＢ６～８断面
（南から）

図版８

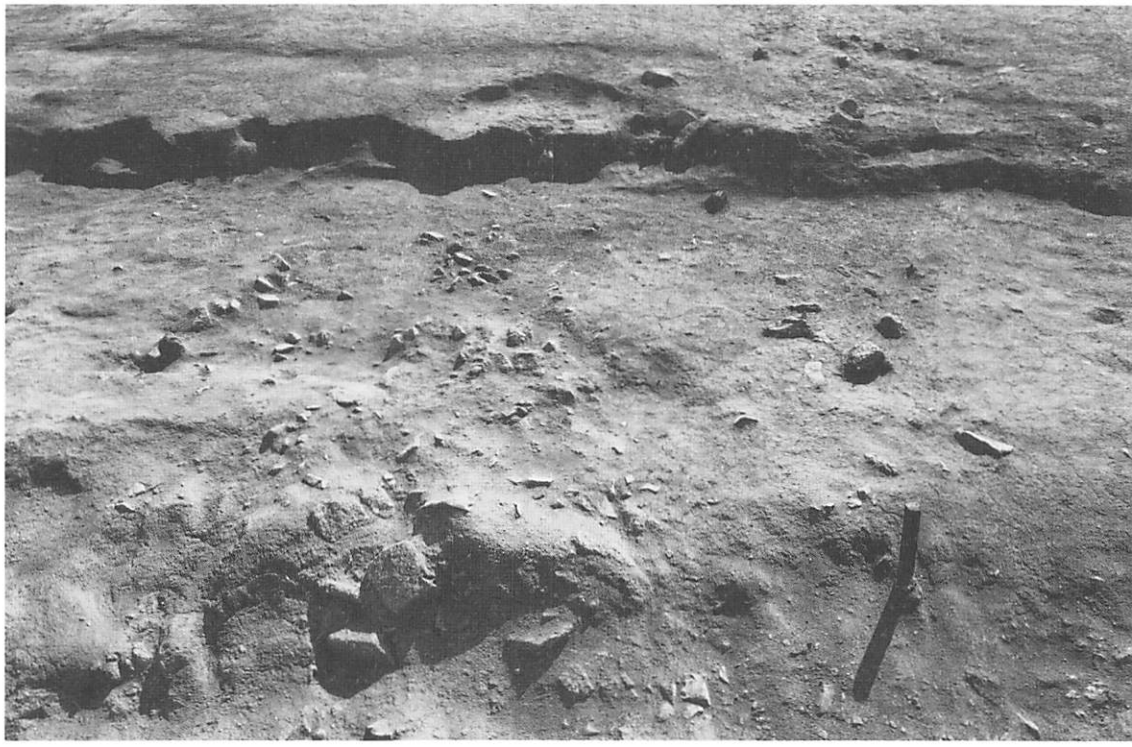
a　ＳＢ６遺物出土状況
（北から）

b　ＳＢ７遺物出土状況
（北から）

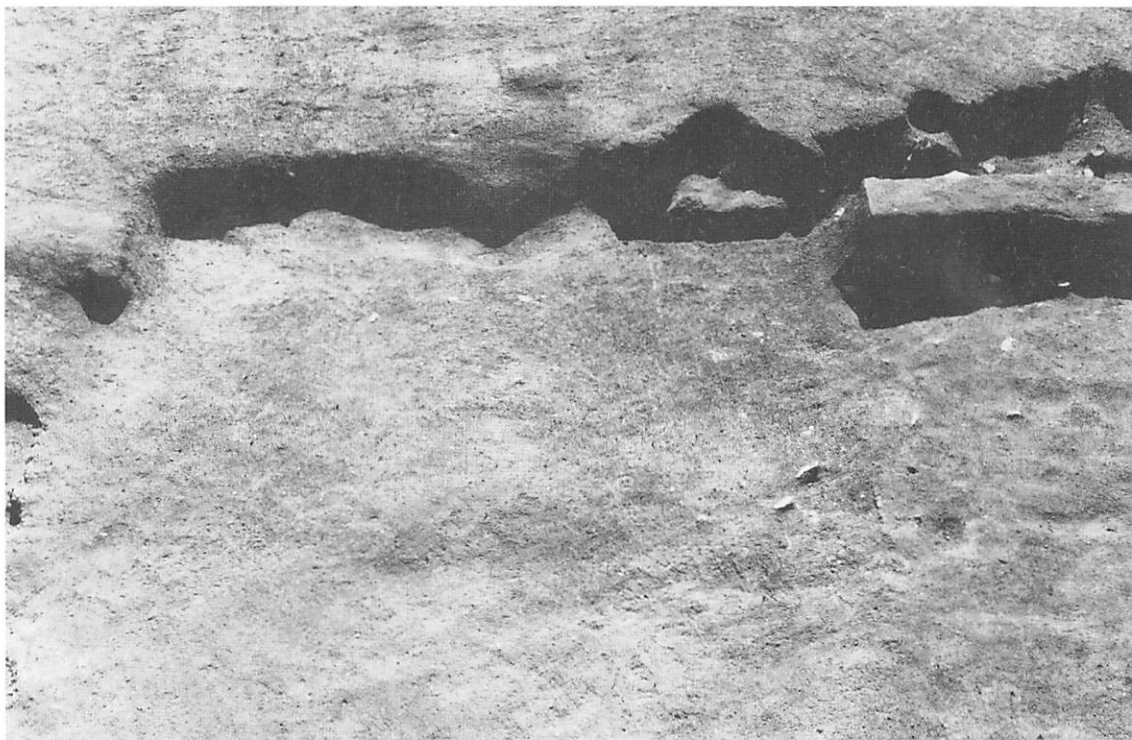
c　ＳＢ８遺物出土状況
（北から）



a　ＳＢ６完掘（北から）

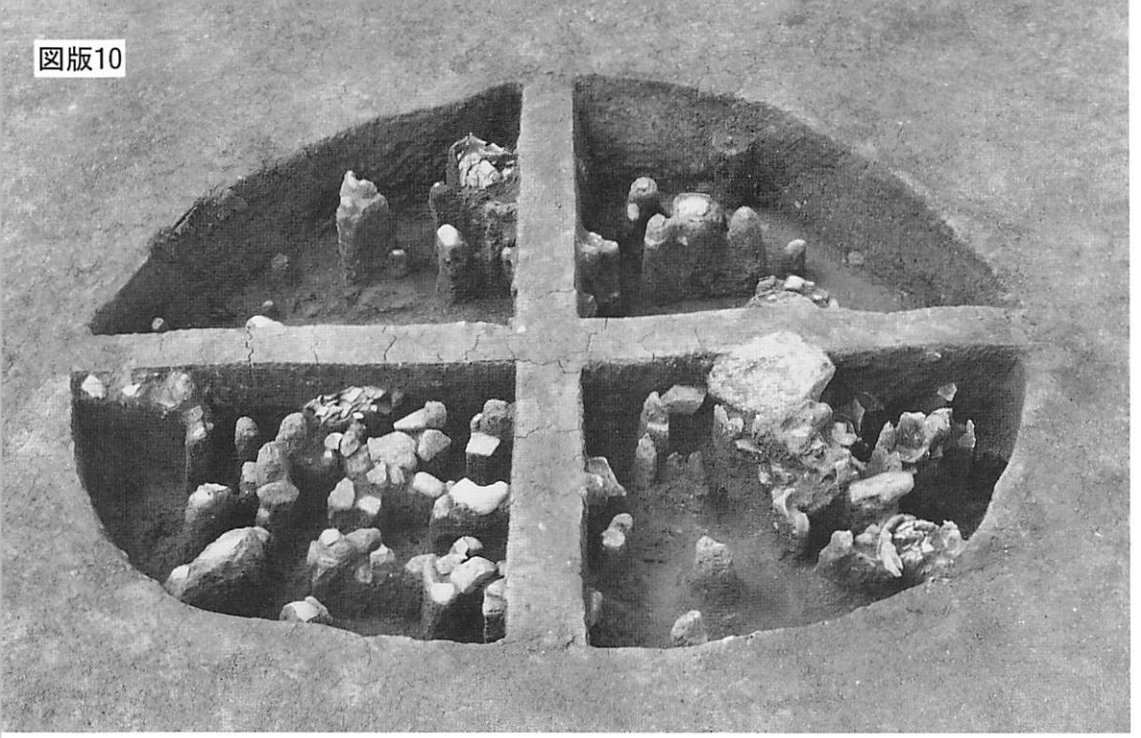


b　ＳＢ７完掘（北から）

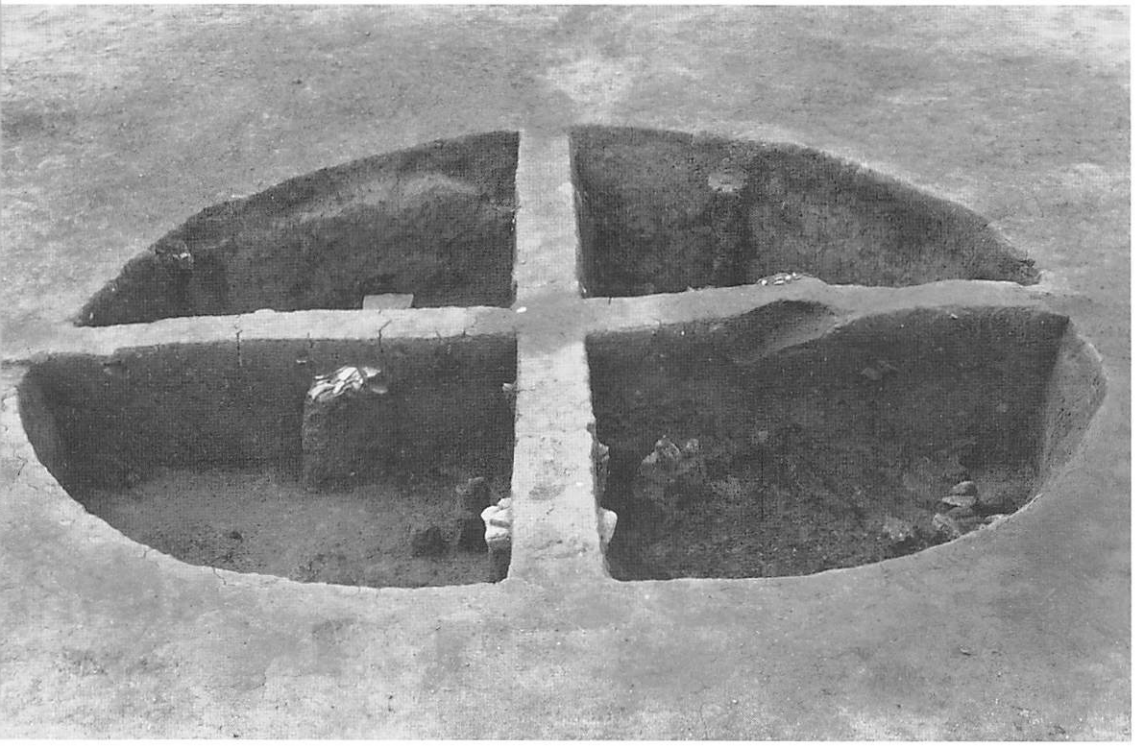


c　ＳＢ８完掘（北から）

図版10

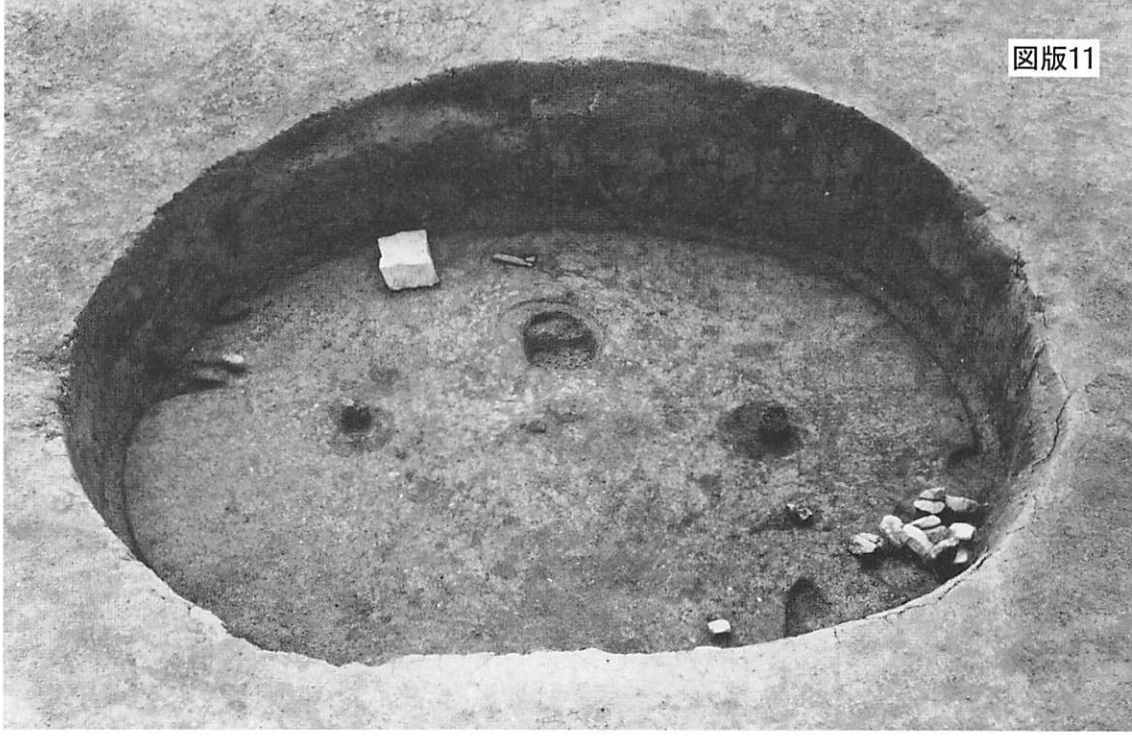


a　ＳＢ９上層遺物出土状況
（北から）

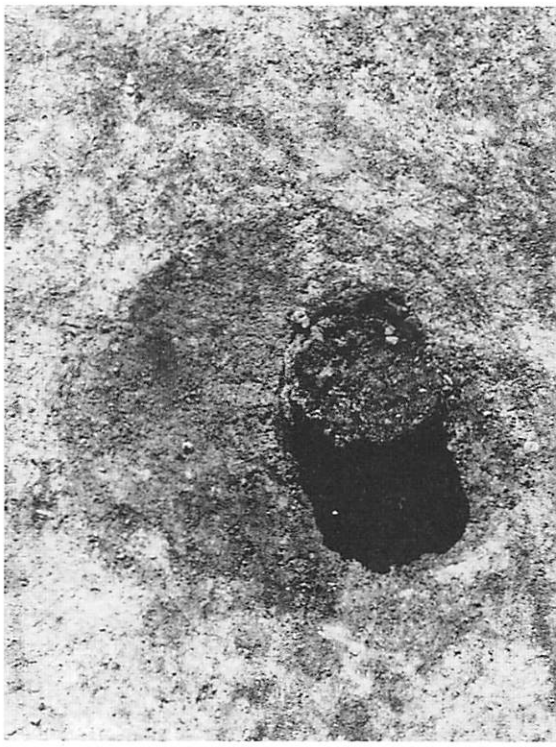


b　ＳＢ９断面（北から）

c　ＳＢ９下層遺物出土状況
（北から）



a　ＳＢ９床面（北から）

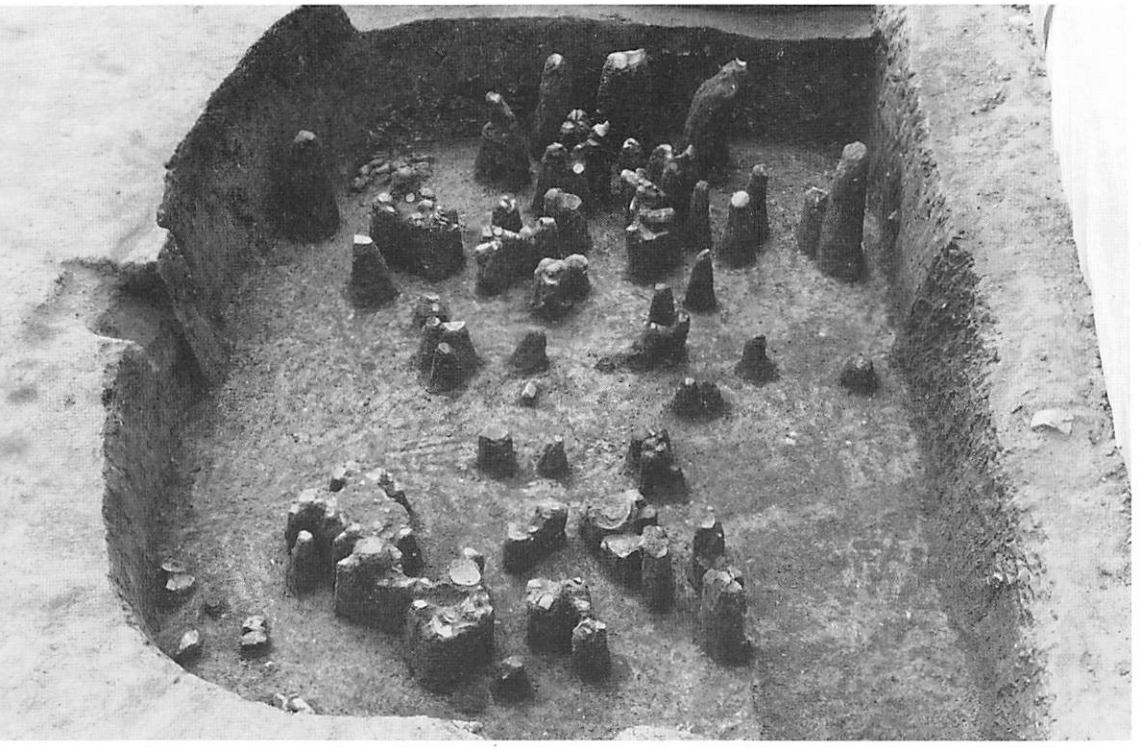


b　ＳＢ９柱根
（左：Ｐ２，右：Ｐ１）

c　ＳＢ９完掘（北から）

図版12

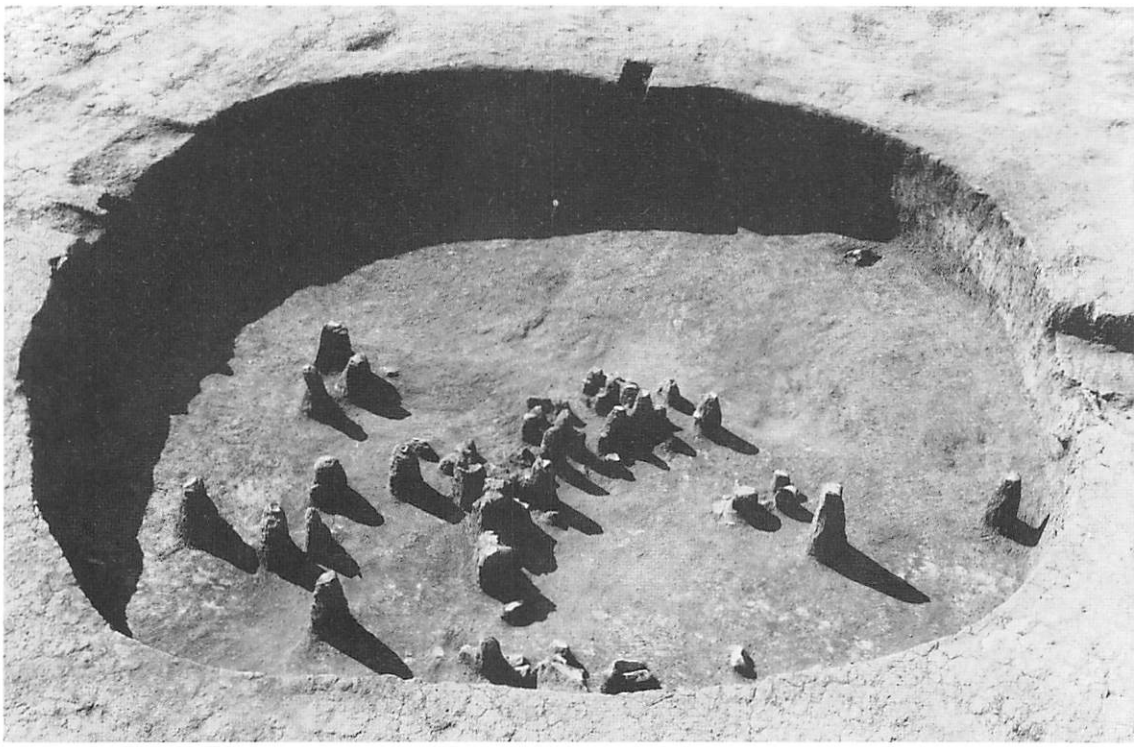
a　ＳＢ10断面（東から）



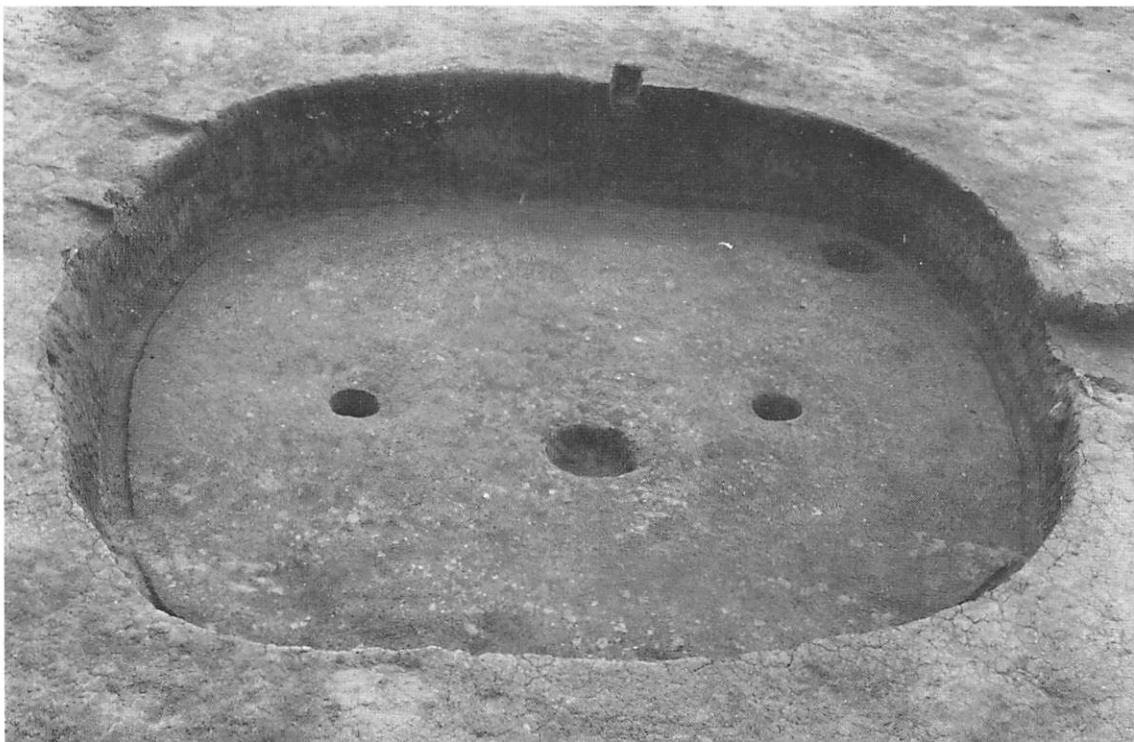
b　ＳＢ10遺物出土状況（北から）

c　ＳＢ10完掘（東から）

a　ＳＢ11断面（東から）



b　ＳＢ11遺物出土状況（北から）



c　ＳＢ11完掘（北から）

図版14

a　ＳＢ12断面（南東から）

b　ＳＢ12遺物出土状況（西から）

c　ＳＢ12完掘（西から）

a　ＳＢ13上面遺物出土状況
（北から）

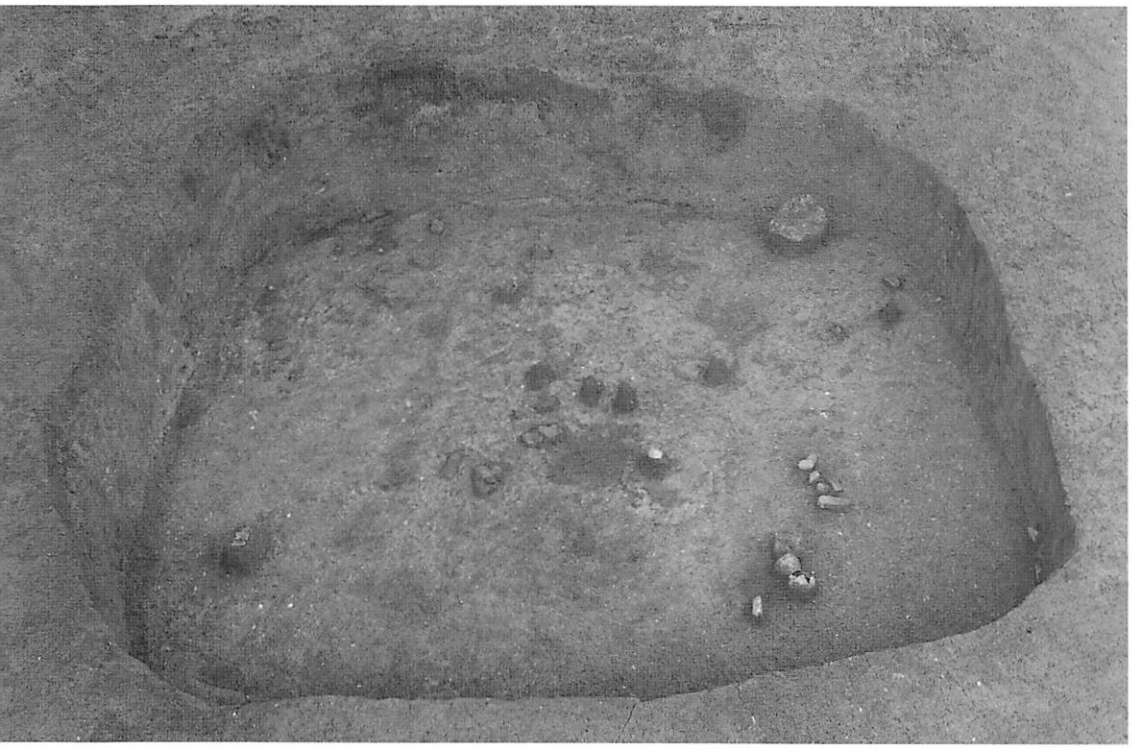
b　同上・部分（西から）

c　同　　上（北から）

d　同　　上（西から）

図版16

a　ＳＢ13断面（東から）



b　ＳＢ13遺物出土状況（北から）

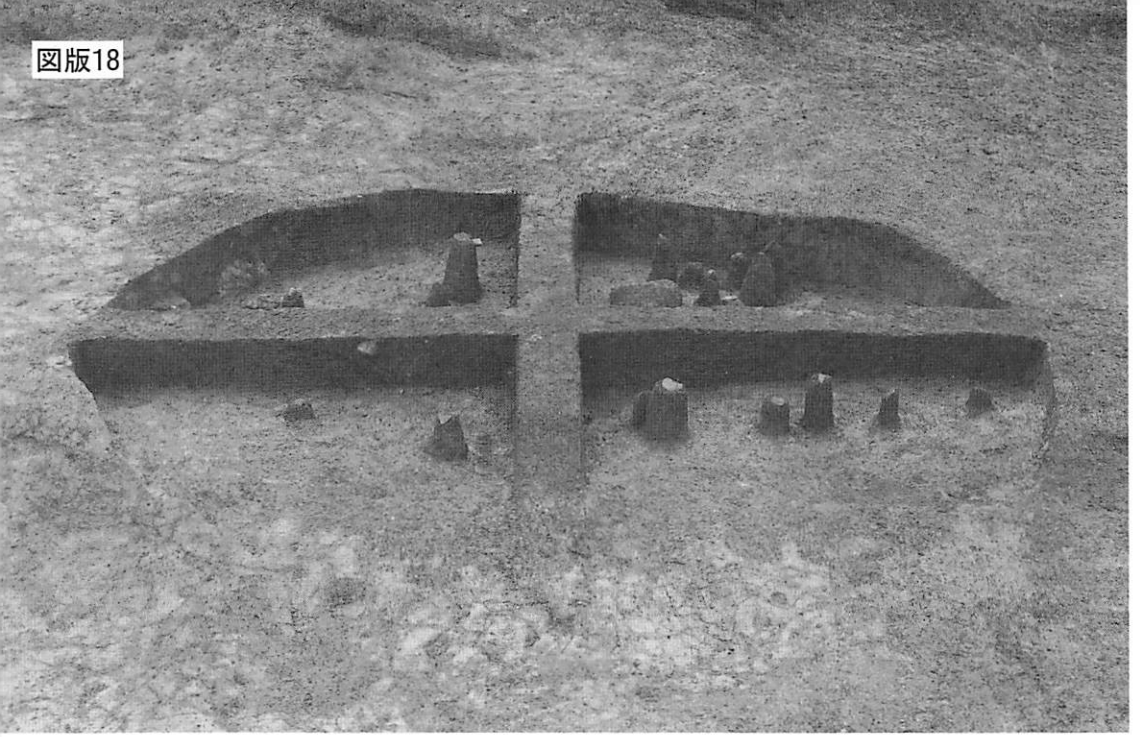
c　ＳＢ13完掘（北から）

a　ＳＢ14断面（東から）

b　ＳＢ14遺物出土状況（北から）

c　ＳＢ14完掘（北から）

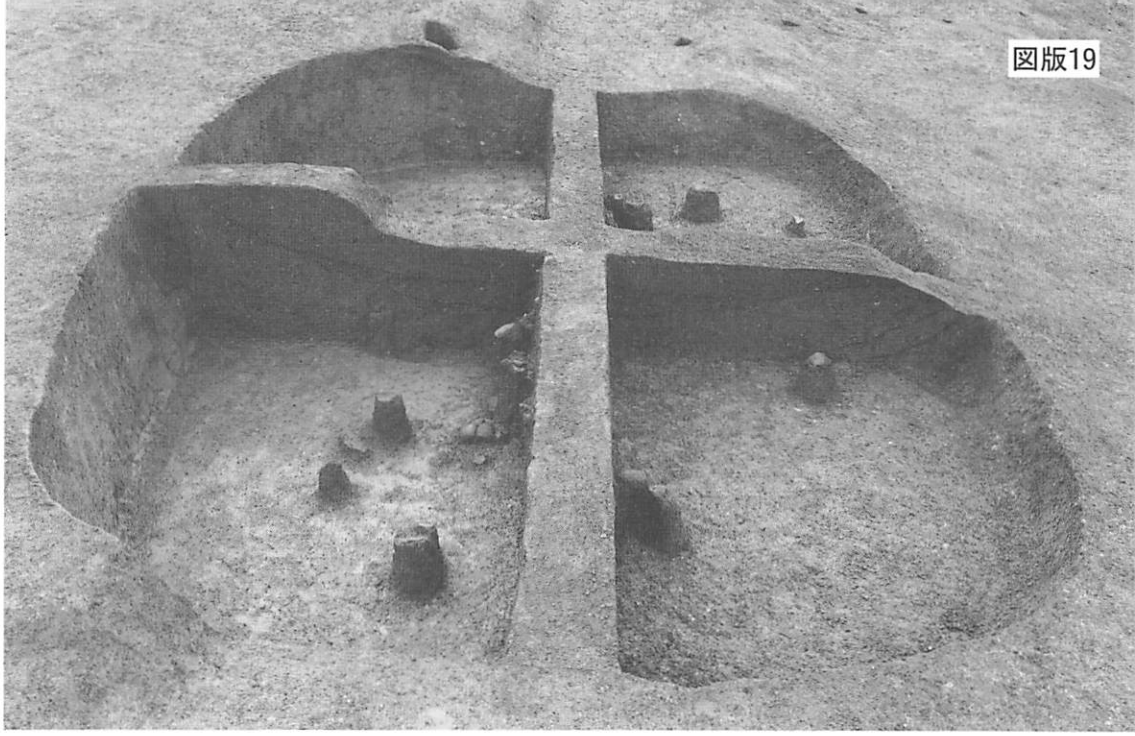
図版18



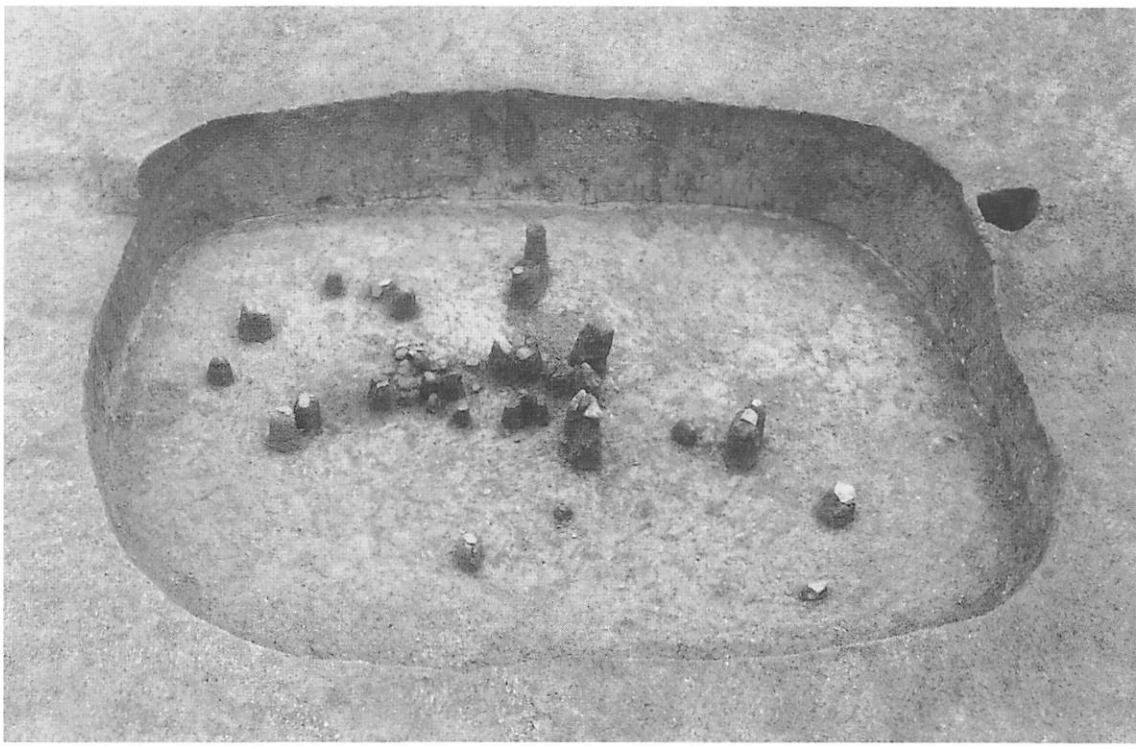
a　ＳＢ15断面（北から）

b　ＳＢ15遺物出土状況（北から）

c　ＳＢ15完掘（北から）



a　ＳＢ16断面（東から）



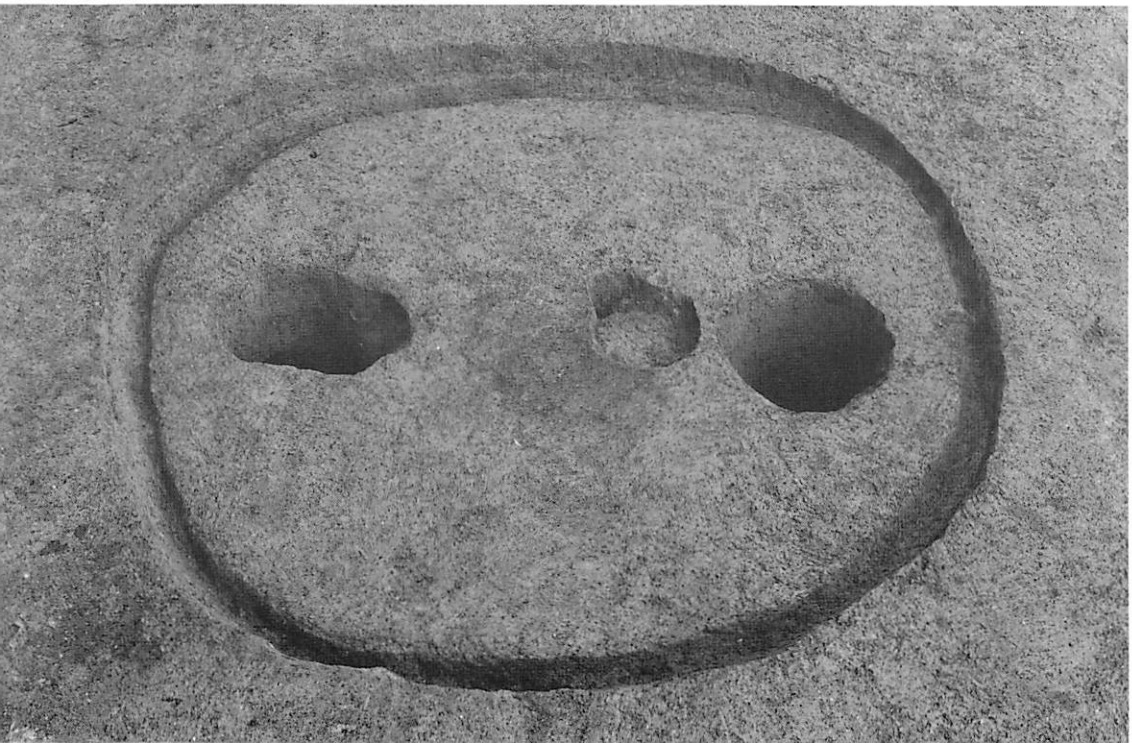
b　ＳＢ16遺物出土状況（北から）

c　ＳＢ16完掘（北から）

図版20

a　ＳＢ17断面（北から）

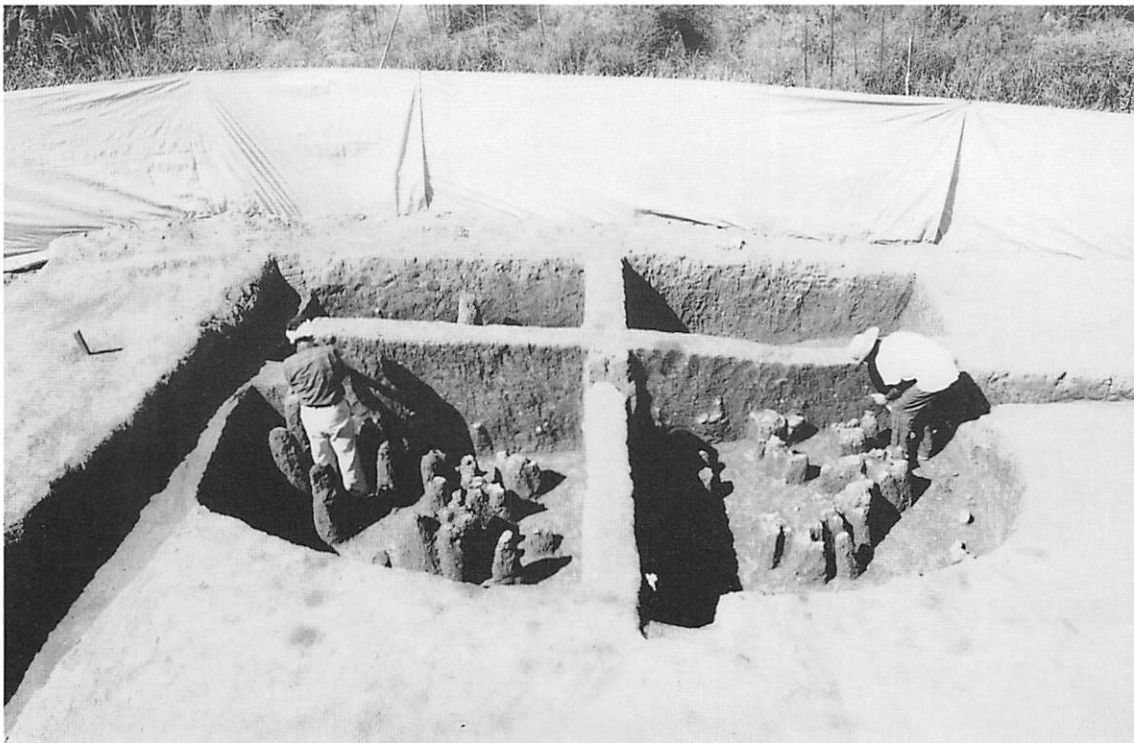
b　ＳＢ17遺物出土状況（東から）



c　ＳＢ17完掘（東から）

a　ＳＢ18完掘（北から）

b　ＳＢ19・ＳＸ５完掘（北から）



c　調査風景（ＳＢ10）

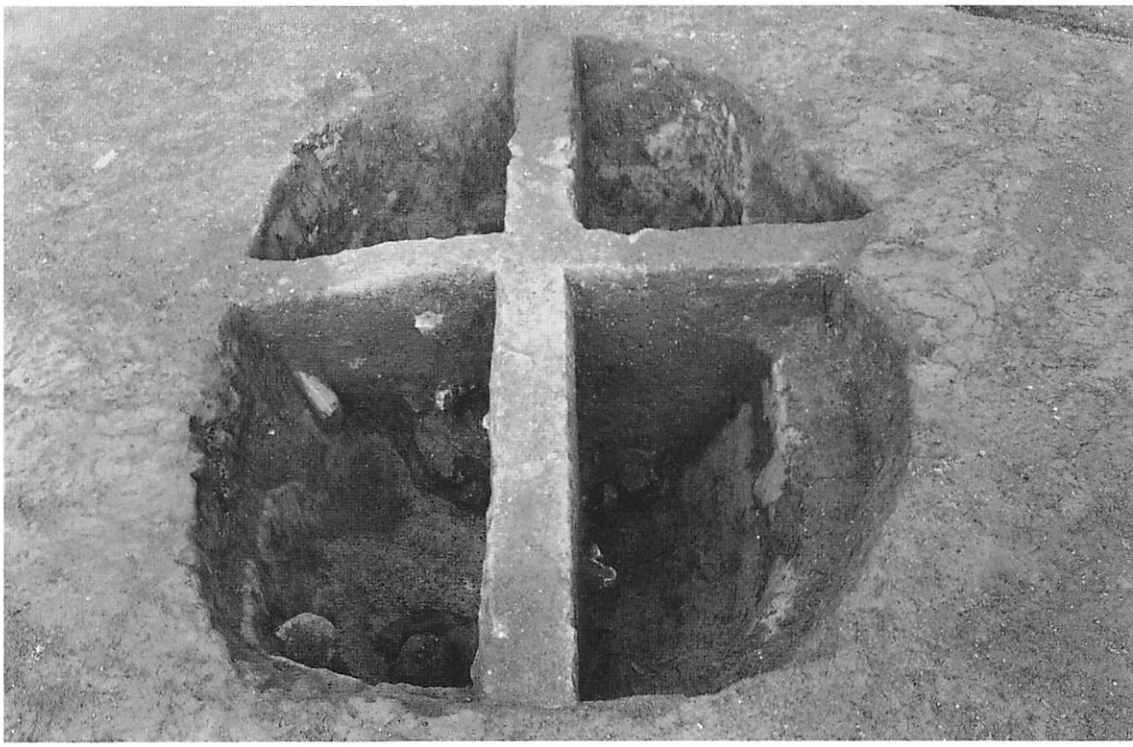
図版22

a　ＳＫ１完掘（北から）

b　ＳＫ２完掘（西から）

c　ＳＫ３遺物出土状況
（北から）

a　ＳＫ３完掘（北西から）

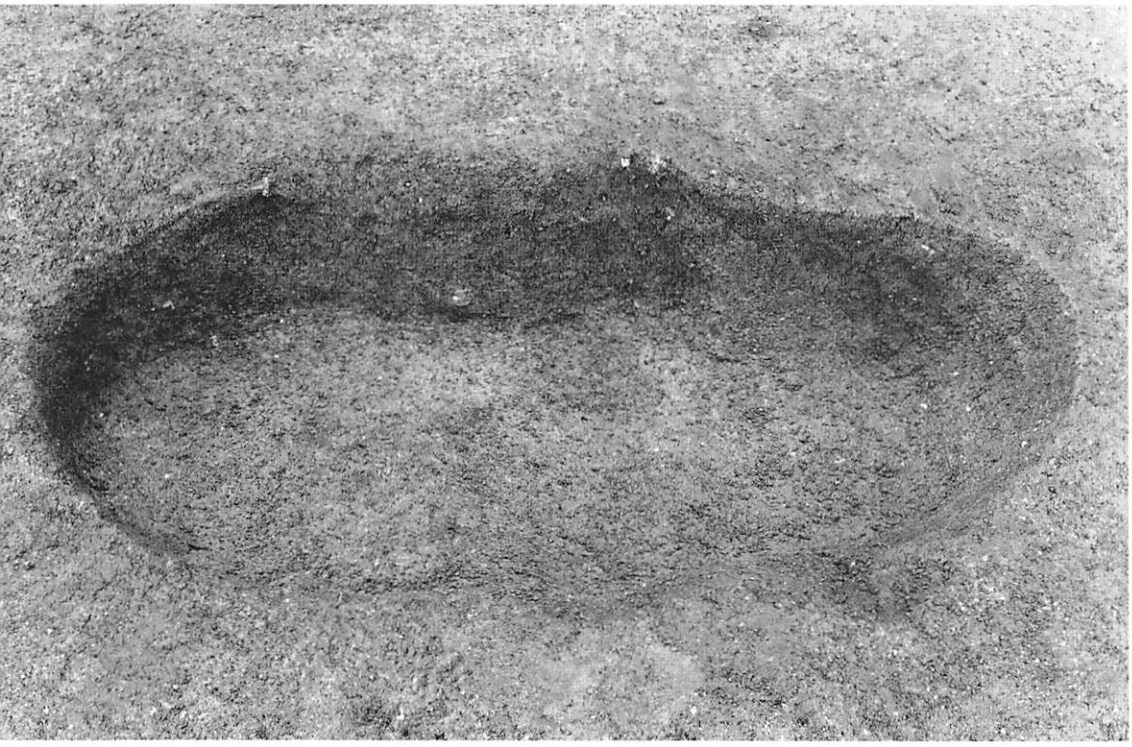


b　ＳＫ４断面（西から）

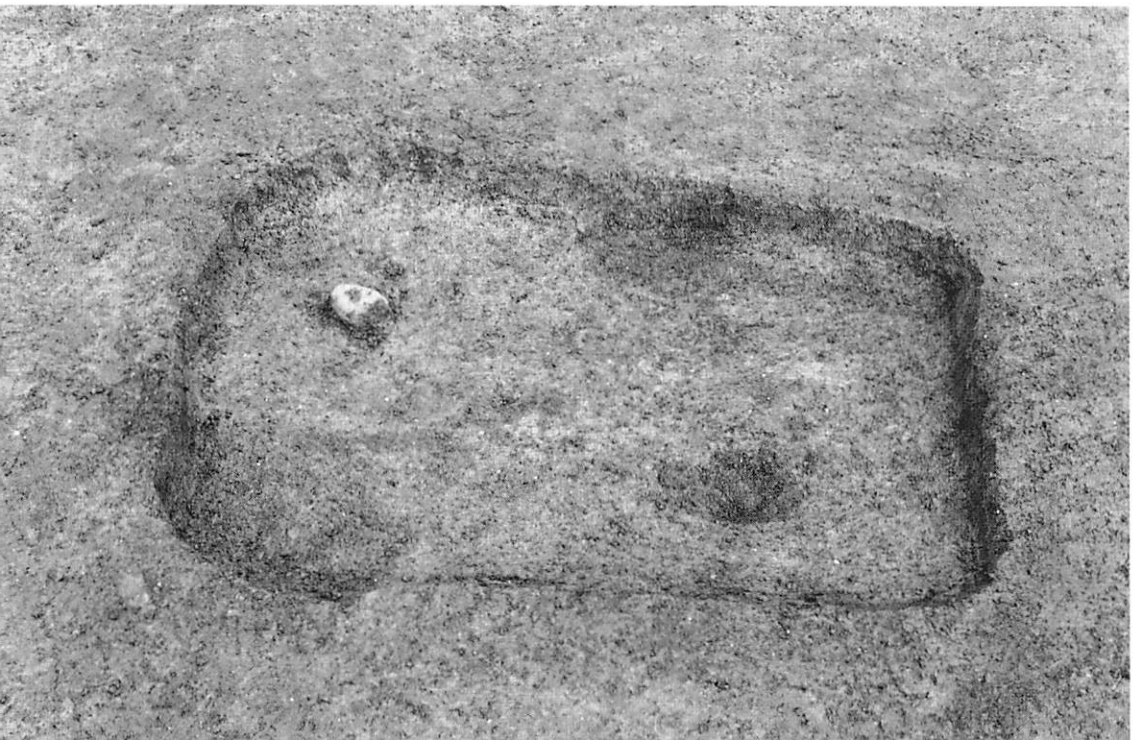
c　ＳＫ４検出状況
（北から）

図版24

a　ＳＫ４完掘（北から）



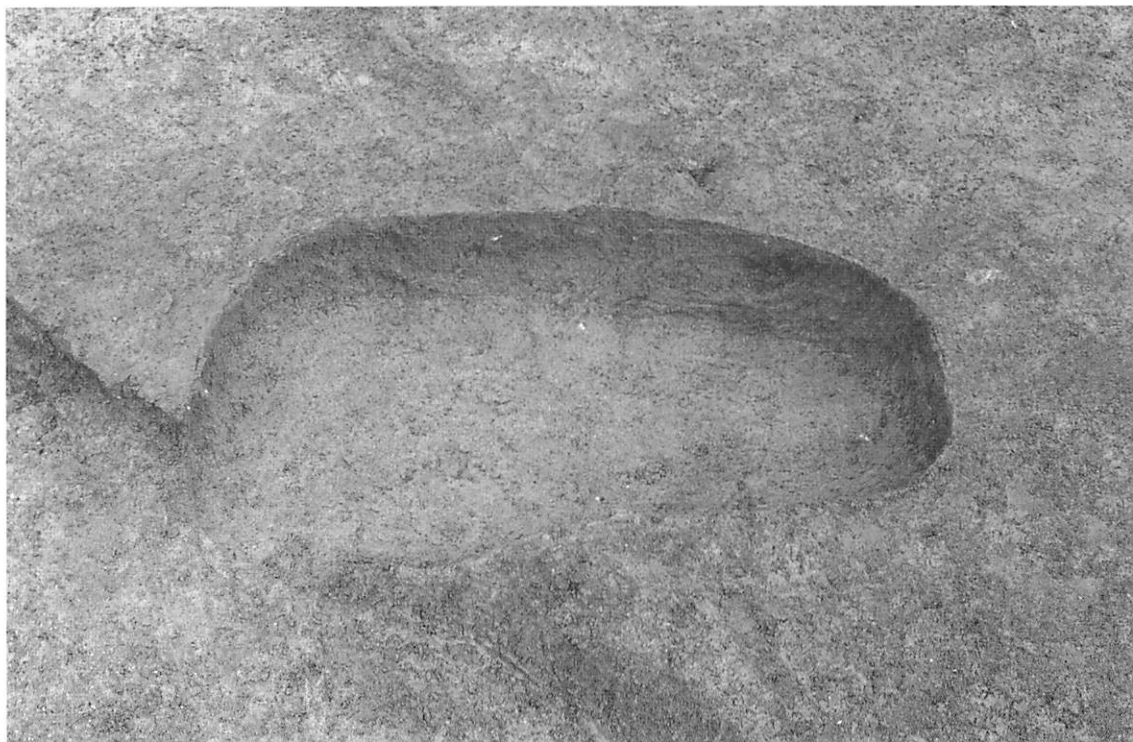
b　ＳＫ６完掘（南から）



c　ＳＫ７完掘（北から）

a　ＳＫ10検出状況
（東から）

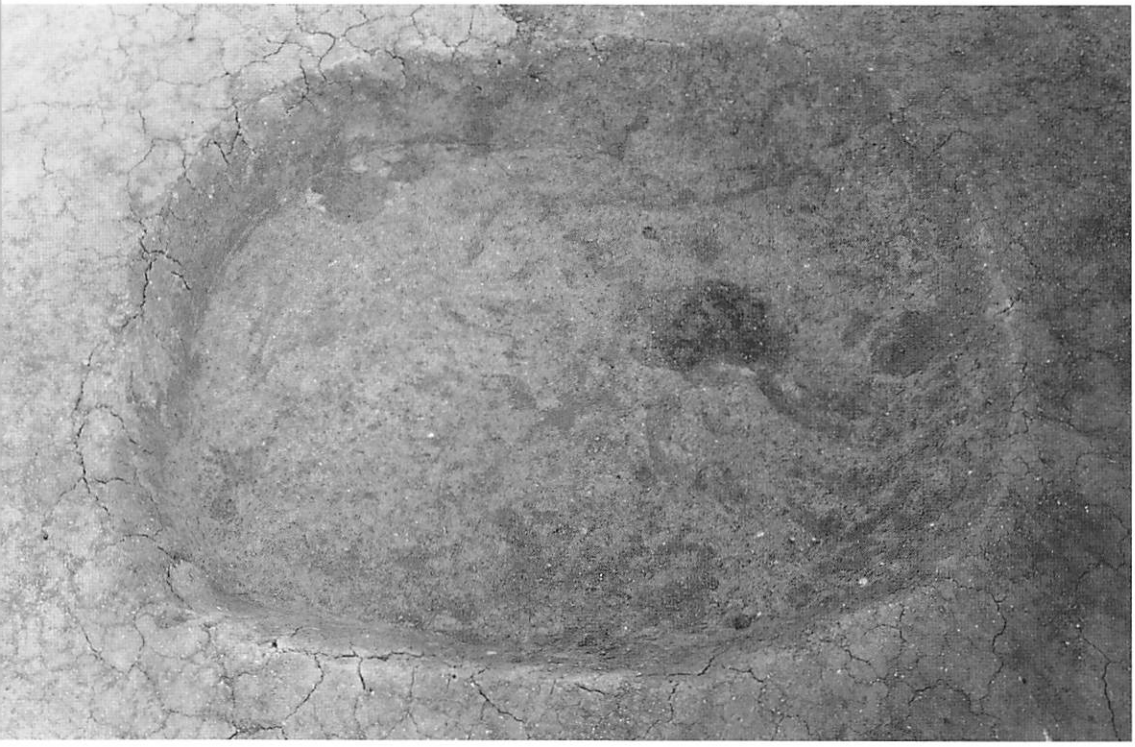
b　ＳＫ10完掘（東から）



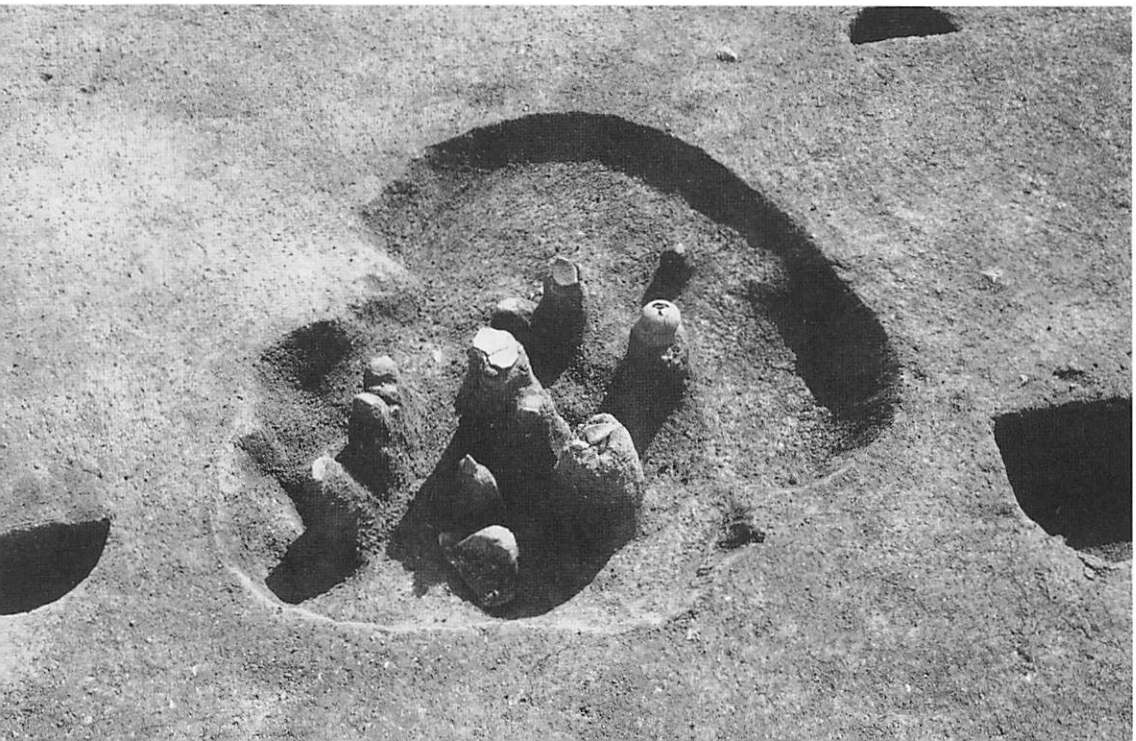
c　ＳＫ11完掘（北から）

図版26

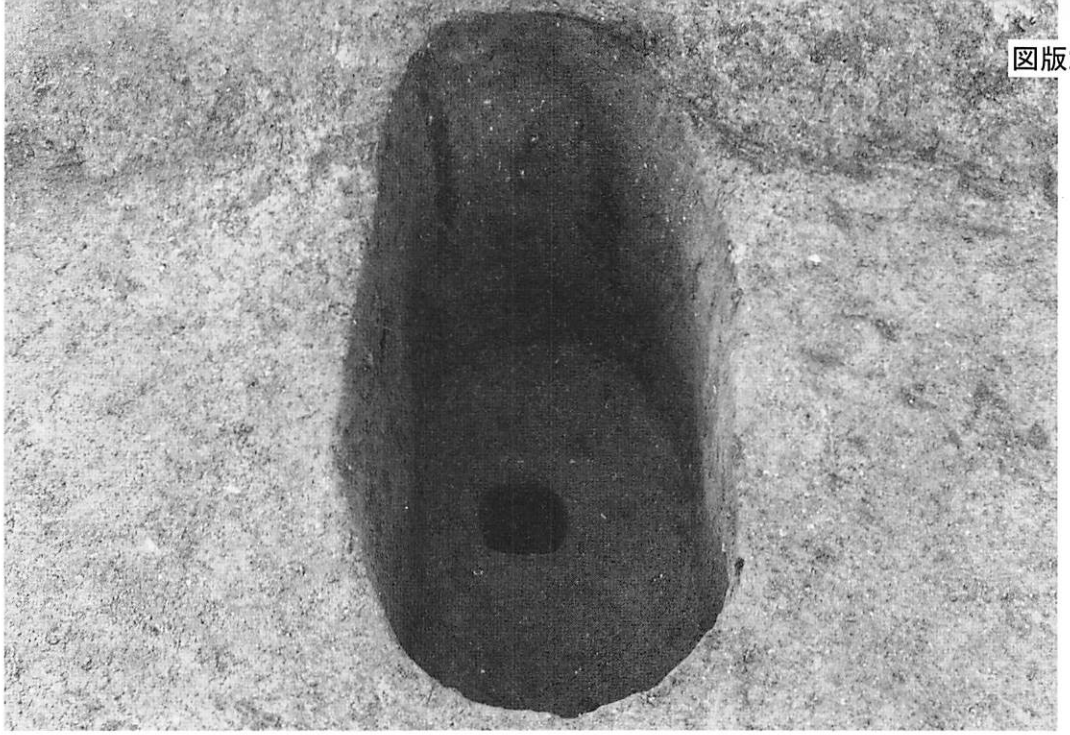
a　ＳＫ12検出状況
（西から）



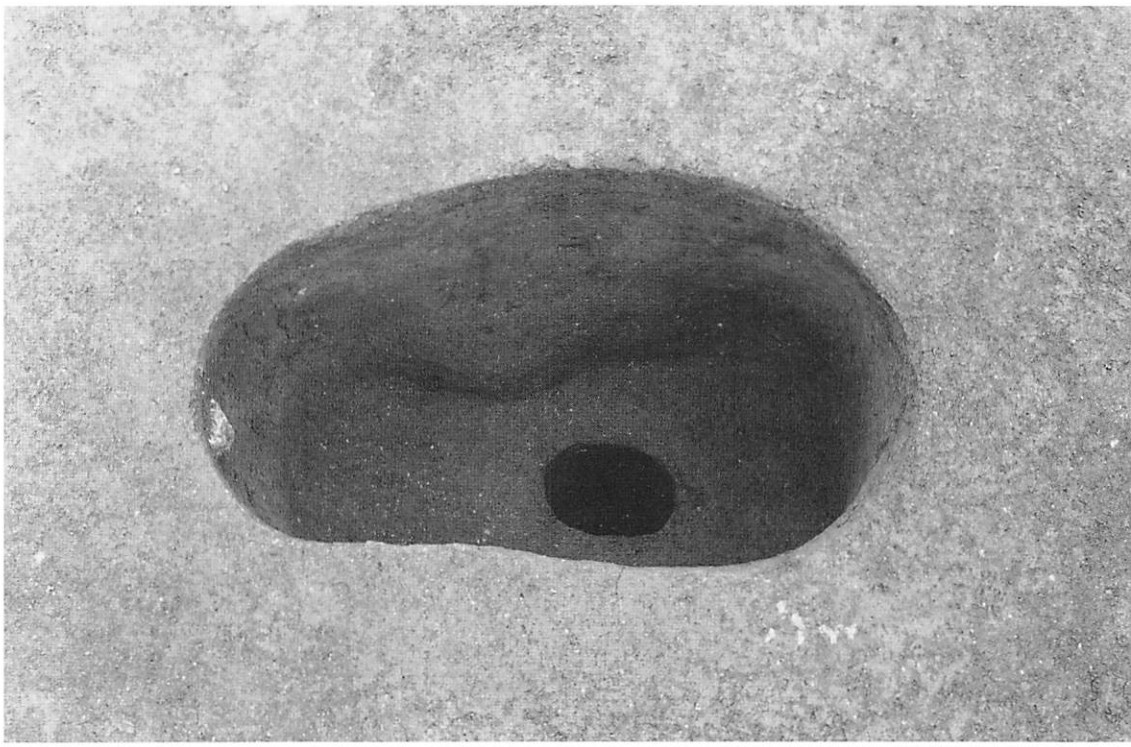
b　ＳＫ12完掘（西から）



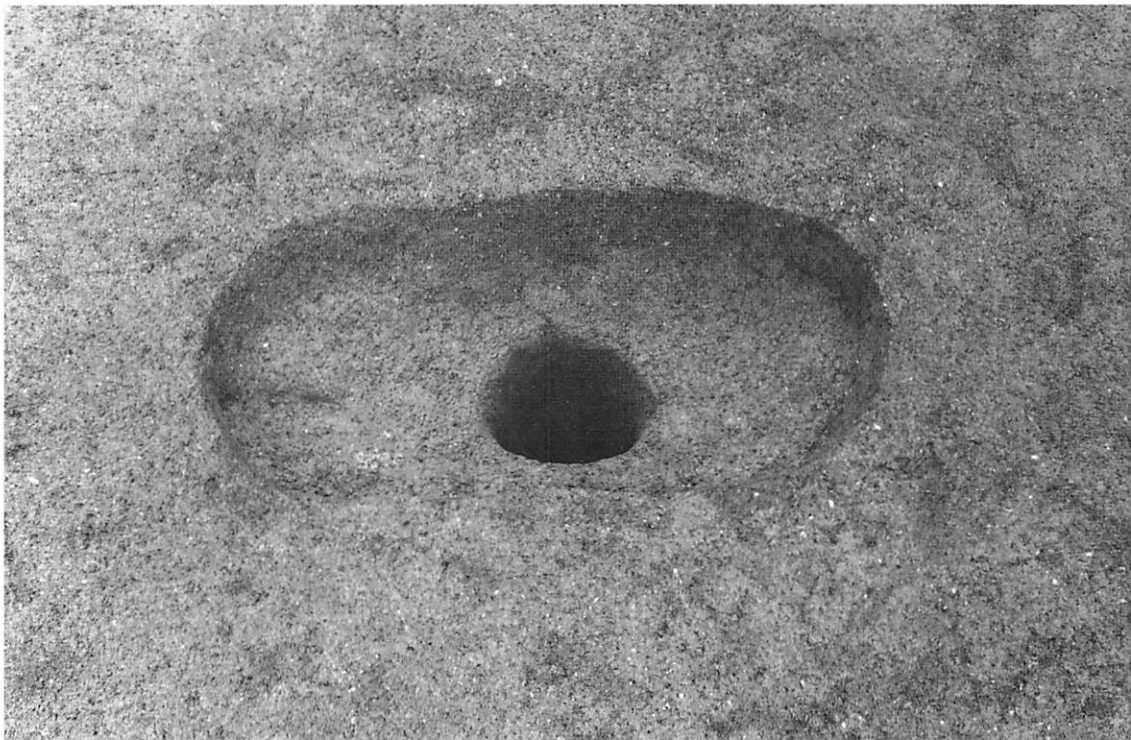
c　ＳＫ13検出状況
（北東から）



a　ＳＫ５完掘（北から）



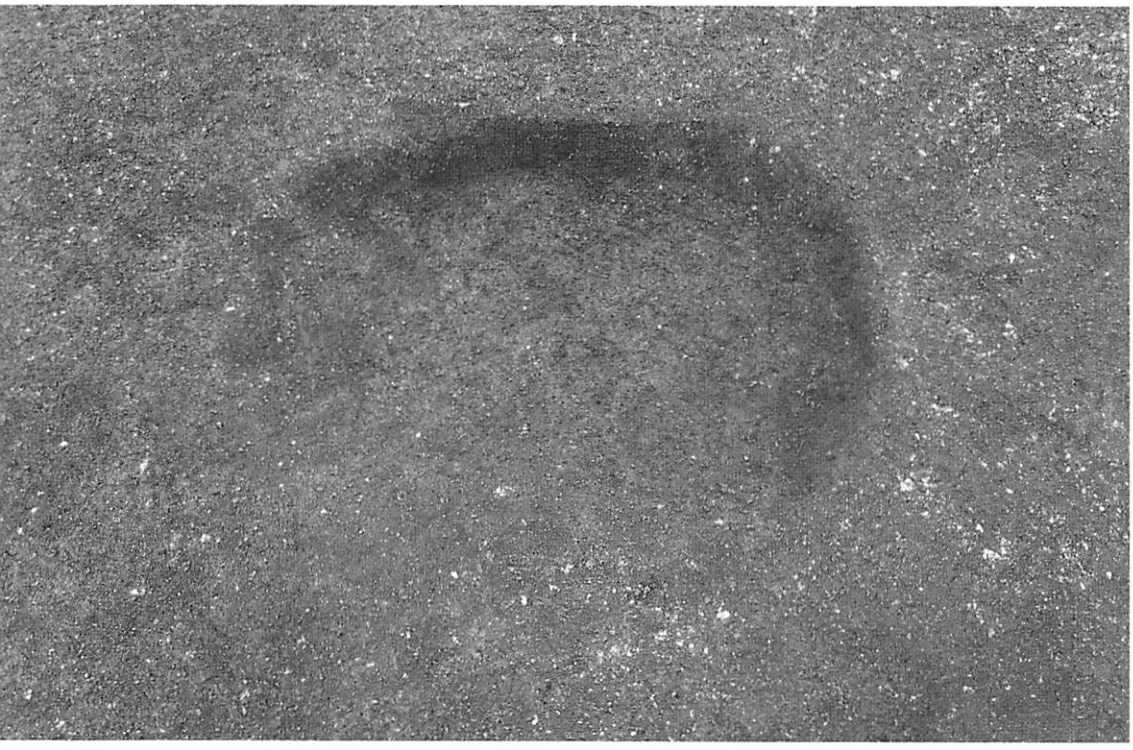
b　ＳＫ８完掘（北から）



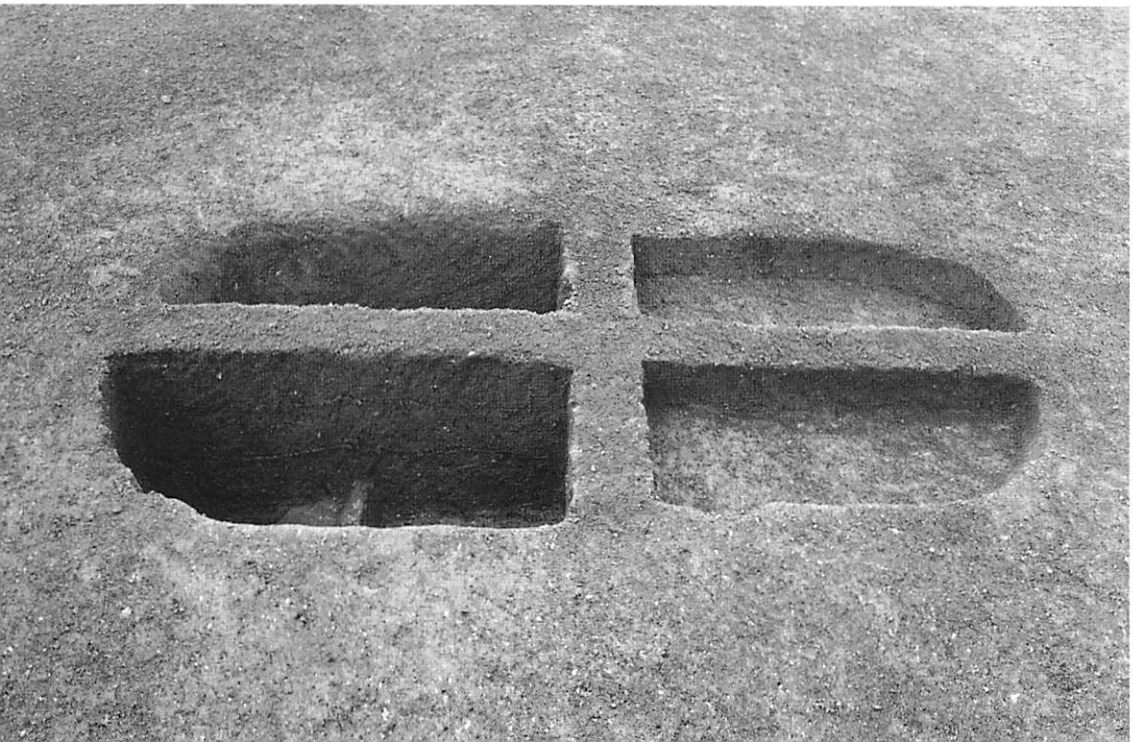
c　ＳＫ９完掘（北から）

図版28

a　墳墓群全景（西から）

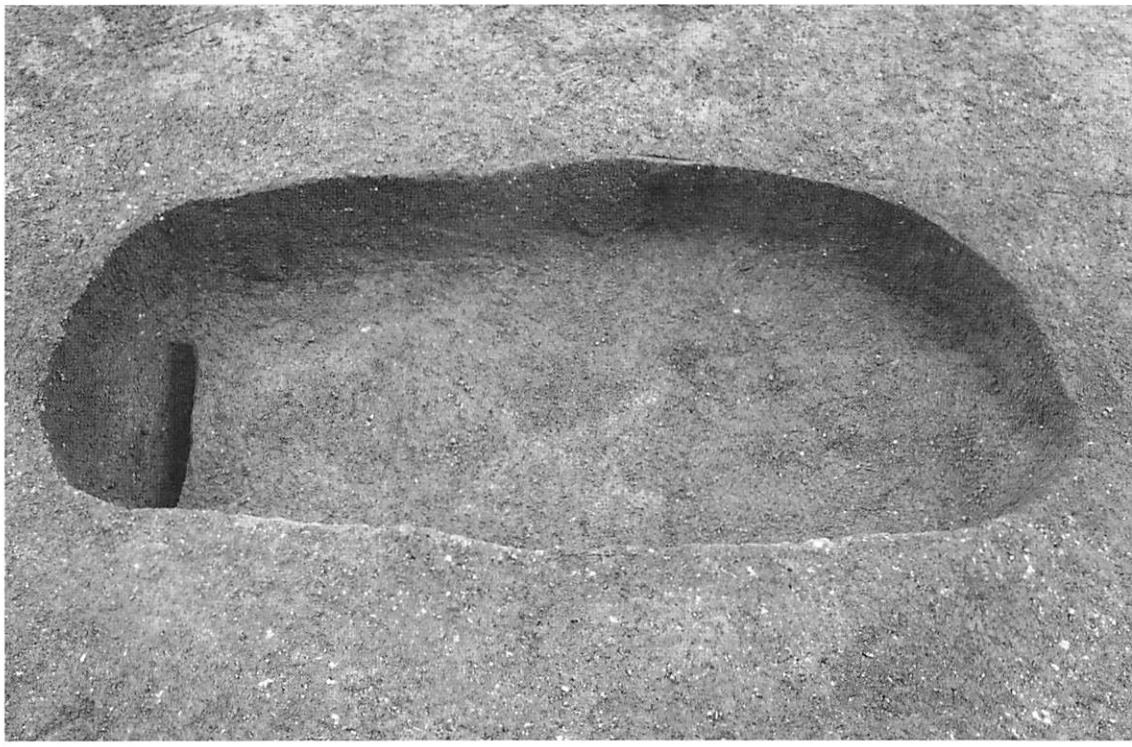


b　ＳＫ14完掘（北から）



c　ＳＫ15・16断面
（北から）

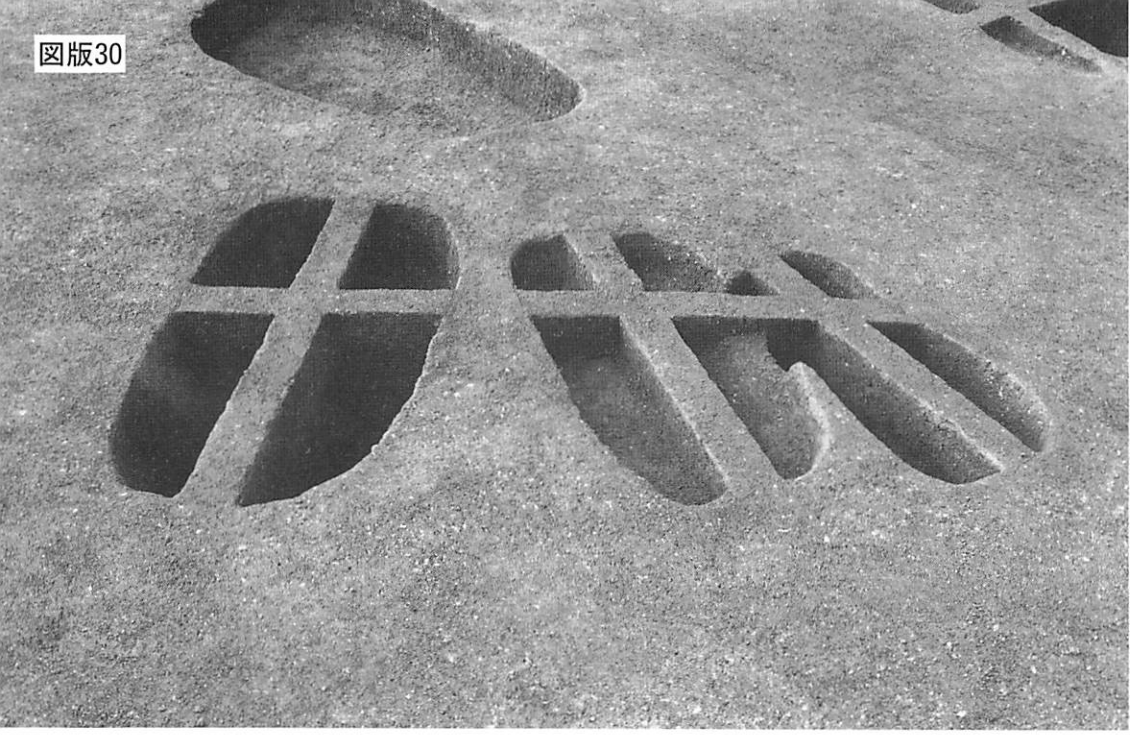
a　ＳＫ15・16完掘
（北から）



b　ＳＫ17完掘（北から）

c　ＳＫ17完掘（西から）

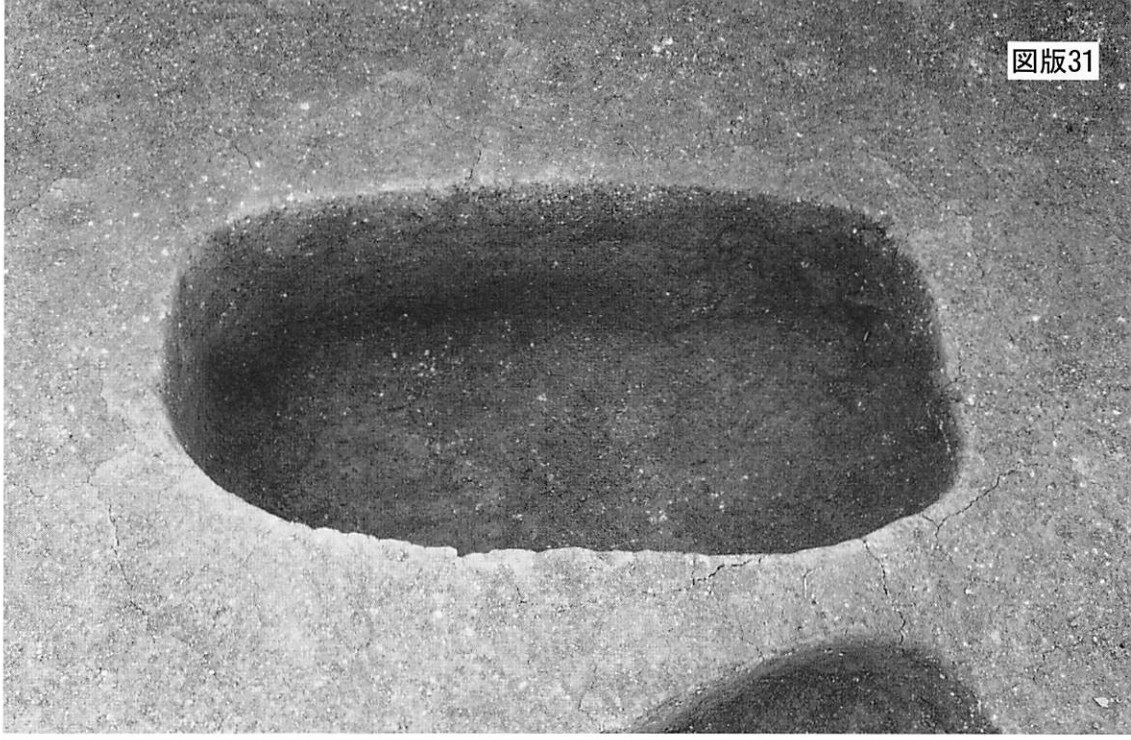
図版30



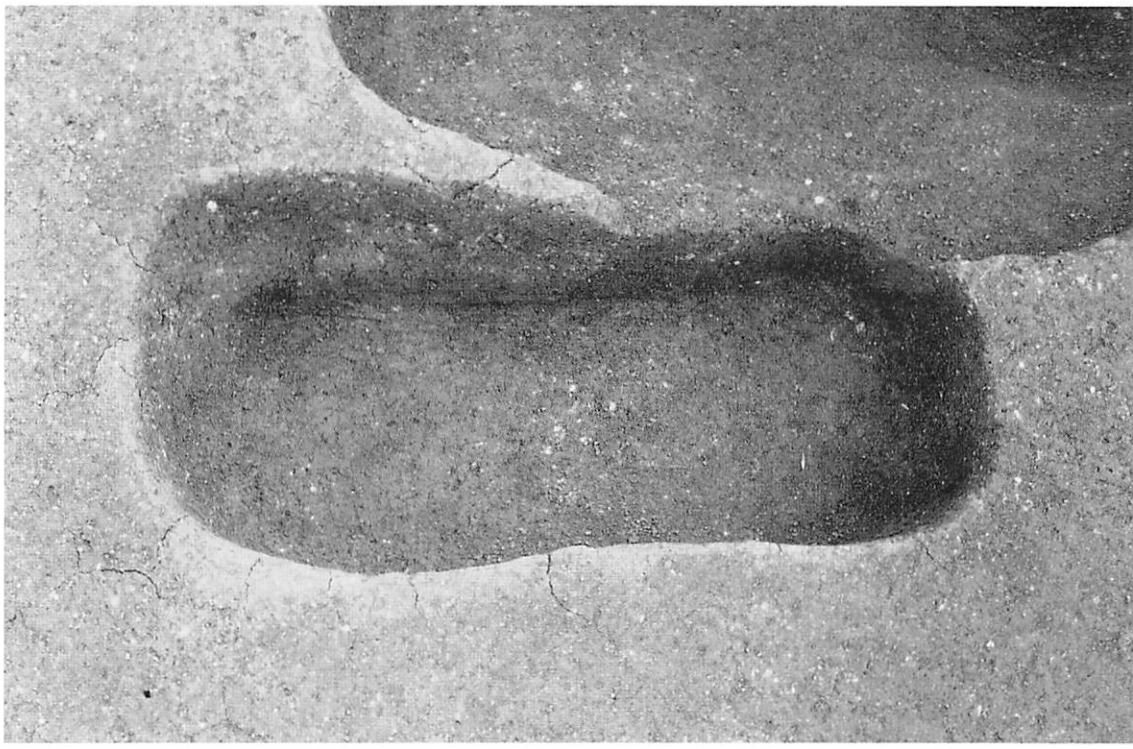
a　ＳＫ18～21断面
（東から）

b　ＳＫ18～21完掘
（西から）

c　ＳＫ18～21完掘
（北から）



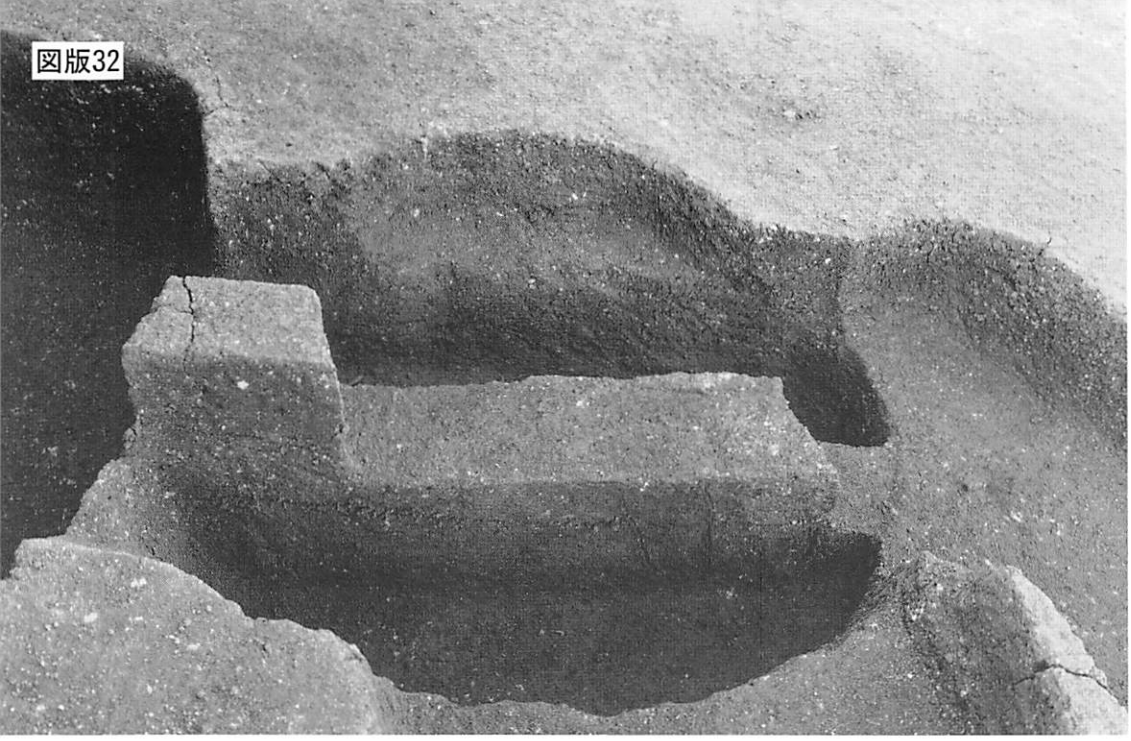
a　ＳＫ18完掘（北から）



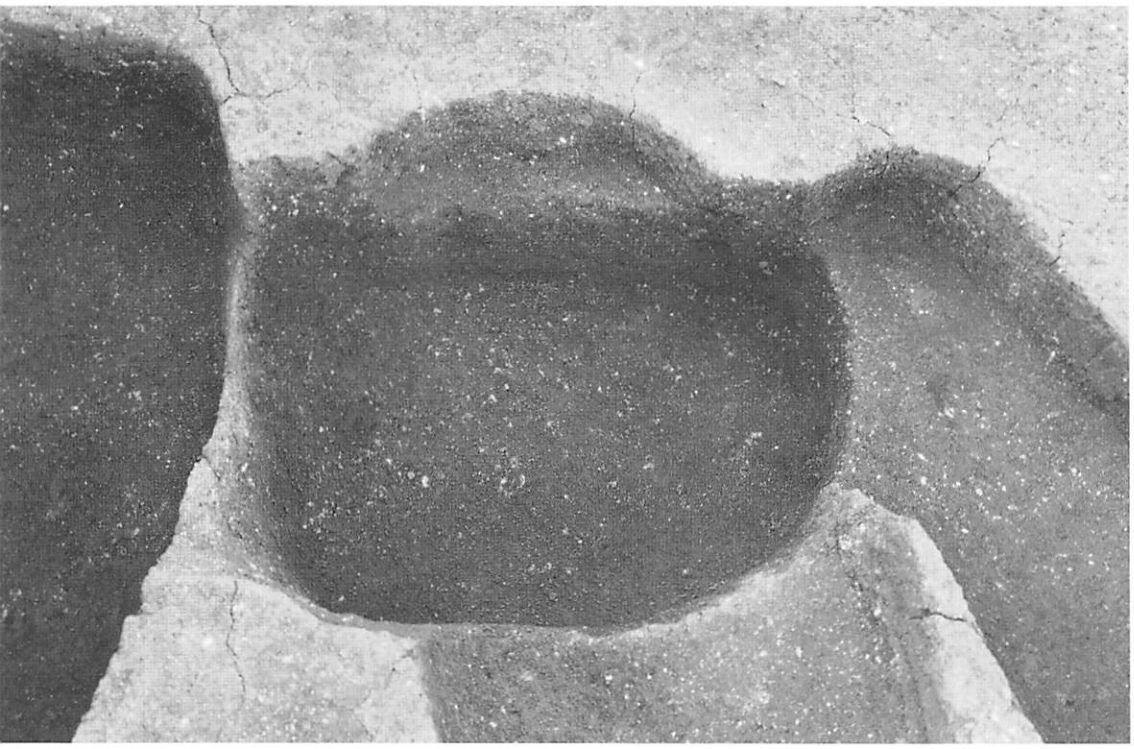
b　ＳＫ19完掘（北から）

c　ＳＫ20完掘（北から）

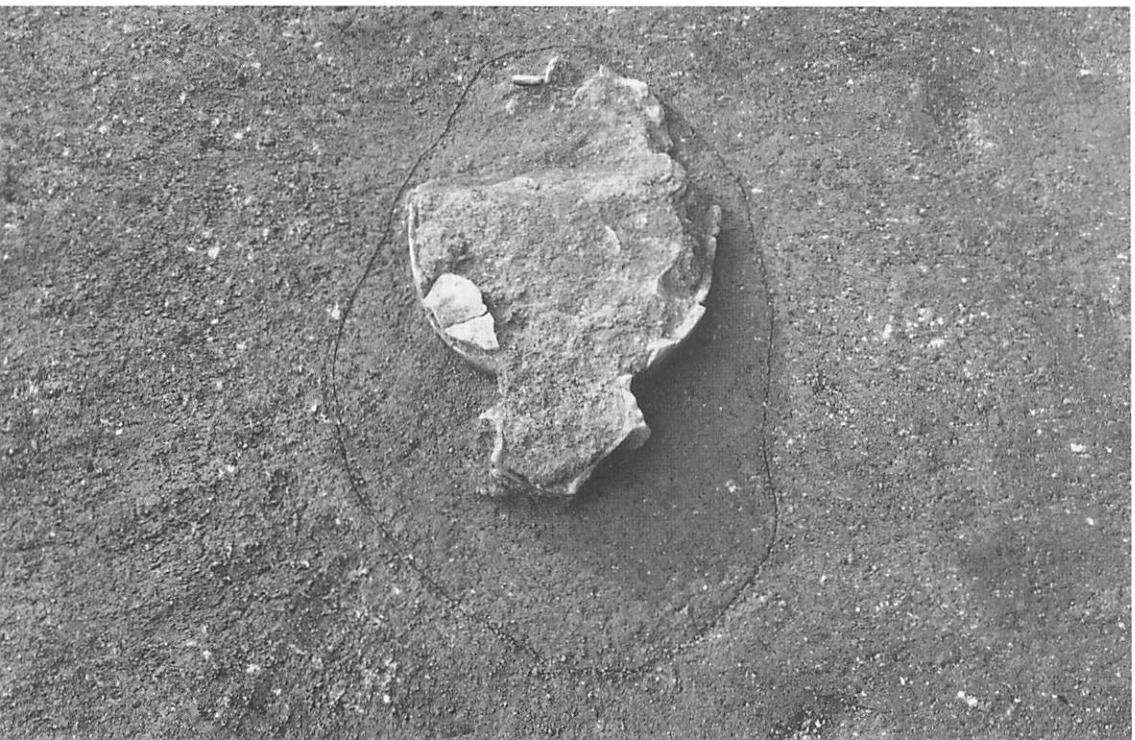
図版32



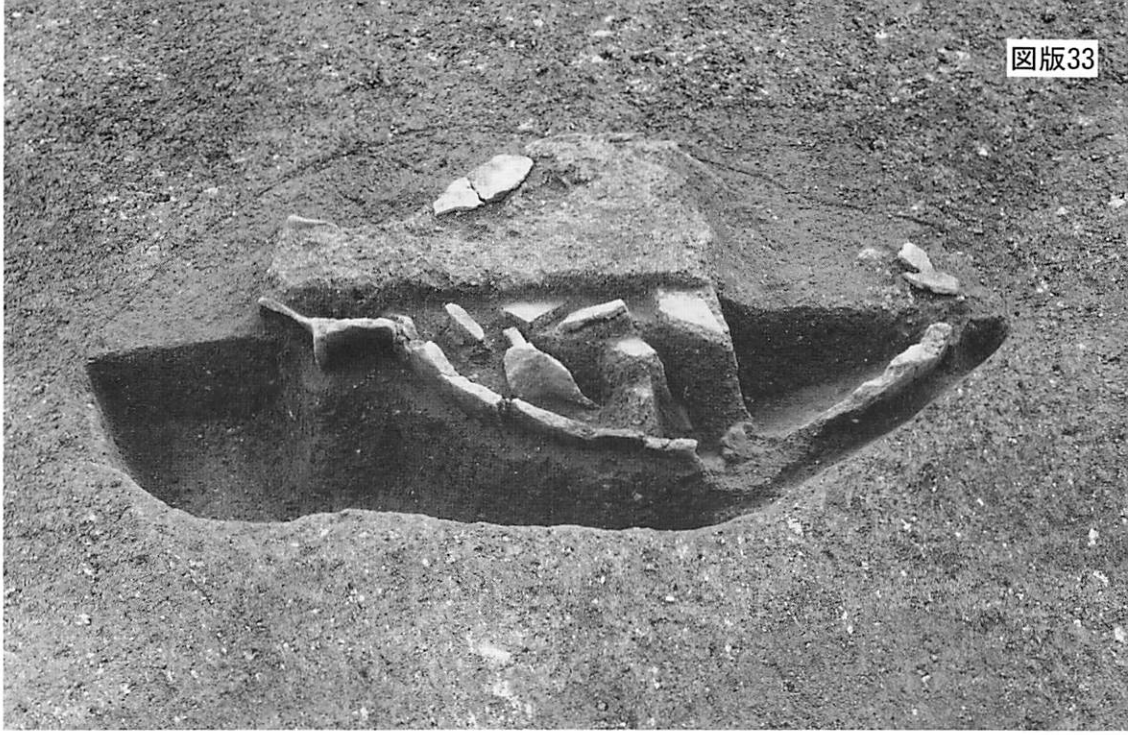
a　ＳＫ20・21断面
（東から）



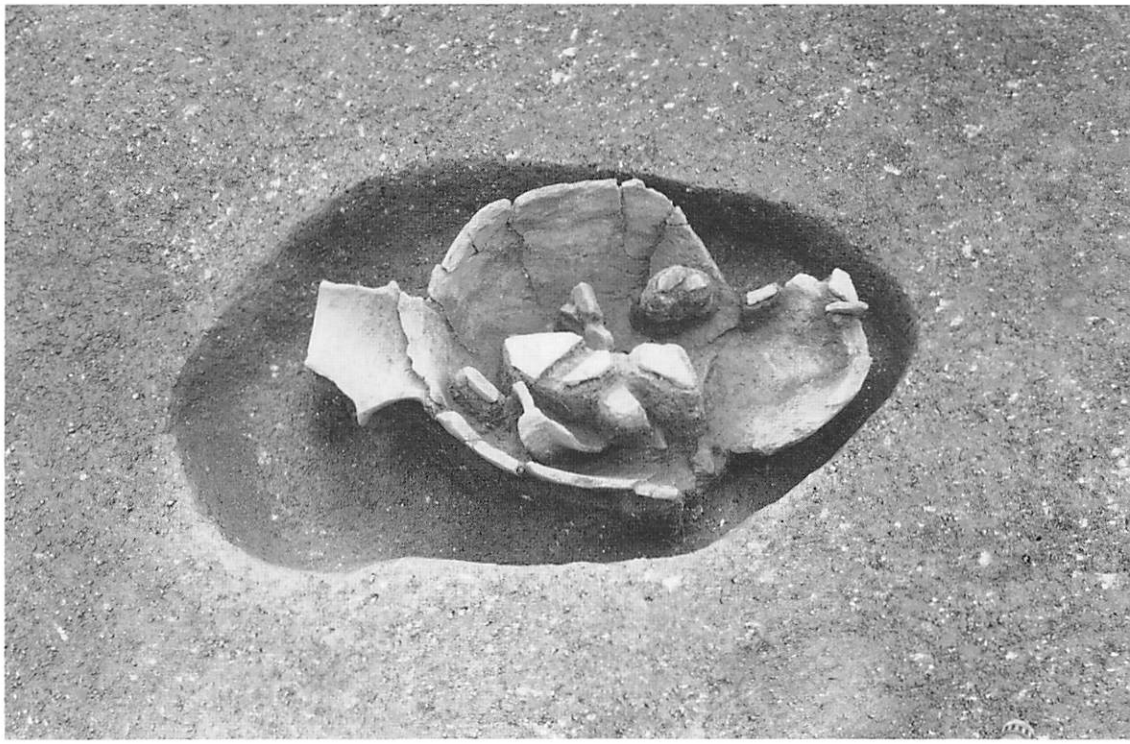
b　ＳＫ21完掘（東から）



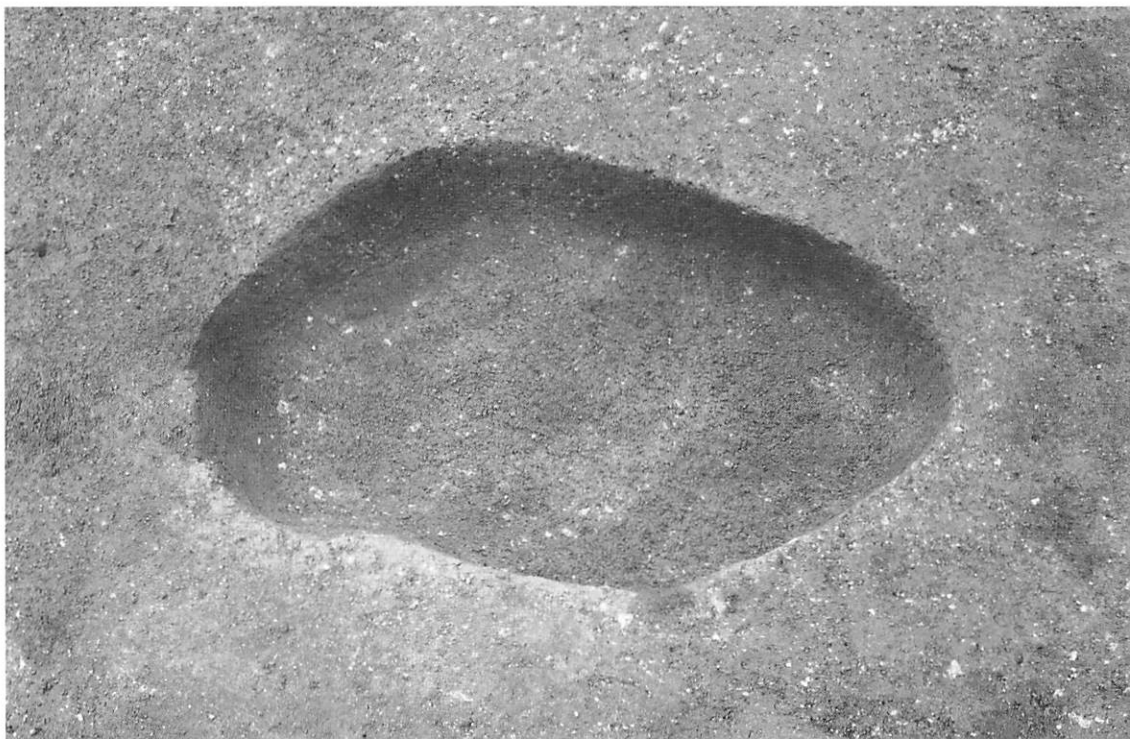
c　ＳＫ22検出状況
（西から）



a　ＳＫ22検出状況
（南から）

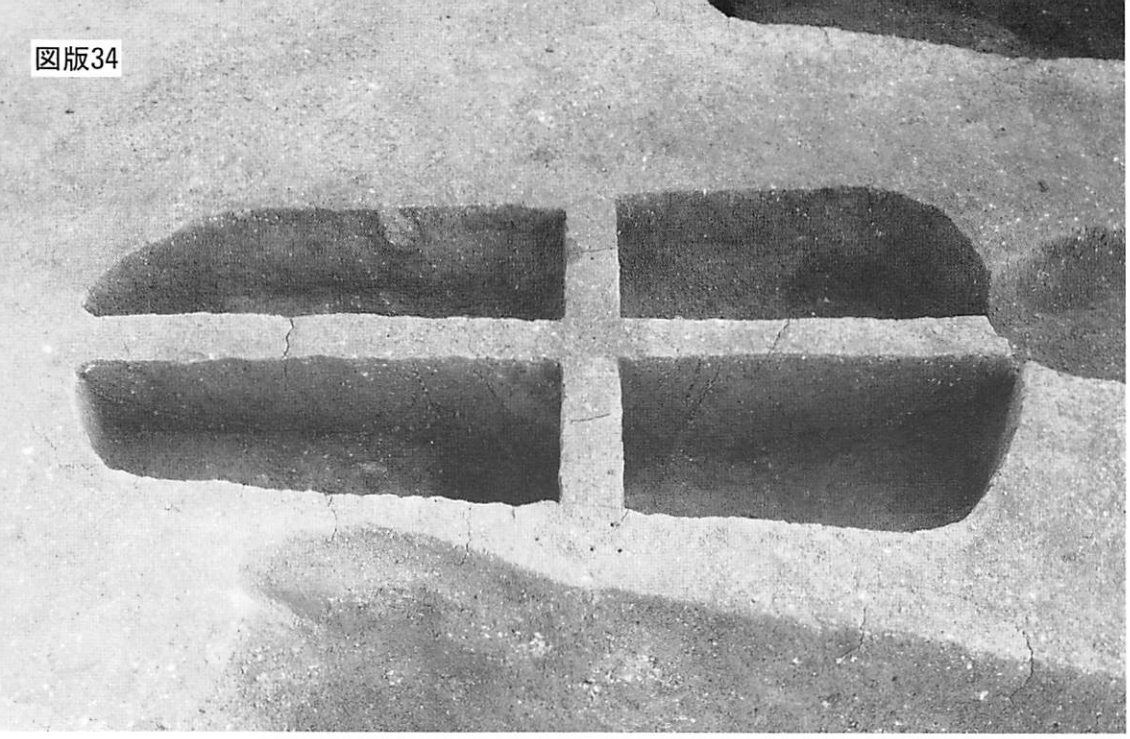


b　ＳＫ22検出状況
（南から）



c　ＳＫ22完掘（南から）

図版34

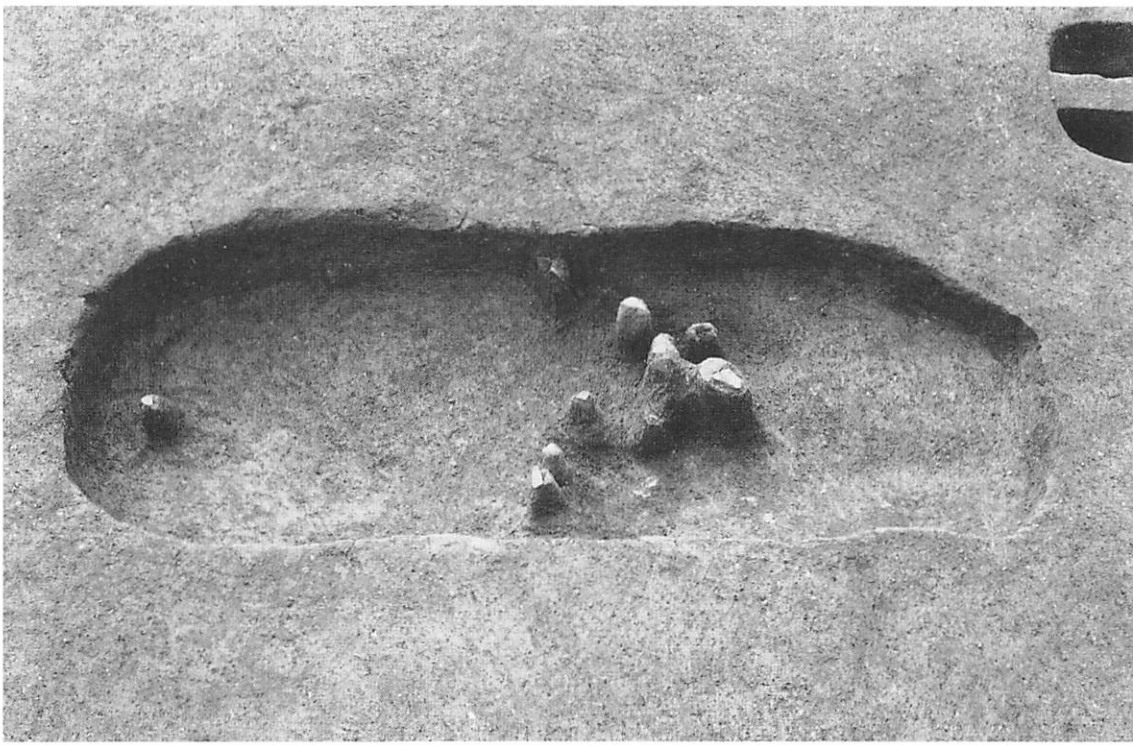


a　ＳＫ23断面（北から）

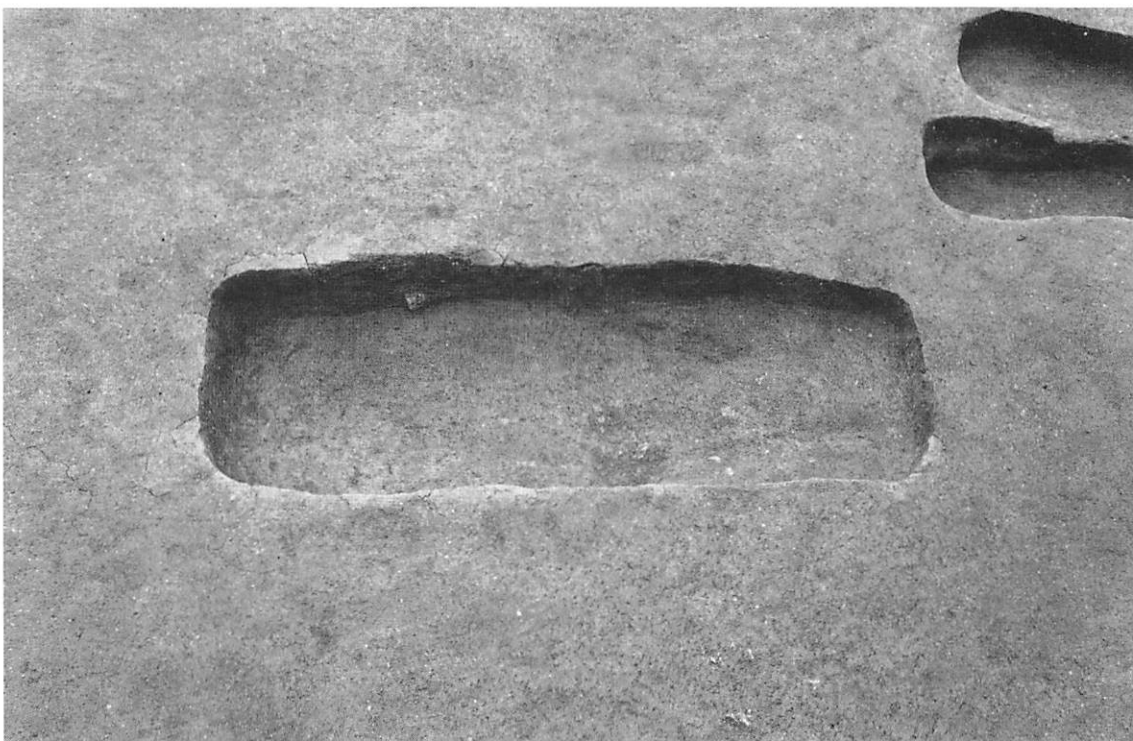
b　ＳＫ23完掘（南から）

c　ＳＫ24完掘（南から）

a　ＳＫ25完掘（南から）



b　ＳＫ26検出状況
（北から）

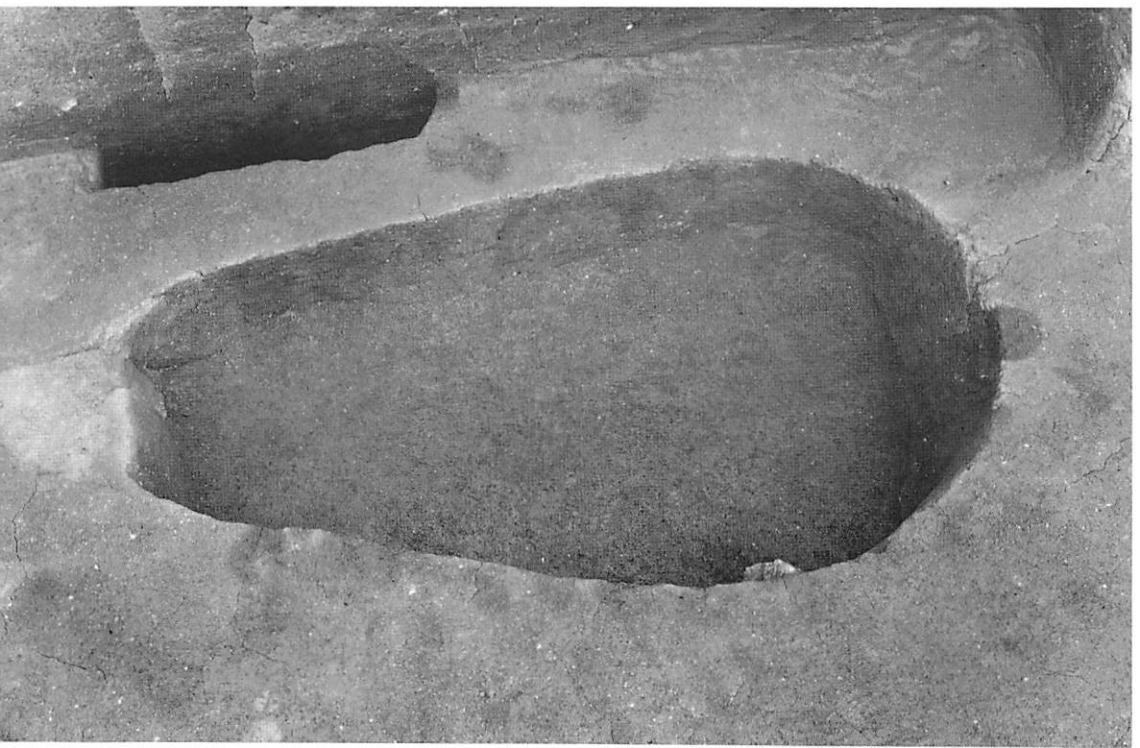


c　ＳＫ26完掘（北から）

図版36

a　ＳＫ27完掘（南から）

b　ＳＫ28完掘（南から）



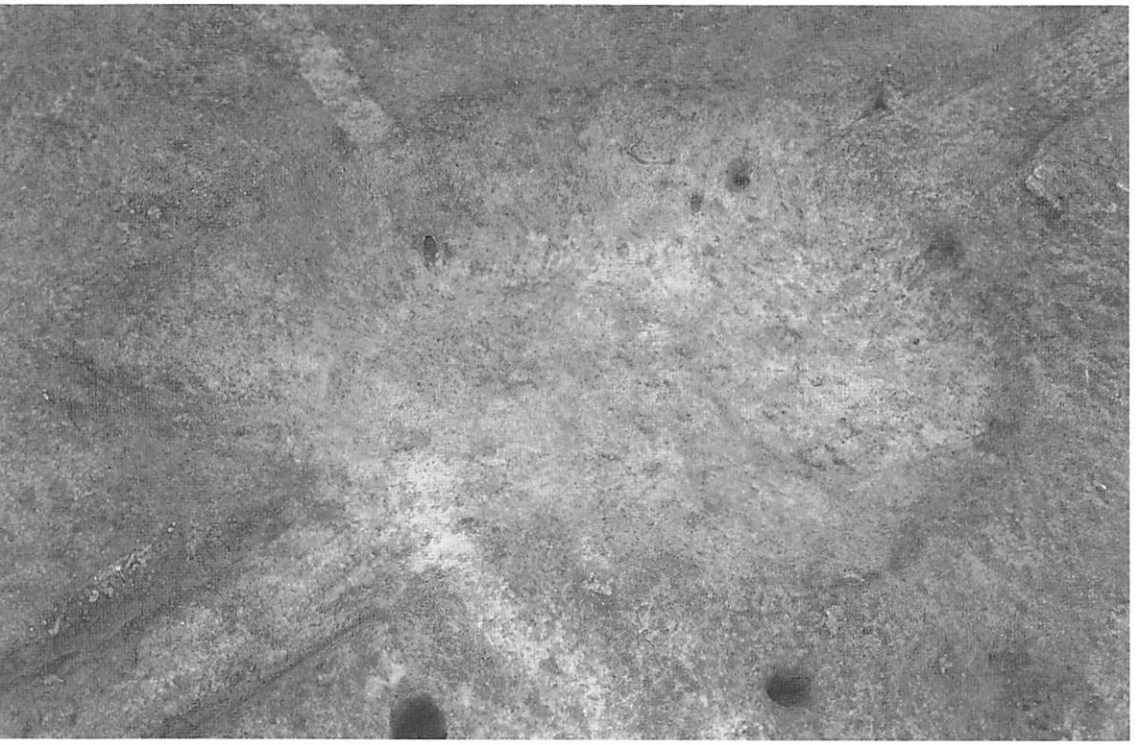
c　ＳＫ29完掘（南から）

a　ＳＸ１完掘（北から）

b　ＳＸ２検出状況（西から）

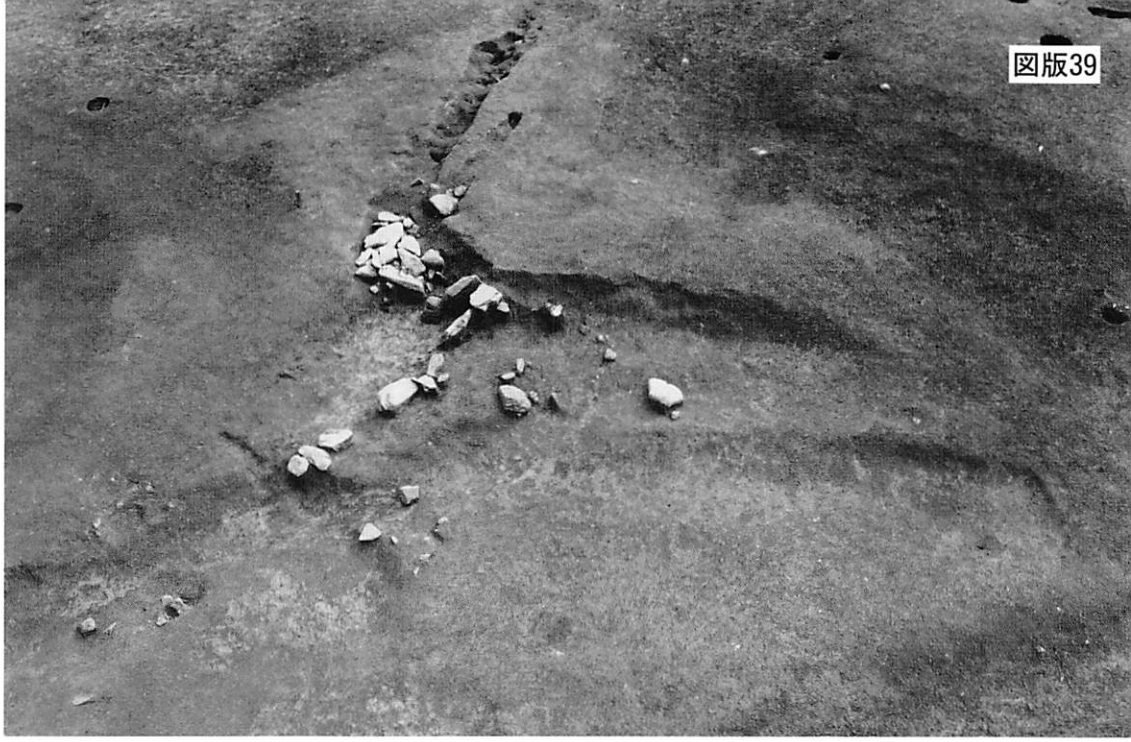
c　ＳＸ４断面（北から）

a　ＳＸ４検出状況
（北から）

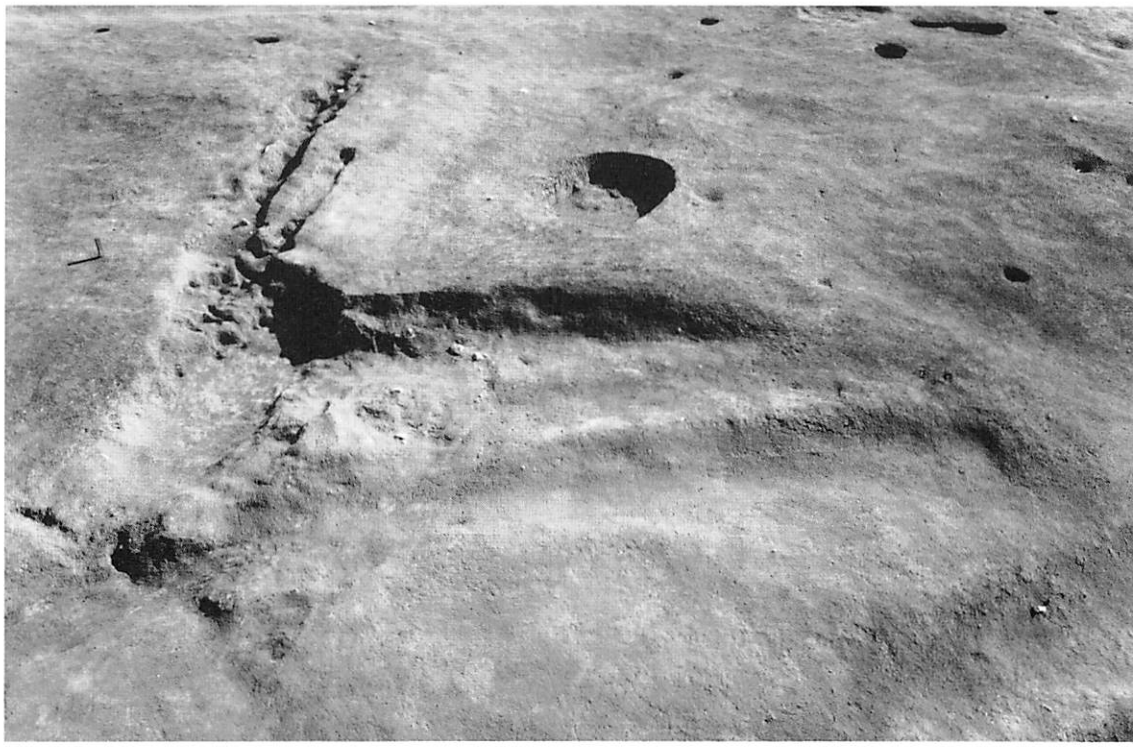


b　ＳＸ４完掘（北から）

c　ＳＸ６完掘（北から）

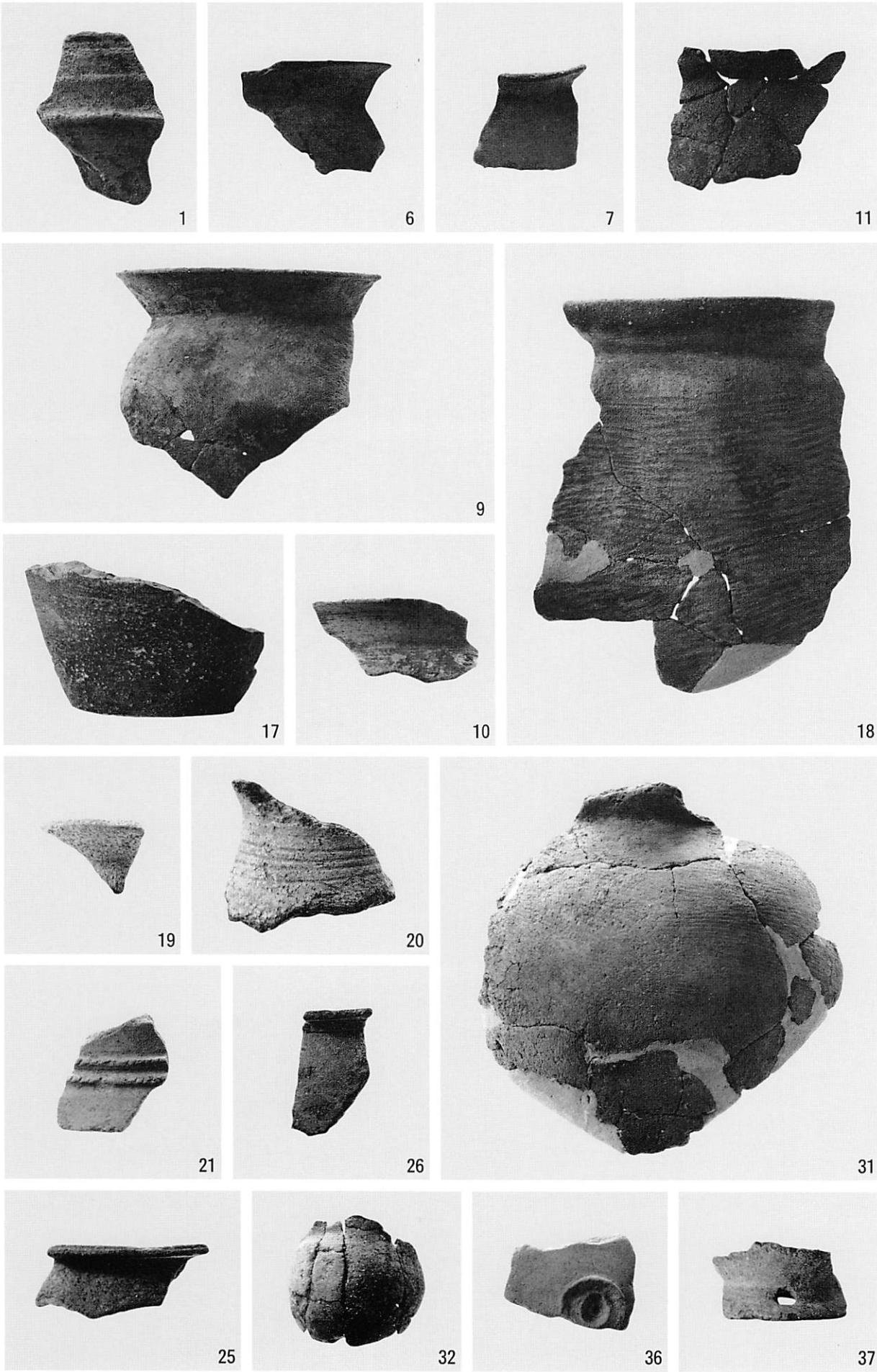


a　ＳＸ７・ＳＤ２検出状況
（北から）

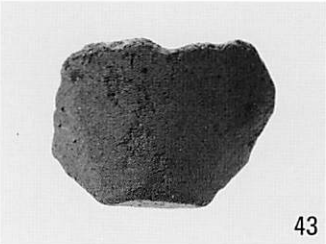


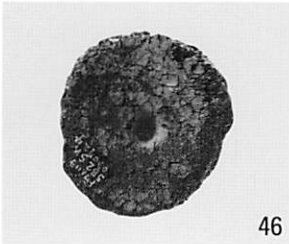
b　ＳＸ７・ＳＤ２完掘
（北から）

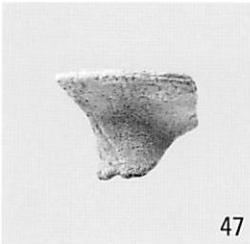
c　ＳＤ１完掘（北東から）

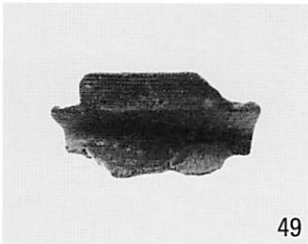


出土遺物１

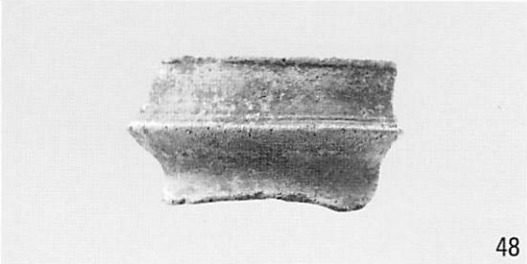

43

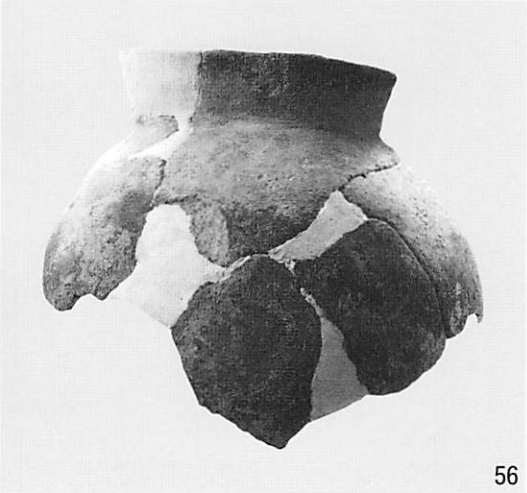

46

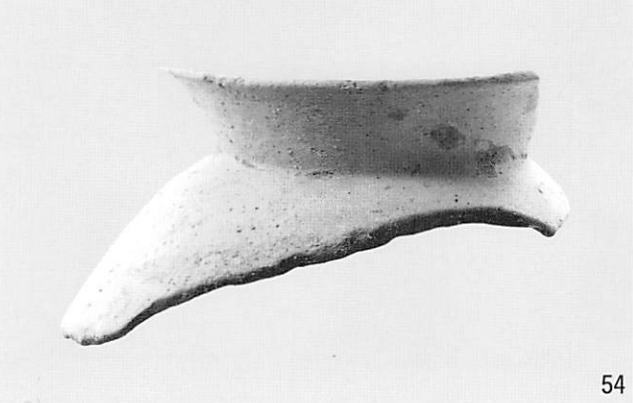

47

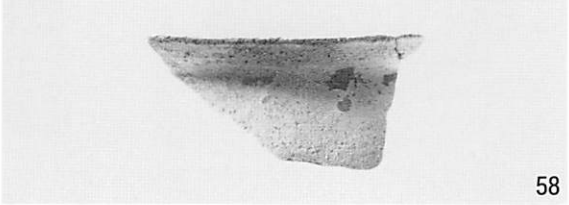

49

53


48


56

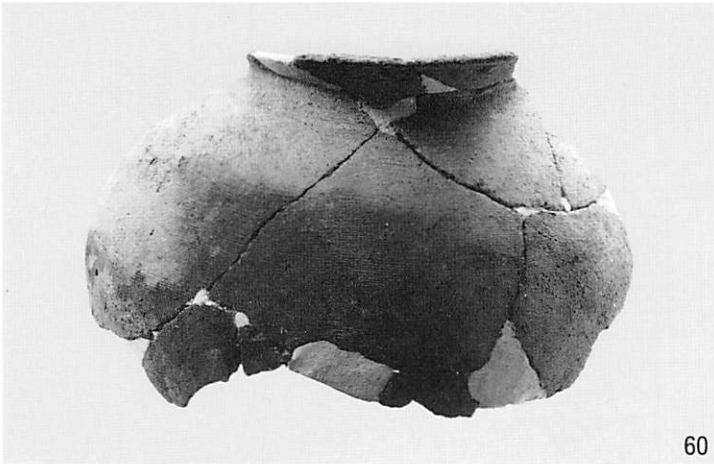

54

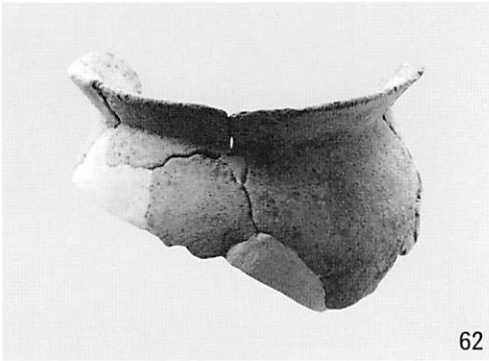

58

59

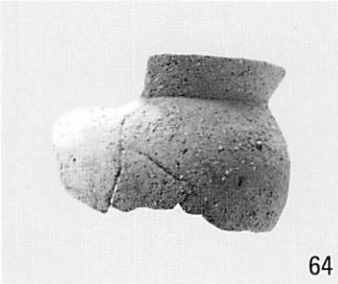
55

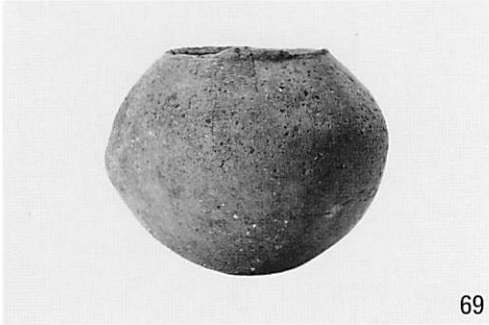
出土遺物２

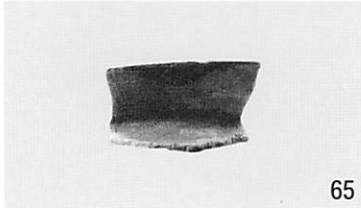

60


62

61

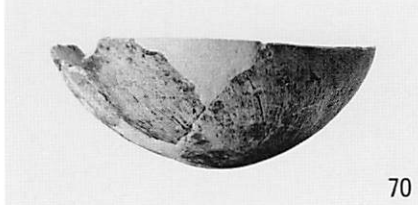

64


69

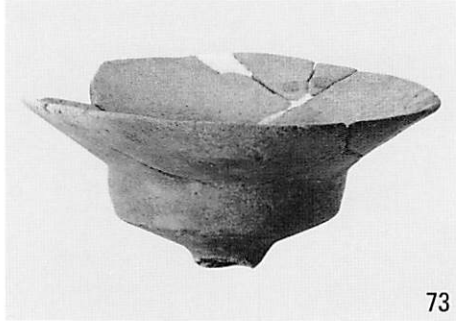

65

63

66


70

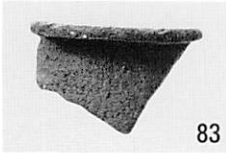
77


73

78

79

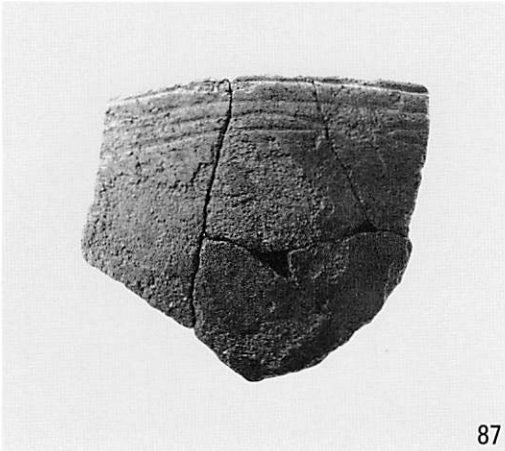
80


83

81

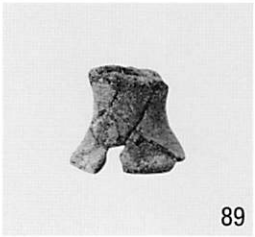
85

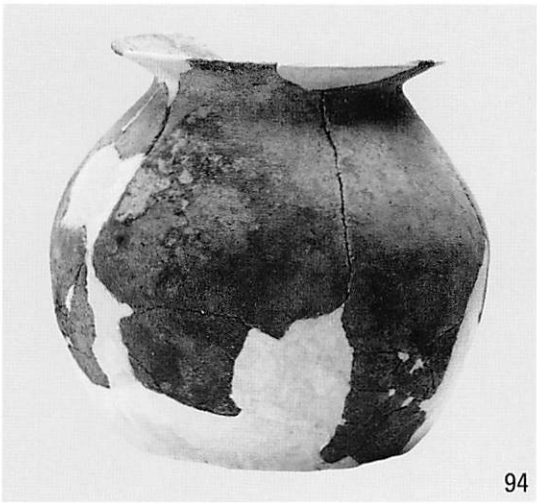
82


87

出土遺物３

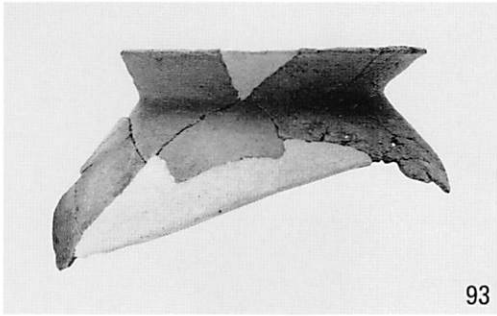
88

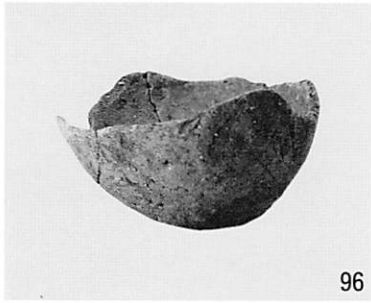

89

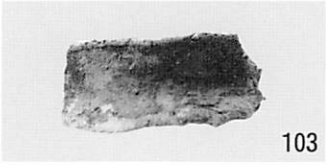

94

98

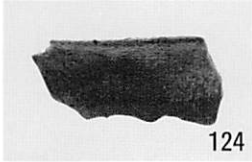
91

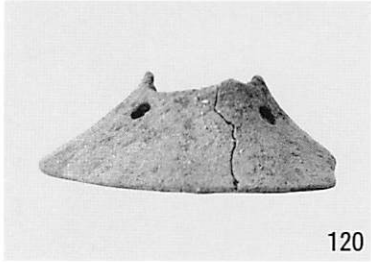

93

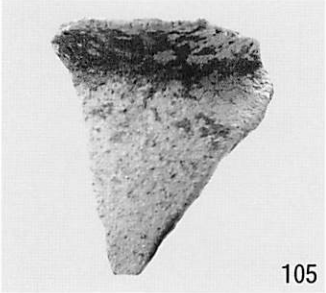

96

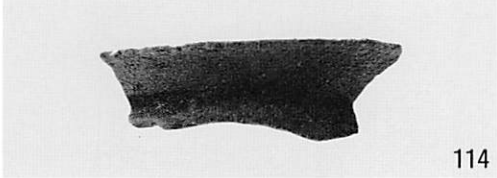

103

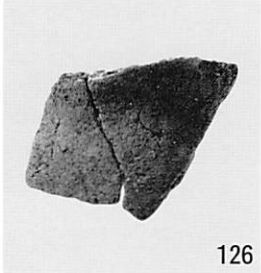
109


124

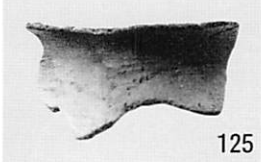

120


105


114

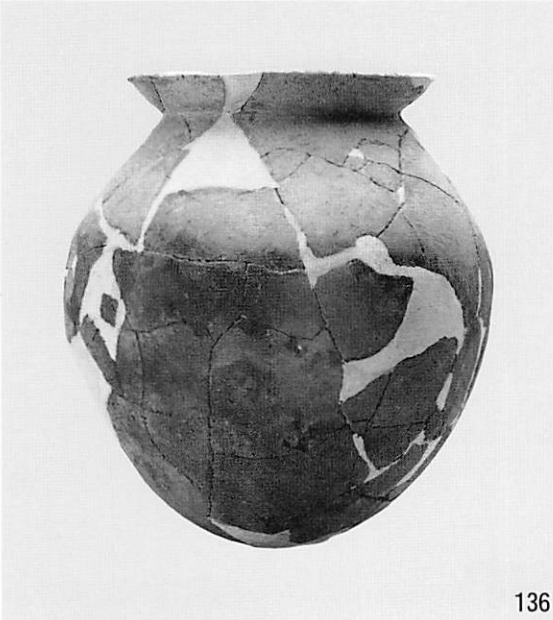

126

133

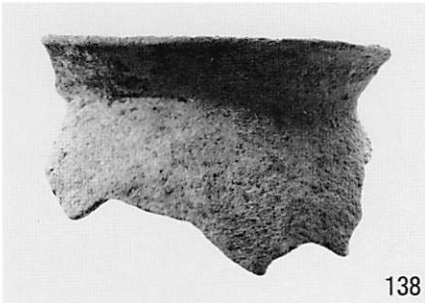

125

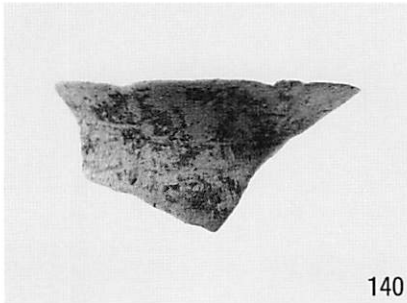
134

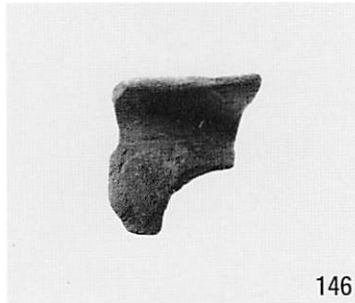
出土遺物４

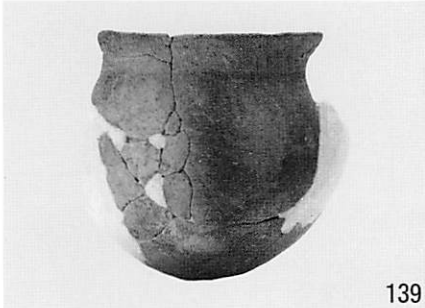

136

137


138

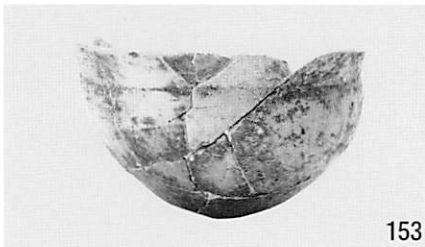

140

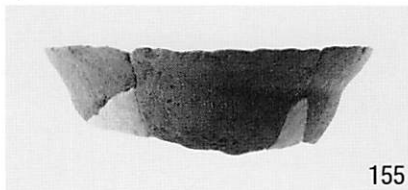

146

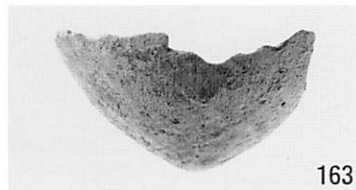

139

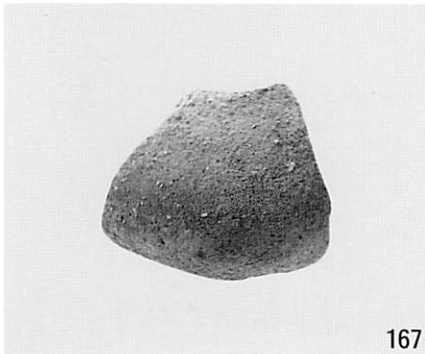
151

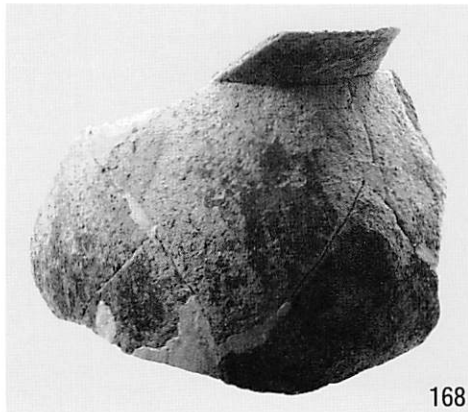
152

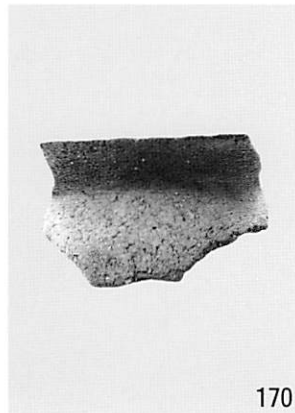

153


155

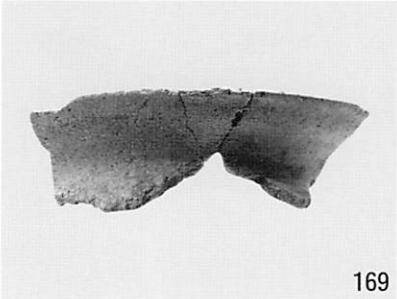

163

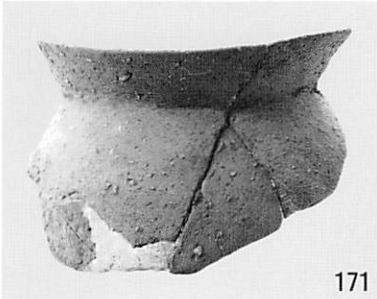

167

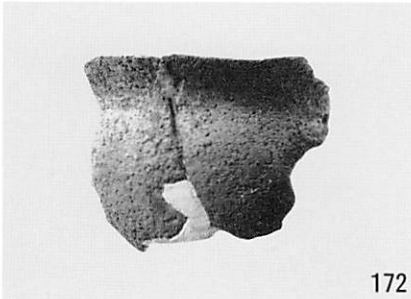

168

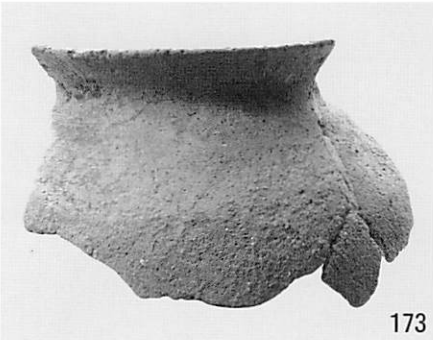

170

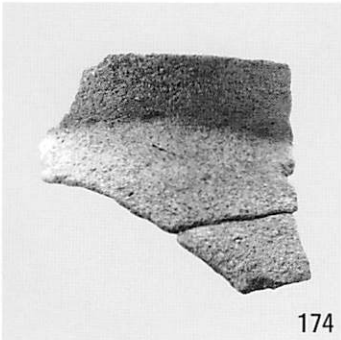
出土遺物５

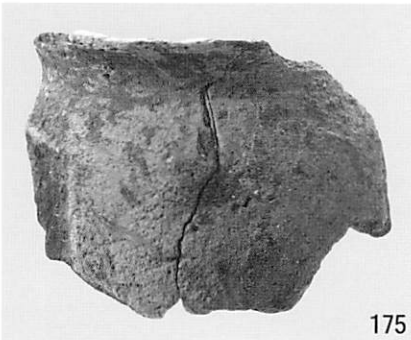

169

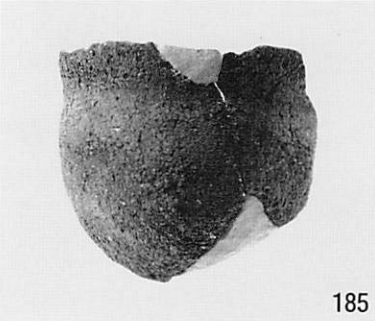

171

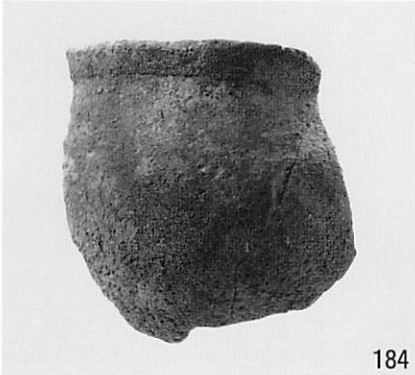

172

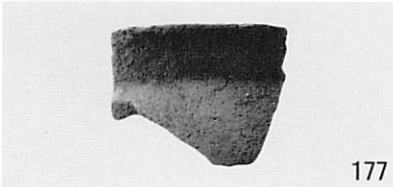

173

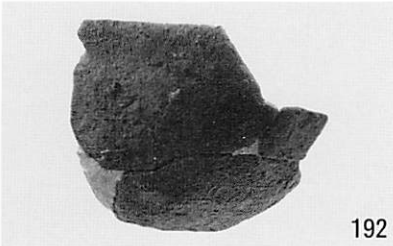

174

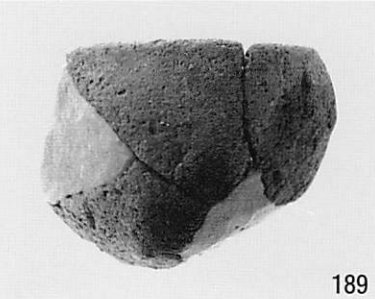

175

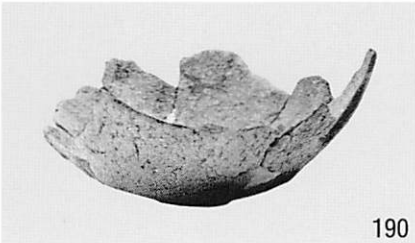

185

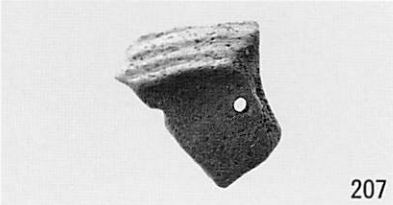

184

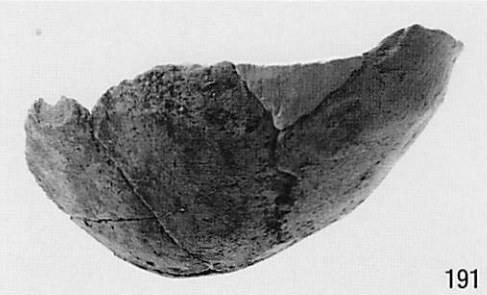

177

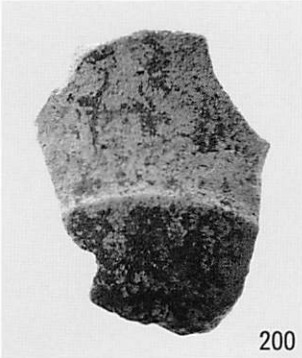

192


189

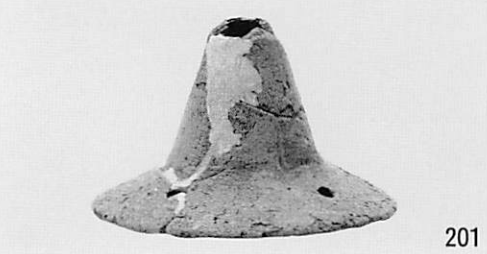

190

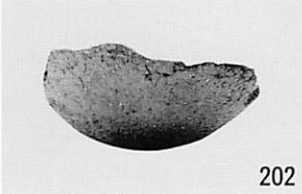

207

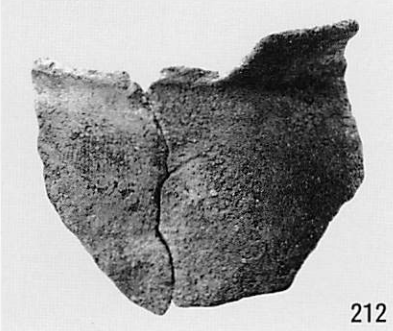

191


200

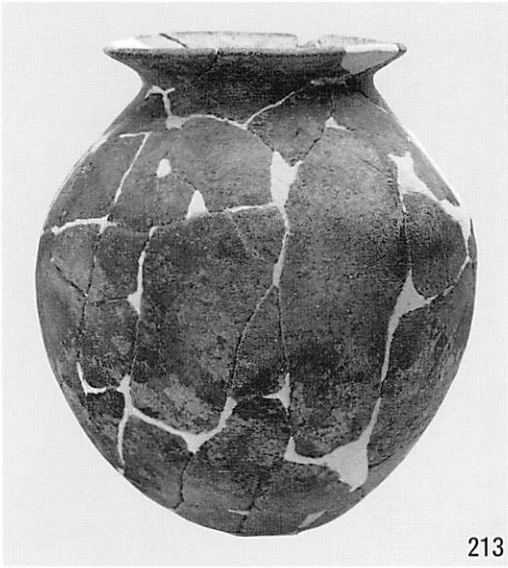
208

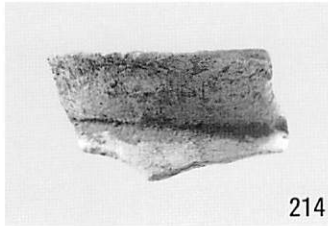

201

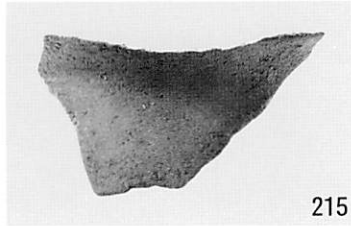

202

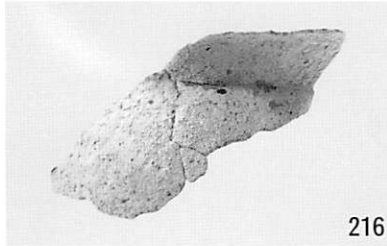

212

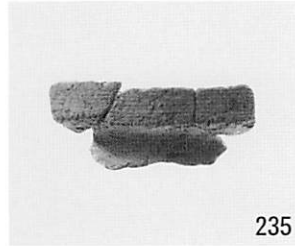
出土遺物６

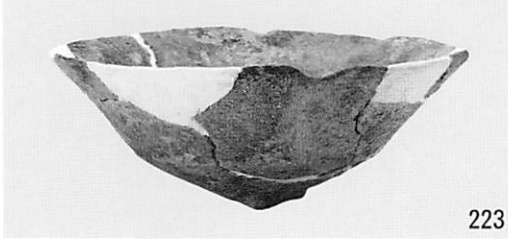

213

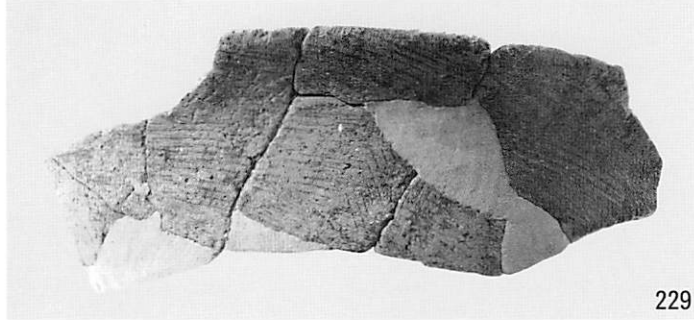

214


215

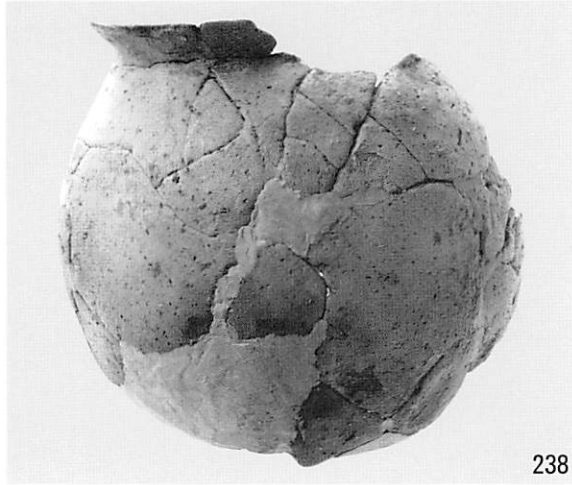

216

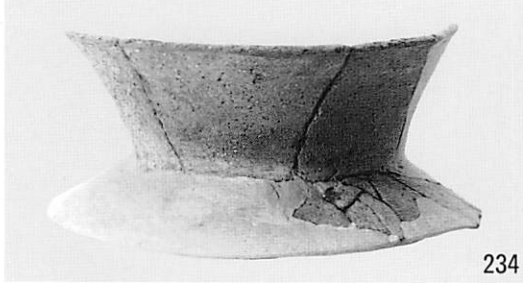

235

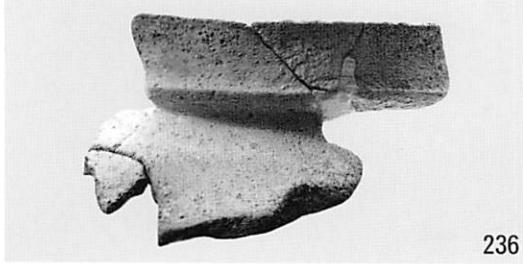

223


229

233

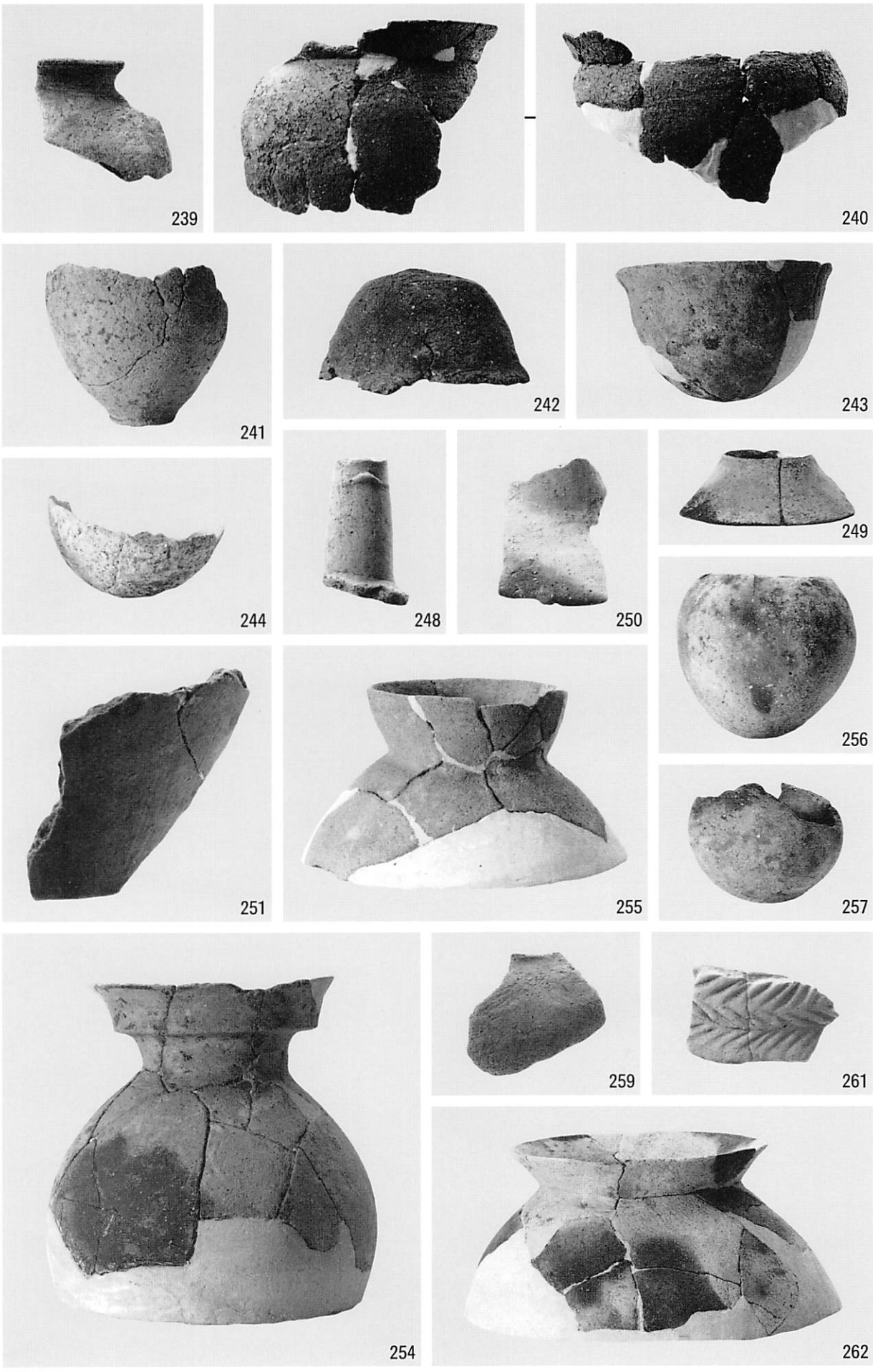

238


234

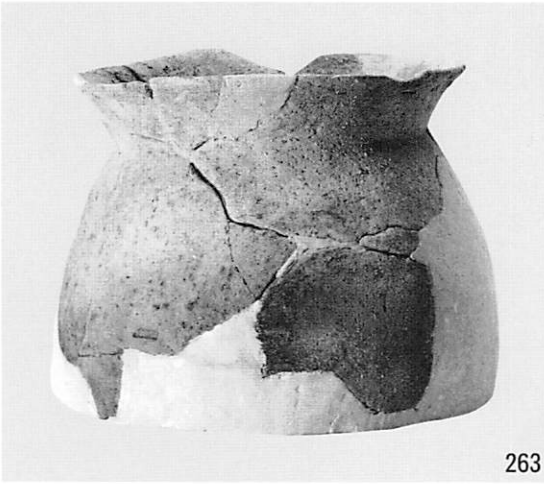

236

237

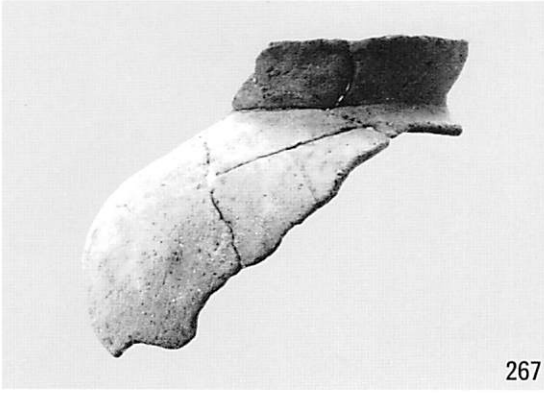
出土遺物７

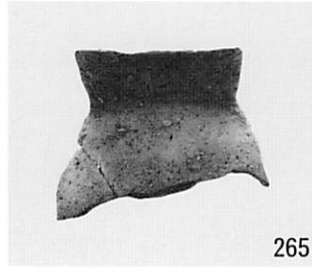

239
240
241
242
243
244
248
250
249
256
251
255
257
254
259
261
262

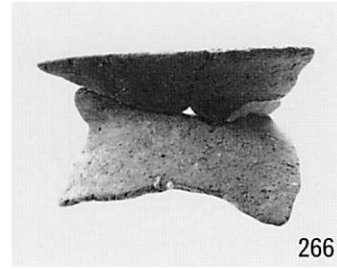
出土遺物８

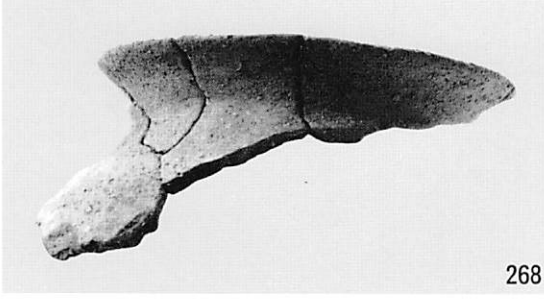

263

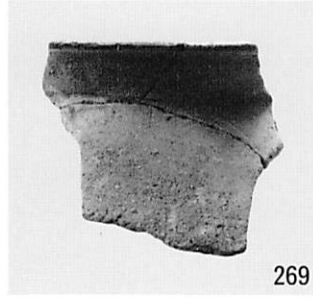
264

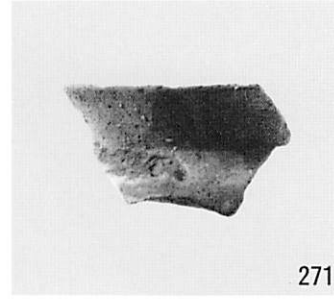

267

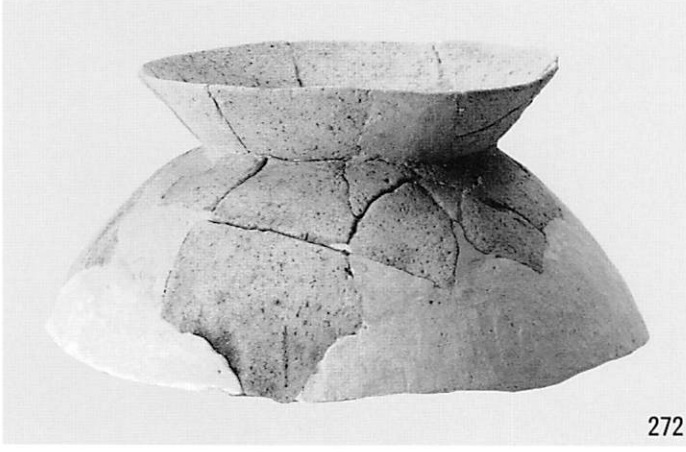

265

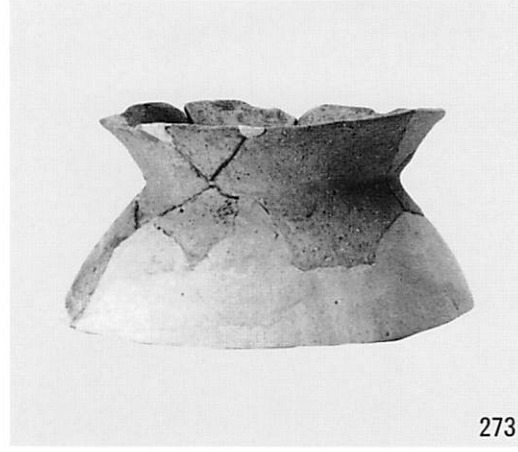

266

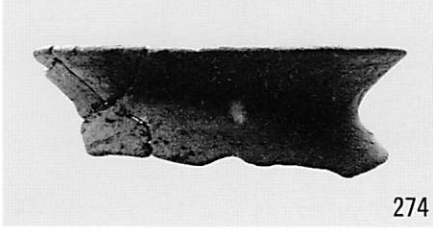

268

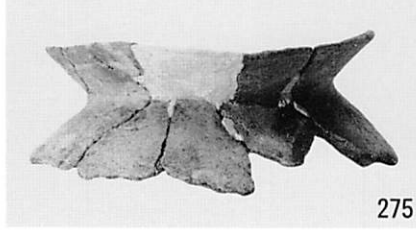

269

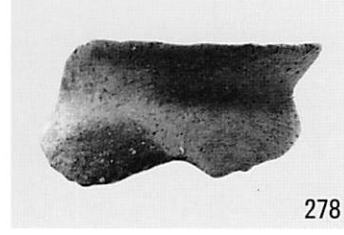

271


272


273

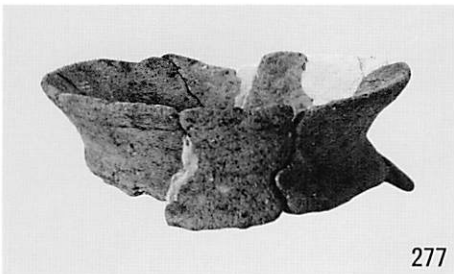

274


275

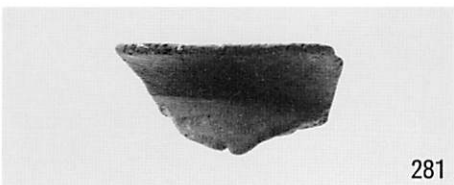

278

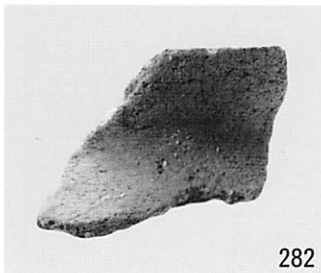
出土遺物９

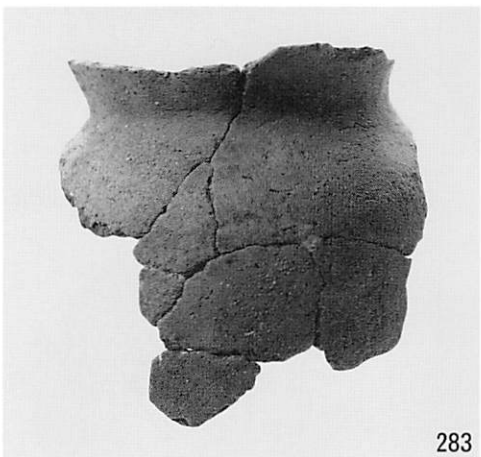
276

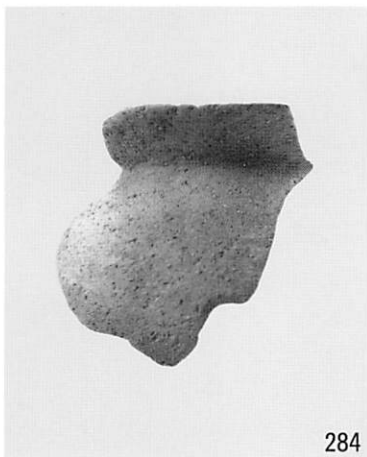

277

280

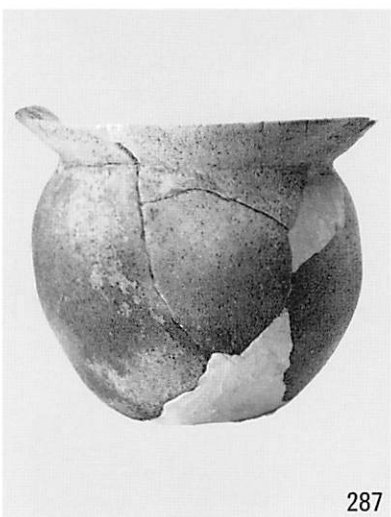

281

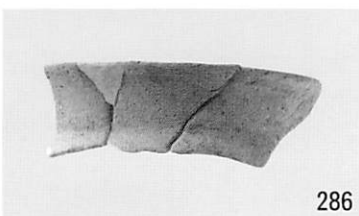

282

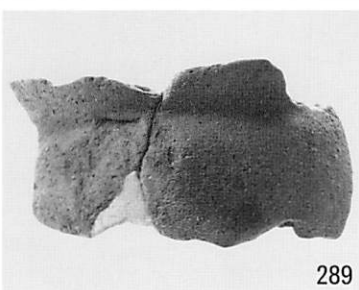

283


284

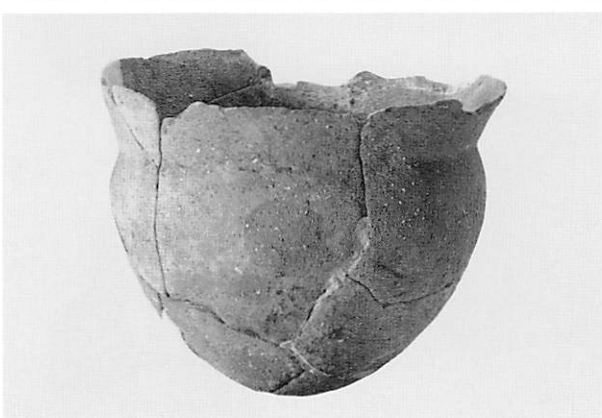
285


287


286

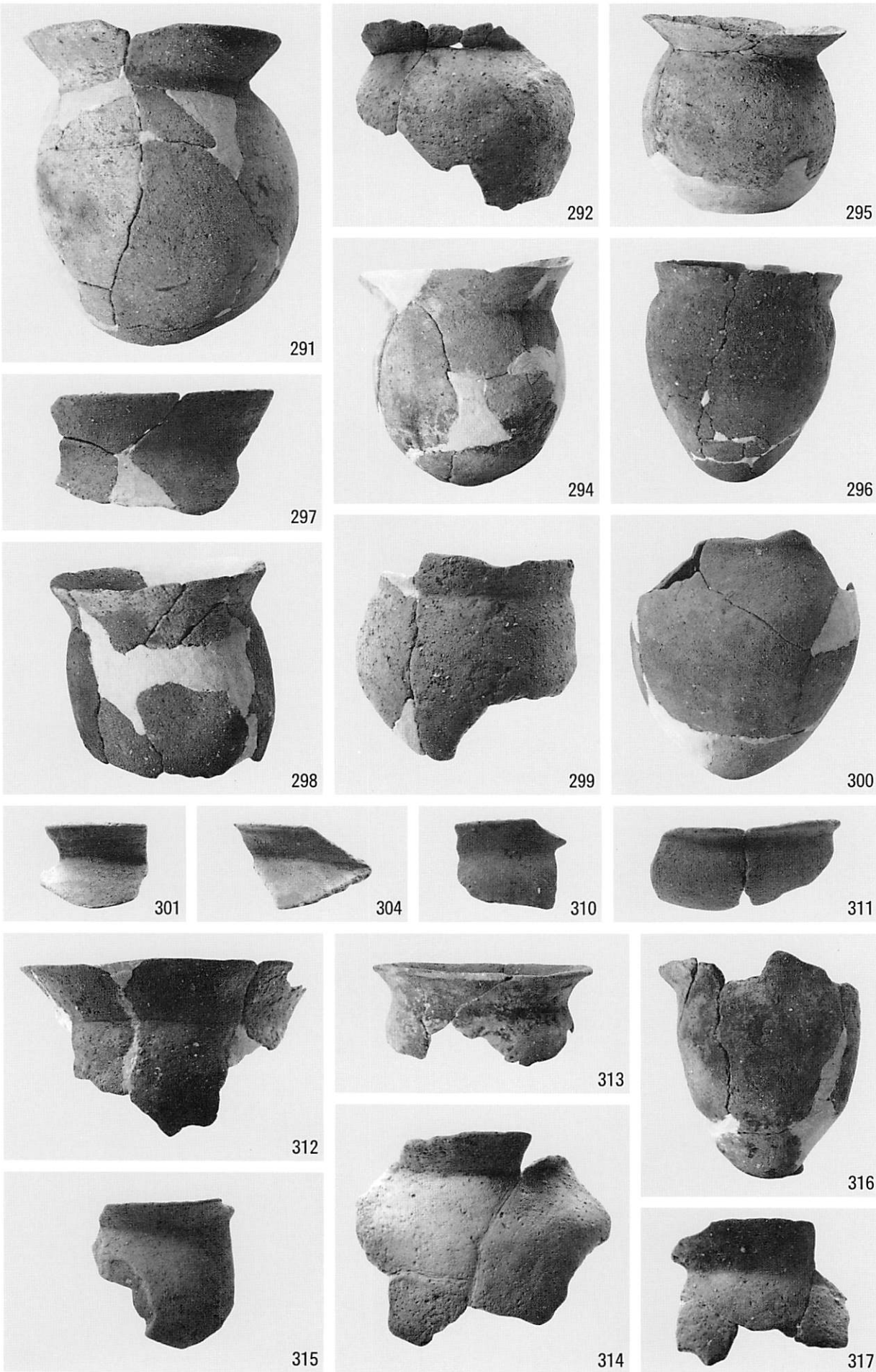

289

288

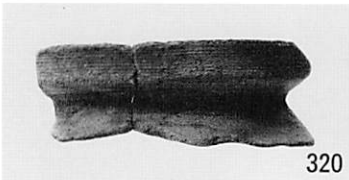


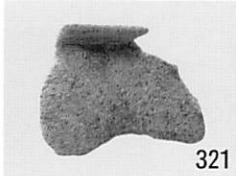
290

出土遺物10

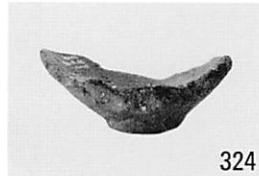

291
292
295
294
296
297
298
299
300
301
304
310
311
312
313
316
315
314
317

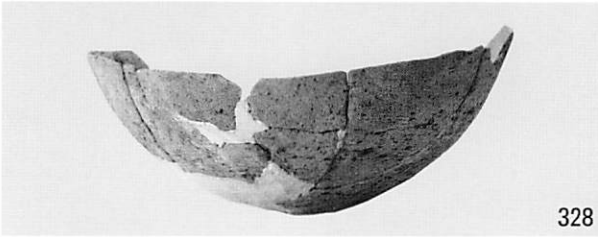
出土遺物11

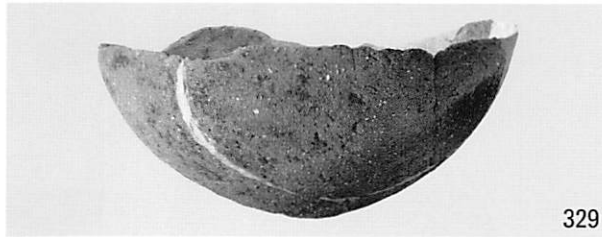

320

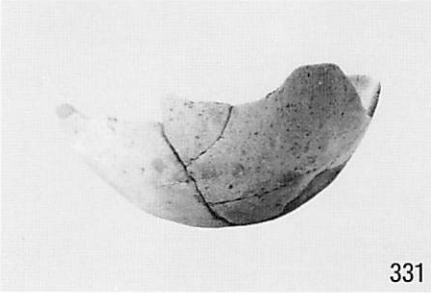

321

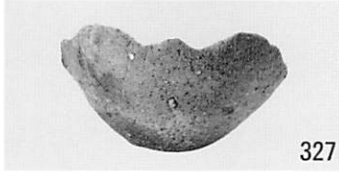
323

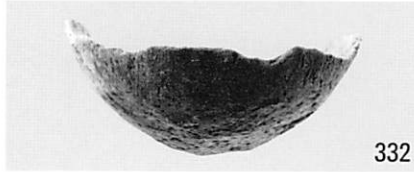

324


328


329

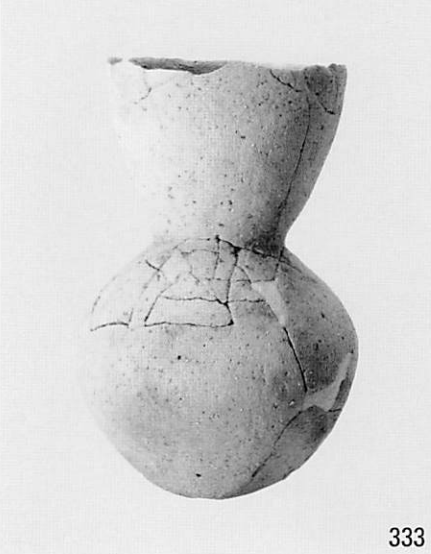

331


327

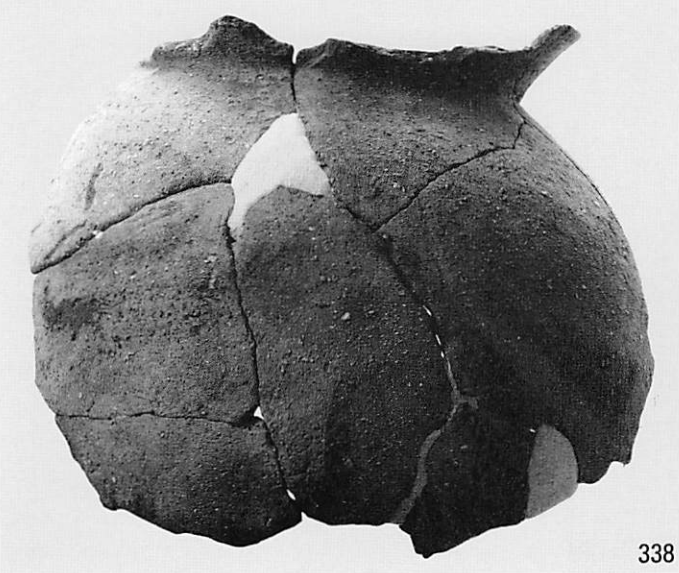

332

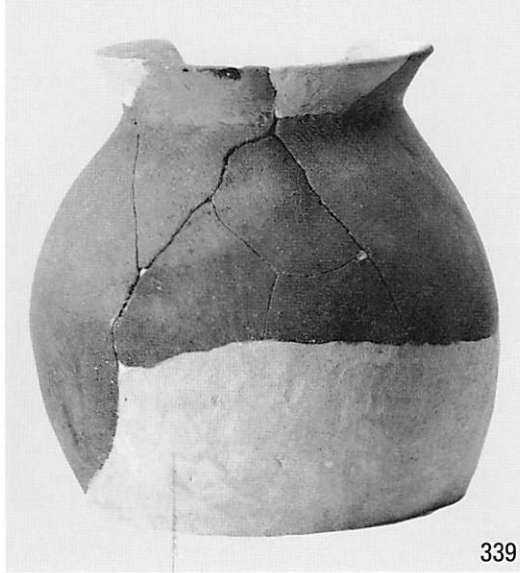
334

335

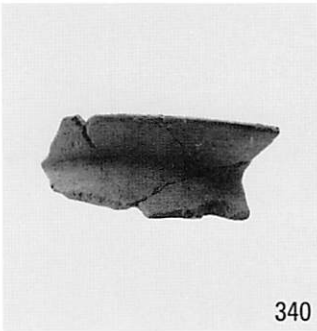

333

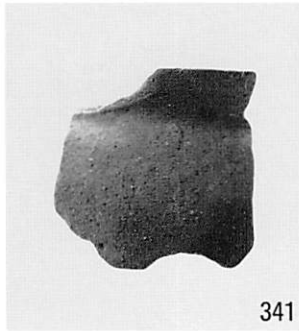
336

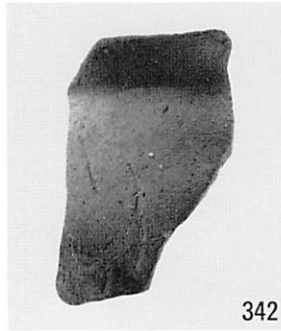

338

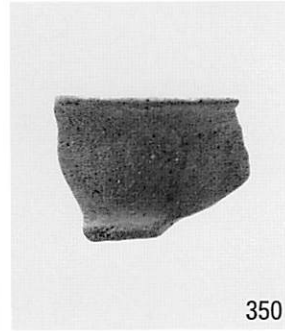

339

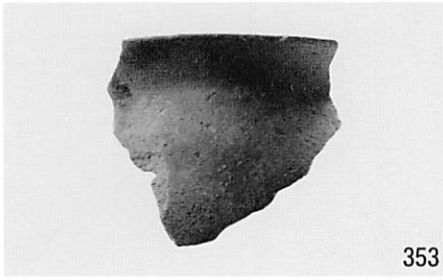
出土遺物12

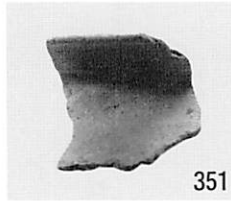

340

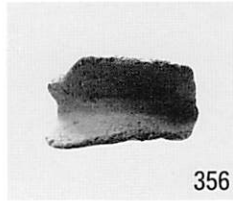

341

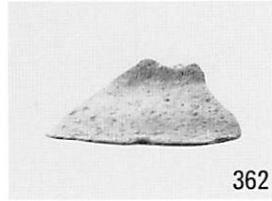

342

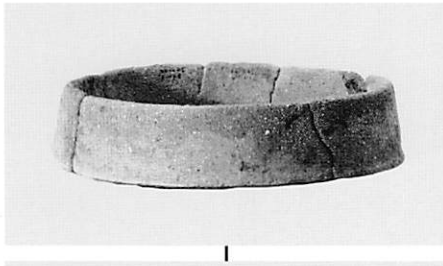

350

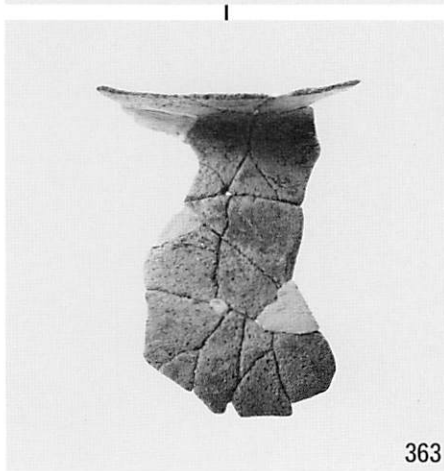

353


351


356


362



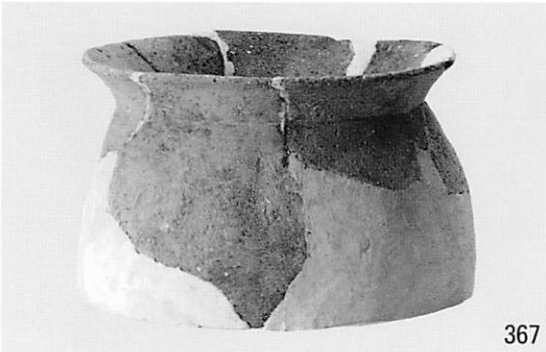

363

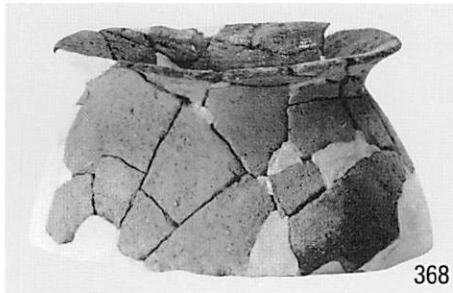
364

365

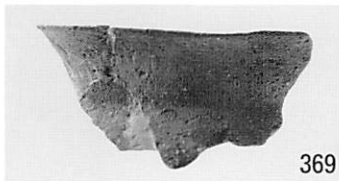
366

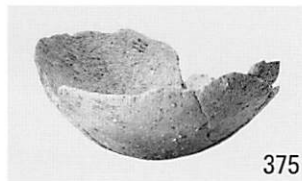
出土遺物13


367

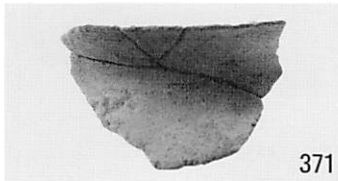

368

374

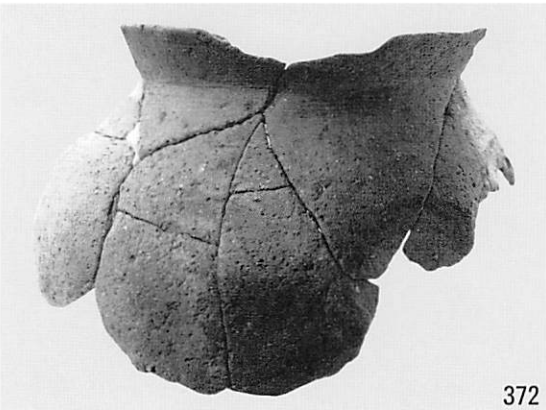

369

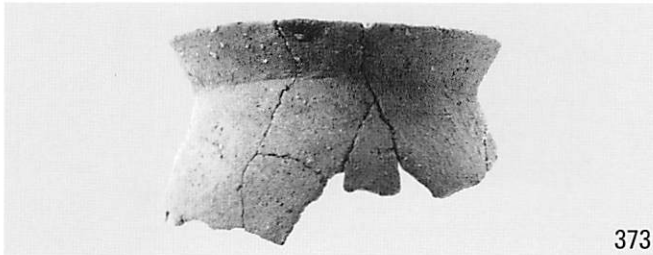

375

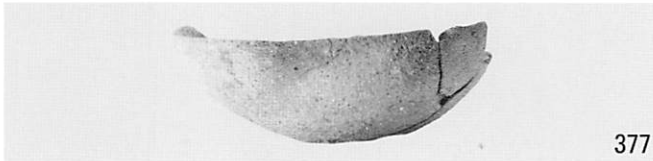
370

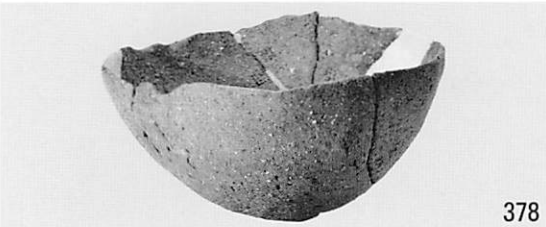

371

379


372


373


377


378

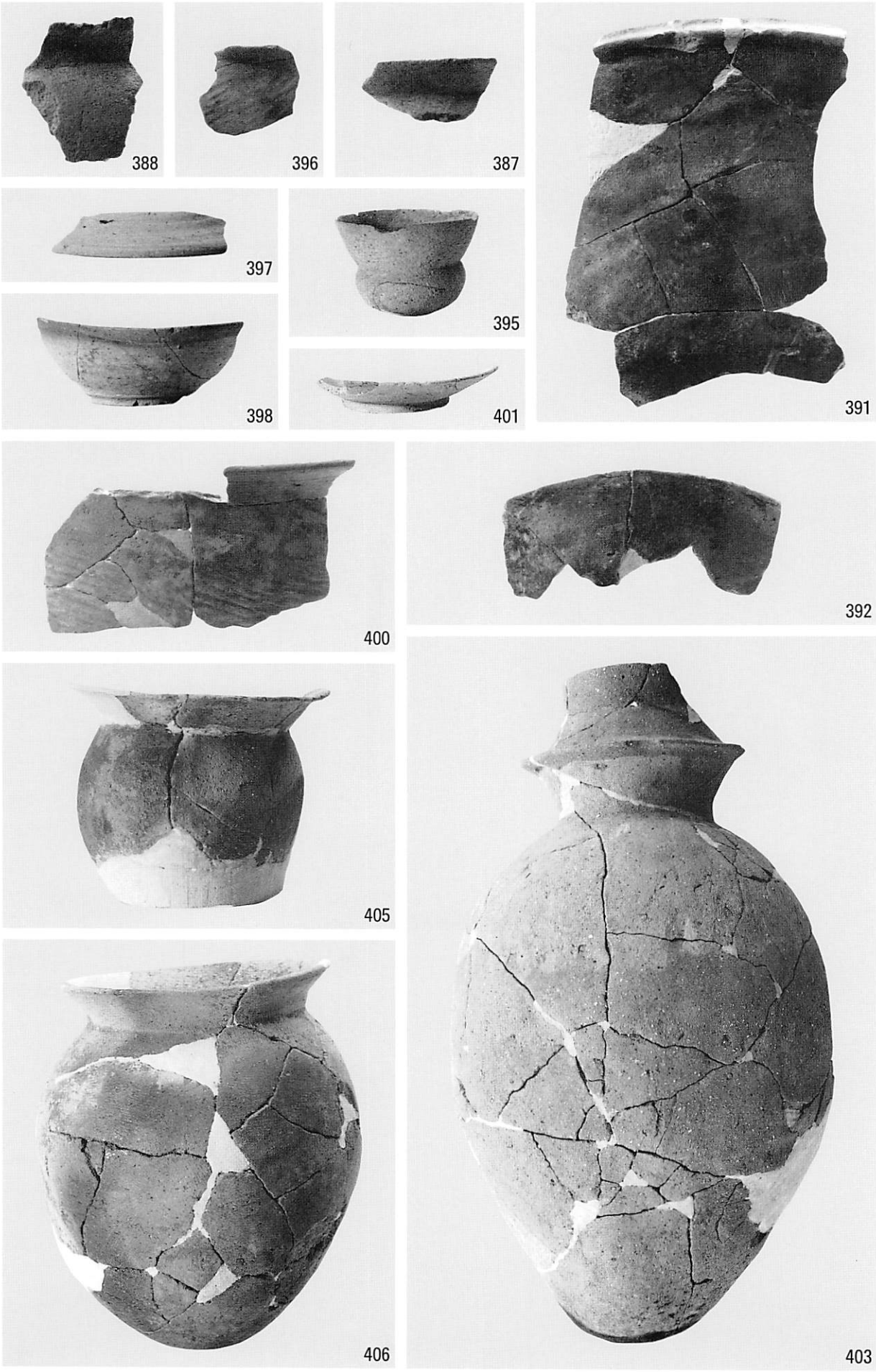
383

380

382

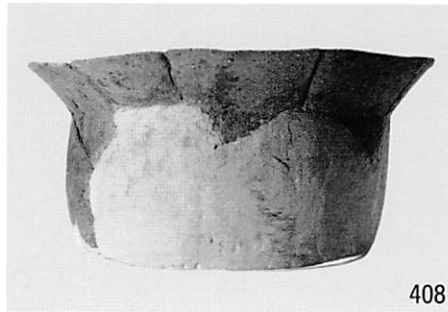
384

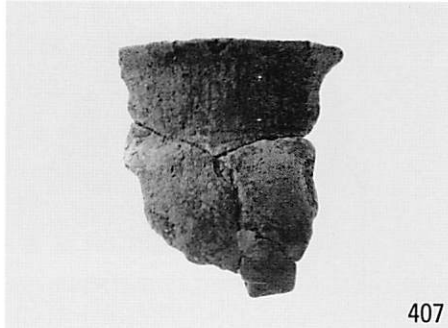
出土遺物14

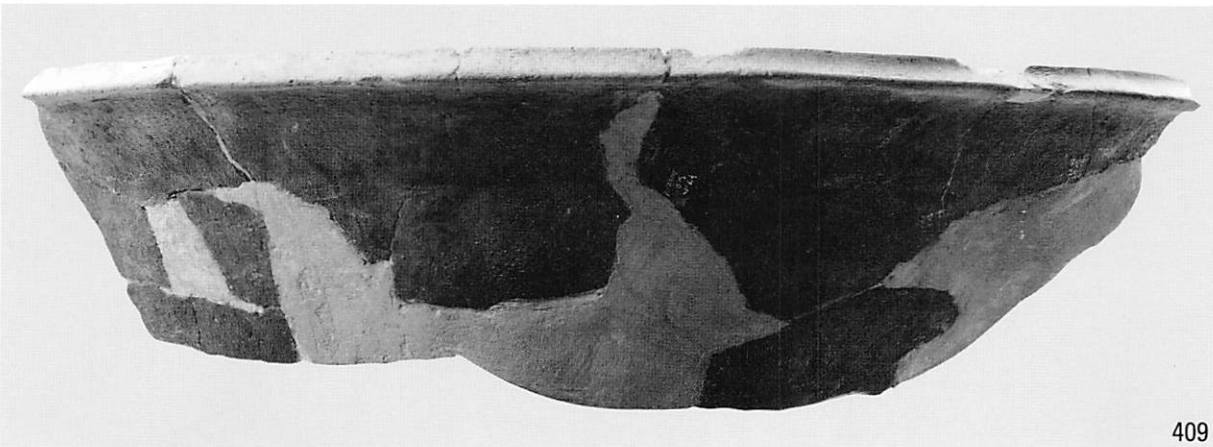


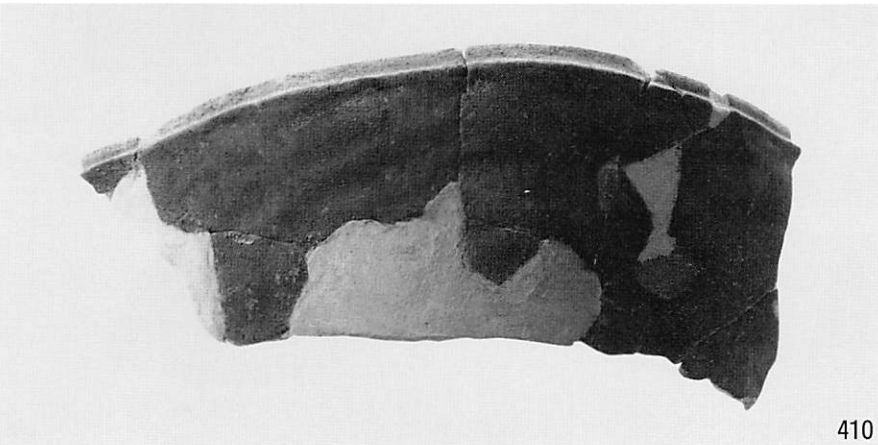
出土遺物15

404

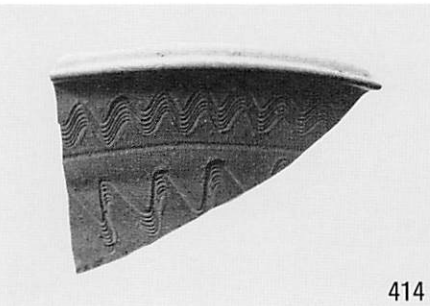

408

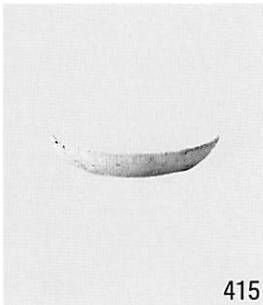

407


409


410

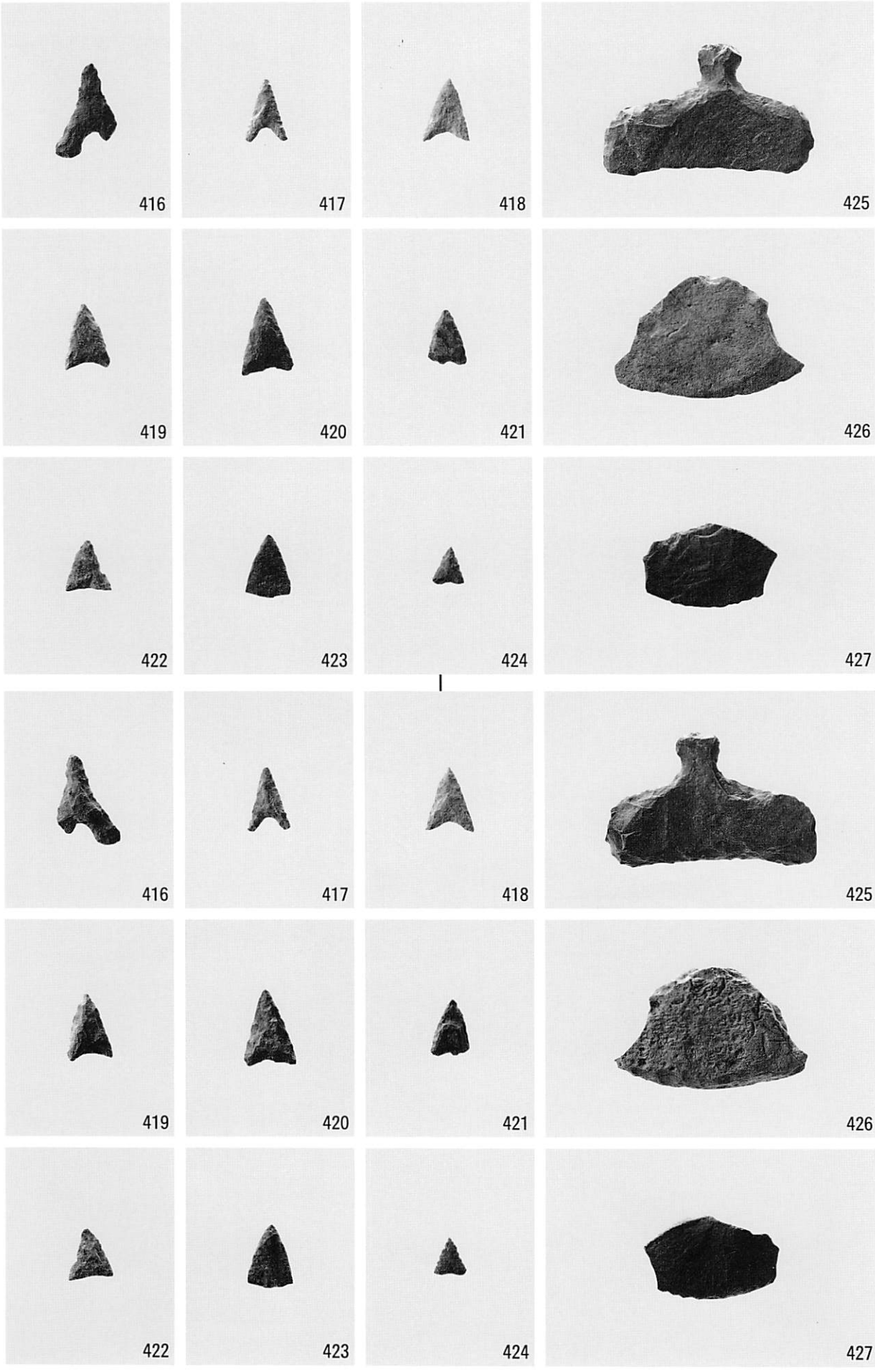
412


414

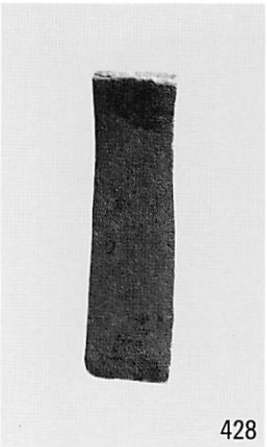

415

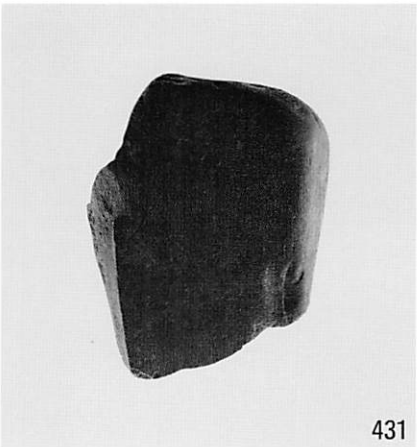
411

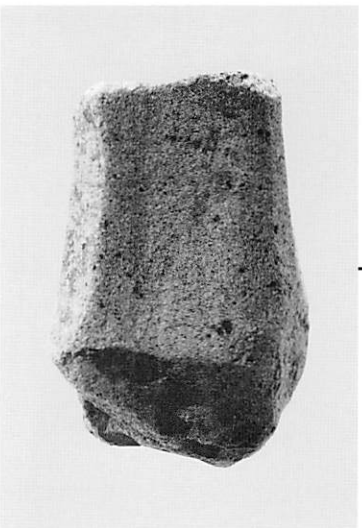
出土遺物16

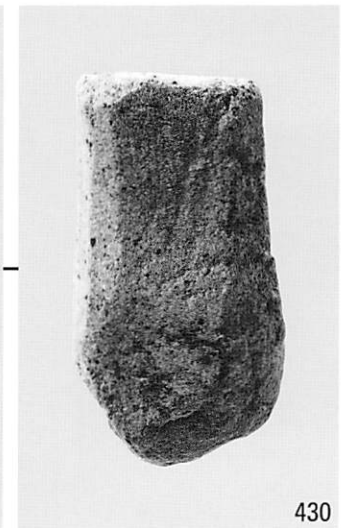

416
417
418
425
419
420
421
426
422
423
424
427
416
417
418
425
419
420
421
426
422
423
424
427

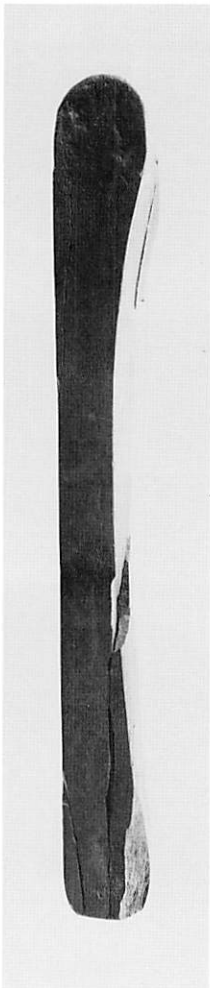
出土遺物17

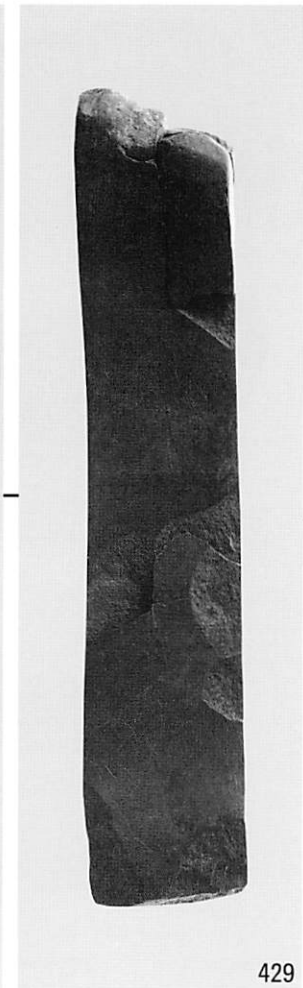

428

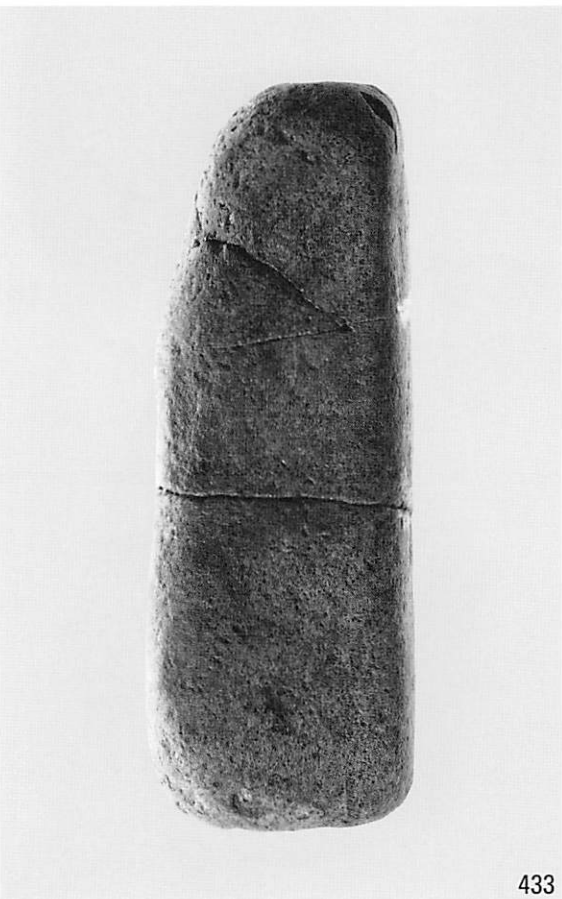

431

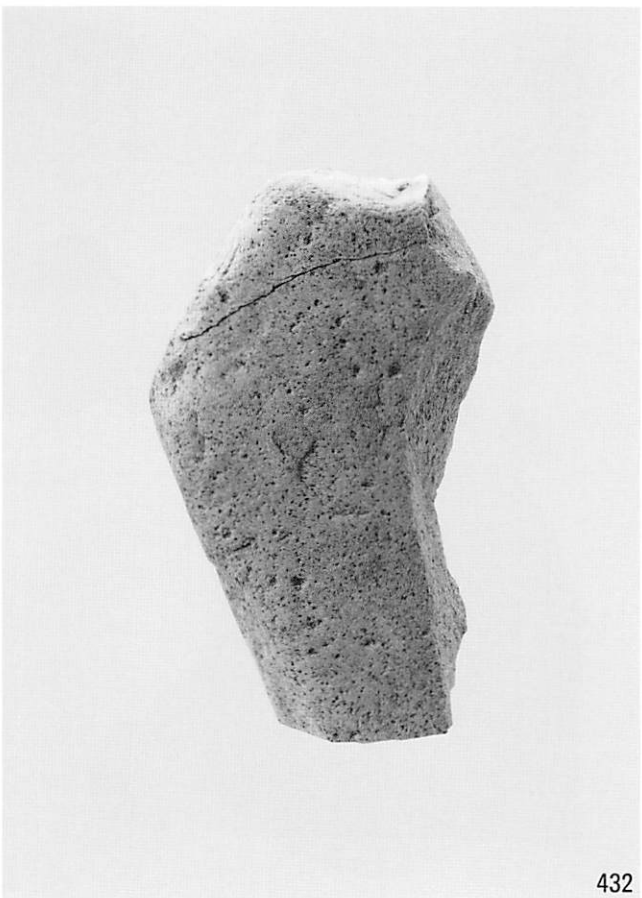



430

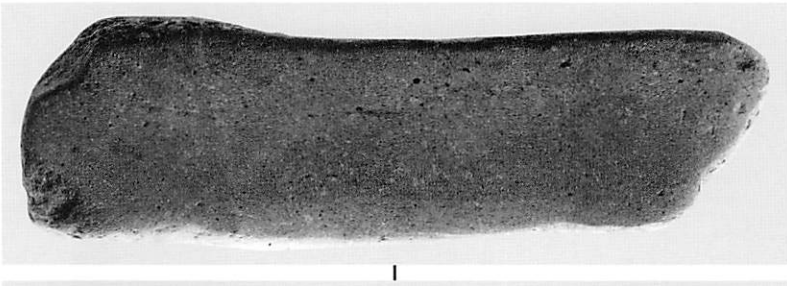


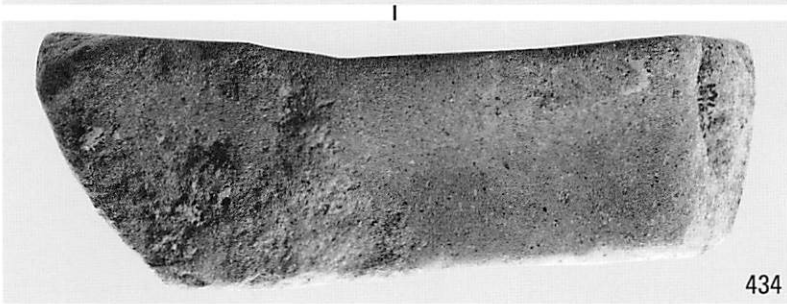

429

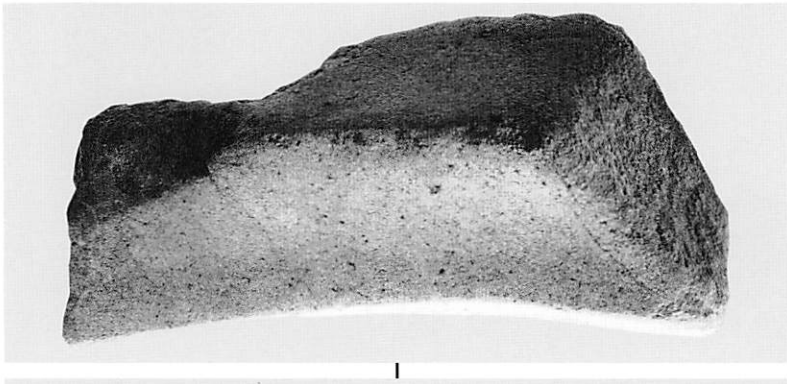

433

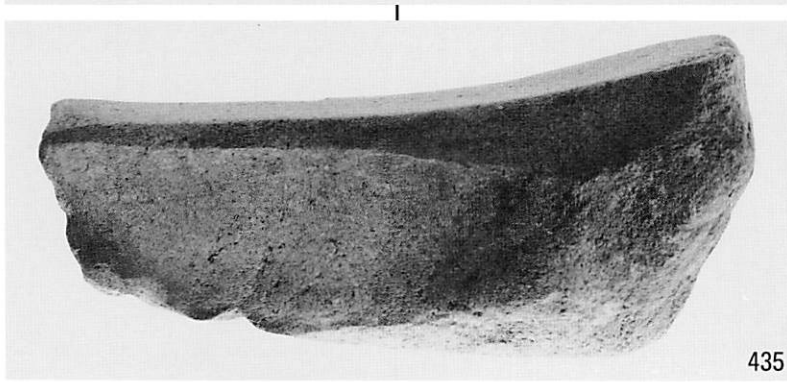

432

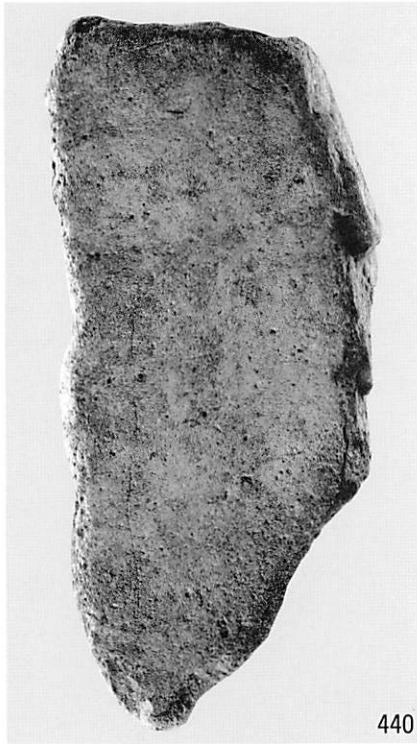
出土遺物18

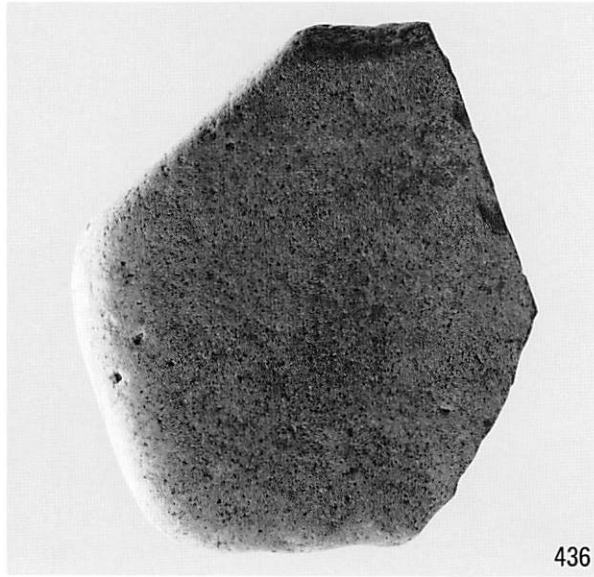






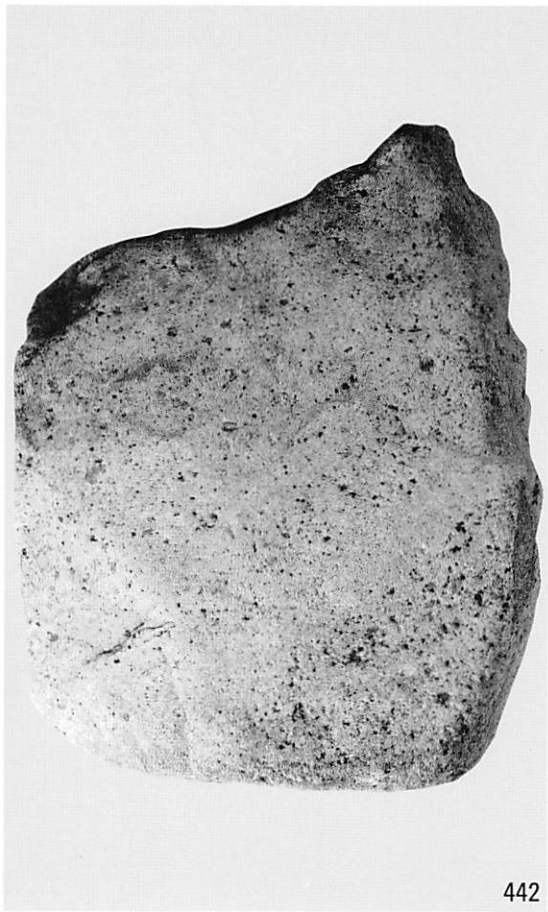


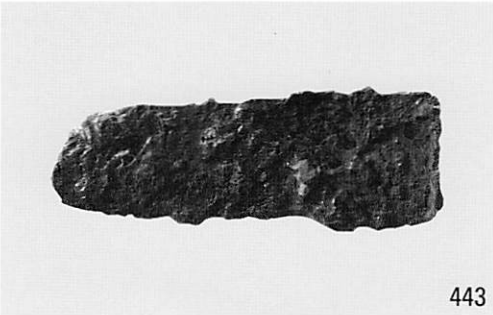


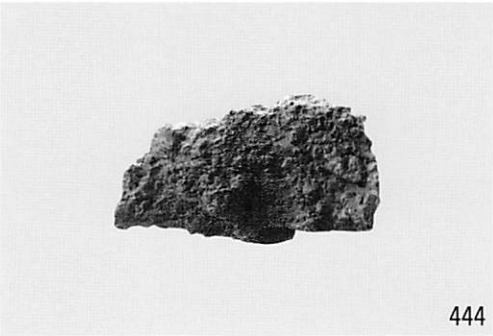


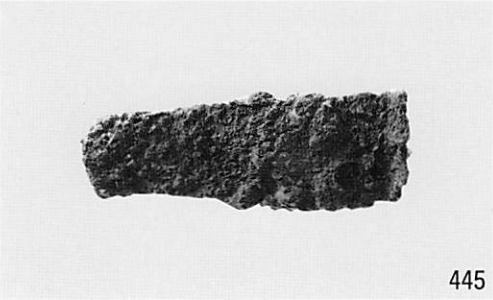
出土遺物19

441


442


443


444


445

446

447

448

450

451

449

452

453

出土遺物20

報告書抄録

ふりがな	とうのはらいせき
書名	塔之原遺跡
副書名	一般国道２号改築事業（安芸バイパス）に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第14集
編著者名	辻　満久，梅本健治，伊藤　実
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目８番49号
発行年月日	西暦2006年２月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうのはらいせき 塔之原遺跡	ひろしまし 広島市 あきく 安芸区 かみせのちょう 上瀬野町	34107	998	34° 25′ 08″	132° 37′ 12″	20030416 ～ 20040310	6300	一般国道２号（安芸バイパス）改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塔之原遺跡	集落跡 墳墓群	弥生～古墳時代	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑，陥穴，墓坑	弥生土器，土師器，土師質土器，石器，鉄器	２本柱竪穴住居多数検出

要約

塔之原遺跡は瀬野川周辺に広がる宅地や耕作地から20mほど比高がある台地状の南から北にかけて緩やかに傾斜する平坦面に位置する。

調査の結果，竪穴住居跡17軒，掘立柱建物跡２棟，土坑11基，陥穴３基，土坑墓14基，土器棺墓１基，溝状遺構３条，性格不明遺構７を検出した。弥生時代未から古墳時代初頭頃の集落関係の遺構が主で，住居跡は２本柱と４本柱があり，２本柱住居は特徴的な小型の住居が多い。掘立柱建物跡の１棟は２間×２間の総柱構造と想定できる。陥穴は縄文時代によく見られる構造のものである。土坑墓・土器棺墓は調査区中央部から北西寄りの調査区境に集中している。

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第14集

塔之原遺跡

一般国道２号改築事業（安芸バイパス）
に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日　平成18（2006）年２月27日

編集　財団法人　広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目８番49号
TEL（082）295-5751　FAX（082）291-3951

発行　財団法人　広島県教育事業団
〒730-0011　広島市中区基町４番１号
TEL（082）228-8451　FAX（082）228-8441

印刷所　鯉城印刷株式会社